

琵琶湖博物館 年報

11号

平成18(2006)年度



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

ごあいさつ

琵琶湖博物館は、2006年10月に開館・一般公開10周年を迎えました。博物館の歴史としてはまだまだ短い年月ながら、多くの皆様のご協力とご支援を頂いたおかげで、さまざまな活動を続け、あるいは少しずつ新しい事業をも進めて参ることができました。頂戴しました種々のご厚情に対し、心から感謝いたします。

10周年記念事業の一つとして、第14回企画展示「湖辺（こへん）～水、魚、そして人～東アジアの中の琵琶湖」を開催しました。これは開館以来、館内・館外の研究者が進めてきた、琵琶湖博物館総合研究「東アジアの中の琵琶湖－コイ科魚類展開の軸とした環境史に関する研究－」の成果の一部を、共同研究者の一人である今森光彦さんの写真を素材として表現しようと試みたもので、この総合研究に基づく企画展示は2007年度にも実施の予定でいます。

水族企画展示では、国際博物館の日関連事業としての「ボテジャコは、いま…？」と、「水辺の生きもの」の2つの展覧会を開催いたしました。「水辺の生きもの」では、そこに生息する生きもの自体だけではなくその利用をもふくめた展示を行いました。

期間を限ったギャラリー展示としては、「博物館を楽しもう：はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」・「こどもが見つめるふるさとの川：こどもエコクラブ伯母Q五郎のたからもの」・「つかんだ つんだ いつもいた－あの生き物は、いま…？」・「滋賀県県民環境学習のつどい」・「企画展で振り返る琵琶湖博物館の10年」・「鉱物・化石展：続湖国の大地に夢を掘る」を開催いたしました。これらの一部は、＜フィールドレポーター＞やくはしかけの方々、さらには県内の教員・研究者などのご協力を、展覧会の準備段階から得てまいりました。そして、期間中には展示室などで、それらの方々が中心になって、さまざまな体験活動や関連行事を行なって下さったのです。

いつもながら、職員だけではなく、多くのかたがたが積極的に琵琶湖博物館を支えて下さっていることに対して、改めて深く感謝申し上げます。

以前の年報にも書きましたとおり、琵琶湖博物館では2002年12月に中長期目標「地域だれでも・どこでも博物館」を策定し、その実現のための運営指針として、2005年3月に「中長期基本計画」および「展示交流空間の更新整備に関する計画」を作りました。この「中長期基本計画」は2005年度で第1期を終え、2006年度から第2期に入りました。したがって今年度は、何を継続し、何は止め、何を新しく行うかを今まで以上にいろいろ考え、また、組織のありかたについても大胆に考え始めたいと思っております。個々の博物館活動はもとより、このような全般的な問題に関しましても、厳しくかつ積極的なご意見・ご批判を頂きますよう、お願い申し上げます。

2007年10月20日

滋賀県立琵琶湖博物館

館長 川那部 浩哉

目 次

ごあいさつ	1
I 博物館機能の強化	4
1 資料が活用できる博物館	4
資料整備活動	4
(1)収蔵資料	4
(2)寄贈者および提供者一覧	7
(3)購入資料一覧	8
(4)水族繁殖生物	8
(5)資料情報の公開	10
(6)資料の利用	10
(7)資料保管	17
(8)燻蒸	17
(9)資料評価委員	17
2 研究を進めて活かせる博物館	18
研究調査活動	18
(1)総合研究	18
(2)共同研究	18
(3)専門研究	19
(4)公表された主な研究業績	20
(5)研究助成を受けた研究	22
(6)琵琶湖博物館研究発表会	24
(7)特別研究セミナー	26
(8)研究セミナー	26
(9)特別研究員の受け入れ	28
(10)海外交流活動	28
(11)開館10周年記念出版物	29
3 新たな参加と発見ができる博物館	30
展示活動	30
(1)常設展示の主な更新	30
(2)第14回企画展示	31
(3)水族企画展示	34
(4)ギャラリー展示	35
(5)トピックス展示	38
(6)集う、使う、創る 新空間	38
展示交流事業	39
(1)水族展示の交流	39
(2)展示交流員と話そう	41
(3)来館者との交流会	42
4 体験と交流を促す博物館	43
一般利用者へのサービス事業	43
(1)観察会・見学会等	43
(2)講座	45
(3)体験教室	48
学校連携事業および体験学習	48
(1)教職員等研修	48
(2)視察対応	49
(3)学校団体向け体験学習	50
(4)一般団体向け体験学習	51
(5)「体験学習の日」の活動	51
(6)職場体験実習	52

(7)博物館実習	52
国際交流活動	53
(1)「JICA博物館集中コース」の実施	53
(2)海外からの視察	55
5 対話と応援ができる博物館	58
利用者主体の事業	58
(1)フィールドレポーター	58
(2)はしかけ制度	60
地域交流活動への支援事業	72
(1)地域活動の支援（博物館内）	72
(2)地域活動の支援（博物館外対応）	76
(3)博物館ガイダンス	79
(4)質問コーナー・フロアトーク	81
情報発信活動	81
(1)通信網を利用した館外への情報提供	81
(2)通信網を利用した双方向の情報交換サービス	83
(3)印刷物	84
II 環境の整備	85
1 拠点としての施設整備	85
(1)利用者用施設の整備	85
(2)情報システムの整備	85
(3)来館者アンケート調査結果	85
2 柔軟な運営組織	90
(1)組織	90
(2)職員	91
3 社会的支援と新しい経営	95
(1)利用状況（2006年度入館者数）	95
1) 総入館者数	95
2) 学校等入館者数	96
3) 月別・曜日別入館者数	96
(2)新聞掲載記録	97
(3)雑誌等掲載記録	104
(4)テレビ放映・ラジオ放送記録	107
(5)予算	109
4 存在基盤の確立	110
(1)滋賀県立琵琶湖博物館協議会	110
(2)企画・計画	111
III 2006年度をふり返って	120
1 研究部	120
2 事業部	120
3 総務部	122
IV 博物館利用のご案内	124
2007年度 職員紹介	125

*表紙の写真：企画展示「湖辺（こへん）～水、魚、そして人～ 東アジアの中の琵琶湖」の展示風景

I 博物館機能の強化

1 資料が活用できる博物館

資料整備活動

琵琶湖博物館で資料整備の対象としているのは、「琵琶湖とその集水域および淀川流域」およびその全体的評価にかかわるもの、ならびに博物館のテーマ「湖と人間」に関係する日本、アジア、世界の湖沼とその周辺地域におよぶものである。自然、人文、社会科学等にかかわる過去から現在までの実物の資料、生魚などの水族資料、映像資料、図書資料および博物館業務に必要な資料について、収集・整理・保管および利用を図り、博物館活動の充実に努めている。

収蔵資料は、博物館職員による収集をはじめ、受贈、受託、交換、購入、製作、提供、参加型調査等によって受け入れられ、必要に応じて速やかに利用できるよう、各資料区分の体系にしたがって整理を行っている。

以下に2006年度の資料整備状況を示す。

(1) 収 蔵 資 料

収蔵資料は、地学標本、植物標本、動物標本、微生物標本、水族資料（生体）、考古資料、歴史資料、民俗資料、環境資料、図書資料、映像資料の11分野にわたる。

登録資料数とは、琵琶湖博物館情報システムの資料データベースに登録されているものの総数をいい、収蔵概数とは、登録資料数と未整理な資料を含めた収蔵全体数である。

2006年度末現在で、博物館登録資料は388,901で、収蔵概数は715,954となった。

これらの収蔵資料は、保存に影響を与えない範囲で、展示、閲覧および貸出等に利用している。

【収蔵資料のまとめ】

2007年3月現在

	登録資料数	収蔵概数	2006年度登録数	受入総数
地 学	27,824	32,966	1,150	2,288
植 物	79,526	163,400	3,136	227
動 物	93,942	244,006	3,923	18,069
微生物	0	57,113	0	4,451
水族（生体）	20,085	20,085	12,098	12,098
考 古	0	1,346箱と334点	0	0
歴 史	0	197件	0	3件
民 俗	2,584	6,959	2,584	57
環 境	0	45箱と730点	0	27
図 書	87,329と1,845タイトル	106,547	1,871と527タイトル	2,381と527タイトル
映 像	75,766	82,226	0	3,668
合 計	388,901	715,954	25,289	43,796

【各分野別の詳細】

地 学 標 本	2006年度						累 積		
	登録数	採集数	寄贈数	購入数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
化石	72	77	1,235	0	0	1,312	薄片作成5点, 登録前収納整理 2,300点, 標本登録・配架・ラベル 作成等1,150点, 化石プレパ レーション・保存処理	18,662	22,680
岩石・鉱物	897	0	970	1	0	971		6,879	7,080
堆積物	6	0	0	0	0	0		1,785	2,221
プレパラート	175	5	0	0	0	5		498	985
小 計	1,150	82	2,205	1	0	2,288		27,824	32,966

植 物 標 本	2006年度						累 積		
	登録数	採集数	寄贈数	購入数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
さく葉標本	3,136	0	0	0	226	226	標本受入・登録・ラベル貼付け・ 収蔵・管理, 標本・データベー スマニュアル製作	79,526	163,226
菌類乾燥標本	0	0	0	0	1	1		0	117
水草包埋標本	0	0	0	0	0	0		0	57
小 計	3,136	0	0	0	227	227		79,526	163,400

動 物 標 本	2006年度						累 積			
	登録数	採集数	寄贈数	購入数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数	
脊椎動物（魚類除く）	225	0	1	0	64	65		762	832	
内 訳	哺乳類骨格標本	0	0	1	0	0	1	データベース整備、データの修 正、ラベルの再作成・添付	192	193
	哺乳類剥製標本	0	0	0	0	0	0		8	8
	哺乳類	0	0	0	0	0	0		100	100
	鳥類骨格標本	49	0	0	0	23	23	標本の受入、計測、製作、デー タベース登録	110	129
	鳥類乾燥標本(鳥類レプリカ等含む)	176	0	0	0	41	41		313	362
	爬虫類骨格標本	0	0	0	0	0	0		34	35
	爬虫類剥製標本	0	0	0	0	0	0	データベース整備、データの修 正、ラベルの再作成・添付	3	3
	爬虫類	0	0	0	0	0	0		2	2
魚類（淡水魚類）	3,264	0	5,115	0	1,302	6,417		47,155	81,087	
内 訳	乾燥骨格標本	154	0	0	0	0	0	未登録、登録標本からの分離に より乾燥咽頭歯標本を作製し、 登録した	2,590	2,590
	DNA分析用標本	579	0	0	0	579	579	うおの会、水族から提供された 標本を100%エタノールでDNA分 析用標本とし、登録した	3,672	3,672
	液浸標本	2,531	0	5,115	0	723	5,838	未登録標本、寄贈、提供された 標本を同定し、登録した	40,893	74,825
昆虫	145	976	8,520	12	419	9,927		34,270	141,859	
内 訳	昆虫液浸標本	145	276	89	0	0	365	Web公開に伴うDB英文化完了。 ソーティング（小分け・粗同定）、 同定、ラベル添付および修正、 収納整理作業1,070本、展示用標 本作成4本、アルコール液点検・ 補充30,600本	12,234	30,600
	昆虫乾燥標本	0	700	8,431	12	419	9,562	村山コレクションの整理	22,036	111,259
貝類	289	12	0	0	655	667	ソーティング（小分け・粗同定）、 ラベルの作成および添付、仮 データ入力各約667点・新規登録、 登録番号ラベルの作成および添 付、標本の配架、各289件・アル コール液点検約13,000本、ホルマ リンからアルコールへの置換約 600本	11,755	13,700	
昆虫と貝類以外の無脊椎動物 （甲殻類、寄生虫など）	0	246	685	0	62	993	甲殻類標本の仮登録1,105件、受 入標本の整理782件（データ入力 +アルコール置換）	0	6,528	
小 計	3,923	1,234	14,321	12	2,502	18,069		93,942	244,006	

微生物標本	2006年度						整理状況・作業内容・公開など	累 積	
	登録数	採集数	寄贈数	購入数	提供数	受入総数		登録資料数	収蔵概数
微小生物液浸標本	0	0	406	0	72	478	仮データベース構築完了、今後はここにデータが整理された時点で受入と見なす	0	2,472
珪藻プレパラート	0	268	0	0	0	268		0	1,387
珪藻顕微鏡写真フィルム	0	1,195	0	0	0	1,195		0	22,905
珪藻顕微鏡写真デジタルファイル	0	2,274	0	0	0	2,274		0	24,064
微小生物顕微鏡写真デジタルファイル	0	217	0	0	0	217		0	6,266
微小生物動画ファイル	0	19	0	0	0	19		0	19
小 計	0	3,973	406	0	72	4,451	0	57,113	

水族資料(生体)	2006年度						整理状況・作業内容・公開など	累 積		
	登録数	採集数	提供数	繁殖数	提供数	受入総数		登録資料数	収蔵概数	
脊椎動物	10,490	910	91	1,052	8,437	10,490		18,863	18,863	
内 訳	魚類	10,434	855	90	1,052	8,437		10,434	18,822	18,822
	両生類	50	50	0	0	0		50	10	10
	爬虫類	5	5	0	0	0		5	24	24
	鳥類	1	0	1	0	0		1	7	7
無脊椎動物	1,608	1,020	10	460	118	1,608		1,222	1,222	
内 訳	昆虫	219	91	10	0	118		219	160	160
	貝類	1,134	695	0	439	0		1,134	901	901
	甲殻類	255	234	0	21	0		255	161	161
小 計	12,098	1,930	101	1,512	8,555	12,098		20,085	20,085	

考古資料	2006年度			累 積	
	登録数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
遺跡遺物(舟、瓦を除く)	0	0		0	1,313(箱)と320
丸木船	0	0		0	5
瓦	0	0		0	22(箱)
灯笼	0	0		0	3
貝塚剥ぎ取り資料	0	0		0	6
展示関係(ガリラヤ湖関係含む)	0	0		0	11(箱)
小 計	0	0		0	1,346箱と334点

歴史資料	2006年度(件数)					整理状況・作業内容・公開など	累 積	
	登録数	撮影数	寄贈数	提供数	受入総数		登録資料数	収蔵概数
古文書、絵図、絵画等	0	2	0	0	2	小牧家旧蔵資料調査作成整理約750点、修理保存処理983点	0	158
二次資料(レプリカ、模写、模造)	0	1	0	0	1		0	32
その他	0	0	0	0	0		0	7
小 計	0	3	0	0	3		0	197

民俗資料	2006年度			整理状況・作業内容・公開など	累 積	
	登録数	提供数	受入総数		登録資料数	収蔵概数
生活生業用具	0	54	54	資料整理、民俗データベース公開	0	4,318
漁撈用具(船関係用具を含む)	2,584	2	2		2,584	2,600
二次資料(木造船模型)	0	1	1		0	41
小 計	2,584	57	57		2,584	6,959

環境資料	2006年度				累 積	
	登録数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
水環境調査資料	0	0	0		0	72
生活用具類	0	0	0		0	25
民具類	0	27	27	受入作業と資料収納作業	0	22(箱)と604
二次資料(レプリカなど)	0	0	0		0	23(箱)と25
海外の湖沼船	0	0	0		0	4
小 計	0	27	27		0	45箱と730点

図書資料	2006年度					累 積	
	登録数	購入数	寄贈・提供数	受入総数	整理状況・作業内容など	登録資料数	収蔵概数
書籍	1,806	564	1,753	2,316	開架図書9,600冊, 雑誌63件の整備, 書籍レファレンス, コピーサービス(有料), 蔵書点検53,500点, 学術雑誌製本305冊, ニュースレターの整理, 図書装備1,800冊	53,582	66,146
文献	65	0	65	65		33,740	40,401
雑誌	527タイトル	159タイトル	368タイトル	527タイトル		1,845タイトル	
小 計	1,871と527タイトル	564と159タイトル	1,818と368タイトル	2,381と527タイトル		87,329と1,845タイトル	106,547

映像資料	2006年度							累 積	
	登録数	撮影数	寄贈数	寄託数	提供数	受入総数	整理状況・作業内容・公開など	登録資料数	収蔵概数
静止画資料	0	3,368	0	40	260	3,668		75,766	82,226
動画資料	0	0	0	0	0	0		0	0
小 計	0	3,368	0	40	260	3,668		75,766	82,226

(2) 寄贈者および提供者一覧

敬称省略(点数)

【地学資料】

化石標本: 岡村喜明(1,200) 山川千代美(26)

岩石・鉱物標本: 岡村喜明(200) 中沢和雄(11) 富田克敏(2)

【植物標本】

さく葉標本: 安藤義範(10) 石田未基(108) 大谷 J. ウィリアム(80) 西村知記(1) 布谷知夫(1)
山川千代美(1) 吉原 茂(25)

菌類乾燥標本: 村上哲也(1)

【動物標本】

哺乳類骨格標本: 京都市動物園(1)

鳥類骨格標本: 膳所高校(1)

鳥類乾燥標本: 膳所高校(13)

昆虫標本: 足立裕郎(1) 石田未基(44) 上原千春(4) 遠藤真樹(58) 太田文子(5) 岡田文夫(4)
小野克己(1) 河瀬直幹(1) 小林修司(3) 佐々木 剛(64) 柴栄康雄(6) 芝口孝一(32)
杉野由佳(19) 高野真幸(2) 高橋 央(10) 高橋 基(15) 高橋和征(62) 竹島彊二(1)
中川 優(7) 藤本勝行(1) 的場 洋(1) 山口幸江(28) さけのふるさと館(1)

魚類標本: 上原千春(3) うおの会(71) 遠藤真樹(9) 大塚泰介(1) 大原健一(8コンテナ)
桑原雅之(176) 後藤宮子・正(13コンテナ) 佐々木剛(4) 佐々木剛・上原千春(1)
佐藤智之(79) 滋賀大学(20) 水族飼育管理(68) 鈴木規慈(11) 高野裕樹(3点と9瓶)
田中治男(3) 谷元峰男(1) 中井克樹(2) 中村総一(1) 藤本勝行(32) 前畑政善(1)
松田征也(1) 村上靖昭(1) 八尋克郎(1)

貝類標本：石田未基(11) 岡田 隆(2) 岡田 隆・藤井泰正(4) 杉野由佳(2) 田中政之(1)
琵琶湖研究所 (635)

昆虫と貝類以外の無脊椎動物標本 (甲殻類・寄生虫など)：

Doo Hee Won、Jong Eun Lee (6) William J. Otani (1) 阿部勇治(1) 石田昭夫(1)
大高明史(678) 金盛美和(1) 久保田信(1) 高山博好(1) 西野麻知子(25)
伴 修平・浦部美佐子(1) 森田光治(24) 吉本勝明(1) 和田太一(1)

【微生物標本】

微小生物液浸標本：中井末松(383)

【民俗資料】

生活生業用具：小磯正人(19) 小西啓史(2) 橋本みさを(1)

漁撈用具：乗田宗法(2)

【環境資料】

民具類：山元泰宏(12)

【図書資料】

書籍：石田志朗(133) 石原丈実(1,376) 今堀治夫(1) 遠藤宣雄(2) 大曲自治会(1) 大村 進(1)
小西博隆(1) 志岐常正(12) 高倉伸五(9) 柄本武良(1) 中井末松(126) 浜田長治郎(1)
畚野剛(229) 松田武夫(1) 脇田政彦(1)

静止画資料：秋山廣光(79) 石井正臣(70) 久保明彦(51) 國分政子(6) 玉藤典一(11)
長濱 脩(30) 野村昭夫(6) 若狭喜弘(7)

(3) 購入資料一覧

	資料名	点数	資料形態	内容等
地学資料	ハウスマン鉱	1点		滋賀県土山町弥栄鉱山産マンガン鉱石
昆虫乾燥標本	Scarabaeus属 (タマオシコガネ属)標本	12点	実物標本	ヨーロッパ産および東南アジア産の Scarabaeus属(タマオシコガネ属)標本
歴史資料	琵琶湖棲息川魚図	1冊	冊子	年代:伝江戸時代後期写
	近江国堅田庄 居初家文書	約82点	古文書	年代:享保18年(1733)~明治9年(1876)

(4) 水族繁殖生物

種名	学名	個体数
日本産魚類		
コイ科		
ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	133
シナイモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila pumila</i>	105
モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>	150
ヒナモロコ	<i>Aphyocypris chinensis</i>	258
カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis</i>	150
ホンモロコ	<i>Gnathopogon caeruleus</i>	111
タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	73
アカヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira</i> subsp.	80
イチモンジタナゴ	<i>Acheilognathus cyanostigma</i>	224
カゼトゲタナゴ	<i>Rhodeus atremius atremius</i>	30

カネヒラ	<i>Acheilognathus rhombeus</i>	100
シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>	300
スイゲンゼニタナゴ	<i>Rhodeus atremius suigensis</i>	423
ゼニタナゴ	<i>Acheilognathus typus</i>	190
ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>	90
タナゴ	<i>Acheilognathus melanogaster</i>	44
イタセンバラ	<i>Acheilognathus longipinnis</i>	309
ニッポンバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus kurumeus</i>	410
ミヤコタナゴ	<i>Tanakia tanago</i>	220
アブラボテ	<i>Tanakia limbata</i>	40
タカハヤ	<i>Phoxinus oxycephalus</i>	14
ワタカ	<i>Ischikauia steenackeri</i>	85
ドジョウ科		
ホトケドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	130
アユモドキ	<i>Leptobotia curta</i>	35
メダカ科		
メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	550
スズキ科		
オヤニラミ	<i>Coreoperca kawamebari</i>	58
トゲウオ科		
ハリヨ	<i>Gasterosteus microcephalus</i>	237
ムサシトミヨ	<i>Pungitius sp.</i>	70
ハゼ科		
アオバラヨシノボリ	<i>Rhinogobius sp.BB</i>	65
サケ科		
ビワマス	<i>Oncorhynchus masou subsp.</i>	3,095
外国産魚類		
コイ科		
ウエキゼニタナゴ	<i>Rhodeus sinensis</i>	225
オオタナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	100
ローデウス・ファンギ	<i>Rhodeus fangi</i>	30
トンキントゲタナゴ	<i>Acheilognathus tonkinensis</i>	25
アケイログナータス・バルバータス	<i>Acheilognathus barbatus</i>	10
チャイニーズワンラインペンシル	<i>Sarcocheilichthys parva</i>	60
カワヒラ	<i>Cultrichthys erythropterus</i>	70
メダカ科		
ランプリクティス・タンガニカヌス	<i>Lamprichthys tanganicanus</i>	240
スズキ科		
ケツギョ	<i>Siniperca chuatsi</i>	25
カワスズメ科		
ジュリドクロミス・オルナータス	<i>Julidochromis ornatus</i>	4
ベトロクロミス・トレワバサエ	<i>Petrochromis trewavasae</i>	16
アウロノクラヌス・デウインドディ	<i>Auronocromis dewindi</i>	24
レピディオランププロログス・アテヌアータス	<i>Lepidolamprologus attenuatus</i>	152
サンフィッシュ科		
ロングイヤーサンフィッシュ	<i>Lepomis megalotis</i>	60
昆虫類		
タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	86
ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i>	18
クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	14

(5) 資料情報の公開

1) データベースの公開

- ・琵琶湖博物館資料データベースの英文版3件の新規公開 (2007年2月6日)

琵琶湖博物館では、海外との研究交流の促進のためにデータベースの英文化を進めており、これまでImage (写真)、Library books (図書)、Fish collection (魚類標本) の3分野の英文データベースを公開してきた。今回、新たに公開されたのは、Fossil collection (化石標本)、Herbarium (植物さく葉標本)、Insects spirit collection (昆虫液浸標本) の3分野の英文データベースである。いずれもタイプ標本など研究価値の高い標本を多く含んでおり、公開による海外との研究交流の促進が期待される。

- ・「民俗資料データベース」の公開 (2007年2月13日)

琵琶湖博物館ではこれまでに日本語版だけで13分野の資料データベースを公開してきたが、人文分野としてはこれが初めての公開となった。琵琶湖博物館が収蔵し、琵琶湖博物館資料目録13号「民俗資料1 琵琶湖水系漁撈習俗資料 (1)」および14号「民俗資料2 琵琶湖水系漁撈習俗資料 (2)」(ともに2006年3月発行)に掲載された資料2,584件について、地方名・標準名、収集地、特徴、法量、重量などの情報を、資料写真とともに公開した。

2) 電子図鑑の公開

- ・琵琶湖博物館として4番目の電子図鑑「珪藻図鑑」の正式公開 (2007年1月10日)

「珪藻図鑑」は、琵琶湖博物館として4番目の電子図鑑であり、琵琶湖博物館共同研究「珪藻電子図鑑の増補改良」の中で、琵琶湖博物館はしかけ「たんさいぼうの会」の協力を得て作成が進められてきた。これまで共同研究の代表者である大塚泰介の個人ページ上で試験公開しながら増補・改良されてきたものである。「珪藻図鑑」は、滋賀県に分布するものを中心に、日本産の淡水珪藻250種を掲載している。学名による索引と、学名、異名および和名からの検索システムを備えている。掲載された各種について、学名、基礎異名、その他異名、和名、類似種との区別点、報告のあった場所、生態情報を掲載するとともに、形態の変異がわかるように複数の光学顕微鏡写真を掲載した。また、可能な限り走査電子顕微鏡写真も掲載した。

(6) 資料の利用

1) 資料の貸出

月	日	貸出先	資料内容	利用目的
5	26	植田潤	鳥類の巣7点	小中学校での講演に利用
6	13	彦根城博物館	「琵琶湖真景図(広瀬柏園筆)」1巻、原板11枚(フィルム)	テーマ展「彦根ゆかりの画人」に展示
6	18	滋賀県立図書館	ニゴロブナ10個体	「水のある風景展」と題したポスター展における展示
7	4	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	東寺文書「元治書状案」1通、原板2枚(プリント)	企画展「古文書が語る朝倉氏の歴史」に展示
7	10	鳥根県立宍道湖自然館ゴビウス	アユモドキ20個体	特別展「ドジョウ展(仮称)」における展示
7	11	朽木いきものふれあいの里センター	ギャラリー展示解説パネル4点、ミノムシ標本セット1箱、生きもの鳴き声ボックスセット1点、安曇川の石標本セット1点、安曇川の石解説パネル1点	展示「夏の森のいきものたち」で利用

7	12	浅川満彦	鉤頭虫の液浸標本11点	標本の同定確認および分類学的な研究
7	12	みなくち子どもの森自然館	イタチ、ハト、ヘビの組み立て骨格標本各1点	特別展「動物のからだ」に展示
7	15	滋賀県立安土城考古博物館	粟津湖底遺跡出土遺物、粟津湖底採集品1点、長命寺湖底遺跡出土丸木船1艘、松原内湖遺跡出土物、復元準構造船1艘、マラウィ湖丸木船1艘、船大工具、漁労道具、松原内湖遺跡写真	第32回企画展「丸木船の時代ーびわ湖と古代人ー」での展示
7	25	上田拓史	カイアシ類の液浸標本16点	分類学的な研究、特に地下水から採集されたカイアシ類数種の再記載
9	24	滋賀県立図書館	ワタカ5個体	図書館受付での展示
9	28	ほたるの学校	映像資料（静止画：環境学習セット／パウチ資料）魚類10点、水生昆虫3点	南郷小学校文化祭パネルに使用
10	11	滋賀県農政水産部	魚類レプリカ14点、映像資料（静止画）1点	第26回全国豊かなうみづくり大会の次期開催県コーナーにおける展示
10	17	下村通誉	エビノコバンの液浸標本3点	日本産エビノコバンの再記載と中国産エビノコバンと同種かどうかの確認
10	24	山梨県水産技術センター	アユモドキ10個体	日本産希少淡水魚繁殖検討委員会15周年記念事業および富士湧水の里水族館秋季特別展「世界のドジョウ展」での展示
10	29	(財) 滋賀県緑化推進会	木馬1点	森づくり交流会での展示
10	30	滋賀県東近江地域振興局森林整備課	木馬1点	東近江市農林水産まつりでの展示
11	15	鳥根県立宍道湖自然館ゴビウス	ハリヨ5個体	日本産希少淡水魚繁殖検討委員会15周年記念事業での展示
12	7	滋賀県立図書館	ビワヒガイ5個体	図書館受付での展示
12	13	鳥根県立宍道湖自然館ゴビウス	イチモンジタナゴ20個体、タテボシガイ10個体	特別展「ラムサール条約と世界の湿地の生き物たち」での展示
2	14	滋賀県立図書館	デメモロコ10個体	図書館受付での展示

2) 資料の譲与

【水族】	ビワマス	100点	北海道千歳サケのふるさと館
	ホンモロコ	20点	水産総合研究センター養殖研究所
	タモロコ	20点	水産総合研究センター養殖研究所
	カワバタモロコ	20点	水産総合研究センター養殖研究所
	デメモロコ	20点	水産総合研究センター養殖研究所
	ハス	15点	鳥根県立宍道湖自然館ゴビウス
	ワタカ	50点	北海道東海大学
	ビワコオオナマス	2点	鴨川シーワールド
	ワタカ	20点	鴨川シーワールド
	シロヒレタビラ	20点	鴨川シーワールド

カネヒラ	20点	鴨川シーワールド
ニゴロブナ	20点	鴨川シーワールド
タガメ	4点	鴨川シーワールド
ニッポンバラタナゴ	20点	いおワールドかごしま水族館
ヒナモロコ	20点	いおワールドかごしま水族館
カワバタモロコ	20点	いおワールドかごしま水族館
ゼニタナゴ	50点	(社)霞ヶ浦市民協会
イタセンバラ	15点	碧南海浜水族館
ゼニタナゴ	15点	碧南海浜水族館
ヒナモロコ	15点	碧南海浜水族館
ニッポンバラタナゴ	50点	虹の森公園おさかな館
シナイモツゴ	50点	虹の森公園おさかな館
カワバタモロコ	50点	虹の森公園おさかな館
スゴモロコ	20点	虹の森公園おさかな館
ムサシトミヨ	30点	宮津エネルギー研究所水族館
ニッポンバラタナゴ	15点	阿蘇カドリードミニオン
アブラヒガイ	19点	京都大学大学院
アブラボテ	30点	アクアトトぎふ岐阜県世界淡水魚園水族館
ヤリタナゴ	30点	アクアトトぎふ岐阜県世界淡水魚園水族館
ニッポンバラタナゴ	10点	おたる水族館
シナイモツゴ	10点	おたる水族館
ムサシトミヨ	30点	栃木県なかがわ水遊園

3) 特別観覧

2006年度は、以下のとおり特別観覧を行った。

<映像>

月	日	貸出先	資料内容	使用目的	備考
4	7	滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課	・魚類	「滋賀で大切にすべき野生生物-滋賀県版レッドデータブック2005年度版」(サンライズ出版刊)に掲載	静止画
4	7	大津歴史回廊推進協議会	・細見新補近江国大絵図	近江歴史回廊推進協議会 近江戦国の道部会パンフレットへの掲載	静止画
4	7	八尋 克郎	・昆虫	朝日新聞社「あいあいAI滋賀」の「湖国の昆虫」に掲載	静止画
4	14	京都府土木建築部	・魚類	インターネットページ(京都府治水総括室内)での使用、畑川で確認された重要種として掲載	静止画
5	2	有限会社 新選社	・瀬田橋の復元模型	「週間ビジュアル日本の合戦」に掲載	静止画
5	17	毎日新聞大津支局	・魚類	毎日新聞滋賀版「琵琶湖生き物図鑑」への掲載のため	静止画
5	25	乾 公正	・プランクトン	日本トキシコロジー学会講習会講演資料として利用のため	静止画
5	25	草津市環境課	・魚類	琵琶湖の魚をテーマにした環境学習事業に係るポスター作成のため	静止画
5	26	滋賀県琵琶湖環境部	・鳥類	滋賀県の外来種リストに掲載するため	静止画

6	2	滋賀県農政水産部 環境こだわり農業課	・魚類	こだわり滋賀ネットワークが実施する講座資料として利用のため	静止画
6	14	毎日新聞大津支局	・魚類	毎日新聞滋賀版「琵琶湖の生き物図鑑」掲載のため	静止画
6	23	琵琶湖干拓小中之湖土地改良区	・魚類 ・植物 ・貝類	小中之湖地区の地域揚水機の有象新事業を紹介するパンフレットに掲載のため	静止画
6	23	株式会社 新学社	・魚類 ・プランクトン ・甲殻類 ・昆虫	(株)新学社発行「学習の達成」理科3年第2分野に掲載(東京書籍版・大日本図書版・啓林館版・学校図書版・教育出版版)	静止画
6	23	伊賀市環境保全市民会議レッドデータブック作成委員会	・魚類	伊賀のレッドデータブックへの掲載のため	静止画
7	6	比治山大学現代文化学部言語文化学科日本語文化コース	・琵琶湖湖底遺跡現場写真	平成18年2月実施の「日本語文化研修旅行」の報告書のグラビア写真として使用	静止画
7	6	鳥根県立宍道湖自然館	・魚類	貴館特別展解説書および展示パネル作成用として	静止画
7	15	滋賀県農政水産部	・魚類レプリカ	佐賀県開催第26回全国豊かなうみづくり大会の次期開催県コーナーにおける展示計画策定のため	静止画
7	16	大阪府水道部庭窪浄水場	・水族資料	大阪府営水道庭窪浄水場薬入棟展示室にて常設展示の映像として利用	静止画
7	17	滋賀県農政水産部	・魚類	平成19年に開催される第27回豊かなうみづくり大会のイベントと合わせ実施する子ども向け環境学習のための模型作成のため	静止画
7	22	長野市立博物館	・コウガゾウ	特別展図録およびポスター等に掲載のため	静止画
7	26	NPO法人 加治川ネット21	・魚類	小学校総合学習テキストとして利用	静止画
7	26	滋賀県農政水産部	・魚類	平成19年に開催される第27回世全国豊かなうみづくり大会PR用パネル作成のため	静止画
7	31	(独) 国立環境研究所	・魚類	国際学会におけるポスター発表に利用	静止画
8	11	吹田市立少年自然の家	・魚類	部屋のキャラクター表示として利用	静止画
8	11	株式会社 小学館クリエイティブ	・魚類	図鑑に掲載するため	静止画
8	28	株式会社 笠倉出版社	・魚類	平成18年8月31日発売書籍「本当にいる世界の未知生物案内」に掲載	静止画
9	3	社団法人 時事画報社	・前野コレクション	海外向け政府広報誌「JAPAN+」2006年10月号掲載のため	静止画
9	3	京都新聞滋賀本社	・魚類	新聞掲載	静止画
9	11	彦根市立教育研究所	・前野コレクション	副読本「わたしたちの彦根」のデジタルデータ化のための資料	静止画
9	11	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	・魚類	機関誌「BYE BLEU」19号(9月末発行)の琵琶湖固有種の特集記事に説明資料として使用	静止画
9	11	株式会社 悠工房	・漁労	「社会科資料集5年」図版掲載のため	静止画

9	12	松田 武夫	・唐橋遺跡1号橋台 出土状況	松田常子著「市民による文化財の保護を」(サンライズ出版)に掲載のため	静止画
9	13	永源寺町史編集委員会	・魚類	永源寺町史通史編掲載のため	静止画
9	14	有限会社 ハーランド プロジェクト	・魚類	京都新聞購読者宛に無料配布する生活情報誌「トマトマガジン」12月特集号に掲載のため	静止画
9	22	毎日新聞大津支局	・魚類	毎日新聞滋賀版「琵琶湖いきもの図鑑」への掲載のため	静止画
9	22	南丹市日吉町郷土資料館	・魚類	南丹市日吉町郷土資料館で開催する展示会への展示パネル作成および図録掲載のため	静止画
9	27	田村 輝雄	・藤村コレクション	ホームページにおける天井川の紹介(家棟川の変遷)	静止画
10	3	鹿妻穴堰土地改良区	・魚類	小学生向け総合学習配付資料(下敷き)制作のため	静止画
10	4	サンライズ株式会社	・谷本コレクション	滋賀の食事文化研究会編「淡海文庫36 芋と近江の暮らし」(サンライズ出版 2006年10月発行予定)に掲載	静止画
10	5	財団法人 日本自然保護協会	・前野コレクション	(財)日本自然保護協会会報「自然保護」2006年11/12月号特集記事	静止画
10	5	共同通信社大津支局	・魚類	滋賀県のニゴロブナの資源回復計画の作成に関する報道に利用	静止画
10	18	マキノ土に学ぶ里研修センター	・魚類	マキノ土に学ぶ里利用のしおりに掲載のため	静止画
10	18	野洲市環境課	・魚類	野洲市環境基本計画中間案発表のため	静止画
10	20	社団法人 日本動物園水族館協会 種保存委員会	・魚類	種保存委員会・日本産希少淡水魚繁殖検討委員会設置15周年記念展覧会のポスター、リーフレット、魚名板に使用	静止画
10	20	建築ジャーナル	・前野コレクション ・古谷コレクション	月刊誌「建築ジャーナル」11月号に掲載のため	静止画
10	25	有限会社 オーピー オー	・植物	(株)ベネッセコーポレーション発行「チャレンジ5年生 2月号」に掲載のため	静止画
10	27	滋賀県農政水産部	・前野コレクション	第27回全国豊かなうみづくり大会～びわ湖大会～における過去の漁業紹介映像として使用	静止画
11	1	彦根市教育委員会事務局市史編さん室	・松原内湖遺跡丸木船 出土状況 ・出土飾り弓 ・出土ヘラ状木製品	「新修彦根市史」(第1巻通史編古代・中世)掲載	静止画
11	2	彦根市教育委員会事務局市史編さん室	・松原内湖遺跡丸木船	「新修彦根市史」(第1巻通史編古代・中世)啓発用リーフレット掲載	静止画
11	7	滋賀県農政水産部農村振興課	・魚類 ・藤村コレクション	農村振興課作成「魚のゆりかご水田プロジェクト」のパンフレットに使用のため	静止画
11	7	柴田 陽一	・小牧家資料	論文に付すため	静止画
11	7	読売新聞大津支局	・「私とあなたの琵琶湖アルバム」所蔵写真	読売新聞滋賀版での連載企画に使用	静止画

11	8	滋賀県農政水産部	・魚類	第27回全国豊かなうみづくり大会～びわ湖大会～プレイベントにおける内水面漁業を紹介するパネルに使用するため	静止画
11	29	株式会社 文溪堂	・魚類 ・水生植物	小学校向け道徳副読本「3年生のどうとく」に掲載のため	静止画
12	11	株式会社 アルバ	・魚類	(株)ポプラ社刊「ポプラディア情報館-理科の実験と観察」本文中に掲載	静止画
12	11	栗東市役所環境経済部生活環境課	・魚類	一般市民閲覧用の水生生物調査報告書での参考写真として使用	静止画
12	11	朝日学生新聞社	・魚類	朝日小学生新聞に掲載のため	静止画
12	11	株式会社 学習研究社 小中教材開発部	・魚類 ・展示風景	図書館本「日本の地理(琵琶湖の自然ページ)」への掲載	静止画
12	22	ほてじゃこトラスト	・魚類	ほてじゃこトラスト10周年記念誌作成に使用	静止画
12	22	海と船の博物館ネットワーク協議会	・展示室の丸子船	海・船・川・沼・湖に係る収蔵資料のデータベース掲載	静止画
1	12	株式会社 昭和堂	・前野コレクション	「環境フィールドワーク入門」(編者:秋山 道夫・仁連 孝昭、2007年3月刊行)第6章図2として掲載	静止画
1	12	琵琶湖環境部水政課	・魚類 ・琵琶湖博物館オリジナルポスター	「滋賀の環境2007」作成のため	静止画
1	26	農政水産部農村振興課	・藤村コレクション	魚のゆりかご水田啓発看板に利用	静止画
1	26	老 文子	・能登川町猪子のカワト	滋賀県立大学紀要「人間文化」掲載論文に使用	静止画
1	31	滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課	・魚類	ラムサール条約登録湿地関係市町村会議ホームページ「湿地の自然」の項目に掲載	静止画
2	9	田中 俊雄	・「私とあなたの琵琶湖アルバム」所蔵写真	琵琶湖・淀川流域圏連携交流会のイベント(BY-net交流会2007-もっと知ろう琵琶湖を-)時に配付資料として使用	静止画
2	9	滋賀県政策調整部	・魚類	滋賀県広報誌「滋賀プラスワン」3月号「琵琶湖の幸を再発見」にて使用	静止画
2	9	株式会社 インタープレス	・魚類 ・甲殻類	小学生向け壁新聞「フォトニュース教材」に掲載	静止画
2	15	株式会社 NHKエデュケーショナル	・地球ファミリー～湖底の主が浮上する～ びわこオオナマズの大産卵	総務省・NHK「オアシスプロジェクト」における、小中学校授業でのインターネット配信において、教育映像素材として使用	動画
2	19	滋賀県立図書館	・滋賀県管下近江国六郡物産図説	図書館所蔵「滋賀県管下近江国六郡物産図説」2～5と共にデジタルアーカイブに掲載のため	静止画
2	20	総合地球環境学研究所	・前野コレクション ・古谷コレクション	「琵琶湖淀川プロジェクト」最終成果報告書に掲載のため	静止画
2	21	滋賀県南郷水産センター	・魚類	水産資料館内展示水槽での魚種名説明用として使用	静止画
2	22	滋賀県立琵琶湖文化館	・琵琶湖文化館活動記録	ギャラリー展「琵琶湖文化館のあゆみ-滋賀県博物館史始め」および記念誌での利用のため	静止画

3	2	株式会社 冬陽社	・エリ全景	「都道府県別 日本の地理データマップ」に掲載のため	静止画
3	2	びわ湖放送株式会社	・前野コレクション	びわ湖特別番組「第27回豊かな海づくり大会記念」特別番組「豊かなる湖・琵琶湖」～その現状と未来を考える～内のVTR中で使用	静止画
3	6	立命館大学BKC教学課	・「私とあなたの琵琶湖アルバム」所蔵写真	立命館大学BKC環境教育フォーラム報告書に使用のため	静止画
3	16	増田 佳昭	・前野コレクション	農を変えたい！全国集会（3/16～18）においてオープニング画像として使用	静止画
3	16	中日新聞	・魚類	新聞掲載	静止画
3	16	財団法人 日本環境協会	・前野コレクション ・C展示室	環境パートナーシップの情報誌「つな環」への掲載	静止画
3	16	読売新聞大阪本社	・魚類	読売新聞大阪本社版夕刊（3/31付）の広告特集内で使用	静止画
3	18	滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課	・魚類	条例啓発用パンフレットおよび関連ウェブサイトに掲載	静止画
3	16	小寺 實	・C展示室のヨシ生態模型	出前講座活動「びわ湖とヨシ」のプログラムマニュアル作製	静止画
3	22	総合地球環境学研究所	・「近江図実測図」明治33年訂正版銅版	44PR「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」プロジェクトのデータベース作成のため	静止画
3	31	有限会社 言叢社	・びわ湖赤野井湾湖底遺跡の川魚とみられるハート型遺構の発掘現場写真 ・近江町世継付近、寺川河口に設けられた川魚の写真	小林茂著「内水面漁撈の民具学」に掲載	静止画
3	31	滋賀県琵琶湖環境部 水政課	・災害写真	「琵琶湖小百科」に掲載のため	静止画
3	31	滋賀県農政水産部全 国豊かなうみづくり 大会準備室	・漁撈	ポスター作成に係る資料として	静止画

<館内閲覧>

月	日	利用者	閲覧内容	閲覧目的
4	12	奥田 昇	魚類液浸標本資料（オオクチバス・ブルーギル・ハス・ビワマスなど）262点	安定同位体分析のため筋肉採取
5	12			
6	1	増田富士雄	烏丸ボーリングコア972件	地層の研究
6	16	Natalya Yorlova	寄生蠕虫類標本	ロシア産寄生蠕虫類との比較研究
10	30	灰谷 輝雄	村山修一蝶類コレクション100点	研究のため（特に滋賀県産の古い標本を利用）
11	6	守山市副読本編集委員会	電話機、テレビ、洗濯機各2点	守山市立小学校副読本作成
12	20	鳥取県立博物館	串鮑（丸子船の積荷）1点	鳥取県立博物館にて展示するパネル写真の撮影
1	18	野間直彦	鳥類乾燥標本（剥製）45点	鳥類学の研究
1	24	曾田貞滋	昆虫乾燥標本40点	オオオサムシ亜属の系統解析のための標本計測
3	9	福音館書店	ツバメ乾燥標本（本剥製）1点	絵本制作のための参考として

(7) 資料保管

整理された資料を保管する際には、ガス燻蒸、冷凍処理および二酸化炭素処理など、防虫・防かび対策を行った後に収蔵庫へ収納している。また、収蔵資料が長期間にわたり安全で良好な状態保てるよう、目視による資料チェックや保存液の補充などを行うほか、収蔵庫の適切な保存環境を維持するため、収蔵庫内の温湿度管理や定期的な清掃とトラップ調査など、総合的有害生物防除管理（IPM）を行っている。

2006年度には、当館の資料保存環境の現状や専門家による評価をもとに検討を行い、当館におけるIPM基準値を設定した。また、定期清掃に収蔵庫前廊下の清掃を追加し、保存環境の維持によりいっそう務めている。

温湿度管理	各収蔵庫定点観測を実施 ・時間ごとに計測し、全データを保存。 ・温湿度の変化を年間を通して把握し、環境の基準を設定する。
定期清掃	・収蔵庫の清掃：月1回原則として第1金曜日に実施 ・収蔵庫前廊下の清掃：当番で割り振られた範囲を週1回実施
生物環境調査	有害生物調査 ・2006年6月30日～7月14日 空中菌調査2カ所・昆虫トラップ調査 223カ所（設置・回収・分析） ・2006年11月3日～17日 空中菌調査4カ所・昆虫トラップ調査 223カ所（設置・回収・分析） ・2007年3月2日～16日 空中菌調査5カ所・昆虫トラップ調査 223カ所（設置・回収・分析） *当館のIPM基準値 ・虫：非誘因性トラップで1日につき捕獲される指標種（チャタテムシ）の個体数（捕獲指数）が1 ・空中菌：空気衝突法により採取した菌を7日間培養させた場合のコロニー数が20

(8) 燻蒸・処理

琵琶湖博物館では、資料を安全に長期間保管し活用していくために、年に1回収蔵庫燻蒸を行い、収集した資料や活用後の資料については収蔵庫への搬入の前に、燻蒸庫での燻蒸を随時行っている。琵琶湖博物館には、大型・小型の2台の燻蒸庫がある。大型燻蒸庫では、ヨウ化メチル（アイオガード）と炭酸ガスによる燻蒸、処理を行うことができる。小型燻蒸庫では、炭酸ガスによる処理を行うことができる。併せて、資料によっては冷凍庫による冷凍処理および脱酸素処理を実施している。

2006年度の燻蒸実施状況は以下の通りである。

○収蔵庫燻蒸

- ・実施期間：2006年9月3日～8日
- ・実施収蔵庫：動物収蔵庫、資材室
- ・使用ガス：エキヒューム（酸化エチレン）

○大型燻蒸庫燻蒸

- ・実施回数：6回
- 内訳 アイオガード3回、炭酸ガス3回

○小型燻蒸庫燻蒸

- ・実施回数：4回

○冷凍処理 随時

○脱酸素処理

- ・実施回数：2回

(9) 資料評価委員

博物館として重要な資料の購入や受贈にあたって、博物館資料としての学術的評価と価格評価を行うため、あらかじめ選定しておいた33名からなる資料評価者名簿をもとにしながら資料評価委員を選任し、資料評価を依頼している。

2 研究を進めて活かせる博物館

研究調査活動

琵琶湖博物館の事業は、研究事業、交流サービス事業、情報事業、資料整備事業、展示事業という五つを総合的に行ない、特にその中でも研究活動が全ての博物館活動の基礎となる。すなわち、研究の成果の発信として、交流、情報、資料、展示が行なわれ、研究成果とその発信が魅力的であれば有るほど、博物館の他の事業も魅力的なものとなる。

特に琵琶湖博物館の研究事業では、「生命文化複合体」としての琵琶湖の「価値」を明らかにすることを目標に、学際的な総合研究やテーマをしぼった共同研究、ならびに個々の学芸員の資質を高める専門研究に取り組んできた。総合研究と共同研究については、研究審査委員会に対して研究計画書を提出し、その審査を受けて、2006年度は、以下の研究課題が審査を通過して実施された。なお、専門研究については、申請金額の多い研究は申請専門研究として、同じく研究審査会での審査を受けた。また、それ以外の専門研究については、研究部代表者会議において審査を実施した。

(1) 総合研究

琵琶湖博物館の設立理念を実現することに直接結びつく研究として、総合研究を行った。総合研究のテーマは次の3件であった。

- ・東アジアの中の琵琶湖－コイ科魚類を展開の軸とした－環境史に関する研究
代表者：中島経夫，研究期間：1996～2006年度
- ・水田における水域ネットワークの構造と生物群集の関係性に関する研究
代表者：前畑政善，研究期間：2006～2010年度
- ・琵琶湖およびその集水域の生物学的探査：分類学、形態と分子に基づく系統学
代表者：マーク・J. グライガー，研究期間：2006～2010年度

(2) 共同研究

琵琶湖博物館のテーマにしたがった研究として共同研究を以下のテーマで行った。

- ・東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究
代表者：榊永一宏，研究期間：2002～2006年度
- ・珪藻電子図鑑の増補改良
代表者：大塚泰介，研究期間：2003～2007年度
- ・古琵琶湖誕生期の古地理・古生物復元
代表者：高橋啓一，研究期間：2004～2006年度
- ・古琵琶湖出現期の古環境解析
代表者：里口保文，研究期間：2005～2007年度
- ・マシジミの遺伝育種学的研究
代表者：松田征也，研究期間：2005～2007年度
- ・琵琶湖の伝統的木造船「丸子船」の構造の研究～操舵性とも関連して～
代表者：牧野久実，研究期間：2006～2008年度
- ・河川残留型を含むピワマス地域個体群存在の可能性
代表者：桑原雅之，研究期間：2006～2008年度
- ・「魚が確認できない」データに基づく魚類が脅威にさらされている地域の特定と要因の解明
代表者：水野敏明，研究期間：2006～2008年度
- ・信仰を理由に保護されてきた森林保全システムに関する社会史的研究－滋賀県竹生島森林における鳥獣害への対応を事例として－

(3) 専門研究

各学芸職員が、自らの専門分野の研究をおこなった。専門研究は特別な経費を要求した申請専門研究と、通常の経費で研究をしたものとのに区別している。

<申請専門研究>

- ・中世内水面漁撈の変容とその歴史的意義－琵琶湖東部奥嶋の漁撈を中心に－（橋本道範）
- ・古琵琶湖層群における植物相の変化と常緑広葉樹の衰退（山川千代美）
- ・安定同位体比分析を用いたカワウ営巣林の食物網構造の解明（亀田佳代子）

<専門研究>

環境史研究領域

- ・コイ科魚類の咽頭歯の比較形態学的研究（中島経夫）
- ・大分県安心院町から発見されたミエゾウ頭骨の形態復元（高橋啓一）
- ・琵琶湖歴史環境の世界史的評価に関する研究（牧野久実）
- ・本州に分布する鮮新統中の火山灰と西太平洋DSDPコア中の火山灰との対比（里口保文）
- ・遺跡立地の環境考古学的研究（宮本真二）
- ・水生双翅目アシナガバエ属*Dolichopus*の分類学的研究（榊永一宏）

生態系研究領域

- ・水田利用魚類の生態と外来種の関連（前畑政善）
- ・農村地域における生物多様性直接支払い制度について（小川雅弘）
- ・滋賀県内における淡水生貝類の現状把握に関する調査研究（松田征也）
- ・ピワマスの繁殖生態（桑原雅之）
- ・多自然型川づくりに関する研究（武部 強）
- ・複層林内での樹下植栽木の単木防除方法の成長比較（西村知記）
- ・仔稚魚保育の場としての造成および天然ヨシ群落の機能評価の検討（孝橋賢一）
- ・植生と水質調節：一降雨流出時の水質変化の組成解析（草加伸吾）
- ・繊毛虫にとって共生藻類を持つ意義（楠岡 泰）
- ・魚類・貝類の保全に関する研究（中井克樹）
- ・水辺環境における「環境共存」についての環境社会学的研究（牧野厚史）
- ・琵琶湖南湖の沈水植物の分布に関するモニタリング（芳賀裕樹）
- ・琵琶湖沿岸におけるヨシ帯活用の変遷と課題（矢野晋吾）
- ・南極湖沼における珪藻群集の分布に関する研究（大塚泰介）
- ・滋賀県の淡水カイミジンコの分布と生態の分析（ロビン・J. スミス）

博物館学研究領域

- ・博物館が提供できる学習活動の特色と課題（布谷知夫）
- ・鰓脚類と顎脚類（甲殻類）の分類学や個体発生学に関する研究（マーク・J. グライガー）
- ・近江の首長墓と寺院にみる歴史的特質と地域性に関する考古学的研究（用田政晴）
- ・琵琶湖集水域における人や生き物の活動の映像記録（写真撮影、録音など）に関する研究
ならびに博物館的表現・伝達方法・利用に関する研究（秋山廣光）
- ・近畿におけるオサムシ類の系統進化に関する研究（八尋克郎）
- ・博物館事業における水理学分野の位置付けに関する研究（戸田 孝）
- ・イバラモのシュート群動態と雌雄異株性に関する研究（芦谷美奈子）
- ・博物館における民具資料の存在意義と利用価値の再発見（中藤容子）
- ・琵琶湖博物館を利用した学習プログラムの開発（中村公一）

琵琶湖博物館総合研究・共同研究審査委員会 委員

氏 名	現 職
鳥 越 皓 之	早稲田大学人間科学学術院 教授
原 田 英 司	京都大学名誉教授
三田村 緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 教授
藤 井 讓 治	京都大学大学院文学研究科 教授
篠 原 徹	国立歴史民俗博物館民俗研究部 教授
宮 崎 信 之	東京大学海洋研究所海洋科学国際協同研究センター 教授
竹 村 恵 二	京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設長 教授
西 川 朗	滋賀県教育委員会学校教育課指導主事
川那部 浩 哉	滋賀県立琵琶湖博物館 館長
寺 田 治 雄	滋賀県立琵琶湖博物館 副館長

(4) 公表された主な研究業績

学芸職員が公表した研究に関する著作物のうち、学術雑誌や書籍などで公表されたオリジナルな論文、あるいはそれと同等なものをあげた。研究業績全体については、琵琶湖博物館インターネットページ (<http://www.lbm.go.jp/active/kenkyu/>) に掲載した。

山川千代美・此松昌彦・八尋克郎・里口保文・石田志朗（2007）伊吹山南麓に分布する中部更新統寺林層の植物化石および昆虫化石に基づく古環境復元. 第四紀研究, 46(1) : 1-18.

牧野久実（2007）琵琶湖集水域、特にエコトーンにおける船の利用について. 史学, 75 (2・3) : 117-139.

牧野久実（2007）湿地における田舟の利用. 「国際湿地再生シンポジウム2006 報告書」国際湿地再生シンポジウム2007実行委員会, 73 (2・3) : 305-312.

用田政晴（2007）前方後方墳と前方後方形周溝墓－法勝寺SDX23号墓の再評価－, 淡海文化財論叢, 2 : 35-40.

用田政晴（2007）琵琶湖南部東岸の古墳と船津. 考古学論究 : 269-287.

Maehata, M. (2007) Reproductive ecology of the Far Eastern Catfish, *Silurus asotus* (Siluridae), with a comparison to its two congeners in Lake Biwa, Japan. Environmental Biology of Fishes, 78 : 135-146.

Takahashi, K., Soeda, Y., Izuho, M., Yamada, G., Akamatsu, M. and Chang, C. (2006) The chronological record of the woolly mammoth (*Mammuthus primigenius*) in Japan, and its temporary replacement by *Palaeoloxodon naumanni* during MIS 3 in Hokkaido (northern Japan). Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology, 233, : 1-10.

平山 廉・藤井 明・高橋啓一（2006）香川県高松市塩江町の上部白亜系泉層群より産出したオサガメ科化石化石, 80 : 17-20.

高橋啓一・島口 天・神谷英利（2006）青森県下北郡東通村尻労産のナウマンゾウ化石とそのAMS¹⁴C年代. 化石研究会会誌, 39 : 21-27.

北川博道・瀬戸浩二・高橋啓一・沖村雄二（2006）瀬戸内海西部諸島周辺海底から産出したナウマンゾウ化石. 島根大学地球資源環境学研究報告, 25 : 31-47.

Zhang, L., Yang, D. and Masunaga, K. (2006) Two new long-legged flies of the genus *Paraclius* (Insecta:

- Diptera: Dolichopodidae) from Taiwan, with New Records of Three Species. *Species Diversity* : 149-156.
- Wang, M., Yang, D., and Masunaga, K. (2006) Note on *Syntormon* from Chinese mainland (Diptera: Dolichopodidae). *Transactions of the American Entomological Society*, 131(1+2) : 129-132.
- Zhu, Y., Yang, D. and Masunaga, K. (2006) Two new species of *Thinophilus* from China (Diptera: Dolichopodidae). *Transactions of the American Entomological Society*, 131(1+2) : 145-149.
- Zhu, Y., Yang, D. and Masunaga, K. (2006) A new species of *Hydrophorus* (Diptera: Dolichopodidae), with a key to species from China. *Entomological News*, 117(3) : 293-296.
- 芳賀裕樹・大塚泰介・松田征也・芦谷美奈子 (2006) 2002年夏の琵琶湖南湖における沈水植物の現存量と種組成の場所による違い. *陸水学雑誌*, 67 (2) : 69-79.
- Ohtsuka, T., Kudoh, S., Imura, S. and Ohtani, S. (2006) Diatoms composing benthic microbial mats in freshwater lakes of Skarvsnes ice-free area, East Antarctica. *Polar Bioscience*, 20 : 113-130.
- 芳賀裕樹・芦谷美奈子・大塚泰介・松田征也・辻 彰洋・馬場浩一・沼畑里美・山根 猛 (2006) 琵琶湖南湖における湖底直上の溶存酸素濃度と沈水植物群落現存量の関係について. *陸水学雑誌*, 67 : 23-27.
- Kobayasi, N., Ohtsuka, T. and Saigusa, M. (2006) Case studies on the seasonal changes of diatom community in paddy fields. *Journal of Integrated Field Science*, 3 : 95-101.
- Nakano, S., Takeshita, A., Ohtsuka, T. and Nakai, D. (2006) Vertical profiles of current velocity and dissolved oxygen saturation in biofilms on artificial and natural substrates. *Limnology*, 7 : 213-218.
- Smith, R. J., Kamiya, T. and Horne, D. J. (2006) Living males of the 'ancient' asexual Darwinulidae (Ostracoda, Crustacea). *Proceedings of the Royal Society, B*, 273 : 1569-1578.
- Smith, R. J. and Kamiya, T. (2006) Six new species of fresh and brackish water ostracods (Crustacea) from Yakushima, Southern Japan. *Hydrobiologia*, 559 : 331-355.
- 宮本真二・中島経夫 (2006) 縄文時代以降における日本列島の主要淡水魚の分布変化と人間活動. *動物考古学*, 23 : 39-53.
- Obrégó-Barboza, H., Maeda-Martínez, A. M., Murugan, G., Timms, B. V., Grygier, M. J., Rogers, D. C., Rodriuez-Almaraz, G. & Dumont, H. J. (2007) Morphology and systematic significance of the mystax, a hitherto undescribed cephalic structure of males in certain Notostraca (Branchiopoda). *Journal of Crustacean Biology*, 27 (1) : 18-23.
- 布谷知夫 (2006) 身近な課題から始める環境教育. *日本生態学会誌*, 2 (56) : 158-165.
- 広瀬裕二・布谷知夫 (2006) 環境教育「生態学会と初等中等教育との連携を目指して」総括論文. *日本生態学会誌*, 2 (56) : 107-109.
- 布谷知夫・西垣 亨 (2006) 地域と博物館との協力で実現した小学生による伯母川調査 (02-002J). *国際湿地シンポジウム報告書* : 107-109.
- 中尾博行・藤田建太郎・川端健人・中井克樹・沢田裕一 (2006) 琵琶湖北湖における外来魚ブルーギル *Lepomis macrochirus* の繁殖生態. *魚類学雑誌*, 53 : 55-62.
- 中尾博行・川端健人・藤田建太郎・中井克樹・沢田裕一 (2006) 外来魚ブルーギルの卵・仔魚に対する在来巻貝類の捕食. *魚類学雑誌*, 53 : 167-174.
- 芳賀裕樹 (2006) 琵琶湖南湖の面積について. *陸水学雑誌*, 67 : 123-126.
- Kameda, K., Koba, K., Hobara, S., Osono, T. and Terai, M. (2006) Pattern of natural ¹⁵N abundance in lakeside forest ecosystem affected by cormorant-derived nitrogen. *Hydrobiologia*, 567 : 69-86.
- Osono, T., Hobara, S., Koba, K. and Kameda, K. (2006) Reduction of fungal growth and lignin decomposition in needle litter by avian excreta. *Soil Biology and Biochemistry*, 38 : 1623-1630.
- Takahashi, T., Kameda, K., Kawamura, M. and Nakajima, T. (2006) Food habits of great cormorant *Phalacrocorax carbo hanedae* at Lake Biwa, Japan, with special reference to ayu *Plecoglossus altivelis*

altivelis. Fisheries Science, 72 : 477-484.

Timoshkin, O. A., Grygier, M. J., Nishino, M., Wada, E., Genkal, S. I., Biserov, V. I., Gagarin, V. G., Semernoy, V. P., Jankowski, A. W., Stepanjants, S. D., Tsalolikhin, S. Y., Starobogatov, Y. I., Alexeev, V. R., Sitnikova, T. Y., Tuzovskij, P. V., Okuneva, G. L., Sheveleva, N. G., Pomazkova, G. I., Arov, I. V., Mazepova, G. F., Janz, H., Obolkina, L. A., Chernyshev, A. V., Morino, H., Nakai, K., Matsuda, M., Ohtsuka, T., Kawakatsu, M., Maehata, M., Masuda, Y., Takemon, Y., Tanida, K., Kusuoka, Y., Yahiro, K., Hirasawa, R., Tuji, A., Kusuoka, Y., Kameda, K., Ishida, T., Itoh, T., Ichise, S., Wakabayashi, T., Okubo, I., Seki, S., Nagasawa, K., Ogawa, K. and Masunaga, K. (2006) Biodiversity of Lake Biwa: New discoveries and future potential. Berliner Palaobiologische Abhandlungen, 9 : 61.

(5) 研究助成を受けた研究

芳賀裕樹

・滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター「琵琶湖南湖沿岸帯におけるカビ臭アオコ発生機構の検討」研究分担者(2004年～)

布谷知夫

・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「半栽培(半自然)と社会的しくみについての環境社会学的研究」研究分担者(2005～2007年度)

・国立民族学博物館「博物館のネットワーク研究会」共同研究者(2005～2008年度)

・国立歴史民俗博物館共同研究「展示室におけるコミュニケーション・デザイン研究会」共同研究者(2006～2009年度)

・文部科学省科学研究費「中近世建築遺構の放射性炭素を用いた年代判定」研究分担者(2006～2008年度)

中島経夫

・(財)世界自然保護基金ジャパン「琵琶湖流域の魚類分布情報のGIS化」研究代表者(2004～2006年度)

・国立歴史民俗博物館「日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合研究」研究分担者(2005～2007年度)

・総合地球環境学研究所プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化－景観の形成史－」プロジェクトメンバー(2005～2011年度)

・全国科学系博物館等における地域子ども教室推進事業運営協議会(国立科学博物館)「地域子ども教室推進事業」研究代表者(2004～2006年度)

・文部科学省科学研究費補助金(基盤A)海外「河姆渡文化研究の再構築－余姚田螺山遺跡の学際的総合調査－」研究分担者(2006～2009年度)

・西日本自然史系博物館ネットワーク「琵琶湖博物館魚類標本の整備と公開」代表者(2006年度)

・社団法人近畿建設協会「琵琶湖魚類調査研究」代表者(2006～2007年度)

牧野久実

・文部科学省科学研究費補助金(基盤A)「イスラエル国ガリラヤ湖周辺の宗教文化についての総合研究」研究分担者(2004～2006年度)

大塚泰介

・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「河床生態系における微生物ループと生食連鎖とのリンク」研究分担者(2004～2006年度)

・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「魚類の数値データを用いた同定ツール作成の研究」研究分担者(2004～2006年度)

・文部科学省科学研究費補助金(基盤C)「珪藻同定支援システムの開発」研究代表者(2006～2008年度)

・文部科学省科学研究費補助金(基盤C)「ラオスの水田における生態系変化の指標となる藻類の特定」研究分担者(2005～2007年度)

矢野 晋 吾

- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「半栽培(半自然)と社会的しくみについての環境社会学的研究」研究分担者(2005~2007年度)

牧野 厚 史

- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「半栽培(半自然)と社会的しくみについての環境社会学的研究」研究分担者(2005~2007年度)
- ・関西大学21世紀COEプログラム「幸福のフィールドワーク-実存と実践の比較社会学的方法の確立をめざして-」(関西学院大学 21世紀COEプログラム『人類の幸福に資する社会調査』の研究)研究分担者(2003~2007年度)
- ・滋賀大学総合環境研究所プロジェクト研究「水辺エコトーンにおける伝統的生業活動とコモنزの変容に関する研究」研究分担者(2005~2006年度)
- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「琵琶湖の歴史的環境と人間の関わりに関する総合的研究」研究分担者(2006~2009年度)

中井 克 樹

- ・平成16年度開始地球環境研究総合推進費「F-3 侵入種生態リスク評価研究プロジェクト」研究参画者(2004~2006年度)
- ・水産庁平成17年度健全な内水面生態系復元等推進委託事業「ブルーギル食害等影響調査」担当者(2005~2006年度)

宮本 真 二

- ・文部科学省科学研究費補助金(若手B)「自然環境の変遷と人間活動の対応関係に関する解明」研究代表者(2005~2007年度)
- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤A)「南部アフリカにおける『自然環境-人間活動』の歴史的変遷と現問題の解明」研究分担者(2005~2008年度)
- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤A)「プラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発-持続的発展の可能性-」研究協力者(2005~2008年度)
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化-景観の形成史-」プロジェクトメンバー(2005~2011年度)
- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「琵琶湖の歴史的環境と人間の関わりに関する総合的研究」研究分担者(2006~2009年度)
- ・滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「水辺エコトーンにおける伝統的生業活動とコモنزの変容に関する学際的研究」研究分担者(2005~2006年度)

高橋 啓 一

- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤C)「後期更新世における動植物相の変遷と旧石器文化の関係解明のための学際的研究」研究代表者(2005~2006年度)
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討」プロジェクトメンバー(2006~2010年度)

梶 永 一 宏

- ・文部科学省科学研究費補助金(若手B)「海洋性双翅目昆虫の起源と進化」研究代表者(2006~2008年度)

橋本 道 範

- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「東アジア内海の新石器化と現代化-景観の形成史-」プロジェクトメンバー(2005~2011年度)
- ・文部科学省科学研究費補助金(基盤B)「琵琶湖の歴史的環境と人間の関わりに関する総合的研究」研究分担者(2006~2009年度)

用 田 政 晴

- ・河川環境財団「琵琶湖水系野洲川・愛知川流域における弥生時代環濠集落の水環境論研究と成果展示への試み」研究代表者（2006～2007年度）

松 田 征 也

- ・（社）日本動物園水族館協会野生動物保護募金による助成対象事業「ISSR分析によるムサシトミヨ水族飼育群の遺伝的多様性」共同研究者（2006年度）

草 加 伸 吾

- ・河川環境財団「下流域の富栄養化への影響を最小限にする森林管理方法の探求」研究代表者（2006～2007年度）
- ・びわ湖・フブスグル湖交流協会研究プロジェクト（地球環境基金、イオン環境財団）「モンゴル北部フブスグル県周辺の森林火災・虫害被害跡地の再生と予防支援」研究分担者（2006年度）

中 村 公 一

- ・滋賀県総合教育センター平成18年度（2006年度）環境教育に関する研究II「エネルギーについて主体的に考える指導法の工夫」共同研究者（2006年度）

中 野 正 俊

- ・滋賀県総合教育センター平成18年度（2006年度）環境教育に関する研究I「森林とその保全の重要性を学ぶ環境学習」共同研究者（2006年度）

（6）琵琶湖博物館研究発表会

○研究発表会

2006年度は琵琶湖博物館の10周年を記念して4回の研究発表会を企画した。

・第1回（通算第10回）

タイトル：「みんなで調べる琵琶湖のおいたち－琵琶湖地域の環境史研究の10年（古琵琶湖編）－」

日時：2006年11月18日（土）13：30～17：00

場所：琵琶湖博物館ホール

内容：琵琶湖博物館で進めてきた「環境史研究」のうち、特に「古琵琶湖研究」をテーマとして取り上げた。学芸員の研究成果、地域の人々で行った研究、これからの研究参加法などについて発表した。はしかけグループ「びわたん」の協力を得て、楽しく演出すると共に、参加者とともに発表会を進行した。

プログラム：

総合司会 山川千代美主任学芸員（環境史研究領域）

13：30～13：40／開会あいさつ 研究部長 高橋啓一

13：40～13：55／環境史研究グループの研究紹介
橋本道範主任学芸員（環境史研究領域）

13：55～14：40／（1）琵琶湖の誕生期（約400万年前）

テーマ：研究の成果と方法

進 行：森永紗江子さん（びわたん）

発表者：里口保文主任学芸員（環境史研究領域）

高橋啓一総括学芸員（環境史研究領域）

14：50～15：50／（2）琵琶湖の沼沢期（約250～170万年前）

テーマ：地域の人々で行った研究

進 行：北村美香さん（びわたん）

発表者：雨森 清さん（甲良東小学校教諭）

小西省吾さん（みなくち子どもの森自然館学芸員）

岡村喜明さん（滋賀県足跡化石研究会会長）

16：00～16：50／（3）古琵琶湖から琵琶湖へそして参加できる研究へ

テーマ：みんなで調べる環境史研究の進め方

進行：森永紗江子さん

発表者：石川寛子さん（びわたん）

会場：青木伸子（交流担当グループ）

・第2回（通算第11回）

タイトル：「カワウ・水草・外来魚－彼らはなぜやっかい者なのか？－」

日時：2006年12月16日（土）13：00～16：45

場所：琵琶湖博物館ホール・アトリウム

内容：琵琶湖博物館では、近年大きく変貌をとげた琵琶湖地域の生態系に関して、さまざまな研究テーマを取り扱ってきた。その中から、特にカワウ、水草、外来魚といった“やっかい者”に焦点をあて、なぜやっかい者なのかを人々と生物との関わりから考える発表を生態系研究領域の学芸員を中心に行った。また、アトリウムを使って生態系領域に所属する学芸員の研究などをポスターで発表した。

プログラム：

開会あいさつ

13：10～13：50／南湖の水草は今・・・？（芳賀裕樹主任学芸員）

13：50～14：30／外来魚問題を歴史から考える（中井克樹主任学芸員）

14：30～15：10／湖と森に与えるカワウの影響－環境を変える生物の全体像を探る－（亀田佳代子専門学芸員）

15：10～15：40／休憩－＜ポスター発表18題＞－

15：40～16：00／コメント：中村正久（滋賀大学環境総合研究センター教授）

16：00～16：40／質疑・討論（コーディネーター：中村正久教授）

16：40～16：45／閉会あいさつ

・第3回（通算第12回）

タイトル：「めざしたこと・できたこと・これからのこと－琵琶湖博物館の10年－」

日時：2007年1月20日（土）13：30～17：00

場所：琵琶湖博物館ホール

内容：博物館という研究機関には「博物館活動のありかた」を探る博物館学の研究も求められている。そこで、実際に琵琶湖博物館で進めてきたさまざまな活動を博物館学的な観点から見直し、国内外の事例とも比較しながら、その位置づけを検証した。琵琶湖博物館が、何を目指してきたのか、そして何ができ、何が課題として残されているのかを考えた。

プログラム：

13：30～13：40／博物館学の考え方、活動の紹介、比較と評価（マーク・J.グライガー総括学芸員）

13：40～14：05／なぜたくさんの虫を集めるのか－地域の人たちとの調査研究から企画展へ－（八尋克郎専門学芸員）

14：05～14：30／学校と博物館との連携について（中村公一主査）

14：30～14：55／琵琶湖博物館の電子情報－世界情勢の中での立ち回り－（戸田孝主任学芸員）

15：10～15：35／琵琶湖博物館の映像資料とその利用の可能性について（秋山廣光専門学芸員）

15：35～16：00／琵琶湖水系漁撈習俗資料の収集・整理・保管、そして利用への道のり

(用田政晴総括学芸員)

16:00~16:25/博物館現場での博物館学(布谷知夫上席総括学芸員)

16:25~17:00/質疑応答・討論

・第4回(通算第13回)

タイトル:「大集合!琵琶湖の研究」

日時:2007年2月17日(土)10:30~17:00

場所:琵琶湖博物館ホール・アトリウム

内容:琵琶湖地域の研究に関係する県内外の機関や人々による38のポスター展示と、各ポスターについての短い発表を行った。これらの発表について館長からコメントをもらい、それらを通して琵琶湖研究の重要性、いろいろなグループや人々が研究をする意味、研究の進め方などについて討論を行った。発表会終了後には館内レストランでの交流会も行った。

プログラム:

9:30~/ポスター会場(アトリウム)開場

10:30~/ポスター発表開始

13:00~/各ポスター1~2分ずつの口頭発表(ホール)、川那部浩哉館長のコメント

15:00~17:00/ポスター前での討論(アトリウム)

(7) 特別研究セミナー

第44回 2006年7月4日(火)13:30~14:30 琵琶湖博物館会議室

李 鍾殷氏(韓国国立安東大学校自然科学大学生命科学科 教授)

「濁水が河川生態系に及ぼす影響」

第45回 2006年7月26日(水)13:30~15:00 琵琶湖博物館会議室

山崎真嗣氏(豊橋技術科学大学エコロジー工学系 博士研究員)

「水田水生生物相に違いを与える要因の探求」

第46回 2007年1月27日(土)10:00~12:30 琵琶湖博物館セミナー室

「なぜ!魚はエリにはいるのか? PART II」(琵琶湖漁業を考える会協賛)

進行:橋本道範主任学芸員

10:00 あいさつ 中島経夫(上席総括学芸員)

10:05~10:35 「琵琶湖のコイ・フナを追う」

米山和良(北海道大学大学院水産科学院)・松田征也(滋賀県立琵琶湖博物館)

10:35~11:05 「アユの行動-流れと水温の影響-」 福田漠生(近畿大学大学院農学研究科)

11:10~11:40 「エリまわりの流れをみる」 妹尾真也(近畿大学大学院農学研究科)

11:40~12:10 「湖にやさしい伝統漁法」

山根 猛(近畿大学大学院農学研究科)・鶴飼広之(大津漁業協同組合)

12:10~12:30 全体質疑・討論(20分)

(8) 研究セミナー

毎月第3金曜日に、以下の研究セミナーを開催した。

第1回(4月21日)

Robin J. Smith「Living males of the 'ancient asexual' Darwinulidae (Ostracoda; Crustacea)」

矢野晋吾「漁場管理の変化と構築される漁業権」

戸田孝・亀田佳代子・島田拓哉・釈慶樹・板倉安正「常設赤外カメラによる琵琶湖赤野井湾の観測結果
- 冬季の水鳥の去就と夏季の水草域の消長 -」

第2回 (5月19日)

芳賀裕樹「タテボシガイとセタシジミの貧酸素耐性」

亀田佳代子「カワウによる物質輸送と環境変化に関する研究：その意義と展望」

高橋啓一「日本の哺乳動物相の変遷を考える - 1000年単位の復元をめざして -」

第3回 (6月16日)

牧野久実「丸子船の操船性の解明に向けて」

前畑政善「琵琶湖内湖における魚類相の実態とニゴロブナ幼魚の放流効果」

青木伸子「博物館における環境学習の望ましいあり方 - 琵琶湖博物館を事例として -」

第4回 (7月21日)

八尋克郎「大分県杵築市の平原層から産出した中期更新世の昆虫化石」

里口保文「日本列島周辺における鮮新世の爆発的火山活動の解明」

藤田裕子「水田土壌における珪藻群集の特徴 - 日本とラオスの調査から -」

第5回 (8月18日)

中島経夫「琵琶湖博物館総合研究『東アジアの中の琵琶湖 - コイ科魚類の展開を軸とした - 環境史に関する研究』のまとめ」

牧野厚史「鳥獣被害問題：社会学からのアプローチ - 滋賀県竹生島カワウ問題における missed opportunity の検討を事例として -」

布谷知夫「参加型調査という研究方法」

第6回 (9月15日)

堀田桃子「トウヨシノボリ4色斑型の集団遺伝学的解析」

楠岡 泰「ヨルダン博物館事情」

草加伸吾「モンゴル北部森林火災跡地での再生阻害要因の探求実験結果と再生への応用」

第7回 (10月20日)

梶永一宏「大洋島における海洋性アシナガバエの起源と分散」

宮本真二・安藤和雄「ヒマラヤ地域における土地開発過程」

用田政晴「安土瓢箪山古墳における壺と『埴輪』の史的意義」

第8回 (11月17日)

山川千代美「後期鮮新世のメタセコイアとスイショウの化石林」

Mark Joseph Grygier「Stage 2 nauplius larvae of the symbiotic stalked barnacles *Koleolepas* and *Heteralepas*」

松田征也「滋賀県で大切にすべき野生生物における淡水貝類の選定について」

第9回 (2月15日)

中井克樹「琵琶湖の外来魚問題史」

小川雅広「農村環境直接支払いについて」

北村美香「博物館におけるマーケティング・プロセスモデル構築に向けて」

第10回 (1月19日)

孝橋賢一「琵琶湖岸において造成されたヨシ群落の機能回復度の評価にむけて～天然ヨシ群落との比較から」

武部 強「多自然型川づくりを目指した河川計画について」

橋本道範「中世琵琶湖漁撈史研究総括 - 『網野史学』の功と罪 -」

第11回 (2月16日)

中村公一「博物館と学校とのよりよい連携のあり方を求めて」

西村知記「複層林内での樹下植栽木の単木防除方法の成長比較」

水野敏明「琵琶湖流域のブルーギルの生息リスク評価」

第12回（3月16日）

大塚泰介「ギャラリー展示『ミクロの世界を探検しようープランクトンの不思議ー』が来場者のプランクトン観に及ぼした影響

野嶋宏二「浜松市引佐町谷下産中期更新世の新種フナ化石の模式標本と新種ヤゲワニ化石の生息環境」

中野正俊「琵琶湖博物館と学校の交流・連携に関わる実践的研究」

（9）特別研究員の受け入れ

・水野敏明

2006年3月1日～2007年3月31日

テーマ：市民参加による魚類分布情報を指標とした淡水生態系の統合的なリスク評価

・堀田桃子

2006年4月1日～2007年3月31日

テーマ：トウヨシノボリの4色斑型の遺伝的および形態的特性の把握

・野嶋宏二

2006年4月1日～2007年3月31日

テーマ：1. 浜松市引佐町産中期更新世（MIS9）の未記載種化石フナ
2. 日本列島産フナ（現生、化石）の類縁関係

・藤田裕子

2006年4月1日～2007年3月31日

テーマ：水田に生息する微細藻類の生態学的研究

・北村美香

2006年1月4日～2007年1月3日

テーマ：博物館におけるマーケティング及び広報活動について

（10）海外交流活動

1) 研究に関する国際用務

・川那部浩哉

2006年7月31日～8月9日 国際イワナシンポジウム出席。アイスランド・レイキャビック、アイスランド大学

2006年9月3日～9月14日 国際陸水学会議におけるSIAL会議出席および日仏共同企画展に係る調整。ドイツ・ベルリンおよびフランス国パリ

・桑原雅之

2006年7月31日～8月9日 国際イワナシンポジウム出席およびイギリスでの自然史博物館、水族館の視察。アイスランド・レイキャビック、アイスランド大学およびイギリス国ロンドン（自費）

・中島経夫

2006年8月31日～9月6日 科学研究費（基盤B）田螺山遺跡出土遺物の調査および古環境考古学研究に関する資料収集。中国杭州市浙江省博物館、上海市上海博物館

・八尋克郎

2006年10月1日～10月9日 日仏共同企画展に係る南フランス産昆虫標本の収集。フランス・パリ国立自然史博物館およびアビニオン周辺

・高橋啓一

2007年1月16日～1月21日 総合地球環境学研究所研究プロジェクト「日本列島における人間・自然

相互関係の歴史的・文化的検討」に係る研究打合せおよび収蔵資料調査. ロシア・サハリン州、サハリン教育大学歴史学部およびサハリン州立博物館

・榎永一宏

2007年1月22日～3月8日 科学研究費(若手B)「海洋性双翅目昆虫の起源と進化」に係る資料収集. オーストラリアおよびニュージーランド

・宮本真二

2007年2月14日～3月5日 科学研究費(若手B)「自然環境の変遷と人間活動の対応関係の解明」に係る研究調査. インドおよびバングラデシュ

2) 事業に関する国際用務

・布谷知夫

2006年4月21日～4月26日 日仏共同企画展に係る「展示基本設計」の内容の検討、調整と実施設計に向けての協議. フランス・パリ、フランス国立自然史博物館

(11) 開館10周年記念出版物

琵琶湖博物館開館10周年を記念して、開館以来10年間の研究部の活動などを「琵琶湖博物館 研究部10年の歩み」を出版した。

3 新たな参加と発見ができる博物館

展示活動

2006年度は、昨年度に引き続き、常設展示の展示物や情報機器の更新、展示手法の改善を行い、常設展示の内容を発展させた関連事業を行った。また、次のような企画展示、水族企画展示、ギャラリー展示、水族展示イベントを開催し、関連事業を展開した。さらに、「集う、使う、創る 新空間」を開設し、地域住民の活動紹介を行った。

(1) 常設展示の主な更新

- 1) A展示室
特になし
- 2) B展示室
「琴湖の治水利水」琵琶湖のかつての水運パネルに変更（牧野(久)2006/5/2）
「輸送の主役 丸子船」最新の研究成果（模型航行実験）の映像を追加展示（牧野(久)2007/2/6）
- 3) C展示室
「川の生き物を調べる」夜間採集の白布に集まる虫を付け替えた（榊永2006/4/26）
「世界の湖沼」キネレット湖関連展示を追加（B展より移動）（牧野(久)2006/5/29）
「生き物コレクション」「鳥類」の引き出しの上に「日本のラムサール条約湿地」の最新パンフレット（日本語版、英語版）を置いた（亀田2006/6/8）
「スタッフからのメッセージ」資料提供の資料を紹介するようにした（展示担当 2006/7/22）
「ホテルダス」最新アンケートを展示（榊永 2006/12/19）
「わたしたちの暮らし40年」1996年から2005年までの展示を追加（展示担当 2007/3）
- 4) 水族展示室
「洞庭湖のダントウボウ等」中国タナゴに変更（松田 2006/9/20）
- 5) 屋外展示
特になし
- 6) ディスカバリー・ルーム（芦谷・堀田・荒井）
「音の部屋」アジアの楽器展示（2006/4/8～）
「音の部屋」北米・南米の楽器展示（2006/7/1～）
「音の部屋」アフリカの楽器展示（2006/10/1～）
「音の部屋」日本の楽器展示（2007/1/3～）
「世界の子どもたち フィンランド」フィンランドの夏休み展示（2006/5/30～）
「世界の子どもたち フィンランド」どうぶつのあしあと展示（2006/11/7～）
「おばあちゃんの台所」こどもの日関連展示（2006/4/21～）
「おばあちゃんの台所」ゆかた展示（2006/6/16～）
「おばあちゃんの台所」七夕展示（2006/6/24～7/7）
「おばあちゃんの台所」着物展示（2006/9/28～）
「おばあちゃんの台所」お正月関連展示（2007/1/3～1/14）
「おばあちゃんの台所」ひなまつり関連展示（2007/2/21～3/10）
「生物水槽」黄ナマズ展示（2006/5/1～）
「ディスカバリー・カウンター」アリ展示（2006/4/20～）
「ディスカバリー・カウンター」日本の蝶標本展示（2006/5/2～）
「ディスカバリー・カウンター」カブトムシ蛹展示（2006/6/3～）
「ディスカバリー・カウンター」カイコ展示（2006/6/4～）

- 「ディスカバリー・カウンター」アマガエル展示 (2006/8/5～)
- 「ディスカバリー・カウンター」バッタ展示 (2006/10/14～)
- 「ディスカバリー・カウンター」モリアオガエル展示 (2006/12/9～)
- 「ディスカバリー・ボックス」福笑い・すごろくボックス展示 (2007/1/3～1/14)

展示関連イベント

- 「ディスカバリー・カウンター」コイを作ろう！ (2006/4)
- 「ディスカバリー・カウンター」短冊に願い事を書こう！ (2006/6～7)
- 「おばあちゃんの台所」紙芝居“七夕はどんな日？” (2006/7)
- 「ディスカバリー・カウンター」カイコの糸取り (2006/7)
- 「ディスカバリー・カウンター」まゆ工作 (2006/8)
- 「ディスカバリー・カウンター」木の葉でウチワ (2006/8)
- 「ディスカバリー・カウンター」光と影のアート (2006/9)
- 「ディスカバリー・カウンター」繭玉ころころ (2006/10)
- 「ディスカバリー・カウンター」タネで絵をかこう (2006/10)
- 「ディスカバリー・カウンター」とびだす思い出カード (2006/11)
- 「ディスカバリー・カウンター」ミノムシを作ろう！ (2006/12)
- 「ディスカバリー・カウンター」みのきんカルテット (2007/1)
- 「ディスカバリー・カウンター」オニをつくろう (2007/2)
- 「ディスカバリー・カウンター」おひなさまをつくろう (2007/3)



わたしたちの暮らし50年



タネで絵をかこう

(2) 第14回企画展示「湖辺～水、魚そして、人～東アジアの中の琵琶湖」

1) 概要

期 間：平成18年7月15日（土）～11月26日（日）

場 所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧料：大人400円（300円） 高校生・大学生300円（230円） 小学生・中学生 200円（150円）

（カッコ内は20人以上の団体料金）

観覧者数：22,700人

展示設計業者：（有）おうれりあん

担当者：主担当者 秋山廣光

副担当者 中島経夫

2) 内容・特徴

① 展示のテーマ：

琵琶湖畔での人の暮らしと身近な自然環境との結びつきを映像で示すことによって、長い歴史の中で築かれてきた湖と人間とのかかわりを深く心に印象づけ、豊富な自然に育まれた身近な環境の価値をあらためて思い出させるような展示とした。

この企画展示は、2007年度企画展示の導入ともなる。これは、琵琶湖の湖辺を出発点として、時間軸をさかのぼり、人間と湖のかかわりがたどった道を探検する物語である。そして、それに重ねるようにコイ科魚類が分布を拡大した時代を時間軸とし、発祥の地であるユーラシアの大地へと、コイ科魚類の足跡をたどるような想像力をかきたてる映像となるように展示した。そのために、現在の琵琶湖という自然環境とそれにかかわる人間の姿を印象に残る手法で展開した。

② 展示の特徴：

本企画展では、湖辺での人間と生き物、その環境とのかかわりを、共同研究者今森光彦氏の映像によって、イメージとして展示した。現代の琵琶湖岸では、ほとんど見られなくなった暮らしと身近な環境が結びついた姿を映像で示し、あらためて来館者に問題意識をもっていただくよう努めた。それと同時に、2007年度に開催の企画展示「琵琶湖のコイ・フナの物語～東アジアの中の湖と人～」への導入となる展示となるよう配慮した。展示の各ゾーン内には、総合研究の共同研究者10名の似顔絵が、それぞれの研究者の立場から個別、展示映像へのコメントを加えた。

3) 展示項目

① エントランス

高島市新旭町針江の湧水を起源とする小川と琵琶湖岸との間で、生活圏を共有する老漁師とコイ科魚類の出逢いを暗示する大写真パネルを設置。

② Aゾーン（導入部）：東アジア総合研究から今森光彦の映像へ

本企画展示の背景となった総合研究「東アジアの中の琵琶湖－コイ科魚類の展開を軸とした－環境史に関する研究」の成果として、コイ科魚類の変遷と湖辺で暮らす人の変遷を歴史年表風に解説した。人の暮らしの痕跡と共に出土するコイ科魚類の咽頭歯化石を展示。7000万年のコイの来た道をたどる。

③ B-1ゾーン：季節の移り変わりの中での、水、魚、人

展示中央にヨシの丸立てを展示。季節の移り変わりの中で自然に生きる魚と人との関わり、それを取り持つ水の映像展示。物語の中心は、高島市新旭町針江。自然の営みと一体となって生活する老漁師とコイやフナとの関係を写真パネルで解説。

④ B-2ゾーン：水の源、野、森、山をたどる

悠久の時の流れの中で、魚と人が出逢う場となった自然景観を表現。山や森に降る雨は川や湧き水となって生物を育む。その中に魚や人が暮らす。背景となる自然風土を作り上げてきた水の循環に合わせ、長い時間をかけてゆったりと変化する自然のあり方を解説。

⑤ Cゾーン：東アジアの中の琵琶湖

平成19年度企画展示「琵琶湖のコイ・フナの物語～東アジアの中の湖と人～」への導入展示。コイの全身骨格標本。ビデオコーナーの設置。フナズシなど風土の中で育まれた郷土料理の紹介も行った。

4) 関連事業

① 上映会「里山 生命めぐる湖辺」（上映ビデオはオリジナル編集作品）

日 時：平成18年7月16日～8月25日（毎週金曜日）5回

場 所：琵琶湖博物館ホール

② 観察会「カバタを見てみよう」

日時：平成18年9月10日

場 所：高島市新旭町針江

共 催：琵琶湖博物館うおの会

参加者：56名

③体験教室「咽頭菌のレプリカ作り」

日 時：平成18年10月1日

場 所：琵琶湖博物館実習室

参加者：12名

④企画展示シンポジウムI「湖辺～水、魚、そして人～」

日 時：平成18年10月15日（日）13：00～16：40

場 所：琵琶湖博物館ホール

話題提供とパネルディスカッション

写真家 今森光彦

NHKエンタープライズ 若松博之

総合地球環境学研究所 内山純蔵

参加者：65名

⑤人形劇にんたま公演「たなかみさま」

日 時：平成18年10月28日

場 所：琵琶湖博物館エントランス

参加者：93名（第一回上演）、84名（第二回上演）

⑥ 企画展示シンポジウムII「琵琶湖をめぐる景観の歴史」

日 時：平成18年11月12日（日）13：00～16：40

場 所：琵琶湖博物館ホール

話題提供とパネルディスカッション

総合地球環境学研究所 内山純蔵

総合地球環境学研究所 カティ・リンドストローム

滋賀大学環境総合研究センター 佐野静代

写真家 今森光彦

琵琶湖博物館 中島経夫

共 催：総合地球環境学研究所プロジェクト「東アジア内海における新石器化と現代化」

参加者：46名



第14回企画展示入口風景

(3) 水族企画展示

1) 第17回水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・？」

①概要

期間：平成18年4月29日(土・祝)～6月18日(日) 計45日間

場所：琵琶湖博物館 水族企画展示室

観覧者数：計 64,944人(平均入場者数 1,443人)(電子カウンターによる)

主催：滋賀県立琵琶湖博物館

担当者：主担当者 松田征也

副担当者 柴山弘史 関慎太郎 藤井泰正

②内容・特徴

滋賀県には「ボテ」または「ボテジャコ」と呼ばれる魚が6種類います。ボテは体長6～12cmのコイ科の魚で、食べても苦みがあることから水産的な価値は低く、どんなエサにでも食いつくことから、釣り人からもじゃま者扱いされる魚でした。ところが近年になり、湖の岸辺に群れ、小川などでも普通にみるこができたボテが、湖や小川からその姿を消しているのです。

企画展示では、滋賀県にすむボテたちの少なくなった理由と現在の状況を紹介するとともに、日本国内にすむボテの仲間(タナゴ類)の展示と、産卵習性や、ボテと人との関わりなどについても紹介しました。

③展示魚種

イタセンバラ、ミヤコタナゴ、タナゴ、カゼトゲタナゴ、アカヒレタビラ、スイゲンゼニタナゴ、セボシタビラ、オオタナゴ、ゼニタナゴ、イチモンジタナゴ、アブラボテ、ニッポンバラタナゴ、シロヒレタビラ、タイリクバラタナゴ、カネヒラ、ヤリタナゴ 以上16種類

2) 第18回水族企画展示「水辺の生き物」

①概要

滋賀県には、世界的にも歴史の古い湖の一つ琵琶湖があり、この湖とその集水域には数多くの生き物がすむ水辺環境が広がっています。水辺では太古の昔より人びとと生き物がお互いに密接に関りあいながら暮らしてきました。

本企画展では、人と生き物が関わるもっとも顕著な場である水辺をテーマに、ため池、水田・用水路、ヨシ原などに焦点をあて、それぞれの場にすむ生き物と人びとの暮らしの一端を紹介することで、来館者が身近な水辺の価値を見直すためのきっかけの場となることをめざした。

主催 滋賀県立琵琶湖博物館

開催期間 平成18年7月15日(土)～11月26日(日)

会場 滋賀県立琵琶湖博物館 水族企画展示室

観覧料 常設展示観覧料に含まれる

②展示方針

- ・水辺で普段めったに見かけられない生き物、身近にいる生き物でも意外な習性、生態をもつ生き物など、水辺に関わるさまざまな生き物について詳しく解説した。
- ・人びとの暮らしに関わるモノ(ヨシ細工や漁具など)を展示したり、水辺にまつわるトピックなどを定期的に入れ替え展示し、来館者にとって新鮮味のある展示を心がけた。
- ・各エリアにキャラクターを配置し、企画展示室内の案内役として来館者にわかりやすく内容を伝える工夫を取り入れた。

③展示した主な生物

- ・魚類：コイ、ニシキゴイ、ホンモロコ、カワバタモロコ、タモロコ、ニゴロブナ、ギンブナ、稚魚(コイ科)、ドジョウ、スジシマドジョウ大型種、ナマズ、など。
- ・昆虫類：ゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、タガメ、タイコウチ、コオイムシなど。

- ・両生は虫類：トノサマガエル、ダルマガエル、シュレーゲルアオガエル、モリアオガエル、ヒキガエル類、アマガエル、アカハライモリ、カスミサンショウウオなど。
- ・甲殻類：アメリカザリガニ、サワガニ、スジエビなど
- ・水生植物：ジュンサイ、タヌキモの仲間ほか　・貝類：マルタニシ、オオタニシなど。



展示室の入口



展示室内部

(4) ギャラリー展示

1) 「こどもが見つめる ふるさとの川ーこどもエコクラブ伯母Q五郎のたからものー」

①概要

開催期間：2006年3月4日（土）～4月9日（日）

開催場所：琵琶湖博物館 水族企画展示室

観覧料：常設展示観覧料に含まれる

観覧者数：10,029人（赤外線カウンターによる人数）

主催：滋賀県立琵琶湖博物館 こどもエコクラブ「伯母Q五郎」

担当者：谷口雅之、中野正俊、中村公一

②内容

今、学校や地域では、川の生き物調査などを取り入れた環境に関する学習や取り組みが盛んに行われている。こどもエコクラブ「伯母Q五郎」は、草津市立志津小学校の子ども達が作ったクラブである。（志津小学校は、平成15年度地域科学館連携支援事業で琵琶湖博物館と連携した小学校である。）平成15年度、16年度は、志津公民館を借りて志津小学校や「伯母Q五郎」が中心となり、琵琶湖博物館の支援のもと「伯母川博物館」が開かれた。「伯母Q五郎」の活動は、今年度も続いており、活動の範囲は草津市全体に広がっている。そこで今年度は、「伯母川博物館」から一步視野を広げ、琵琶湖博物館を会場にして、「伯母Q五郎」の活動を紹介すると共に、環境に関する子ども達のメッセージを伝える場をつくりたいと考えた。

この展示は、来館者にとって身近な環境について見つめなおす機会となり、また、「伯母Q五郎」の活動紹介から、子ども達の可能性に気づき、地域活動に対して意識をもってもらう場となることをねらいとした。

展示タイトル「こどもが見つめる ふるさとの川ーこどもエコクラブ伯母Q五郎のたからものー」には、こどもの視点から川を見るということと、将来にわたってふるさとの川を大切にしていこうという思いを込めている。また、川に関わる活動を通して得られたすべてのことを「たからもの」と捉え、子ども達の変容を展示のストーリーとした。

③展示内容

- ・こどもエコクラブ「伯母Q五郎」の活動の紹介
- ・草津市内の川にいる生き物の展示
（水槽展示：4「ザリガニ」「フナ」「カワムツ」「カマツカ」「タモロコ」）
- ・「伯母Q五郎」へのメッセージを展示

2) 「博物館を楽しもう～はしかけ・フィールドレポーター活動紹介～」

①概要

開催期間：平成18年3月21日（火・祝）～4月9日（日）

開催場所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧料：常設展示観覧料に含まれる

担当者：中井克樹、牧野厚史

②内容・特徴

はしかけ、フィールドレポーターは、毎年、年度末に日を選んで合同で活動発表会を行っている。通常はグループ毎に行われている博物館での活動をお互いに知り、それぞれの活動に活かすためである。はしかけ制度発足から5年目に入る2005年度は、一日だけの活動の紹介ではなく、企画展示室を使ったギャラリー展示というかたちで活動の報告を行った。タイトルは「博物館を楽しもう～はしかけ・フィールドレポーター活動紹介～」とした。展示期間は、春休み期間を意識し、2006年3月21日～4月9日として、期間中には参加団体によるイベントデーが設けられ、ザ！ディスカバはしかけ（はしかけのグループ）によるお手玉づくりや、フィールドレポーターによる竹とんぼ製作など、はしかけ、フィールドレポーターによる様々なイベントも行われた。

3) 「つかんだ・つんだ・いつもいた あの生きものは、いま…？」

①概要

期間：平成18年4月29日（土・祝）～6月18日（日） 計45日間

場所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧者数：計43,153人（平均入場者数931人）

主催：滋賀県立琵琶湖博物館

担当者：主担当者 松田征也

副担当者 芳賀裕樹・中井克樹・榎永一宏・布谷知夫

②内容・特徴

子どもの頃、はらっぱ、里山、田んぼ、小川、公園や学校の校庭、そして琵琶湖で出会った植物や動物たち生物は、いまだどうしているのか？ タンポポの綿毛に息をかけて吹き飛ばす、今も昔も何も変わらない？ 琵琶湖で魚釣りをすると、釣れる魚の種類は？ 何げない日常の中にも、過去と現在を比較する視点を持つことで、身のまわりの生き物たちにさまざまな変化が起きていることに気づくのではないのでしょうか。

ギャラリー展では、植物、魚類、貝類、両生・爬虫類、鳥類、昆虫類について、代表的（シンボリック）な生物の現状とその減少理由などを、標本類、写真などを通じて紹介することで、来場者に自然環境の重要性と、昔なじみの生き物たちの現状を考えるための機会を提供しました。

展示はパネルを中心としたもので、紹介する生きものを「今は少なくなった生き物」「昔はみなかったが、いまは増えている生き物」「今と昔で種類が変わってしまった生き物」の3つのパターンに分類し、それぞれパターンごとに色分けして紹介しました。

③展示項目（見出しタイトル（ ）内は紹介した生物）

（ア）今は少なくなった生き物

- ① 琵琶湖からイシモロコ(モツゴ)が消えた！（モツゴ）
- ② オオサンショウウオは減ったのか？（オオサンショウウオ）
- ③ 「鳩の海」なのに、カイツブリはたった373羽？（カイツブリ）
- ④ 元祖「外来魚」はどこへ？（カムルチー）
- ⑤ 河原とともに消えゆくカワラバッタ（カワラバッタ）

- ⑥公害雑草はどこへ行く (セイタカアワダチソウ)
- ⑦湖の幸を取り戻せ! (セタシジミ)
- ⑧ポテジャコは、いま・・・? (タナゴ類)
- ⑨湖の幸をとりもどせ (ホンモロコ、ニゴロブナ)
- ⑩水路から消えてしまった!? マツカサガイ (マツカサガイ)
- ⑪春の田んぼの代表だったのに (レンゲ)

(イ) 昔はみななかったが、いまは増えている生き物

- ①甲羅を干すカメに異常あり! (アカミミガメ)
- ②夜の田んぼに牛の声 (ウシガエル)
- ③入れ替わってしまったブラックバス (オオクチバス)
- ④25年前にはほとんどいなかったカワウが、今は2~4万羽に増えた (カワウ)
- ⑤クマゼミ日本を北進中!! 滋賀県でも分布を拡大 (クマゼミ)
- ⑥ピンクの卵を見たら・・・ (スクミリンゴガイ)
- ⑦分布を広げているチョウたち (ナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモンなど)
- ⑧名前は知らないが、誰もが知っている (ヒメオドリコソウ)
- ⑨琵琶湖南湖の水草が急に増えた (水草類)

(ウ) 今と昔で種類が変わってしまった生き物

- ①ヒツキ虫が大きくなった! (オナモミとオオオナモミ)
- ②シジミが増え!? 外国産のシジミかも? (タイワンシジミ)
- ③田んぼのカエルの鳴き声が変わった!? (ダルマガエル)
- ④変わるタンポポの勢力図 (タンポポ)
- ⑤え〜っ! ナメクジも昔とは違うって? (ナメクジ)
- ⑥黒いゴリは侵入者! (ヌマチチブ)
- ⑦ミノムシが消えた! (オオミノガ)

(エ) 滋賀県産アユモドキ標本 (琵琶湖博物館蔵)

(オ) 滋賀県産イタセンバラ標本 (国立科学博物館蔵)

(カ) 鳴き声あてクイズ (蛙と鳥類)

(キ) タテボシガイの神経垂迹

(ク) シジミの貝合わせゲーム

(ケ) お絵かきコーナー

④関連事業

紙芝居「ぼくの周りでおこっていること」(工房ゑこるか)

5月20日・5月27日・6月3日・6月10日・6月17日

4) 企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年

①概要

期間：平成18年12月23日(土・祝)～平成19年2月18日(日) 計43日間

場所：琵琶湖博物館 企画展示室

観覧者数：計18,127人

主催：滋賀県琵琶湖博物館

担当者：主担当者 芳賀裕樹 副担当者 草加伸吾・用田政晴

②内容・特徴

この展示では年表と共に企画展示を軸に10年のあゆみを紹介した。開館記念特別展「里山 生命の小宇宙」に始まり、「博物館ができるまで」「古代湖の世界」「私とあなたの琵琶湖アルバム」「近江はトンボの

宝庫」「絶滅と進化」「湖の船」「琵琶湖の魚・漁・食」「鯰」「中世のむら探検」「外来生物」「のびる・ひらく・ひろがる」「歩く宝石オサムシ」までの企画展示の代表的な資料および図録を使用して展示をおこなった。10年間の水族企画展示については開催時のチラシとパンフレットによって振り返った。

また、世界古代湖会議、パリ国立自然史博物館との協力覚書、漁師修行の旅、伯母川探検隊、「はしかけ」やフィールドレポーターの活動を年度ごとに振り返ると共に、学校・地域連携、展示交流員や水族飼育員の活動紹介、国際交流の様子、インターネットページ・電子図鑑、出版物などのトピックについてパネルを作成して展示した。

(5) トピックス展示

1) アトリウム

「イノシシ」

①期間：平成19年1月3日（水）～2月4日（日）

担当者：松田征也

協力者：高橋啓一、用田政晴、布谷知夫、橋本道範、孝橋賢一、西村知記、石田未基、太田佳恵、出口武洋

②内容・特徴

平成19年の干支にちなみ、当館が所蔵する化石、古文書、植物、シシ垣の写真など当館所蔵の資料を中心に、イノシシと人との関係について展示を行った。

2) B展示室

蔵ケース 「近江の奇祭 鍋冠祭と中世筑摩の人々」(橋本、太田 2006/4/11～5/7)

3) 水族展示

水族展示室内のふれあい体験室前に設置した小型展示水槽をつかって、生まれたばかりの稚魚や話題性のある魚など、常設展示では観察することの難しい水生生物を展示した。内容と期間は以下のとおりであった。

- ・「琵琶湖固有種 イサザ」(桑原2006/4/11～5/1)
- ・「ホンモロコの稚魚」(松田2006/5/9～5/28)
- ・「スイゲンゼニタナゴの稚魚」(松田2006/5/30～6/18)
- ・「オヤニラミの稚魚」(松田2006/6/20～7/17)
- ・「イタセンパラの稚魚」(松田2006/7/19～8/6)
- ・「琵琶湖固有種 ビワヨシノボリ」(桑原2006/8/8～9/3)
- ・「ホトケドジョウの稚魚」(松田2006/9/9～10/1)
- ・「ミヤコタナゴの未成魚」(松田2006/10/3～10/22)
- ・「産卵期を迎えた カネヒラ」(松田2006/10/31～11/19)
- ・「イチモンジタナゴの幼魚」(松田2006/11/28～12/24)
- ・「ビワマスの稚魚」(桑原2007/1/3～3/25)
- ・「琵琶湖固有種 イサザ」(桑原2007/3/27～4/22)

(6) 集う、使う、創る 新空間

2005年度に情報利用室の一部を改造して誕生した新空間は、地域のひとびとの活動を支援するための展示室として本格的に使用を開始することになった。今年度は新空間の運営に関する方針や利用規則を策定し、より活発な使用を進めている。

- ・4月22日（土）～5月31日（水） 鉱物・化石展（地学愛好団体の連合組織「湖国もぐらの会」）

- ・ 6月20日（火）～7月20日（木） 和船をめぐる地域住人の活動紹介（堅田高等学校図書委員会ほか）
- ・ 8月12日（土）～9月2日（土） 試作品！デイスカバリーボックスを使ってみよう（琵琶湖博物館（博物館実習受講生））
- ・ 10月3日（火）～10月15日（日） はしかけ・フィールドレポーター、九州国立博物館へ行く！（琵琶湖博物館フィールドレポーター・琵琶湖博物館はしかけ）
- ・ 10月17日（火）～10月29日（日） ヨシ紙展示「琵琶湖と鶴殿のヨシ紙」（鶴殿ヨシ原研究所・ヨシ博物館）
- ・ 11月5日（日）～12月3日（日） 「木から生まれた溪魚たち」フィッシュクラフト展（フィッシュクラフト・フィッシングタックル）
- ・ 12月9日（土）～1月8日（月） 日本野鳥の会滋賀支部の活動（野鳥の会滋賀支部）
- ・ 2月25日（日）～3月18日（日） メモリアリウムへようこそーふるさと絵屏風と郷の語り部（沖田かたりべ会・南市かたりべ会）
- ・ 3月25日（日）～4月8日（日） はしかけ・フィールドレポーター活動紹介（はしかけ・フィールドレポーター）

展示交流事業

（1）水族展示の交流

水族展示では、2006年度も例年通り当日の来館者を対象として、当館最大の水槽であるトンネル水槽（沖合・岩場水槽）やチョウザメ類、ガーパイク類などの古代魚を展示している水槽（古代魚水槽）、およびカイツブリ水槽（水辺の鳥）において展示交流を行った。トンネル水槽では、水族飼育員が潜水し、展示交流員と水中マイクを使って会話しながら、魚の解説や風船などを使った簡単な実験を行った。古代魚の水槽では、チョウザメ類やガーパイク類に餌を与え、種類ごとの餌の違いやとり方の違いを解説した。また、カイツブリ水槽では、餌を与えてカイツブリが水中にもぐって餌を探したり、それを捕らえる様子を来館者に観察していただきながら、この鳥の体のしくみや生態についてわかり易く解説した。

「水族飼育員と話そう」の内容

月	日	内 容	参加者 (名)	担当飼育員	補助飼育員 [展示交流員]
4	1	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	柴山・岡田（隆）
	12	トンネル水槽潜水通話	30	丸尾	柴山・布施・[澤井]
	15	古代魚への給餌と解説	100	右川	柴山
	21	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	柴山・丸尾
	27	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	柴山・布施・[近藤]
5	9	古代魚への給餌と解説	20	柴山	右川
	12	カイツブリへの給餌と解説	40	布施	丸尾
	17	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	柴山・[中村]
	20	古代魚への給餌と解説	70	右川	柴山
	25	カイツブリへの給餌と解説	30	岡田(隆)	柴山・布施
	30	トンネル水槽潜水通話	70	丸尾	柴山・布施・[井出]
6	3	古代魚への給餌と解説	70	右川	岡田（隆）
	8	カイツブリへの給餌と解説	30	布施	柴山・岡田（隆）
	15	トンネル水槽潜水通話	70	丸尾	柴山・[岩見]
	17	カイツブリへの給餌と解説	40	岡田(隆)	布施
	22	古代魚への給餌と解説	50	柴山	岡田（隆）
	28	トンネル水槽潜水通話	60	丸尾	柴山・[犬塚]

7	6	古代魚への給餌と解説	40	右川	柴山
	8	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	柴山・岡田(隆)
	12	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	柴山・[杉本]
	15	古代魚への給餌と解説	60	柴山	右川
	20	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	布施・丸尾
	26	トンネル水槽潜水通話	70	丸尾	柴山・[愛須]
8	9	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	柴山・岡田(隆)
	11	トンネル水槽潜水通話	80	丸尾	柴山・[池畑]
	16	古代魚への給餌と解説	80	柴山	右川
	23	カイツブリへの給餌と解説	50	岡田(隆)	布施
	30	トンネル水槽潜水通話	80	丸尾	柴山・[折中]
9	2	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	岡田(隆)
	14	トンネル水槽潜水通話	30	丸尾	柴山・[北田]
	28	トンネル水槽潜水通話	50	丸尾	御葉袋・布施・[村田]
	30	カイツブリへの給餌と解説	40	岡田(隆)	布施
10	11	古代魚への給餌と解説	30	柴山	右川
	12	トンネル水槽潜水通話	40	丸尾	柴山・大西・[斉藤]
	19	古代魚への給餌と解説	30	右川	柴山
	21	カイツブリへの給餌と解説	30	岡田(隆)	布施
11	2	古代魚への給餌と解説	30	柴山	右川
	4	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	岡田(隆)・大西
	15	トンネル水槽潜水通話	40	大西	松田学芸員・柴山・右川
	22	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	布施
	28	古代魚への給餌と解説	30	右川	柴山
12	2	カイツブリへの給餌と解説	40	布施	岡田(隆)
	9	古代魚への給餌と解説	80	柴山	右川
	13	トンネル水槽潜水通話	20	大西	柴山・[橋本]
	21	トンネル水槽潜水通話	10	大西	柴山・布施・[林]
1	6	カイツブリへの給餌と解説	40	布施	岡田(隆)
	10	古代魚への給餌と解説	30	右川	柴山・御葉袋
	17	トンネル水槽潜水通話	40	大西	柴山・[本田]
	20	古代魚への給餌と解説	70	柴山	大西
	24	トンネル水槽潜水通話	60	大西	柴山・[中江]
	31	カイツブリへの給餌と解説	20	岡田(隆)	大西
2	3	古代魚への給餌と解説	70	右川	柴山
	7	トンネル水槽潜水通話	60	大西	柴山・布施・[矢野]
	9	カイツブリへの給餌と解説	30	布施	岡田(隆)
	18	カイツブリへの給餌と解説	30	岡田(隆)	布施
	22	古代魚への給餌と解説	20	柴山	右川
	28	トンネル水槽潜水通話	30	大西	柴山・[斎藤]
3	3	古代魚への給餌と解説	50	柴山	右川
	7	カイツブリへの給餌と解説	20	右川	柴山
	13	トンネル水槽潜水通話	30	大西	柴山・[千葉]
	17	カイツブリへの給餌と解説	50	布施	岡田(隆)
	21	古代魚への給餌と解説	100	右川	柴山
	28	トンネル水槽潜水通話	60	大西	柴山・[山本]

(2) 展示交流員と話そう

展示交流員は、琵琶湖博物館の案内だけではなく、展示を通して来館者と交流し、来館者に身近な自然や生活へ目を向けていただく「かけはし」となっている。展示交流員は、普段から展示室での交流を行っているが、さらなる交流業務の充実をはかるため、昨年度に引き続き、「展示交流員と話そう」を実施した。本事業を実施するに際しては、展示交流員が各自でテーマを設定し、担当学芸員のアドバイスを受けながら、知識の習得、交流方法の検討、資料作成について、2ヶ月間の準備を行った。また、普段の交流から「きっかけ」をつかみ、できるだけ自然なスタイルで臨めるよう努力したり、各自のテーマに沿って、展示だけの交流ではなく、化石を触ってもらう・自作の資料を見てもらう等、来館者の興味を引き出す工夫も行った。

本事業の詳細は以下のとおりである。

- ①実施期間：平成18年12月1日（金）～平成19年3月31日（土）
（日曜日、祝・祭日は除く）
- ②実施人数：展示交流員 37名
- ③実施回数：平成18年12月 80回
平成19年1月 93回
平成19年2月 83回
平成19年3月 99回 計355回
- ④交流人数：計1,670名

実施内容一覧

展示室	名 前	実 施 テ ー マ	実 施 場 所
A	芦田 弘 美	動物の歯とたべもの	自然史研究室 又は コレクションギャラリー
	杉本 和 子	メタセコイヤ	植物化石の研究
	柳原 徳 子	いちょうはひとりぼっちー	コレクションギャラリー
B	中村とく子	疏水～淀川	治水への取り組み
	井出 範 子	疏水を歩こう	治水への取り組み
	犬塚 菊 美	西野水道	治水への取り組み
	村田 洋 子	イスラエルの湖 ガリラヤ湖	琴湖の漁
	木村 美 枝	近江大津宮	
C	荒井 紀 子	ホタルがすみやすい川に！	ホタルと人と環境と
	奥村 恵 子	「フィールドレポーター」って何？	タンポポ調査
	北川 喜美榮	ヨシ葎屋根・ヨシについて	ヨシ葎き屋根
	岩見 勉	歩幅で琵琶湖の距離を測ろう	空からみた琵琶湖
	岩見 勉	葉っぱに文字を書いてみましょう	オピニオンコーナー
	近藤 摩 子	近江八景	空からみた琵琶湖
	池畑 慎 吾	思い出クイズ	わたしたちのくらし40年
	北田 昌 子	オサムシ（マイマイカブリ）の紙フィギュアをたのしもう	オピニオンコーナー
	林 克 子	琵琶湖の冬鳥を見ませんか	展望コーナー
	愛須美由起	からすま半島の秋の草花	

	本 田 幸 子	豊かな土壌づくりの主演「みみず」	水をはぐくむ森林
	吉 岡 令	あおばな	農村の暮らし
	北 村 美 香	オサムシってどんなムシ？	いきものコレクション
	初 田 幸 穂	木材組織	オピニオンコーナー
	西 山 順 子	おばあちゃんの食（植）物学	農村の暮らし
	山 本 真 理	近江の城	空からみた琵琶湖
	千 葉 い づ み	メダカとお米のおいしい関係	暮らしとむすびついた自然
	矢 野 典 子	プランクトンの魅力	いきものコレクション 又は ミクロの世界
水 族	今 泉 美 保	黄色いビワコオオナマズと語ろう「鯰よも やま話」	トンネル水槽
	吉 田 治 美	チョウザメ	古代魚
	齊 藤 文 子	琵琶湖の鮎	琵琶湖のアユ
	弓 削 宣 子	水生昆虫 タガメ	里の生き物
	中 江 美 知 子	ムギツク	おもしろい習性の魚たち
	鴨 田 真 依 子	ゲンゴロウのおはなし	里の生き物
	澤 井 秀 之	ふれあい水槽の不思議	ふれあい水槽
	前 川 桂 子	オオサンショウウオ	川の中流の生き物
	森 智 美	大山椒魚	川の中流の生き物
	齋 藤 滋 子	ドンコとムギツク	おもしろい習性の魚たち
ディスカ バリー	橋 本 富 江	かげ絵であそぼう！	かげ絵コーナー
	折 中 康 子	伝承遊び折り紙	

(3) 来館者との交流会

来館者の多い夏休み期間は、8月7日（月）以外は休まず開館し、特別企画としてお盆期間中である8月14日を除く開館の月曜日の午前10時に、水族展示室バックヤードのミニガイドツアーを実施した。

1) 水族展示室バックヤードのミニガイドツアー

ミニガイドツアーでは、水族展示のバックヤードを学芸員と水族飼育員が、通常は見学できない飼育設備や、魚の繁殖水槽、調餌室などを解説しながら来館者を案内した。

開催日と参加者人数

7月25日（月） 63人

7月31日（月） 67人

8月21日（月） 100人

8月28日（月） 67人

合計：297人

4 体験と交流を促す博物館

一般利用者へのサービス事業

(1) 観察会・見学会等

2006年度は、博物館内や県内とその周辺で行う博物館観察会等17件の事業を企画した。当該年度も他団体との協働・連携事業を多くすることをめざした。観察会・見学会に限ってながめると、協働できた事業は13件（76.4%）と昨年（16件うち9件：56.3%）よりやや割合が増加した。

観察会・見学会に対する参加者の評判はおおむねよかったが、応募者が皆無ないし定員をやや大きく割り込んだ事業も数件みられた。逆に応募者が定員を上回った事業もみられたが、この場合、原則として応募者を全員受け入れた。本事業のうち、「川虫探検」は応募者が40名以上あったが、前夜から明け方にかけての降雨による増水のため中止になった。各事業のタイトル、開催日、定員、参加者数等を下表に示した。

観察会・見学会等の実施結果一覧表

回	月	日	事業名	定員	参加者数	共催関係
1	5	6	見て楽しい、食べておいしい朽木の春	30	35	朽木いきものふれあいの里
2	6	11	ホテルを観察しよう	30	34	荒井紀子
3	7	23	漁船に乗ってビワマス魚を見てみよう	20	18	朝日漁業協同組合
4	7 7 7 8	23 29 30 6	ワークショップでつながる佐川美術館と琵琶湖博物館「手で触れてみよう、目でふれてみよう」	30	70	佐川美術館
5	8	6	水辺の貝を調べてみよう	30	27	
6	8	12	多賀のお魚観察会	30	38	多賀町立博物館、芹川漁業協同組合、WWF・ブリヂストンびわ湖生命の水プロジェクト
7	8 10	23 1	※鯉の歯の化石のレプリカをつくろう	30	5 12	びわたん
8	8	27	ミドリセンチコガネを探しにいこう	30	37	
9	9	10	※カバタを見に行こう	30	56	針江生水の郷委員会
10	10	8	※魚のくらしにふれてみよう	20	44	びわたん・うおの会・守山ほたるの森資料館
11	10	15	化石の観察会	30	36	
12	10	29	ビワマスの採卵現場を見学してみませんか	20	33	百瀬漁業協同組合、南郷水産センター高島事業場
13	10	29	※人形劇「たなかみさま」	当日受付	177	にんたま
14	11	25	比良の里山探検	30	38	カワセミ自然の会
15	12	3	環境学習施設のプログラムを体験してみよう－偏光スコープをつくろう	当日受付	15	びわたん・滋賀県環境学習センター
16	12	17	下物の水鳥を観察してみよう－野外観察と水鳥のお話－	30	45	日本野鳥の会・滋賀支部
17	3	25	川虫探検	30	雨天中止	

※ 企画展示「湖辺～水、魚、そして人」の関連事業



ワークショップでつながる佐川美術館と琵琶湖博物館「手で触れてみよう、目でふれてみよう」(プランクトンの観察)



比良の里山探検

1) 博物館探検

2006年度は、博物館の舞台裏を紹介する見学会4件の事業を企画した。昨年度までは1件であったものを、新規に事業を起こすことによって充実させた。そのうち特に、「水族バックヤードミニ探検」、および「水族展示の舞台裏」は、いずれも応募者が多く、好評であった。琵琶湖博物館のファンを増やすには格好の事業と思われた。ただし、他の交流事業と比較して参加者数いちじるしく多いため、実施時期、内容等について検討を要する。「よその博物館探検」は斬新な企画であったが、応募者がなかったことの原因(広報、タイトルなど)を追究し、新年度にもう一度挑戦すべきものと考えられる。

博物館探検の実施結果一覧表

回	月	日	事業名	定員(名)	参加者(名)
1	7 8	24・31 21・28	夏休み特別イベント： 水族バックヤードミニ探検	当日受付	295
2	10	21・22	開館10周年記念イベント： 水族バックヤードミニ探検	当日受付	141
3	11	25	よその博物館探検	20	—
4	3	4	水族展示の舞台裏	40	124



水族展示の舞台裏(魚の繁殖・飼育室の見学)



水族展示の舞台裏(トンネル水槽を上から見学)

(2) 講座

講座は、①当該年度の企画展示に関連した講座（企画展示関連講座）、②研究部が主体となって実施する講座（研究部の講座）、③学芸員が専門テーマについて解説する講座（入門・専門講座）、④教員や地域の指導者等を対象とした講座（指導者向け講座）、⑤子どもたちを対象に行う夏休み自由研究講座の5つに区分できる。

2006年度には、①、②は実施しなかったが、特に①の企画展示関連イベントの一つとして人形劇団「にんたま」の協力を得、アトリウムにおいて人形劇「たなかみさま」の講演をし、子どもたちに好評を博した（観察会・見学会の項参照）。2006年度に開催した講座の実績を以下に記した。

1) 入門・専門講座

2006年度は、以下に示した2件の事業を実施した。個々の講座の内容を以下に記す。

回	開催日	内 容 (タイトル)	募集数(名)	参加者(名)	講 師
1	8月1日	回転実験室で水槽実験を!	15	5	戸田 孝
2	4月13日	キンネレット湖畔 (西アジア) の考古学 (全2回)	各30	延7	牧野久実

○回転実験室で水槽実験を!

本館C展示室の回転実験室で、準備に時間を要するため日常の展示室運営では実施できない、水槽を使った実験を行った。具体的には、水槽中央の排水口にできる渦が必ず実験室の回転の向きになることを確かめる実験と、水槽に牛乳などを垂らすとカーテン状になる実験（テラー柱の実験）を行った。

○キンネレット湖畔 (西アジア) の考古学 (全2回)

キンネレット湖畔 (中東) の風土や文化、そして最近の発掘調査の成果についてわかりやすく紹介した。

2) 指導者向け講座 (担当: 中村公一・中野正俊)

2006年度は、本講座を昨年以上に充実させる形で、以下5件の講座を企画した。いずれの講座も申し込み数が少なく、定員割れしたものの、参加者にはたいへん好評であった。

○先生のための川の生き物調査 (中村・中野・秋山・前畑)

昨年度には教師を対象にしていたが、今年度は学校や園教員以外に地域活動指導者も募集対象に含めて開催した。開催場所は天津市田上枝の天神川である。

開催日	タ イ ト ル	定員(名)	参加者(名)	共催・後援
8月1日	先生のための川の生き物調査	10	9	滋賀県教育委員会

○先生のための湖沼学基礎講座 (担当: 芳賀・中村・中野)

昨年度からの試みとして教師を対象に、湖の不思議や富栄養化の仕組みなど、琵琶湖の環境を考える上で必要な湖沼学のエッセンスを体験的に学ぶ講座を県教育委員会後援のもとで開催した。

開催日	内 容	定員(名)	参加者(名)	共催・後援
7月27日	・琵琶湖の模型づくり ・展示室にて世界の湖沼等の解説	20	延32	滋賀県教育委員会
7月28日	・プランクトン観察 ・水質検査等実習			

○生き物飼い方講座

本年度も幼稚園・保育園、小学校の教師を主な対象に、魚、ザリガニ、昆虫などについて、それぞれの生き物の特徴や飼い方、増やし方について、実物と資料を提示しながら学芸員が解説した。実物に触れられることがたいへん好評であった。

開催日	内 容	定員(名)	参加者(名)	担当者	共催・後援
7月29日	・昆虫の飼い方 ・水生昆虫の飼い方	各30	延43	八尋克郎 榊永一宏	滋賀県教育委員会 総合教育センター
7月31日	・魚・カメの飼い方 ・ザリガニの飼い方			秋山廣光 前畑政善	



先生のための川の生き物調査



生き物の飼い方講座

○指導者のための博物館利用講座

琵琶湖博物館は「湖と人間」をテーマとした、環境学習や体験学習の絶好の場である。

本講座は2005（平成17）年度に開始した講座である。本年度は内容を発展させ、指導者を対象に子どもたちとともに学びたいポイントを民俗担当の学芸員が紹介する《基礎編》、琵琶湖博物館の体験学習をまず、指導者に体験していただく《実習編》、博物館教員と民俗担当の学芸員とで展示室を回りながら、独自のワークシートを作成する《応用編》の3種類5講座を開催した。

開催日	内 容	定員(名)	参加者(名)	担当者	共催・後援
4月8日	基礎編：展示室の見方解説	各30	延38	中藤容子 中野正俊 中村公一	滋賀県教育委員会
4月22日					
8月8日	実習編：化石のレプリカづくり A展示室の見方				
8月10日					
1月27日	応用編：ワークシートづくり				

○淡水魚類学専門講座(全5回)（主担当：前畑政善）

本講座は、淡水魚のことを専門的に学びたいという方々（先生や地域のリーダー）を対象に一昨年から設けたものである。今回は5人の講師が、それぞれ専門とする立場から5つのタイトルで講義した。講義内容が盛りだくさんで時間が短かすぎるとの声もあったが、おおむね好評であった。新年度は、滋賀県の北の地域で行う予定である。内容は、以下のとおりであった。

回	開催日	タイトル	内 容	講 師
1	1月20日	河川、ダム、溜池の環境特性と魚類調査法	河川や溜池の環境の特徴、ならびに身近な水辺で魚類調査を行う際の調査法を具体的に解説した。	前畑政善
2	1月27日	滋賀の魚－生態と見分け方－	滋賀県にすむ魚類全種について、個々の魚の生態や見分け方について説明します。種類数が多いため、詳しい点については、受講者の質問に応じる形で解説した。	秋山廣光
3	2月3日	なぜ地域在来の魚を調べ、守るのか－いま必要な「お宝鑑定」－	地域在来の魚たちがなぜ大切なのか、魚たちのもつ「遺産」に通じる価値の視点から論じた。	中井克樹
4	2月17日	魚をかいした湖と人間のかかわりの歴史	考古遺跡から出土するコイ科魚類の咽頭歯の研究からみた魚と人間のかかわりの歴史を紹介した。	中島経夫
5	2月24日	滋賀県にすむサケの仲間たち	滋賀県には、もともと4種類のサケ科の魚が棲んでいる。これらの魚は、どこから来てどんな生活をしているのかについて、最新の知見を交えながら紹介した。	桑原雅之

3) 夏休み自由研究講座（担当：杉江鉄之介・前畑政善）

子どもたちを対象に、夏休みに入って間もない7月下旬に研究の方法について指導する「夏休み自由研究講座」を開催した。本年度は初回から数えて5回目となった。本講座の日程、参加者数、講師等は下表のとおり、多数の参加があり、特に地学・化石コースの参加者が多かった。

開催日	コース名	定員	参加者数	会場	講師・担当
7月23日（日） 10:00～15:00	昆虫	各30名	39名	実習室Ⅰ	八尋、榊永、（武田）、（南）
	植物		16名	生活実験工房	布谷
	地学・化石		48名	実習室Ⅱ	高橋・里口・（岡村）

※（ ）内は外部講師



植物コース



地学・化石コース

(3) 体験教室

2006年度も、昨年同様に里山体験教室を開催した。

○里山体験教室（担当：西村知記、楠岡 泰）

里山の手入れや里山にかかわる暮らしを、実際の活動を通じて体験することで「里山」の重要性を見直すことを目的に行った。野洲市大篠原にある里山に入り、計3回の里山の手入れ作業を行うとともに、観察を中心に、五感を十分に使った体験活動を行った（冬編は雨天で中止となった）。本事業の開催にあたっては「里山の会」（はしかけ）と協力して実施した。

「里山体験教室」開催日と内容（登録者50名：延べ88名）

回	開催日	内 容	参加人数	担当者/講師
1	5月27日	新たな里山との出会い	38名	西村、楠岡
2	7月22日	カブトムシのゆりかごづくり	23名	西村、楠岡
3	9月23日	里山のキノコ探検	27名	西村、(佐野：幼菌の会)
4	12月9日	里山の火の使い方	-	雨天中止



里山の手入れ（春編：2006年5月27日）



前日に仕掛けたベイトトラップの獲物を調べる
（夏編：2006年7月22日）

学校連携事業および体験学習

(1) 教職員等研修

2006年度に行われた教職員等研修は、合計33件（参加者：936名）であった。研修では、博物館の基本理念や展示概要のほか、総合的な学習などにおける学校の博物館活用法についての解説を行った。また、実習室等で展示に関わる実習をしたり、学芸員から各分野の専門的な話を聞いたりした。

月	日	研 修 会 名	人数
5	11	滋賀県総合教育センター 第1回理科教育講座	30
5	12	滋賀県大津市教育委員会生涯学習課	10
6	29	愛知県大府市教育委員会	6
7	13	大阪府豊中市中学校理科技術職員等研修	20
7	26	滋賀県湖南市教育委員会 研修会	5
8	2	三重県亀山市小中社会科部会研修会	18

8	2	滋賀県小学校教育研究会生活科部会	50
8	3	滋賀県中学校教育研究会理科部会自然調査ゼミナール	15
8	9	滋賀県環境教育研究協議会	280
8	11	滋賀県環境学習支援センター 企画者のための環境学習体験講座	35
8	22	滋賀県守山市教員研修	6
8	24	滋賀県総合教育センター 環境科学講座	23
8	24	全国中学校理科研究会 OB会	38
8	25	滋賀県理数大好きスクール研修会	63
8	28	滋賀県草津市老上小学 教員研修	30
9	12	VJC台湾教育関係者招請旅行団	12
9	15	近畿地区病弱養護学校長会	11
9	21	愛知県豊橋市校区社会教育委員連絡協議会	35
9	28	滋賀県総合教育センター 10年経験者研修	10
10	12	滋賀県草津市教育委員会 中国上海市教育代表団	9
10	17	岐阜県岐山高等学校 教員研修	4
10	24	滋賀県総合教育センター 10年経験者研修	10
10	27	全国高等学校教頭会近畿地区連絡協議会	98
11	4	大阪府教職員互助会	41
11	8	モンゴル教育視察団	15
11	21	滋賀県米原市中学校理科部会研修会	5
11	4	大阪府教職員互助会	41



理科教育講座



生活科部会研修

(2) 視察対応

平成18年度に受け入れた、学校連携・教育普及活動に関する視察は、合計6件16名であった。

月	日	団体名	人数
1	10	美濃加茂市民ミュージアム	3
1	18	山口県立山口博物館	3
2	1	静岡県環境衛生科学研究所	2

2	2	ふくしま海洋科学館	3
3	1	ふくしま海洋科学館	4
3	16	群馬県立自然史博物館	1

(3) 学校団体向け体験学習

博物館と学校とが連携を保ちながら活動を進めていくことができるよう、学校のカリキュラムに沿った社会見学への対応のほか、各種体験学習、フローティングスクール等の受け入れを行った。特に、体験学習として下記のような活動を実習室、セミナー室、生活実験工房等を利用して行った。

また、展示学習を支援する「サポートシート (19種類)」の利用を、教員研修や下見受付を通して、学校へ呼びかけた。

校 種	主 な 活 動 内 容
小 学 校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等)、ヨシ笛、化石のレプリカ、水質検査、プランクトン採集と観察、昔の暮らし体験 (石臼、脱穀、手押しポンプ)、わら細工、魚に触れる、魚の採集 (釣り) と解剖、外来魚の調理、野外観察 (ヨシ群落)、野外植物観察、水鳥観察、火山灰の観察、大地のつくり、バックヤード見学、質問対応
中 学 校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等)、ヨシ笛、化石のレプリカ、水質検査、プランクトンの採集と観察、プランクトン模型作り、わら細工、魚の採集 (釣り) と解剖、外来魚の調理、昆虫の観察、水生昆虫の観察、昆虫の調査、野外観察 (ヨシ群落)、野外植物観察、貝の観察、水の汚れの測定、水鳥の観察、火山灰の観察、大地のつくり、バックヤード見学、質問対応
高等学校	講義 (琵琶湖と環境、琵琶湖の魚類、博物館の展示について等)、プランクトンの採集と観察、魚の採集 (釣り) と解剖、水質調査、珪藻化石の観察、生態観察池での陸水学基礎学習、湖岸調査 (地形、植生他)、火山灰の観察、大地のつくり、バックヤード見学、展示利用学習、課題研究、質問対応

体験学習実施数

校 種	県 内		県 外		合 計	
	学 校 数	児童生徒数	学 校 数	児童生徒数	学 校 数	児童生徒数
小 学 校	37	3,246	33	2,634	70	5,880
中 学 校	29	2,765	22	1,851	51	4,616
高 等 学 校	11	503	6	333	17	836
養 聾 盲 学 校	2	28	2	21	4	49
合 計	79	6,542	63	4,839	142	11,381



琵琶湖の生き物



化石のレプリカつくり

(4) 一般団体向け体験学習

子どもたちの自然や文化への興味関心を高めるとともに、地域連携のあり方を探るため、子ども会やスポーツ少年団、障害者団体などの一般団体に対して体験活動を行った。

実施数	内 容
団体32件 (1,250名)	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の生き物）、ヨシ笛、外来魚調理、プランクトンの採集と観察、魚の解剖、昔の暮らし体験 等

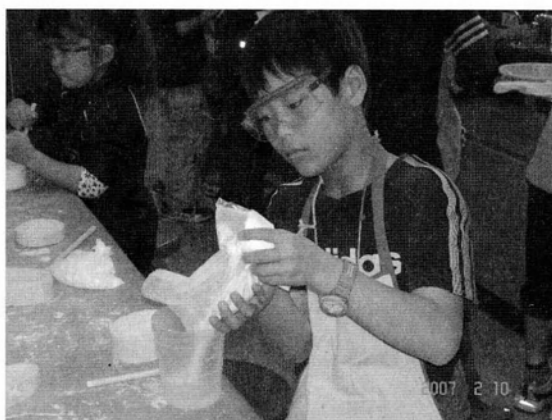
(5) 「琵琶湖博物館わくわく探検隊（体験学習の日）」の活動

学校週5日制に対応する事業として、2004年度まで「体験学習の日」事業として行ってきた、毎月第2・4の土曜日に当館を訪れる小・中学生を対象に、自然・環境・歴史・民俗への興味や関心を高めるための体験活動を、子ども向けながら広く来館者に体験学習を楽しんでもらうため、事業名を「琵琶湖博物館わくわく探検隊」として実施した。基本的には、午後1時より受付、プログラム実施は午後1時半～3時までとした。大変好評で、年間930名の参加者があり、プログラムの内容上、定員オーバーで参加をお断りするものもあった。

回	月	日	タイトル	参加人数
1	4	8	紙すきをしよう	29
2	4	22	紙すきをしよう	33
3	5	13	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	43
4	5	27	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	19
5	6	10	投網に挑戦しよう	64
6	6	24	投網に挑戦しよう	54
7	7	8	青花をつかって染め物をしよう	34
8	7	22	青花をつかって染め物をしよう	57
9	9	9	綿から糸をつくろう	83
10	9	23	綿から糸をつくろう	58
11	10	14	たねみつけ～秋の屋外展示を探検しよう～	28
12	10	28	たねみつけ～秋の屋外展示を探検しよう～	19
13	11	11	木の実で遊ぼう	72
14	11	25	木の実で遊ぼう	46
15	12	9	富江家はっけんブックづくり	19
16	1	13	博物館でスゴロクをしよう	45
17	1	27	博物館でスゴロクをしよう	49
18	2	10	化石のレプリカをつくろう	55
19	2	24	化石のレプリカをつくろう	54
20	3	10	縄文コースターをつくろう	22
21	3	24	縄文コースターをつくろう	47
合 計				930



琵琶湖のプランクトンを観察しよう

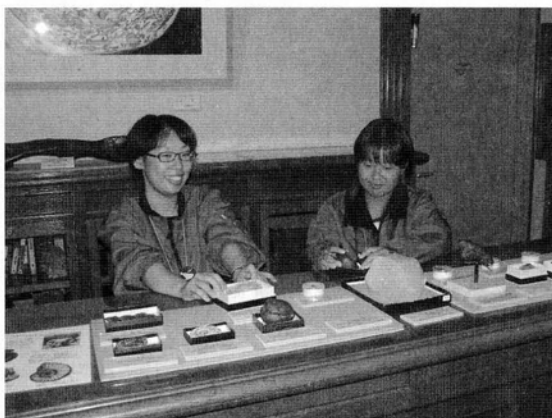


化石のレプリカづくり

(6) 職場体験実習

琵琶湖博物館を校区にもつ草津市立新堂中学校2年生の職場体験実習を受け入れた。

学校名	月日	受入人数	内容
新堂中学校	11月7日～10日	3	展示交流員実習・学芸員研究体験・水族調餌給餌作業・体験学習等



展示交流員体験



展示交流員体験

(7) 博物館実習 (期間：8月1日(火)～8月8日(火)；ただし6日は休日)

国内15大学、27名の学生を対象に、琵琶湖博物館の基本理念・活動方針と、それにもとづく交流、情報、資料整備、展示などの活動について、講義および実習を行った。特に交流の場としての博物館活動を理解してもらうために、来館者との交流の担い手となる展示交流員体験や、ユニバーサルデザインチェックとその発表という実習も行った。最終日には、博物館活動の基本的考え方の理解を確認しつつ展示を企画する実習として、ディスカバリーボックスの企画を行い、簡易的な材料で製作し、発表会を行った。発表会では博物館職員との意見交換も行われた。

なお、8日以上の実習が必要な2名は3日間、1名は2日間の追加実習を行った。

実習の日程および内容

月日（曜日）	実習内容（午前）	実習内容（午後）
8月1日（火）	・全体オリエンテーション ・講義「博物館とは何か？」 ・館内案内	・講義「琵琶湖博物館の設置理念と概要」 ・ディスカバリールームの見学 ・ディスカバリーボックスの製作ガイダンス
8月2日（水）	・講義「常設展示の概要と戦略」 （常設展示の見学を含む）	・企画展示説明 ・企画展示の展示評価、発表
8月3日（木）	・講義「企画調整の事業」 ・講義「ユニバーサルデザインとは？」 ・ユニバーサルデザイン調査と検討	・ユニバーサルデザイン調査と検討、発表
8月4日（金）	・展示交流員体験	・展示交流員体験
8月5日（土）	・講義「琵琶湖博物館交流事業の概要」 ・交流事業「うみんど」「うみっこ」の企画、発表	・よし笛・化石のレプリカづくりから体験学習プログラム制作、発表
8月6日（日）	<休 み>	
8月7日（月）	・講義「琵琶湖博物館の資料整備」 ・講義・見学「琵琶湖博物館の水族」 ・博物館資料整理等の実習	・博物館資料整理等の実習
8月8日（火）	・ディスカバリーボックス制作	・ディスカバリーボックス発表 ・修了式

実習生：15大学、27名（内訳）

所 属	人 数	所 属	人 数
滋賀県立大学	5	京都府立大学	1
成安造形大学	5	京都文教大学	1
京都教育大学	3	近畿大学	1
龍谷大学	2	神戸大学	1
法政大学	2	筑波大学	1
九州東海大学	1	新潟大学	1
京都造形芸術大学	1	琉球大学	1
京都橘大学	1		
合	計		27

国際交流活動

（1）「JICA博物館集中コース」の実施

JICAからの委託事業として、国立民族学博物館と共催して、「博物館学集中コース」を実施した。事務局は国立民俗学博物館が持ち、琵琶湖博物館は運営委員2名を出して、全体の運営にかかわると共に、10名の研修の受け入れを行った。

なお、このJICAの研修は2003年度まで10年間にわたり国立民俗学博物館が「博物館技術コース」として行われていたもので、琵琶湖博物館も研修生を受け入れて協力してきたが、2004年度から名称と研修内容を変更し、琵琶湖博物館も共催して行ったものである。

1) 研修員

- Mr. Innocent Mawethhu Manele (ボツワナ国立博物館)
Mr. Li Shengneng(中国瀋陽故宮博物館)
Ms. Liliana Sanchez Rojas (コロンビア国立博物館)
Ms. Ximena Munoz Perry (コロンビア伝承衣装博物館)
Mr. Lalemba Berhe Tsehaye (エリトリア国立博物館)
Mr. Morteza Kossarneshan (イラン文化遺産・観光庁)
Ms. Luz Veronika Tupayachi Calderon (ペルー国立文化庁)
Ms. Duangkamon Kamalanon (タイ文化省芸術局国立博物館課)
Mr. Onal Demirer (トルコ・アンタリア博物館)
Ms. Priscilla Kaela Kangwa (ザンビア・コッパーベルト博物館)

2) スケジュール

2006年4月3日 来日

4月17日 開講式

7月21日 閉講式

7月22日 帰国

琵琶湖博物館での研修

4月26日 琵琶湖博物館の紹介(楠岡)

琵琶湖博物館の展示室見学(楠岡)

4月27日 展示計画から実施まで(鮫島・乃村工藝社)

企画展示の考え方と実施例(布谷)

4月28日 ギャラリー展示の実施・見学(布谷・楠岡)

展示評価について(布谷・楠岡)

5月10日 博物館と研究(グライガー)

資料整備と地域博物館の役割(布谷)

博物館資料の利用と管理・収蔵庫見学(用田)

5月11日 ヨシ博物館(近江八幡市)見学

能登川市立博物館見学

5月12日 交流事業の考え方(牧野(厚))

琵琶湖博物館の体験学習への参加(中村・中野)

JICA研修生のカントリーレポート(JICA研修生)

各国料理の準備

琵琶湖博物館スタッフとJICA研修生の交流会

5月13日 フィールドレポーターとはしかけ活動(楠岡)

びわたんプログラムへの参加(楠岡・青木)

3) 個別研修

選択の個別研修には、研修員10名のうちの3名が参加した。

・参加研修員 Mr. Morteza Kossarneshan, Ms. Luz Veronika Tupayachi Calderon,

Ms. Duangkamon Kamalanon

・個別研修期間

11月15日～18日

・研修内容(テーマ・地域と博物館)

- 7月9日 エコクラブ「伯母Q五郎」の子どもたちと川の生き物調査（楠岡、布谷）
子どもたちに各国の湖紹介
子どもたちに対して各国の湖の形に関するワークショップ
- 7月10日 伯母川探検プログラムについて（楠岡）
体験学習プログラムの開発：葉っぱの形（布谷）
体験学習プログラムの開発：ピンホールカメラ（秋山）
- 7月11日 研修員が中学生に対して各国の湖事情の講義（中村）
ディスカバリールームで各国の湖の形についてワークショップ（堀田）
はしかけ「びわたん」について（青木）
- 7月12日 はしかけ「近江はたおり探検隊」の活動に参加（辻川）
中学生と共にカヌー体験（中村）
- 7月13日 高校生向け体験学習（植生調査、プランクトン調査）の見学（布谷、楠岡）
草津市立まちづくりセンター見学（布谷、楠岡）
草津本陣見学（布谷、楠岡）



カヌー体験

(2) 海外からの視察

月	日	依頼者 視察団体名	人数	担当
4	6	(財) 滋賀陶芸の森 ゲスト・アーティスト一行	4	グライガー
4	11	韓国慶尚南道密陽市市長一行	15	前畑
4	22	京都大学大学院工学研究科 留学生	40	スミス
4	25	(株) 国際水産技術開発 JICA 驟雨団研修「持続的増養殖開発コース」	9	松田、スミス
5	1	JTB西日本大津支店 (オーストラリア) North Sydney Boys High School	23	グライガー
5	18	上智大学アジア人材養成研究センター 2005年ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業専門家交流プログラム	12	グライガー
5	18	滋賀県教職員課 外国から研修の教員	25	スミス
6	27	滋賀県琵琶湖環境部水政課 (中国) 杭州市湿地公園保全、立法視察団	7	布谷
6	28	ミシガン州立大学連合日本センター 2006年度「Environmental Sciences in Japan」コース	9	グライガー

7	14	釜山市民河川守り運動本部2006釜山日本海外先進河川研修団	16	布谷
7	25	近江ふるさと会	20	用田
7	25	関西広域連携協議会, JICA留学生セミナー研修員	16	グライガー
7	28	(財)北九州国際技術協力教会 第8回JICA国別特設フィリピン環境管理コース	10	グライガー
7	28	びわこビジターズビューロー 第3回アジア国際子供サマーキャンプ	18	秋山
8	11	滋賀県商工観光労働部国際課 (中国) 湖南省環境保護視察団	13	芳賀
8	31	(財)国際エメックスセンター JICA「閉鎖性海域の水環境技術II」コース	7	グライガー
9	12	タイ王国National Discovery Museum Institute	4	グライガー
9	12	びわこビジターズビューロー VJC台湾教育関係者招請旅行団	15	用田
9	13	(米国) Stanford University Overseas Seminar	16	楠岡、スミス
10	5	滋賀県国際協会 研修生	6	用田
10	11	(財)全国建設研修センター JICA「建設事業における環境保全対策」コース	13	グライガー
10	13	滋賀県琵琶湖環境部水政課 韓国慶尚南道知事一行	39	布谷
10	18	(株)関西電力土木建築エンジニアリングセンター 中華民国經濟部認識首長常務次長一行	23	芳賀
10	20	(株)国際水産技術開発 JICAラオス国別研修	4	松田
10	20	(財)日本環境衛生センター 平成18年度JICA研修「水環境モニタリングII」コース	11	グライガー
10	22	第4回国際窒化物パルケ国際シンポジウム	約30	グライガー、楠岡
10	26	滋賀県商工観光労働部国際課 (ドイツ) バイエレン州環境省次官一行	7	前畑
10	26	(財)北九州国際技術協力協会 平成18年度第7回「生活排水技術II」研修コース	11	グライガー
11	2	ロシア科学アカデミーシベリア支所陸水学研究所	1	グライガー
11	15	(独)国際協力機構大阪国際センター 平成18年度「ヨルダン国:博物館活動を通じた観光新振興」コース	7	楠岡
11	16	(財)北九州国際技術協力協会 JICA平成18年度産業廃水処理技術研修コース	10	グライガー
11	21	(株)エヌジェーエス・コンサルタンツ JICA「ブラジル国サン・ベルナルド・カンポ市ピリングス湖流域環境改善計画」研修員	8	芳賀
11	29	(韓国)江原道立大学水産訪問団	21	松田
12	19	びわこビジターズビューロー 中国湖南省教育旅行視察団	8	用田
1	21	(韓国)G.P.S. JT Tour (韓国)サンチョン郡分化環境課と道立博物館の建築の関係者	10	布谷
1	24	(財)国際湖沼環境委員会 JICA平成18年度(第2回)湖沼環境保全のための統合的流域管理コース	10	楠岡、芳賀
2	2	韓国慶尚南道昌原市市長一行	4	前畑

2	2	(財)北九州国際技術協力協会 中国フフホト市下水道研修	12	中島
2	7	滋賀県農政水産部耕地地課 平成18年度日中農村整備・村鎮建設交流研究会中華人民共和国建設部	12	小川
2	10	滋賀県琵琶湖環境部水政課 第24回三宝蓮サイパン島青少年訪日使節団	18	布谷
2	10	Yoho ソウル市環境委員会	9	布谷
2	20	在大阪・神戸フランス総領事とフランス大使館科学技術参事官	2	グライガー
2	20	(財)日本国際協力センター関西支所 中国の高校1年生	46	前畑、中井
3	4	(独)国際農林水産業研究センター ラオス水産生物資源研究センター副所長一行	3	桑原
3	6	日本旅行関西法人営業部 オーストラリアの旅行会社の教育旅行担当者	11	グライガー
3	23	京都アメリカ大学コンソーシウム	13	スミス

5 対話と応援ができる博物館

利用者主体の事業

(1) フィールドレポーター

フィールドレポーター制度とは県内を中心に身近な生き物や生活に関する情報を定期的に報告してもらい、得られた情報を博物館の資料として保存し、展示や交流の中でいかしていくとともに、情報のやりとりを通して博物館とレポーター同士をつなぐ制度である。この制度は1997年から始まり、2006年度は172名の登録があった。

活動としては、博物館とフィールドレポーターが相談してテーマを設定し、年数回行うアンケート型調査と、自由な内容で身近な情報を随時報告する自由回答調査の2種類を実施している。調査の結果はフィールドレポータースタッフにより「フィールドレポーター便り」にまとめられ、フィールドレポーター交流会でも発表される。調査に先駆けての勉強会や観察会を適宜実施している。

2006年度は4月から8月にかけて「オオヨシキリのさえずり調査」を実施し、11月から2月まで「2006年ミノムシ調査」、3月から「ツバメ調査(2007)」を実施した。

そのほかの活動としては、フィールドレポーターのニュースレター「フィールドレポーター掲示板」を年5回発行し、調査報告書「フィールドレポーター便り」も2回発行した。9月には九州国立博物館で開かれた「ボランティアメッセ2006 IN 九博」で竹調査の成果を中心に活動を紹介し、「竹がつく漢字あてゲーム」などを行った。また、草津市で開かれた第7回パワフル交流・市民の日でも展示や「竹がつく漢字あてゲーム」を実施した。

琵琶湖博物館開館10周年関連イベントでは当日のポスター展示のほか、研究発表会や10周年記念ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」でも「フィールドレポーターコーナー」を出展した。

2007年3月から情報利用室の新空間で展示された「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」にも出展した。

2007年2月から「フィールドレポーター掲示板」および「フィールドレポーター便り」の電子化をフィールドレポータースタッフの協力で実施し、インターネットのフィールドレポーターのウェブサイトから最近のものはダウンロードできるようになった。

調査内容等一覧

内 容	実施月	報告数(件)
1) オオヨシキリのさえずり調査	4~8	108
2) 2006年ミノムシ調査	11~2	
3) ツバメ調査(2007)	3~	調査中
4) 自由形調査(フィールドレポーター掲示板)	通年	

活動内容等一覧

月	日	曜日	種類	内 容
3~4	21~9	火~日	イベント	ギャラリー展 博物館を楽しもう~はしかけ・フィールドレポーター活動紹介~出展
4	1	土	定例会	オオヨシキリ調査、調査用紙の最終検討および竹細工の準備
4	2	日	イベント	ギャラリー展関連イベント「竹細工を作ってみよう」
4	9	日	イベント	ギャラリー展関連イベント「竹細工を作ってみよう」
4	15	土	定例会	掲示板、便り、オオヨシキリ調査資料の印刷および発送
5	13	土	臨時活動	JICA研修員との交流
5	20	土	定例会	竹製品調査のレポーター便りの印刷発送

5	28	日	臨時活動	フィールドレポーター交流会（エドヒガン、セミ、竹調査の成果発表）
6	3	土	定例会	ボランティアメッセ2006（福岡）での出展内容の検討
6	17	土	定例会	ボランティアメッセの検討、掲示板準備
7	1	土	定例会	掲示板の編集、印刷、発送
7	15	土	定例会	C展示室フィールドレポーターコーナーの展示替え準備
8	5	土	定例会	C展示室フィールドレポーターコーナーの展示替え
8	19	土	定例会	ボランティアメッセおよび掲示板の準備作業
9	2	土	定例会	掲示板の編集、印刷、発送およびボランティアメッセの準備
9	16	土	定例会	ボランティアメッセ2006の準備および発送作業
9	23・ 24	土・ 日	イベント	九州国立博物館で開かれたボランティアメッセ2006 IN 九博に出展
9	30	土	臨時活動	新空間で展示するボランティアメッセ2006の報告パネル作り
10	3～ 15	日 火～	展示	新空間展示「はしかけ・フィールドレポーター、九州国立博物館へ行く！」に出展
10	7	土	定例会	冬の調査に向けて話し合い
10	21・ 22	土・ 日	イベント	開館10周年記念イベントでポスター展示
10	28	日	イベント	第7回草津市パワフル交流・市民の日に出展
11	4	土	定例会	ミノムシ調査の内容について話し合い
11	18	土	定例会	ミノムシの調査票を印刷、発送
12	2	土	定例会	10周年記念ギャラリー展のフィールドレポーターコーナーの企画会議
12	9	土	臨時活動	ギャラリー展フィールドレポーターコーナーの最終話し合いと、オオヨシキリ調査のフィールドレポーター便りの発送作業
12	16	土	定例会	10周年記念ギャラリー展のフィールドレポーターコーナーの制作
12	21	木	臨時活動	10周年記念ギャラリー展のフィールドレポーターコーナーの制作
12	22	金	臨時活動	10周年記念ギャラリー展のフィールドレポーターコーナーの制作
1～ 2	23～ 18	土～ 日	イベント	10周年記念ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」フィールドレポーターコーナー出展
1	6	土	定例会	今年の計画、他館との交流について話し合い
1	20	土	定例会	春の調査および伊丹昆虫館との交流会について話し合い
2	3	土	定例会	掲示板の編集、印刷、発送作業
2	17	土	定例会	伊丹昆虫館との交流会について打ち合わせ
2	17	土	イベント	琵琶湖博物館研究発表会にポスター参加
2	18	日	臨時活動	伊丹昆虫館との交流会
3	3	土	定例会	ツバメ調査の検討
3	17	土	定例会	ツバメ調査の調査票の印刷、発送
3	24	土	臨時活動	はしかけ・フィールドレポーター発表会準備
3	25	日	イベント	はしかけ・フィールドレポーター発表会参加
3～ 4	25～ 8	日～ 日	イベント	新空間展示「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」に出展



ボランティアメッセ 2006 IN 九州国立博物館で
竹の漢字プログラムを披露するレポータースタッフ



伊丹昆虫館との交流会でチョウの飼育風景を見学

(2) はしかけ制度

はしかけ制度は、展示の見学や交流イベントへの参加など、いわゆる受け身的な博物館の利用にとどまらず、博物館の事業や活動にさまざまな形で自主的にかかわりたいとする人たちに対し、そのきっかけの場、さらには新しい活動を発想・展開するための環境を提供するための参加型制度で、2000年8月に設置された。はしかけ制度のもとでの活動は、年度単位で登録・更新の手続きを経たはしかけ会員が、個別のテーマをもつはしかけグループの活動に参加する形で主として行われる。はしかけグループの活動は多岐にわたり、活動の場所や対象を博物館内やその周辺におくグループもあれば、県内の各地域へも活動範囲を広げているグループもある。このようにして、はしかけ会員には、琵琶湖博物館の中長期基本計画に掲げられている「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けて、博物館と地域あるいは地域に住む人たちとの間の、文字通り「はしかけ」としての役割も期待されている。

はしかけ制度は、参加者の側が自主的に企画・提案を行い、博物館とともに活動を具体化していく形へと移行していくことが望まれる。はしかけグループやはしかけ会員が核となり、各地で新たな活動が生まれ、すでに活動しているグループと連携をとりながら、博物館と連携した活動のネットワークが広がっていく方向へと発展していくことが、はしかけ制度の将来的な目標のひとつであり、「地域だれでも・どこでも博物館」構想を実現するひとつの有効な手段となりうるものとする。

2006年度には、はしかけ会員登録者数は年度末の比較で20人増加し381人となったが、活動の場となるはしかけグループの数は1つ減り、13グループになった。

はしかけ会員となるうえで受講が必修のはしかけ登録講座は、2006年度は例年通り7月、11月、3月の3回実施し、年度末の3月25日（日）から4月8日（日）の間、新交流空間で「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」を開催した。この初日の25日の午後からは「はしかけ交流会」をセミナー室で開催し、会員どうしの親睦をはかった。

外部主催のイベントとしては、全国の博物館ボランティア関係者が集う「ボランティアメッセ IN 九州国立博物館」が福岡県太宰府市で9月23日（土・祝）・24日（日）に開催され、はしかけの活動紹介を行った。

	開催日	会場	講師	参加者数
第1回	7月8日（土）	会議室（講義）および展示室・ 研究棟・収蔵庫等（琵琶湖博物 館）	全体進行：中井 各グルー プの説明は、世話人やはしかけ 会員による	25人
第2回	11月5日（日）			21人
第3回	3月10日（土）			27人

各グループの活動

○ びわたん (旧「体験学習の日グループ」)

担当：中村公一・中野正俊・青木伸子 会員数：23名

〔設立の趣旨〕「琵琶湖博物館わくわく探検隊」の事業を博物館職員とともに運営し、同事業がめざす「フィールドへの誘い」「展示室のより深い理解」を来館者に届ける。

〔活動の概要〕「琵琶湖博物館わくわく探検隊」事業は、概ね毎月第2、4土曜日の午後に行われている。この事業は、来館者に滋賀県の人々の暮らしや身のまわりの自然に対する興味・関心を深めてもらうことをねらいに行っている。「びわたん」のメンバーは、この事業におけるプログラム開発や事業当日の参加者との交流などに積極的に関わっている。また、それぞれの興味・関心に応じて、琵琶湖博物館内での展示、その他公共施設や学校、博物館に出かけての展示ならびに体験学習を行うほか、スキルアップのための自己研修も行っている。

「びわたん」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所
4月 8日	紙すきをしよう	琵琶湖博物館
4月22日	紙すきをしよう	琵琶湖博物館
5月13日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	琵琶湖博物館
5月27日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	琵琶湖博物館
6月10日	投網に挑戦しよう	琵琶湖博物館
6月24日	投網に挑戦しよう	琵琶湖博物館
7月 8日	青花をつかって染め物をしよう	琵琶湖博物館
7月22日	青花をつかって染め物をしよう	琵琶湖博物館
7月23日	SAGAWAキッズミュージアム ペたぺた探検隊!	佐川美術館
7月29日	SAGAWAキッズミュージアム カメラを使って写真を撮ろう!	佐川美術館
7月30日	SAGAWAキッズミュージアム プランクトンってどこにいる?	佐川美術館
7月30日	文化ボランティア研修会	滋賀会館
8月 3日	自然調査ゼミナール 偏光スコープをつくろう ペットボトル顕微鏡をつくろう	琵琶湖博物館
8月 6日	SAGAWAキッズミュージアム 植物の形を見よう	佐川美術館
8月23日	化石のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館
9月 9日	綿から糸をつくろう	琵琶湖博物館
9月23日	綿から糸をつくろう	琵琶湖博物館
9月23・24日	ボランティアメッセIN九州国立博物館	九州国立博物館
9月27日	コイの歯の化石のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館
10月 1日	コイの歯の化石のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館
10月3日～15日	はしかけ・フィールドレポーター九博へ行く!ポスター展示	琵琶湖博物館
10月 5日	ヨシ笛をつくろう	蒲生北小学校
10月 6日	植物の影で秋の文様をつくろう	琵琶湖博物館
10月14日	たねみつけ～秋の屋外展示を探検しよう～	琵琶湖博物館
10月28日	たねみつけ～秋の屋外展示を探検しよう～	琵琶湖博物館
11月 3日	自主研修会 紙芝居	琵琶湖博物館
11月11日	木の実で遊ぼう	琵琶湖博物館
11月15日	JICA研修 びわたん活動の紹介	琵琶湖博物館
11月16日	咽頭歯のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館

11月18日	琵琶湖博物館研究発表会第10回「みんなで調べる琵琶湖の私たち」運営協力	琵琶湖博物館
11月25日	木の実で遊ぼう	琵琶湖博物館
12月3日・5日	滋賀県環境学習のつどい ポスター展示および企画運営協力(偏光スコープをつくろう/環境学習はっとカフェ「今、地域のために何ができるか」)	琵琶湖博物館
12月5日	参加型研修会 プランクトンの模型をつくろう	島根県立しまね海洋館
12月7日	探鳥会 ワークショップ 色とりどり☆	琵琶湖博物館
12月9日	富江家はっけんブックづくり	琵琶湖博物館
12月23日～2月18日	企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年 ポスター展示	琵琶湖博物館
1月13日	博物館でスゴロクをしよう	琵琶湖博物館
1月27日	博物館でスゴロクをしよう	琵琶湖博物館
2月10日	化石のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館
2月17日	気軽にどこでもアート交流事業 青写真をとろう	滋賀会館
2月24日	化石のレプリカをつくろう	琵琶湖博物館
3月10日	縄文コースターをつくろう	琵琶湖博物館
3月24日	縄文コースターをつくろう	琵琶湖博物館
3月25日～4月8日	はしかけ・フィールドレポーター活動紹介 ポスター展示	琵琶湖博物館

○ うおの会

会長：村上靖昭 担当：中島経夫 会員数：153名

〔設立の趣旨〕「魚を愛し、魚採りを楽しもう。魚とその棲息環境を将来にのこそう。魚とその棲息環境の現状を調査し、その姿を証拠として記録しておこう」という目標をたて、お魚とりが大好きな人々が集まって、魚つかみを楽しみながら、共に調査を実施し、身近な環境を見つめなおすことを目的にしている。2000年の発足から、お魚とりが大好きな皆さんに、博物館を利用した活動の場を提供しながら、調査によって得られた成果を活用し、身近な環境に生息している魚たちの情報を21世紀初頭の記録として貴重な博物館資料とすることを目指している。

〔活動の概要〕 2000年の発足から2004年5月までは、滋賀県内の魚類分布調査や、法竜川での定点調査などの調査と分析を行ってきた（成果報告は、琵琶湖博物館研究調査報告第23号「みんなで楽しんだうおの会―身近な環境の魚たち」にまとめられている）。

2005年度より、うおの会の活動は、「魚つかみを楽しむ」会から「魚つかみの楽しみを伝える」会として活動内容を再構築した。琵琶湖流域を対象に、NPO、団体、機関、学校、企業や個人をつなぐ「琵琶湖お魚ネットワーク」の指導員や上級調査員として、流域各地で分布調査や地域の観察会での指導を行っている。2007年2月には、その成果として「琵琶湖お魚ネットワーク報告書」を発行した。また、会員同士の交流やスキルアップとして、琵琶湖お魚ネットワークの魚類分布調査をすることを目的に、月1回の定例調査を琵琶湖流域各地で開催している。うおの会では、このように魚つかみを楽しみながら、得られたデータをもとにして環境の保全や回帰に役立てたいと願っている。

「うおの会」のおもな活動

活動月日	内 容
4月8日	第5回コアメンバー会議
4月15日	うおの会第37回定例調査
4月15日	お魚調査と魚についての研修会への協力

4月16日	よしよしプロジェクト3「和邇中浜消波堤補強」への参加
4月17日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
4月24日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察会①への協力
4月24日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
5月1日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
5月7日	第6回コアメンバー会議
5月8日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
5月13日	お魚ネットワークおおつ生息調査への協力
5月14日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察会②への協力
5月14日	びわここだわりゆりかご米グループ田植イベントへの参加
5月15日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
5月20日	第1回琵琶湖お魚探検隊生息調査への協力
5月22日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
5月28日	うおの会第38回定例調査
5月28日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察会③への協力
5月28日	「第5回琵琶湖外来魚駆除の日」への協賛
5月29日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
6月5日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
6月7日	南笠東小学校3年総合学習「狼川探検」への協力
6月9日	Vol. 29うおの会ニュースレター発行
6月10日	第2回ゆりかご水田観察会in菖蒲への協力
6月10日	琵琶湖博物館わくわく探検隊投網教室への協力
6月10日	公開ヒアリング2006「内湖今昔-内湖との関わり」への協力
6月11日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察会④への協力
6月12日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
6月14日	大津市立日吉中学校 葛川自然教室 環境学習への協力
6月15日	子どもたちの農業・農村体験学習への協力
6月18日	きらり☆NPOボランティア活動フェアへの協力
6月19日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
6月24日	ニゴロブナ幸津川観察会への協力
6月24日	琵琶湖博物館わくわく探検隊投網教室への協力
6月24日	第2回お魚ネットワーク臨時運営会議への参加
6月24日	第7回コアメンバー会議
6月25日	うおの会第39回定例調査
6月26日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
6月28日	田んぼの生きもの調査への協力
6月28日	草津市立玉川小学校狼川探検への協力
6月29日	魚のゆりかご水田in鶺鴒川への協力
6月30日	魚のゆりかご水田in栗見新田への協力
7月2日	八幡堀釣り大会への協力
7月3日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
7月8日	第2回琵琶湖お魚探検隊生息調査への協力
7月10日	環境フィールドワーク2Hグループの授業への参加
7月15日	長沢川探検への協力
7月18日	子どもたちの農業・農村体験学習への協力

7月19日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察会⑤への協力
7月22日	太田川自然観察会への協力
7月26日	子どもたちの農業・農村体験学習への協力
7月30日	エリ漁体験への協力
7月30日	上田上新免の生き物観察会への協力
8月 2日	川の生き物観察会への協力
8月 3日	県環境教育部会夏季研修会への協力
8月 4日	笠縫東小学校職員研修への協力
8月 5日	白鳥川かいどり大作戦への協力
8月 5日	水みず探検隊への協力
8月 6日	御呂戸川探険への協力
8月 6日	東近江市地域学事業「お魚調査」①への協力
8月 6日	「第21回八幡てんびん祭り」でさかなの展示への協力
8月19日	安土町環境のつどい2006への協力
8月20日	親子雑魚捕り体験教室への協力
8月20日	FLB魚の調査とヨシ植栽への協力
8月22日	マキノ西浜自然観察会への協力
8月27日	親子で魚つかみを楽しもうへの協力
8月28日	東近江市地域学事業「お魚調査」②への協力
8月31日	お魚ふやし隊 平成18年度自然観察への協力
9月 9日	まのきたっ子ワクワク広場への協力
9月10日	琵琶湖博物館観察会「カバタを見に行こう」への協力
9月13日	琵琶湖河川事務所研修への協力
9月16日	第3回琵琶湖お魚探検隊生息調査への協力
9月18日	西方寺福寿土曜学校 お魚観察教室への協力
9月22日	琵琶湖河川事務所研修への協力
9月23日	東近江市地域学事業「お魚調査」③への協力
9月23日	びわこ揚水土地改良区観察会への協力
9月24日	第40回うおの会定例調査
9月28日	南小松地区排水路の生き物観察会への協力
9月30日	仰木の里観察会への協力
10月 4日	龍谷大学特別講義「琵琶湖の魚から身近な環境を考える」への協力
10月 7日	ふるさと川探検「山寺川の魚調査」への協力
10月 8日	琵琶湖博物館交流事業「魚のくらしにふれてみよう」への協力
10月 9日	秋 きらり☆NPOボランティア活動フェアへの参加
10月14日	大人の川遊びトレーニングへの協力
10月14日	東近江市地域学事業「お魚調査」④への協力
10月15日	びわこ揚水土地改良区観察会への協力
10月15日	高島市お魚ふやし隊自然観察会への協力
10月21日	2006青少年のための科学の祭典への協力
10月22日	2006青少年のための科学の祭典への協力
10月22日	湖東地域環境シンポジウムへの協力
10月22日	第41回うおの会定例調査
10月22日	琵琶湖博物館開館10周年記念へのポスター展示
10月24日	滋賀大学環境学習支援士指導への協力

10月28日	今津三谷自然観察会への協力
10月28日	三ツ池地区第2回ため池探検隊への協力
10月29日	東近江市地域学事業「お魚調査」⑤への協力
10月29日	第2回「河川を愛する市民会議」への参加
10月29日	「おさかなさがしたーい」への協力
11月1日	第8回コアメンバー会議
11月2日	乙女ヶ池再生計画水質調査への協力
11月7日	家棟川ビオトープ自然観察会への協力
11月8日	琵琶湖における水中生物の生態系を知ろうへの協力
11月9日	乙女ヶ池再生計画お魚調査への協力
11月18日	第4回琵琶湖お魚探検隊生息調査への協力
11月19日	東近江市地域学事業「お魚調査」⑥への協力
11月26日	第42回うおの会定例調査
12月3日～12月5日	滋賀県県民環境学習のつどいへのポスター提示
12月9日	瀬田南小学校 冬のわくわくランド クイズラリーへの協力
12月17日	第43回うおの会定例調査
12月17日	第9回コアメンバー会議
1月13日	第3回お魚ネットワーク運営委員会への参加
1月20日	琵琶湖お魚探検隊第5回調査への協力
1月21日	第二回外来魚情報交換会
1月28日	きらりNPO・ボランティア活動フェアへの協力
2月10日	草津市こども環境会議への協力
2月17日	平成18年度第4回琵琶湖博物館研究発表会への協力
2月24日	第1回環境教育フォーラムへの協力
2月25日	第3回お魚ネットワーク交流会の共催
3月4日	第2回桜池生き物観察会への協力
3月11日	第3回ゆりかご水田観察会in菖蒲への協力
3月18日	「お魚ふやし隊」平成18年度自然観察への協力
3月18日	ヨシ植え事業への参加
3月25日	第44回うおの会定例調査
3月25日	うおの会第7回総会
3月31日	びわこお魚探検隊定例調査

○ 田んぼの生き物調査グループ

担当：楠岡 泰・マーク J. グライガー 会員数：22名

〔設立の趣旨〕 滋賀県に住む人にとって最も身近な水環境である水田に目を向けて、その生物の分布や生態を調査する。

〔活動の概要〕 当グループは、フィールドレポーター制度で行った田んぼの生き物調査に興味を持った有志で結成された。水田に生息する生物、特に大型鰓脚類（カブトエビやホウネンエビ、カイエビなど）の分布および生活史を明らかにすることが現在の研究テーマである。このため大型鰓脚類の出現状況を県内各地の水田で調べ、分布マップを作成するとともに、分布の違いを生み出す要因を明らかにするため水温や水質などのデータとの比較を行っている。

はしかけそれぞれが自分のペースで自宅近くの定点観察および広域分布調査を行っている。また、2006年度は合同調査として近江八幡市を中心に同じ水田で夏のエビ類の分布と冬の泥の様子を調べた。

2006年度は長浜周辺でのトゲカイエビの分布確認や、堅田以北の湖西側でのアメリカカブトエビの確認

など分布の関する新たな知見が得られた。

「田んぼの生き物調査グループ」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	備 考
4月22日	田んぼの生き物調査研修会	琵琶湖博物館	9名
5月21日	第1回田んぼの生き物合同調査	近江八幡市周辺	12名
6月4日	第2回田んぼの生き物合同調査	近江八幡市周辺	11名
7月23日	田んぼの生き物同定会	琵琶湖博物館	9名
1月10日	田んぼ土壌調査研修	農業技術振興センター	5名
1月21日	第1回冬の田んぼ土壌合同調査	近江八幡市周辺	10名
3月4日	第2回冬の田んぼ土壌合同調査	近江八幡市周辺	6名
3月10日	総会および田んぼの生き物調査まとめ会	琵琶湖博物館	8名
3月25日～4月8日	はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」にポスター出展	琵琶湖博物館	
通 年	田んぼの生き物調査	滋賀県周辺	それぞれが随時調査
12月～2月	冬季田んぼの状態調査	滋賀県周辺	それぞれが随時調査

○ 里山の会

会長：吉井 隆 担当：楠岡 泰・西村知記 会員数：20名

〔設立の趣旨〕交流事業「里山体験教室」の卒業生が中心となり、2001年から活動している。里山体験教室のホスト役を通して里山をより深め、会独自に現代における里山の「利用法」と「楽しみ」を模索している。

〔活動の概要〕里山体験教室が、今年度より新たなフィールド（野洲市大篠原）での活動になった。ヤブ状の枯アカマツ林を「里山林」と呼べるようにするのに、いったいどのくらいの時間と労力がかかるだろうか。里山体験教室を前に、新担当の西村の思いは複雑であった。その思いとは裏腹に、会のメンバーはそんな素振りは微塵も見せず、明るく、そして貪欲に、新たなフィールドにおいても「楽しみ」を模索し続けた。これが原動力となり、里山の会入会者や里山体験教室リピータの増加につながっている。

また、今年度も会の独自活動を盛んに行い、「豊かな湖づくりキャンペーン」に協賛して、県内外を問わず活動の輪を広げている。

「里山の会」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所
5月20日	里山下見	野洲市大篠原
5月27日	里山体験教室（春）里山探検	野洲市大篠原
7月15日	里山整備と下見	野洲市大篠原
7月20日	里山体験教室（夏）カブトムシのゆりかごづくり	野洲市大篠原
7月30日	里山活動誌作成	博物館研究交流室
8月5日	里山活動誌作成	博物館研究交流室
9月16日	里山整備と下見	野洲市大篠原
9月17日	全国雑木林会議 in 名張	三重県名張市
9月23日	里山体験教室（秋）キノコ探検	野洲市大篠原
10月28日	市民活動屋台村 in マキノ	高島市マキノスキー場

11月3日	里山フィールド活動	日野町上駒月
12月2日	里山下見	野洲市大篠原
12月9日	里山体験教室（冬）中止、焚き火術研修	野洲市大篠原
1月14日	ヨシ刈りイベント	守山市なぎさ公園
2月10日	里山の会総会、鑑賞炭・竹炭づくり	野洲市大篠原
3月17日	はしかけ発表会準備（パネルづくり）	博物館研究交流室
3月25日	はしかけ発表会（パネル紹介・コンサート）	博物館新空間、アトリウム

○ 近江はたおり探検隊

担当：中藤容子 記録・ホームページ担当：辻川智代 会員数：20名

〔設立の趣旨〕 地域に残された人とモノから近江のはたおり文化を探究し、現在失われてしまった近江の良さを再発見し、地域の人々とともにその良さを伝えていく」ことを目標に活動する。

〔活動の概要〕 博物館に収蔵される機織り用具の調査を通じ、伝統的な地域に残る機織りを再現することを目標とし、織姫の会、研究会、はたおり探検などの活動を行っている。さまざまな博物館や専門家、地域のお年寄り、機織りに興味のある若者子どもたちとの交流の中で、機織り用具の製作、近江上布復元のための探究、苧麻などからの糸・布づくり、藍からの藍染めなどを行い、平成18年度には「野良着部会」をたちあげ、琵琶湖南部特有の縞柄の藍染木綿の復元を始めた。

「近江はたおり探検隊」のおもな活動

活動月日	タイトル	行事名	主催者名	場 所
4月15日～3月14日 (36回)		織姫の会・野良着部会	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館など
6月14日		はたおり探検	琵琶湖博物館	山城郷土資料館・奈良晒保存会
4月12日～2月5日 (7回)		近江はたおり研究会（第22回～第28回）	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館など
7月8・22日（2回）	青花を使って染め物を作ろう	琵琶湖博物館わくわく探検隊	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館
9月9・23日（2回）	綿から糸をつくろう	琵琶湖博物館わくわく探検隊	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館
11月4～11日	「綿と機織りの会」活動紹介（糸つむぎ体験会を3回実施）	第2回もりやま市民屋台村	守山市民交流センター	守山市民交流センター
3月25日～4月8日	活動紹介	ギャラリー展示「博物館を楽しもう」	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館

○ 植物観察の会

担当者：布谷知夫 会員数・代表者：特定せず（名簿なし）

〔設立の趣旨〕 2004年度に企画展示「のびる・ひらく・ひろがる」を企画したところに、植物を好きな人を増やすことを目的にして「はしかけ」を作った。ただし、他の「はしかけ」グループのようにはっきりとしたグループ化はせず、「はしかけ」全体の植物の研修会のような位置付けにしてきた。それはどのような活動についても、植物に関係する場合が多く、共通した植物観察の場を作っておくことを意識したためである。

〔活動の概要〕 テーマを決めた室内での勉強会や野外での観察会を行っている。2004年度の企画展示では、観察会への参加者に依頼して、種子の採集や展示室内でのワークショップなどを行なった。今後も野外

での観察会を継続するとともに、希望に応じて室内での勉強会などを計画する。

「植物観察の会」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	参加者数
4月30日	カタクリの花の観察会	高島市マキノ町	35名
8月5日	夏の植物の観察会	余呉町	11名
11月19日	秋の木の実の観察会	野洲町花緑公園	16名
2月11日	冬の雑木林の観察会	大津市志賀町比良	14名

○ たんさいぼうの会

会長：有田重彦 担当（影の会長）：大塚泰介 会員数：20人

〔設立の趣旨〕珪藻を中心に、微小生物のハイ・アマチュア研究者の育成を目指す。

〔活動の概要〕2002年5月に「珪藻の会」として発足し、研究対象の拡大をねらって「たんさいぼう（単細胞）の会」と改名した。発足以来、珪藻など微小生物の調査・観察・研究を行い、学会発表や研究論文として成果を公表してきた。活動によって得られた標本および成果物は、琵琶湖博物館に寄贈される。

2006年度は、過去の「たんさいぼうの小さな旅」で採集した小女郎が池、八雲ヶ原湿原、草津・栗東のため池群などの珪藻について、写真撮影と整理を進めた。並行して新たな採集・調査も行った。2006年5月と11月には、西浅井町の山門湿原で珪藻の調査をした。2007年2月～3月には、豊穰の郷（守山市）と共同で、守山市内河川の珪藻を調査した。2007年4月現在、3人の会員が、それぞれの課題で論文を執筆中である。

「たんさいぼうの会」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	担当者・参加者
4月22日	たんさいぼうの会第14回総会	琵琶湖博物館	担当：中井大介 参加者：7人
5月6日	たんさいぼうの小さな旅V 山門湿原（予備調査）	西浅井町山門湿原	担当：大塚泰介 参加者：6人
9月23・24日	ボランティアメッセ2006 IN 九博に出展	九州国立博物館	発表者：中井大介 ・杉本昌隆
10月1日	たんさいぼうの会第15回総会	琵琶湖博物館	担当：田邊純子 参加者：10人
11月11日	日本珪藻学会第26回研究集会で発表		発表者：吉川俊一
11月23日	たんさいぼうの小さな旅V 山門湿原（本調査）	西浅井町山門湿原	担当：大塚泰介 参加者：6人
1月14日	たんさいぼうの会第16回総会	琵琶湖博物館	担当：杉本昌隆 参加者：9人
2月10日～ 3月3日	たんさいぼうの小さな旅VI 守山市内河川（冬期調査）	守山市内	担当：中井大介 参加者：8人
3月25日	はしかけ・フィールドレポーター発表会で発表	琵琶湖博物館	担当：大塚泰介 参加者：4人

○ 咽頭菌倶楽部

会長：村上靖昭 担当：中島経夫 会員数：3名

〔設立の趣旨〕うおの会のサブグループとして2003年1月末に発足した。その趣旨はコイ科魚類の咽頭菌に興味をもつ人が集い、互いに研鑽しながら魚やコイ科魚類に関する知識を深めることにある。

〔活動の概要〕 コイ科魚類の咽頭歯を見分ける能力を磨き、遺跡からの遺体や地層からの化石咽頭歯を同定する。そのことによって、コイ科魚類の進化の道筋や人の営みを知る。咽頭歯標本の製作、遺跡からの咽頭歯遺体の検出、化石の調査などを行っている。2006年度も前年度に続き、うおの会の活動が活発化しており人材が不足気味であったが、12月から咽頭歯を検出する作業を再開した。

「咽頭歯倶楽部」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
12月 12日間 (3日、5日、6日、11日、12日、13日、17日、19日、20日、21日、24日、25日)	咽頭歯の検出作業	琵琶湖博物館 動物標本製作室	各1名
1月 21日間 (4日、5日、9日、10日、11日、12日、13日、15日、16日、17日、18日、19日、20日、21日、23日、24日、25日、26日、27日、29日、31日)	咽頭歯の検出作業	琵琶湖博物館 動物標本製作室	各1名
2月 21日間 (1日、2日、3日、4日、5日、6日、7日、8日、9日、10日、13日、14日、15日、16日、17日、18日、20日、21日、22日、23日、28日)	咽頭歯の検出作業	琵琶湖博物館 動物標本製作室	各1名
3月 21日間 (1日、2日、6日、7日、8日、9日、11日、14日、15日、16日、17日、18日、19日、20日、22日、23日、25日、26日、29日、30日、31日)	咽頭歯の検出作業	琵琶湖博物館 動物標本製作室	各1名

○ ほねほねくらぶ

会長：山中裕子 広報担当：永野まやこ 担当：高橋啓一 会員数：15名

〔設立の趣旨〕 現生あるいは化石の骨に関係した活動を通じて、琵琶湖博物館の研究や交流活動の支援を行い、その楽しさを広く博物館外の人々に伝えることを目的としている。

〔活動の概要〕 2002年7月に発足。骨に魅せられた仲間が集まり、現生動物の解剖、骨格標本の作製などを毎月1回の例会を中心に行っている。昨年度から定例活動日以外に個別での活動も行っている。今年度は、探究心旺盛な幼稚園児・小学生も加わり、メンバーの技量を磨きたい、知識を深めたいという思いも強まり、他団体の見学交流など館外での活動や、館外施設での展示用標本製作などをおこなった。

「ほねほねくらぶ」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所
4月例会	ギャラリー展見学	琵琶湖博物館
5月例会	朽木いきものふれあいの里から20体の資料をもらい受け、内タヌキ他5体の土埋め作業	朽木いきものふれあいの里 琵琶湖博物館
6月例会	アザラシの解体、ハクビシンの骨クリーニング	琵琶湖博物館
7月例会他	ハクビシンの骨組み立て、タヌキの皮剥	琵琶湖博物館
8月例会他	コノハズクの解剖、シロハラハの解剖、タヌキの皮剥	琵琶湖博物館
9月例会	アナグマの解剖、水付け	琵琶湖博物館
10月例会	アザラシの骨クリーニング、足の組み立て	琵琶湖博物館
11月例会	土埋め資料の掘り出しと骨のクリーニング	琵琶湖博物館
12月例会	シャモ鍋 (シャモの解剖、骨のクリーニング)	琵琶湖博物館
1月例会	アナグマの骨クリーニング	琵琶湖博物館
2月例会	シカ、イノシシ頭骨の解体、水付け	琵琶湖博物館
3月例会	大阪市立自然史博物館「なにわホネホネ団」見学	大阪市立自然史博物館

○ 湖（こ）をつなぐ会

代表：中山法子 担当：牧野厚史 会員数：17名

〔設立の趣旨〕「うた」を通じて、琵琶湖の文化的・社会的価値を再発見することをめざしている。

〔活動の概要〕2003年11月に県内在住の子ども達で組織する「琵琶湖の未来たち合唱団」とその保護者らによって活動を開始した。新しい琵琶湖のうた「生きている琵琶湖」を滋賀県内外に広め、子ども達が日々の生活のなかでこの歌を口ずさむことによって、琵琶湖の未来のことを考えるきっかけとなるよう活動を続けている。月1回の練習会をもち、参加者の多い時にはアトリウムでミニコンサートを開催した。今年度は博物館からの発信だけでなく、地域へ出かけていく足がかりとして、幼児向けの紙芝居を制作した。紙芝居には「人」も「琵琶湖」も自然の中の一部であるということをお小さな子ども達にも伝えられたらという思いを込めた。今後はこの紙芝居と歌をセットにして幼稚園など訪問し活動をひろめていく予定である。

「湖（こ）をつなぐ会」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所
5月21日（日）～	紙芝居の原稿作成のための打ち合わせ開始	琵琶湖博物館
2月24日（土）	紙芝居「びわこの旅」完成、初演	琵琶湖博物館
3月25日（日）	はしかけ活動発表 紙芝居「びわこの旅」上演	琵琶湖博物館

○ 温故写新

代表者：未定 担当：秋山廣光 会員数：31名

〔設立趣旨〕

- ・写真とカメラを愛し、撮影を楽しむことを主旨とする。
- ・生命の活動、人の生活や自然の移りゆく様子を記録し後世に伝える。
- ・感動的に、そして美しく。
- ・時の流れと共に変化するこの世界の一瞬を切り取り、命や自然、人の営みを考察する一助とする。

〔活動の概要〕実績は乏しく、初心者の方をとほとほと歩いている。写真撮影の基礎から様々なジャンルに対応する講座を予定。暗室作業や学窓など一連の作業の習得や写真表現を用いた様々な活動を行いたい。

具体的には、テーマを決め撮影会を行った後、作例を持ち寄りお互いの評価によって技術を磨く。たとえば、魚類や水生生物の撮影、植物群落の記録、風景撮影、伝統文化の記録、環境の定点観測撮影、鳥類、昆虫類、哺乳類などの野生生態撮影など、多岐にわたることを想定。撮影記録を用い、企画を練り図鑑やハンドブックなどを作成する。

「温故写新」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	参加者数
4月8日	会議	琵琶湖博物館実習室	7名
4月22日	撮影会	烏丸半島（博物館周囲）	7名
5月6日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	9名
6月3日	撮影会	烏丸半島（博物館周囲）	9名
6月17日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	8名
7月15日	撮影会	烏丸半島（博物館周囲）	4名
7月29日	部外活動：当館と佐川美術館の共催事業で行った針穴写真の補助	佐川美術館	3名
8月5日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	6名

9月9日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	7名
9月30日	撮影会	琵琶湖博物館生活実験工房	9名
10月15日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	7名
11月11日	撮影会	琵琶湖博物館生活実験工房	4名
11月25日	リベンジ撮影会	琵琶湖博物館生活実験工房	8名
1月13日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	10名
2月10日	撮影会	琵琶湖博物館生活実験工房	7名
2月24日	勉強会	琵琶湖博物館実習室	名
3月24日	撮影会	琵琶湖博物館生活実験工房	名

○ 展示室を楽しくする会 (旧「生活実験工房に集う会」)

担当：中藤容子 会員数：12名

〔設立の趣旨〕琵琶湖博物館の展示空間（屋外展示、生活実験工房も含む）をより深く楽しく利用していく方法を「工房に集う会」「アクティビティー集を作る会」「はしかけキッズの会」などの部門に分かれてさまざまな層の人々とともに実践的に探究していく。

〔活動の概要〕平成18年度は生活実験工房を担当する職員の指導・協力を受けながら、「工房に集う会」で田んぼの管理・利用を行う中で博物館の新しい活用方法を模索した。「近江はたおり探検隊」で使う綿・藍などを染織の材料を「おりばたけ」で栽培。看板も製作し設置した。

「展示室を楽しくする会」のおもな活動

活動月日	タイトル	主催者名	場 所
5月7日～2月14日 (18回)	田畑作業（田植え・稲刈り・わら細工づくりなど）	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館 (生活実験工房)
3月25日～4月8日	はしかけ・フィールドレポーター活動紹介	琵琶湖博物館	琵琶湖博物館 (集う、使う、創る新空間)

○ ザ！ディスカバはしかけ

担当者：堀田桃子・荒井文子 会員数：8名

〔設立の趣旨〕子どもからお年寄りまで、ディスカバリールームを訪れる方々に、展示のメッセージがよりよく伝わるように、分かりやすく、楽しい空間をつくることを目指している。

〔活動の概要〕新しいメンバーを迎え、さらに多彩な活動をすることができた。主な活動内容は、裁縫(展示物の作成・補修)、読み聞かせ、工作イベントの補助など、それぞれの特技を活かしたものであった。また、活動内容を館外へ広める機会もあり、はしかけとしての意識を高めることができた。

「ザ！ディスカバはしかけ」のおもな活動

活動月日	内 容	場 所	参加者
5月20日	「ホテルの紙芝居」上演	ディスカバリールーム	2
7月	布製きのこ作成。「世界の子どもたち」で展示	自宅で作成	3
8月24日	「木の葉でウチワ」工作プログラム補助	ディスカバリールーム	3
9月23・24日	ボランティアメッセ参加。ポスター発表	九州国立博物館	1
11月	指人形の洋服作成。「にんぎょうげきじょう」で展示	自宅で作成	1
通年	指人形の補修	ディスカバリールーム	1

地域交流活動への支援事業

(1) 地域活動の支援 (博物館内)

月	日	団体・行事名	参加者数	タイトル・内容	区分	場所	担当
4	1	(株)高島屋京都店	55	ヨシ笛づくり	講師	実習室	布谷・青木
4	23	奈良教育大学 新入生宿泊研修	22	琵琶湖の魚から環境を考える	講師	実習室	前畑
5	11	滋賀県総合教育センター 第1回理科教育講座	20	博物館と学校との連携について	講師	セミナー室・ホール・実習室	秋山・中野
5	11	滋賀県中学校理科部会 滋賀県中学校理科部会研究委員総会	40	博物館と学校との連携について	講師	博物館セミナー室等	中村・中野
5	12	滋賀県大津市生涯学習課 現地研修会	10	琵琶湖の水環境について	講師	博物館実習室等	中村
5	13	栗東市児童外国語支援グループ	5	ヨシ笛	講師	実習室	青木
5	13	立命館大学経済経営理工学部	208	琵琶湖の環境と魚-魚の現状から環境を考える	講師	ホール	前畑
5	20	全国県人会連合会	24	博物館の概要	講師	セミナー室	布谷
5	25	大阪市住吉区地域振興協議会 琵琶湖学習会	50	琵琶湖の環境	講師	セミナー室	布谷
5	28	蔀屋子子供育成会	70	子ども会行事	講師	うみっこ広場	青木
6	4	杉浦2区子供育成会	28	ヨシ笛	講師	実習室	青木
6	10	草津第二公民館	41		講師	実習室	松田
6	23	玉津PTA事業講習	5	化石レプリカ	講師	実習室	青木
6	23	御蔵山子供会	5	ヨシ笛	講師	実習室	青木
6	24	琵琶湖市民大学 連続学習会	30	琵琶湖の環境と人との関係-里山のくらし、今のくらし-	講師	実習室	芳賀
6	24	京都橘大学文化政策学科	32	博物館実習	講師	会議室	布谷
6	24	京都女子大学	45	博物館実習	講師	会議室	布谷
6	25	玉津PTA事業講習	75	化石レプリカ	講師	実習室	青木
6	29	真野公民館びっくり箱	13	化石レプリカ	講師	実習室	青木
6	29	滋賀県立大学 環琵琶湖文化論実習	21	博物館の概要と展示説明	講師	セミナー室	牧野
6	29	愛知県大府市教育委員会 社会教育研修	6	琵琶湖の水環境について	講師	博物館実習室等	中村・中野
7	8	守山こどもエコクラブ	12	わき水勉強会	講師	応接室	草加
7	9	JC草津青年会議所	250		講師	セミナー室・ホール・会議室	
7	12	NPO法人シニア自然大学 琵琶湖研修会	60	夏期合宿	講師	セミナー室・実習室・実験工房	布谷・秋山・八尋
7	13	大阪府豊中市教育委員会 中学校理科技術職員等研修	20	博物館と学校との連携について	講師	博物館実習室等	中村・中野
7	15	NPO法人シニア自然大学	40	魚から見た琵琶湖	講師	セミナー室	桑原
7	15	真野子供会 真野っ子土曜塾	65	化石レプリカづくり	講師	実習室	里口・青木

7	17	阪巻水道組合（奈良交通）	38	琵琶湖と河川	講師	セミナー室	武部
7	23	近江ふるさと会	40	博物館概要	講師	会議室	用田
7	26	南丹市教育委員会	58	施設見学・アユモドキについて	講師	会議室	前畑
7	26	湖南省教育研究所 湖南省教育研究所研修	6	琵琶湖博物館の舞台裏	講師	会議室	布谷
7	27	指導農業士研修	20	琵琶湖の濁水について	講師	会議室	小川
7	27	豊橋開拓土地改良区	35	プランクトン観察・講義	講師	実習室	芳賀
7	27	長良公民館	22	淡海生涯学習カレッジ 南湖で増加する水草と水質	講師	セミナー室	芳賀
7	29	JAF滋賀	40	琵琶湖とそのまわりの昆虫たち/ヨシ笛づくり	講師	実習室	八尋/ 青木
7	31	鳥学会員近畿地区懇談会	27	イスラエルの渡り鳥研究について	担当	セミナー室	亀田
8	2	三重県亀山市社会科部会	18	琵琶湖の漁業について	講師	会議室	孝橋
8	2	大津市教育委員会生涯学習課	77	4市子ども交流事業	講師	実習室	中村・ 青木
8	2	関西大学博物館	50	博物館実習	講師	ホール	布谷
8	2	大手前大学	25	博物館実習	講師	実習室	布谷
8	2	滋賀県小学校教育研究会 生活科部会研修会	50	博物館と学校との連携について	講師	実習室	中村・ 中野・ 西村
8	3	滋賀県中学校教育研究会 中学校理科部会 自然調査ゼミナール	50	プランクトンと付着微小生物の観察/魚の解剖/琵琶湖の貝を調べてみよう/博物館周辺で昆虫採集をしよう	指導	博物館実習室等	八尋・ 楠岡・ 前畑・ 松田・ 中村・ 中野
8	5	ホテルの学校	22	プランクトンと珪藻の観察	講師	会議室・実習室	大塚
8	9	滋賀県教育委員会 平成18年度環境教育研究協議会	280	博物館と学校との連携について	アドバイザー	博物館ホール等	中村・ 中野・ 西村
8	9	北方領土返還要求運動滋賀県民会議	7	博物館概要	講師	応接室	布谷
8	11	滋賀県環境学習支援センター 企画者のための環境学習体験講座	35	プランクトン観察・琵琶湖の概要	講師	博物館実習室等	中村・ 中野
8	11	葉山東学童保育所ひよこくらぶ	58	ヨシ笛	講師	実験工房	青木
8	17	近江八幡市コープ委員会	60	化石レプリカ	講師	実習室	中村
8	22	兵庫シルバーカレッジ	56	琵琶湖周辺の環境	講師	会議室	布谷
8	22	伊川を愛する会神戸 こども淡水魚教室	50	琵琶湖の魚について	講師	セミナー室	秋山
8	22	守山市教育委員会 理科部会研修	6	博物館と学校との連携について	講師	博物館実習室等	中村・ 中野
8	23	河浦町商工会	18	博物館概要	講師	会議室	用田
8	23	滋賀県立びわ湖フローティングスクール	100	あつまれ「湖の子」たち!	講師	セミナー室	芳賀

8	24	全国中学校理科OB会 全国 中学校理科教員OB会研修会	36	琵琶湖博物館と環境	講師	会議室	布谷
8	24	滋賀県総合教育センター SPP事業研修会	28	プランクトンの採集と 観察	講師	セミナー室・実 習室	芳賀・ 大塚
8	24	滋賀県総合教育センター 環 境科学講座	28	博物館と学校との連携 について 琵琶湖の概 要	講師	博物館実習室等	中村・ 中野
8	25	滋賀県教育委員会 理数大好 きモデルスクール研修会	63	博物館と学校との連携 について 化石レプリ カづくり	講師	博物館実習室等	中村・ 中野・ 前畑
8	25	北方領土返還要求運動滋賀県 民会議	125	博物館概要	講師	ホール	高橋
8	25	近江子ども未来会議	50	博物館概要	講師	セミナー室	牧野 (厚)
8	26	甲賀市岩上公民館	29	草花を使ったしおりの 製作	講師	実習室	青木
8	27	草津市生涯学習センター MyライフMyくさつ講座	44	博物館では何ができる	講師	セミナー室	布谷
8	27	おうみNPO政策ネットワー ク	20	湖と人間とのよりよい 共存関係	講師	セミナー室	布谷
8	28	滋賀県草津市老上小学 校 内研修	30	琵琶湖博物館での体験 学習	講師	博物館実習室等	中村
8	30	東北学院大学	111	博物館実習	講師	ホール	高橋
9	15	近畿大学水産学科	120	移入種について	講師	ホール	中井
9	15	近畿養護学校校長会	11	琵琶湖と環境	講師	応接室	布谷
9	20	桃山学院大学	18	博物館実習	講師	会議室	布谷
9	20	京都精華大学	120	琵琶湖博物館と環境	講師	セミナー室・ ホール	布谷
9	21	愛知県豊橋市教育委員会 社 会教育委員連絡協議会研修会	31	博物館と学校との連携 について	講師	セミナー室	中村・ 中野
9	23	辰馬考古資料館	15	博物館概要	講師	会議室	用田
9	27	大村湾の活動を推進する会	5	移入種について	講師	会議室	中井
9	28	総合教育センター 10年経験 者研修	10	博物館と学校との連携 について プランクト ン模型づくり	講師	セミナー室・実 習室	中村・ 中野
10	1	京都女子大学国文科	41	博物館実習	講師	セミナー室	里口
10	1	琵琶湖市民大学		琵琶湖の魚と生態系	講師	会議室	芳賀
10	6	南御蔵山子ども会	7	体験学習事前準備	講師	実習室	青木
10	9	MIHO MUSEUM 教育ボラ ンティア研修会	34	琵琶湖博物館を利用す る人	講師	会議室	布谷
10	14	芥川倶楽部(高槻市)	60	琵琶湖の現状と課題－ 魚から環境を考える	講師	セミナー室	前畑
10	14	おばたん「タネみつけ」	28	屋外展示で見られるタ ネ	ア ドバ イ ザー	生活実験工房	布谷
10	15	近畿養護学校校長会	125	琵琶湖と環境	講師	琵琶湖博物館 ホール	布谷
10	15	日本植物画倶楽部	37	滋賀県の絶滅危惧植物	講師	実習室	布谷
10	16	中部の環境を考える会	250	施設概要	講師	セミナー室	八尋

10	16	子どもネットワークセンター 天気村	35	食文化体験実習	講師	生活実験工房	中藤
10	24	滋賀県総合教育センター 10 年経験者研修	10	博物館と学校との連携 について プランクト ン模型づくり	講師	博物館実習室等	中村・ 中野
10	24	諫早湾地域振興調査特別委員 会	11	博物館の概要と水質研 究について	講師	応接室	芳賀
10	24	大阪市淀川区地域振興会	230	琵琶湖と淀川	講師	ホール	芳賀
10	25	淀川区地域振興会	189	琵琶湖博物館の概要と 水質研究について	講師	ホール	芳賀
10	27	全国教頭会近畿地区連絡協議 会 全国教頭会近畿地区連絡 協議会総会	98	琵琶湖と生物—琵琶湖 博物館が目指したもの	講師	ホール	布谷
10	28	ライトピア大山田子ども会	40	琵琶湖が生まれた頃の 大山田	講師	セミナー室	里口
10	29	南御蔵山子ども会	88	ヨシ笛	講師	実習室	青木
10	29	近畿大学	80	博物館実習	講師	ホール	松田
11	4	栗東三大字子ども会	26	プランクトン観察・化 石レプリカ	講師	実習室	青木
11	4	大阪府教職員互助組合	41	博物館概要	講師	ホール	中野
11	5	ボーイスカウト京都連盟桂川 地区長岡4団カブ隊	29	プランクトン観察・化 石レプリカ	講師	実習室	青木
11	7	吹田市亥の子谷コミュニ ティー協議会	20	博物館概要及び環境に ついて	講師	セミナー室	布谷
11	7	加古川下流域下水道促進組合	17	琵琶湖の水質について	講師	会議室	芳賀
11	7 ～ 10	草津市立新堂中学校 職場体 験	3	博物館の仕事について	受け 入れ 担当	実習室等	中村・ 中野・ 西村・ 高橋
11	9	静岡県都市環境保全行政研究 会	20		講師	会議室	前畑
11	18	自然とみどり	50	プランクトン観察	講師	実習室	中野
11	21	米原市中学校理科教育研究会 理科教員研修	5	台所の植物学	講師	会議室	布谷
11	23	滋賀県獣医師会野生動物講演 会	30	カワウを通して人と野 生動物の過去、現在、 未来を考える	講師	会議室	亀田
11	23	滋賀県レクリエーション協会	34	ヨシ笛	講師	セミナー室・実 習室	中村
11	25	琵琶湖成蹊スポーツ大学	23	博物館概要	講師	実習室	中村
11	25	草津ライオンズクラブ	98	ニゴロブナとフナズシ (全3回)	講師	セミナー室	前畑
11	25	大野イトヨの会	20	施設概要	講師	会議室	牧野 厚
11	25	草津市観光物産協会 ボラン ティアガイド養成講座	20	博物館の設立趣旨およ び主要な展示の説明	講師	会議室	牧野 厚
12	3	滋賀県教育委員会 滋賀県県 民環境学習のつどい			講師	セミナー室・ホ ール・会議 室・実習室	牧野 厚・ 青木
12	9	立命館大学経済学部国際経済 学科	226	博物館実習	講師	ホール	布谷
12	10	NPO推進室	10	博物館概要	講師	応接室	青木

12	16	ダイニツクアストロパーク天文館	28	ヨシ笛	講師	実習室	青木
1	13	滋賀県文化振興財団	46	ヨシ笛	講師	実習室	青木
1	20	NPO法人シニア自然大学	20	プランクトンの観察	講師	実習室	楠岡
1	23	草津第二小学校PTA	16	アユ鮒講義・バス料理	講師	実習室	秋山
2	7	日本コカコーラ社	5	視察	講師	展示室	中野
2	16	三重県厚生年金受給者協会 文化教養講座・歴史探訪教室	50	博物館の概要	講師	セミナー室	前畑
2	18	琵琶湖市民大学 連続講座		琵琶湖とともに歩む近江の暮らし	講師		芳賀
2	20	日本国際協力センター	47	博物館の概要	講師	セミナー室	前畑
2	23	NPO法人シニア自然大学 自然大学研修会	25	琵琶湖周辺の水利用	講師	会議室	布谷
2	24	天王寺民生委員協議会	40	博物館の概要	講師	セミナー室	山川
3	23	伊庭内湖の自然を守る会	25	内湖の生き立ちや役割・生息魚類	講師	会議室	桑原
3	25	小松市社会教育協会	45	研修	講師	実習室	前畑
3	28	高島屋エコ体験会	89	プランクトン観察・化石レプリカ	講師	実習室	青木
3	28	甲賀士老人福祉センター	36	プランクトン観察	講師	実習室	中村
3	29	滋賀県石材組合連合会青年部	72	滋賀県の岩石とその成り立ち	講師	実習室	中野・里口

(2) 地域活動の支援 (博物館外対応)

月	日	団体・行事名	参加者数	タイトル・内容	区分	場所	担当
4	~	こどもエコクラブ「伯母Q五郎」ふるさとの自然探検	100	草津市志津地域との連携活動	アドバイザー	草津市内の河川および琵琶湖	中村・中野
4	23	第21回セタジミ祭実行委員会 セタジミ祭	130	琵琶湖の水生生物	講師	瀬田川・沖島	松田
5	13	ホテルの学校	30	千丈川を歩いて発見(観察会)	講師	大津市	榎永
5	16	おおつ環境フォーラム	10	水生昆虫同定研修会	講師	草津市	榎永
5	22	中部近畿カワウ広域協議会第1回総会	82	カワウの生態	講師	滋賀県厚生会館別館	亀田
5	27		60	大戸川観察会	講師	大津市	榎永
6	4	子どもと自然学会 第6回全国研究大会(近江八幡大会)	80	内湖の水生生物	講師	八幡公民館大ホール	松田
6	11	社団法人栗東青年会議所		ひとづくりフェスタ2006	講師	コミュニティーセンター大宝東	青木
6	11	日本野鳥の会京都支部 支部総会	50	琵琶湖のカワウ	講師	仁和寺御室会館	亀田
6	11	志賀町こども週末活動支援ネットワークルン	60	さがしてみよう!わいのむしのたち(水生昆虫観察会)	講師	志賀町	榎永
6	11	自然観察指導員大阪連絡会	24	緑地公園見学会	講師	大阪服部緑地運動公園	布谷
6	18	朽木いきものふれあいの里		田んぼの生きもの~自然農法の田んぼで自然観察~	講師	高島市朽木生杉	楠岡

6	27	滋賀県高島市小学校教育研究会環境部会	20	琵琶湖の魚の生態	講師	マキノ東小学校	前畑
7	2	大阪自然環境保全協会 インストラクター養成講座	32	自然保護につながる自然観察	講師	牧岡公園（奈良市）	布谷
7	7	パワフル交流市民の会実行委員会	約100	パワフル交流市民の会	担当	草津市役所会議室	八尋・楠岡・青木
7	9	エコネット近畿 第2回近畿の環境団体情報交流会	70	シンポジウム「持続可能な近畿づくり」と市民	パネラー	大阪市立市民学習センター	牧野（厚）
7	9	伯母Q五郎 伯母川探検	8				布谷
7	18	追手門学院大学 おうてもん塾		琵琶湖のナレズシ・鮒鮓とニゴロブナから見る近江、アジアの食文化	講師	毎日カルチャーセンター	矢野
7	20	ホテルの学校	30	千丈川のいきものしらべ	講師	大津市	榊永
7	23	佐川美術館・琵琶湖博物館	32	SAGAWAKITZミュージアム2006 ペタペタ探検隊 はだしで歩くといつもと違う	担当	佐川美術館	びわたん・牧野（厚）
7	25	京都府南丹市教育委員会	50	アユモドキってどんな魚-分布と生態-	講師		前畑
7	25	追手門学院大学 おうてもん塾		パネルディスカッション・アジアを食らう	パネラー	毎日カルチャーセンター	矢野
7	28~29	こども昆虫キャンプ実行委員会 全国こども昆虫キャンプ特別講演会	120	昆虫と植物と恋愛-今森光彦・布谷知夫・増田スライドトーク/昆虫標本つくりとこれから	パネラー・講師	マキノ高原体育館	布谷
7	29	佐川美術館・琵琶湖博物館	40	SAGAWAKITZミュージアム2006 針穴写真を利用したワークショップ	担当	佐川美術館	秋山・温古写真・びわたん・牧野（厚）
7	30	佐川美術館・琵琶湖博物館	34	SAGAWAKITZミュージアム2006 プランクトンの模型をつくろう	担当	佐川美術館	楠岡・びわたん・牧野（厚）
7	30	守山市ほたるの森資料館	20	夏の昆虫	講師	ほたるの森資料館	八尋
8	2	コープ滋賀 野菜畑へ行こう	40	野菜畑の昆虫	講師	近江八幡市大中	八尋
8	3	草津市消費生活学習会		琵琶湖の固有魚について	講師		中島
8	3	長浜市水生生物少年少女調査隊指導者連絡会 「みずすまし」交流会	120	水生昆虫からわかる環境	講師	長浜市市民交流センター ふれあいホール	榊永
8	5	真野北公民館	40	雑木林の昆虫	講師	八幡神社（真野谷口）	八尋
8	5	ティエステイ	40	館の概要と環境学習について	講師		前畑

8	6	佐川美術館・琵琶湖博物館	22	SAGAWAキッズミュージアム2006 植物のかたちをみよう	担当	佐川美術館	布谷・びわたん・牧野(厚)
8	22	神戸市生涯学習科 神戸シルバーカレッジ生活環境コース	40	琵琶湖博物館と環境の課題	講師	神戸市	布谷
9	4	NPO法人シニア自然大学	67	淡水魚入門講座I	講師	大阪NPOプラザ	前畑
9	5	NPO法人シニア自然大学	61	淡水魚入門講座II	講師	大阪NPOプラザ	前畑
9	7	NPO法人シニア自然大学	58	淡水魚入門講座III	講師	大阪NPOプラザ	前畑
9	8	びわこ豊穰の郷	30	里中河川の水利用文化	講師	琵琶湖豊穰の郷事務所	牧野(厚)
9	9	ホテルの学校		川の中の生き物しらべ	講師	南郷水産センター	秋山
9	9	草津市環境課 草津市水環境クリーンウォーク		外来魚の調理	講師	湖岸公園	楠岡・孝橋
9	12	NPO法人シニア自然大学	60	淡水魚入門講座 野外実習I	講師	大戸川(大津市)	前畑
9	18	福寿土曜学校	40		講師	大津市西方寺	秋山
9	18	NPO法人シニア自然大学	58	淡水魚入門講座 野外実習II	講師	大戸川(大津市)	前畑
9	23 ~ 24	九州国立博物館		ボランティアメッセ2006 IN 九博	担当	九州国立博物館	フィールドレポーター・はしかけ・楠岡
9	26	NPO法人シニア自然大学	62	淡水魚入門講座 野外実習III	講師	大戸川(大津市)	前畑
10	7	手賀沼流域フォーラム実行委員会	150	第10回 手賀沼流域フォーラム-きっと逢える私達の夢見る手賀沼-	基調講演	千葉県手賀沼親水広場水の館	亀田
10	14	お魚ネットワークおおつ	20	大人の川遊びトレーニング	講師	ウォーターステーション琵琶	秋山
10	16	NPO子どもネットワーク天気村 こんぺいとうクラブ親子遠足		湖の幸・畑の幸	講師	草津市	中藤
10	21	コープ滋賀	60	自然観察シリーズ 第2弾 川探検	講師	大津市	柘永
10	29	針江生水郷委員会	20	おさかなさがしたーい	講師	針江公民館	秋山
11	2	草津市立まちづくりセンター運営委員会 まちセン いろは講座	40	ボランティアって何だろう	講師	草津市まちづくりセンター	布谷
11	10 ~ 12	日本自然保護協会 自然観察指導員講習会	70	自然の観察	講師	大阪府服部緑地ユースホステル	布谷
2	10	社団法人霞ヶ浦市民協会		在来魚復活にかける夢	基調講演	霞ヶ浦環境科学センター	松田

2	16	滋賀県総合教育センター 平成18年度理数大好きモデル地域事業研究協議会	70	理数大好きモデル地域事業最終年度へ向けて	アドバイザー	野洲市	中野
2	17	財団法人滋賀県文化振興事業団（しが文化芸術体験サポートセンター）他		平成18年度気軽にどこでもアート交流事業	担当	滋賀会館	青木
2	24	NPO法人 びわこ豊穰の郷 第4回 川づくりフォーラム	80	今なぜ里中川か？	基調講演	守山商工会議所	牧野（厚）
3	11	「川の連続性を考える」シンポジウム－琵琶湖・大阪湾のつながりを取り戻すための天ヶ瀬ダムの取り組み－	200	淀川ダム統合管理所	パネラー	宇治市文化センター小ホール	前畑
3	24	おおつ環境フォーラム	10	水生昆虫同定研修会	講師	草津市	榊永

(3) 博物館ガイダンス（視察対応を含む）

月	日	団体名	内容	場所	担当
4	2	岡設計	博物館の建築	展示室	布谷
4	8	追手門学院大学文学部アジア文化学科	概要説明	ホール	矢野
4	11	滋賀県副知事	概要説明・館内案内	展示室	布谷
4	11	監査委員	概要説明・館内案内	展示室	布谷
4	18	秋田県由利本荘市長一行	概要説明・館内案内	展示室	前畑
5	9	農林水産省農村振興局水利整備課	展示案内	展示室	小川
5	13	関西学院大学文学部地理学地域文化学教室	概要説明・館内案内	セミナー室	布谷
5	16	近畿弁護士連合会 公害・環境委員会	概要説明	展示室	秋山
5	17	環境省水・大気環境局長	概要説明・館内案内	展示室	布谷
5	19	近畿ブロック北方領土返還要求運動連絡協議会	展示概要	展示室	高橋
5	20	滋賀県人会東京支部	概要説明・館内案内	展示室	布谷
6	6	高知県企画振興部鳥獣対策室	カワウの被害対策についての情報提供	セミナー室	亀田
6	13	安土城考古博物館	概要説明	展示室	用田
6	18	明示学院大学（岡田純一氏）	概要説明・館内案内	展示室	布谷
6	29	愛知県大府市教育委員会	概要説明・館内案内	展示室	布谷
6	29	（仮）大阪府水道記念館	概要説明	展示室	秋山
7	3	福岡市立歴史博物館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
7	11	秋田県知事	概要説明・館内案内	展示室	布谷
7	27	滋賀県指導農業士会	展示案内	展示室	小川
8	11	神奈川県立生命の星地球博物館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
8	9	北方少年少女派遣事業	概要説明・館内案内	展示室	布谷
8	9	環境教育協議会	展示案内	展示室	松田
8	18	旭山市市会議員	概要説明・館内案内	展示室	布谷
8	19	平塚市美術館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
8	23	熊本県河浦町商工会	概要説明	展示室	用田
8	25	三重県建築家協会	概要説明・館内案内	展示室	布谷
8	25	根室北方領土協議会	展示概要	展示室	高橋
8	27	奈良女子大学博物館學受講学生	概要説明・館内案内	展示室	布谷

8	30	東北学院大学	博物館活動の説明	展示室	高橋
9	2	新潟県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）	概要説明・館内案内	展示室	布谷
9	10	日本科学未来館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
9	12	日本スクリーン	概要説明・館内案内	展示室	布谷
9	23	辰馬考古資料館	展示案内		用田
9	28	NHK谷田部解説委員・全国豊かなうみづくり大会準備室	概要説明・展示案内	展示室	孝橋
9	30	鳥取県立博物館館長	展示案内、博物館活動の説明	展示室	高橋
10	2	宮崎県総合博物館	ボランティア活用状況	応接室	牧野（厚）
10	5	滋賀県国際協会	展示案内	展示室	用田
10	7	北海道東北地域経済総合研究所	概要説明・館内案内	展示室	布谷
10	10	野洲市環境課	展示案内	展示室	秋山
10	15	自然環境研究センター	概要説明・館内案内	展示室	布谷
10	21	天王寺動物園園長	水族バックヤード案内	展示室	前畑
10	22	第4回国際窒化物バルケ国際シンポジウム	展示案内	展示室	楠岡
11	1	全国・近畿各府県市町村振興協会事務局長	概要説明・館内案内	会議室・展示室	前畑
11	7	釧路湿原国立公園連絡協議会	概要説明・館内案内	展示室	布谷
11	15	掛川市市議会議員団	概要説明・館内案内	展示室	布谷
11	24	鳥取県立博物館附属山陰海岸学習館	概要説明・館内案内	事務学芸室	前畑
12	8	水産庁増殖推進部漁場資源課	展示案内	展示室	小川
12	19	長崎大学環境科学部	概要説明・館内案内	展示室	布谷
12	20	北陸経済研究所	概要説明・館内案内	展示室	布谷
12	22	中国・日本湖沼地理研修視察団	概要説明	展示室	前畑
1	10	美濃加茂市民ミュージアム	教育普及活動について	実習室	中村・中野
1	10	みのかも文化の森	概要説明・館内案内	展示室	布谷
1	14	埼玉医科大学小児科医師および生涯学習課課長	教育普及活動について	実習室	中野
1	18	沖縄県南風原町立南風原文化センター	概要説明・館内案内	展示室	布谷
1	18	山口県立山口博物館	教育普及活動について	実習室	中村・中野
1	25	鹿児島水族館	概要説明	展示室	秋山
1	25	JR東日本パーソナルサービス	概要説明・館内案内	展示室	布谷
2	1	静岡県環境衛生科学研究所	教育普及活動について	実習室	中村・中野
2	2	ふくしま海洋科学館	教育普及活動について	実習室	中村・中野
2	8	千葉県立中央博物館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
2	11	大阪府下小中学校理科担当教員	概要説明	展示室	前畑
2	14	雨引山楽法寺	概要説明	展示室	前畑
2	15	広島県廿日市市市議会	博物館の活動方針など	展示室	桑原
2	15	米子市市会議員	概要説明・館内案内	展示室	布谷
2	15	富山市科学文化センター	「はしかけ制度」等の調査	事務学芸室	牧野（厚）
2	20	足立区立博物館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
2	28	愛媛県立総合科学館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
2		天王寺区民生委員協議会	概要説明	セミナー室	山川
3	1	ふくしま海洋科学館	教育普及活動について	実習室	中村・中野

3	6	兵庫県立人と自然の博物館	展示案内	展示室	西村
3	14	北海道別海町教育委員会	展示案内、博物館活動の説明	展示室	高橋
3	16	群馬県立自然史博物館	教育普及活動について	実習室	中村・中野
3	17	県産材を活用する家づくりグループ	講演と意見交換コーディネート	会議室	西村
3	22	福島県立博物館	概要説明・館内案内	展示室	布谷
3	25	小松市社会教育協会	概要説明	実習室	前畑

(4) 質問コーナー・フロアトーク

質問コーナーにおける質問内容

期 間	2005年4月1日～2006年3月30日				
総質問数	632件				
質問内容	一般的な質問（総合案内で回答できるようなもの）			232件	
	専門的な質問			400件	
対 応	担当学芸職員が対応			484件	
	専門学芸職員（または外部）に依頼			148件	
専門的な質問の内容の内訳					
生 物	動 物	魚類	170件	プランクトン	14件
		その他の水生動物	57件	動物一般	99件
	植 物	陸上植物			35件
		水生植物			19件
地 学		45件	図 書	24件	
物 理		1件	琵琶湖	42件	
歴 民		17件	環 境	11件	
博 物 館		19件	その他の質問	79件	

情報発信活動

琵琶湖博物館では、コンピュータ技術を活用し、情報拠点として機能できる基本情報システムの構築を進めてきた。しかし、コンピュータ技術の発展と普及に伴って電子情報が博物館活動の全体に広く関わりを持つ状況になり、電子情報関連の業務だけを独立した事業の一つとして取り扱う意義が薄れてきた。その一方で、コンピュータ技術と関わりの深い二次資料（図書映像資料）を整備する事業を、一次資料（いわゆる実物資料）の整備と別に取り扱うことの弊害が目立ってきた。

そこで、開館から2003年度まで一次資料のみを対象としていた資料整備事業において二次資料の整備も取扱うこととし、情報に関する担当部署（情報センター）では、コンピュータ技術に関わる他の事業、すなわち①電気通信を利用した「情報発信」に関わる事業と、②コンピュータ利用の基本となるインフラストラクチャの整備に関する事業のみを取扱うこととした。この結果、情報センターが組織として小規模になりすぎたため組織体制の見直しを2年間にわたって進めた結果、広報活動の一環という位置付けを重視して、旧情報センターの分掌を今年度より総務部企画調整課に移管することとした。

(1) 通信網を利用した館外への情報提供

来館者や遠隔地の利用者に対する電子的な情報提供手段については、開館以前から種々実践しながら検討を進めてきたが、2004年度までにwww（いわゆる「ホームページ」）を利用したシステムに一本化された。このシステムでは、インターネットを経由して博物館のページに接続することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を利用したり、博物館資料のデータベースや各種の学術情報を検索利用する

ことができる。

実際の運用は、データベースや電子交流システムなど利用者からの反応に応じて異なる情報を提供する「動的サーバ」と、それ以外の一般的な情報を提供する「静的サーバ」の2台で分担しており、アクセス状況に関する統計も独立に計上されている。2006年度における各サーバのアクセス件数は下表のとおりであった。

インターネットページ（静的サーバ）へのアクセス件数

	総ヒット数	ページヒット数	連続アクセス	表紙アクセス	表紙開始アクセス
4月	1,771,654	500,714	50,224	14,804	10,555
5月	2,439,542	681,799	65,257	16,343	11,364
6月	2,263,867	599,505	65,432	13,772	8,727
7月	2,774,184	745,014	74,923	18,098	10,377
8月	3,236,402	778,071	91,200	18,056	10,852
9月	2,059,358	527,578	62,561	14,462	8,907
10月	1,906,993	499,946	58,471	14,118	8,410
11月	1,829,664	496,858	62,936	12,079	7,174
12月	1,362,859	390,817	48,318	10,063	5,595
1月	1,684,724	451,788	53,063	12,213	7,099
2月	1,933,907	504,139	51,337	13,131	7,752
3月	1,682,136	461,383	50,299	13,010	6,155
合計	24,945,290	6,637,612	734,021	170,149	102,967

総ヒット数 : サーバに対する全ての種類のデータ要求の総数(但し、博物館内部からの要求は除外)各ページの定義ファイルはもちろん、ページを構成する画像ファイルの要求も含まれる
 ページヒット数 : 「総ヒット数」のうち、各ページの定義ファイルに対する要求の件数
 連続アクセス : 同一利用者が概ね1時間以内に再度アクセスしたと思われるものは合わせて1件と数えた場合のアクセス件数(博物館内部からのアクセスは除外)
 表紙アクセス : 「連続アクセス」のうち、ウェルカムページ(表紙ページ)を経由したアクセスの件数(「表紙から入った」と「表紙へ戻った」ものとの合計)
 表紙開始アクセス : 「表紙アクセス」のうち、最初にウェルカムページにアクセスした件数

※「エアリキャッシュ」を利用して利用者側の組織内で情報を再使用している場合は、合わせて1件しか計数されない。

インターネットページ（動的サーバ）へのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
セッション数	361	533	500	672	635	478	571	434	473	570	622	511	6,360
絞込検索回数	368	299	582	786	322	377	962	349	498	819	702	336	6,400
データ閲覧件数	6,120	3,817	5,396	7,265	5,573	3,396	8,769	4,931	4,140	6,252	14,788	3,319	73,766

セッション：サーバ側が絞込検索を実現するために認識している「同一ユーザによる連続した」アクセスの集合

※博物館内部からのアクセスは計数していない。

《インターネットページのコンテンツ充実》

当館のwwwページは、1996年12月25日に運用開始した後、1998年10月18日に全体を置き換える形の大規模な更新を実施し、さらに2002年5月28日には、コンテンツ(情報提供の目的となる本来の情報)は保持しながらリンク(目的の情報へ行き着くための誘導情報)の構造を大幅に見直す形の更新を行ってきた。また2005年度には「広報媒体」としての機能強化のため、大規模な更新作業を行った。

今年度は上記の「大規模更新」をより充実したものにするために、「研究部」の学芸職員のページを作成したり、より見やすいページの充実を行った。

《英語版インターネットページの大規模更新》

前年度、インターネットページの大規模更新を実施したが、その際、英語ページが取り残された形に

なっていた。そこで、今年度は英語ページで発信すべき情報の再整理を行い、それに基づいて英語ページ全体のレイアウトデザインも改める大規模更新を行った。内容的には、琵琶湖に関する基本情報の概論や、常設展示についての解説文章（従来は展示項目リストのみ）などが、新たに追加された主な内容である。また、研究発信の一環として日本語ページの学芸職員紹介情報を充実させた成果も反映させた。

英語ページについては、以前から情報更新の滞りが慢性化しているという問題があった。今回の大規模更新では、内容を一気に更新することにより、この問題を当面解消することも、副次的な目的として位置付けた。英語ページについても継続的な更新を行える態勢を整えることが、今後の課題として残されている。

(2) 通信網を利用した双方向の情報交換サービス

博物館側からの一方的な情報発信だけでなく、来館者や遠隔地の人からの情報を受ける活動も含めた双方向の情報交換を実現するため、2つのサービスを行っている。

1) 電子メールによる質問などの受付サービス (query@lbm.go.jp)

インターネットを介した電子メールによって、質問、感想、要望などを受け付け、担当者が内容に応じた専門の学芸職員に割り振って回答するサービスを行っている。2006年度は全部で189件のメールがあり、その内容は以下のようなものであった。画像使用の許可依頼は専用メールアドレス (photo@lbm.go.jp) を設けたため減少している。

内 容	件 数
専門的内容を含む質問	118
施設利用・行事などの問い合わせ	19
情報掲載依頼 (リンク許可・サイト登録を含む)	12
資料の提供・利用、収蔵資料についての問い合わせ	15
館の運営についての意見	6
館の運営についての問い合わせ	5
職員採用についての問い合わせ	4
館の案内資料の請求	4
その他	6
合 計	189

スパムメール、ウィルスメール、一方的な情報提供までは計上していない。
回答に回答しての追加質問など、継続したやりとりは、合わせて1件とした。

2) 電子交流システム (LBMNET)

各家庭のパソコンを博物館のシステムに接続することにより、身のまわりのできごとに関する報告や質問を書き込んだり、他の参加者の質問などに対応して議論したりすることができるシステムである。当初は旧来型のパソコン通信で接続するシステムとして運用開始し、1999年にインターネットを経由して接続することもできるように改良した。現在はこちらが入口になっている。

(3) 印刷物

品名	サイズ	ページ数	発行部数
琵琶湖博物館研究部10年の歩み	A4	175	2,500
企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年	A4	59	2,500
資料目録15号	A4	207	700
資料目録16号	A4	207	700
年報10号	A4	134	800
うみんど39号	A4	8	30,000
うみんど40号	A4	8	30,000
うみんど41号	A4	8	25,000
うみんど42号	A4	8	30,000
うみっこ20号	A4	4	45,000
うみっこ21号	A4	4	45,000
もよおしもの案内(2006年度 秋冬編)	A4		42,000
もよおしもの暦(2006年度 秋冬編)	A2		1,400
もよおしもの案内(2007年度 春夏編)	A4		47,000
もよおしもの暦(2007年度 春夏編)	A2		1,500
企画展示「湖辺～東アジアの中の琵琶湖～」展示解説書	A4	80	1,600
企画展示「湖辺～東アジアの中の琵琶湖～」ポスター	A2		2,000
企画展示「湖辺～東アジアの中の琵琶湖～」ポスター	B1		100
企画展示「湖辺～東アジアの中の琵琶湖～」チラシ	A4		25,000
企画展示「湖辺～東アジアの中の琵琶湖～」JR駅用チラシ	A4		15,000
水族企画展示「水辺の生き物」リーフレット	A4	8	35,000
ギャラリー展示「つかんだ、つんだ、いつもいた」チラシ	A4		20,000
ギャラリー展示「つかんだ、つんだ、いつもいた」ポスター	A1		600
ギャラリー展示「つかんだ、つんだ、いつもいた」JR駅用チラシ	A4		13,000
水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・？」チラシ	A4		20,000
水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・？」ポスター	A1		600
ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」チラシ	A4		20,000
ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」ポスター	A2		1,050
ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」JR駅用チラシ	A4		15,000
ギャラリー展示鉱物・化石展「続・湖国の大地に夢を掘る」チラシ	A4		22,000
ギャラリー展示鉱物・化石展「続・湖国の大地に夢を掘る」ポスター	A2		1,450
ギャラリー展示鉱物・化石展「続・湖国の大地に夢を掘る」JR駅用チラシ	A4		13,000
「琵琶湖博物館で夏休みを10倍楽しもう」チラシ	A4		160,000
企画展シンポジウムチラシ	A4		8,500
研究発表会チラシ	A4		4,000
10周年のつどいチラシ	A4		16,000
博物館講座チラシ	A4		7,000
夏休み「自由研究講座」チラシ	A4		6,500
サポートシート	A4	4種	14,000
広報用「琵琶湖&川の魚」カレンダーポスター	A1		6,000
広報用「琵琶湖&川の魚」チラシ	A4		160,000
広報用「カード型リーフレット」			100,000
要覧(英語版)	A4	35	400
琵琶湖博物館子ども用リーフレット			100,000

Ⅱ 環境の整備

1 拠点としての施設整備

(1) 利用者用施設の整備

来館者とりわけ年少児童等の安全の確保のため屋上広場のスリットに転落防止柵を設置し、A展示室入り口近くの階段吹き抜け部分に転落防止パネルとネットを設置した。

また、関係者駐車場の損傷が激しかったインターロッキングブロックを撤去し、透水性舗装を施した障害者用駐車場として6台分の区画を整備した。

(2) 情報システムの整備

2006年度は以下のような更新、追加整備等を行った。

1) 機器の更新

開館後10年を経過し、損傷するなど老朽化が進行している機器を主にリースによって更新した。

今年度新規導入した主な機器は、以下のとおりである。また、旧機種等については適正に廃棄した。

ノート型パソコン（Windows：日立社製Flola330 WDG9）10台

デスクトップ型パソコン（Macintosh：Macintosh社製PowerMac G5）1台

デスクトップ型パソコン（Windows：Dell社製Optiplex）1台

カラージェルジェットプリンター（リコー社製Ipsio G717）1台

2) ソフトウェアの追加開発

琵琶湖博物館の収藏品データベースは、主に博物館が収蔵する資料の管理を目的として構築運用され、現在までに約40万件のデータが入力され、そのうち、約30万件が公開されている。1999年度以降、このデータベースに蓄積された資料情報を一般利用者にも公開して活用してもらうため、準備が完了した分野から順次公開に向けたシステム改良を進めている。本年度は、開館後蓄積してきた質問・回答データを有効利用するため、「質問回答」データベースの開発を行い、次年度の部分公開を行う計画にしている。

3) セキュリティ強化のための措置

情報システムのセキュリティを確保するため、ファイヤーウォール装置やウイルス対策システムについて、メーカーとの契約に基づいて提供される改良版ソフトウェアを順次導入し、最新の情勢に応じたバージョンアップを継続的に行った。

(3) 来館者アンケート調査結果

1) 目的

博物館利用者のニーズや満足度を的確に把握しながら、今後の博物館運営や展示の企画、広報活動のあり方をなどを考え、利用しやすい博物館づくりを進めるため、来館者アンケートを毎年3回～4回実施している。

2) 実施時期

アンケートの実施は、原則として平日と休日を含んで連続する3日間とし、来館者への券売時に毎日1,000枚を手渡ししてアンケート協力をお願いをしている。また、別途、アンケート記入台をアトリウムに2箇所、玄関横に1箇所、計3箇所設置してアンケート用紙類を置いている。

2006年度は、夏休み期間中の2006年8月26日（金）～8月28日（日）、秋の行楽シーズンの11月10日（金）～12日（日）、さらに春休み中2007年3月23日（金）～25日（日）の計3回にわたりアンケート調査を実施した。

なお、2006年度はアンケートの回答数を増やす目的で、出口に付近にアンケート調査への協力をお願いする案内板を設置した。このためか、アンケートの回答数は平成17年度に比べ1割ほどアップした。

第1回	2006年8月26日（金）～28日（日）	回答者数378人
第2回	2006年11月10日（金）～12日（日）	回答者数266人
第3回	2007年3月23日（金）～25日（日）	回答者数290人

3) 項目

来館回数、博物館を何で知ったか、滞在時間、満足度などについて尋ねた上で、意見や不満な点などがあれば具体的に記入していただいた。また、記入者自身については、およその年齢、性別、住居地域を教えていただいた。

第1回～2回目のアンケート調査では、同伴者についてお尋ねする項目を設けたが、3回目のアンケート調査では、それに代わり来館された主な目的をお尋ねした。これは、来館目的から来館者ニーズを分析し、今後の博物館運営の参考とすることを目的としたものである。

4) 傾向

毎回のアンケート調査結果はほぼ同じ傾向を示し、きわめて安定したデータであることは2006年度についてもいえる。

①リピーター

「初めての来館」者は、2005年度には45%ほどであったが、今年度は48%前後と少しではあるが増加している。逆にリピーターは減少し、2005年度には4回目以上の方は30.5%であったが、今年度は約26%となった。リピーターが数値上減少している理由に、新規来館者数の増加したことが考えられる。新規来館者が増えたことにより、全体の来館者が増えた傾向がアンケート調査から見てとることができる。当館はリピーター率の高い施設であることから、新規来館者の増加は新たなリピーターにつながる可能性があることからたいへん望ましいことであり、今後もリピーター率の高い施設であり続けるための充実した博物館活動を続けなければならない。

②口コミ

来館のきっかけとなった情報源は、友人・知人、家族・親戚といういわゆる口コミによるということが依然として多いが、インターネットの情報サイトをご覧になって来館される方もわずかではあるが増加している。しかし反面、県・市町村の広報の割合が下がってきていることから、県・市町村への積極的な情報提供を実施する必要がある。

③満足度

博物館を訪ねてみて、「非常に満足した」と「満足した」をあわせると80%以上を占め、2005年度に引き続き高い割合であった。これは、新規の来館者にとって、常設展示、ギャラリー展示、水族企画展示が好評であったことが要因であると考えられる。なお、「琵琶湖博物館中長期基本計画」第二段階の「年3回平均目標値80%」を達成することが第二段階の途中で実現できたことになり、今後もさらにこの数字を維持、上方修正できるように努力したい。

この他、もう一度来てみたいという来館者は70%を越えているほか、観察会や体験学習に参加したいという希望者も13～15%近くあることから、単に数字ではなくこうした行事への参加者の満足度も評価していく必要がある。

④不満な点

来館された方の不満な点は、今年度もレストラン、交通の便、駐車場、昼食場所などに多くみられるが、レストランについては年々その数字が下がってきており、今後も改善する努力を続ける必要がある。また、駐車場への誘導サインは、その改善を進めているところであり、一日でも早い改善に努力しなければならない。

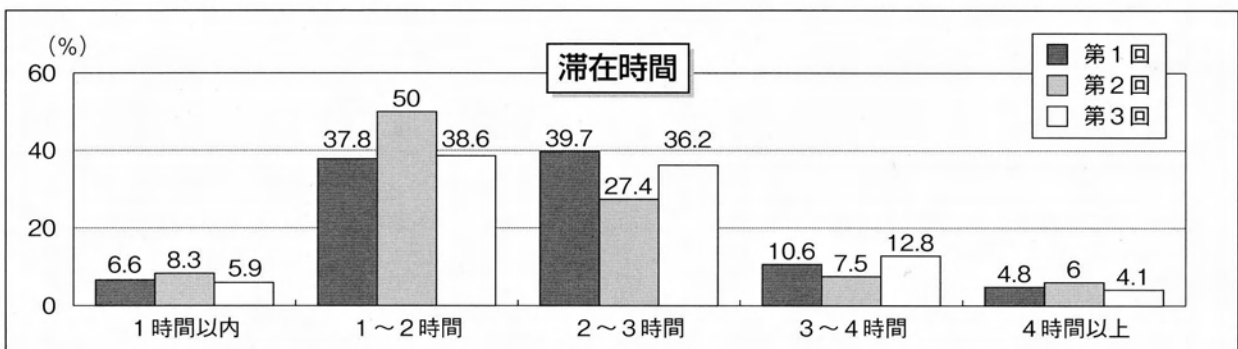
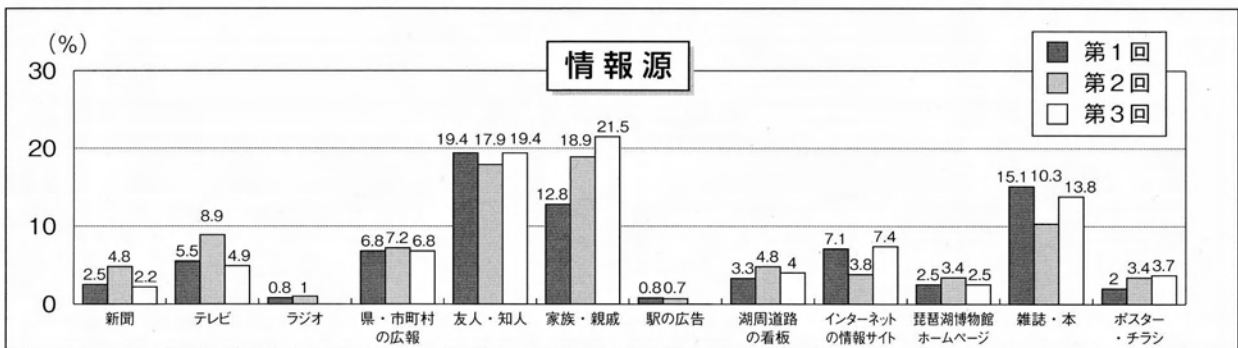
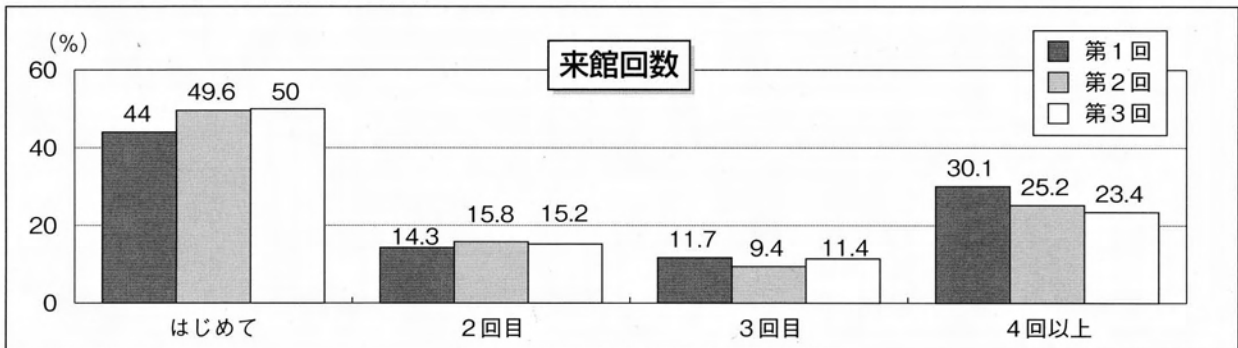
これら来館者の意見については、毎回のアンケート調査後、琵琶湖博物館としての対応や考え方を公表しているところであり、関係者への周知も行うなど一層の内部努力も求めているところであるが、根本的な解決に至らない事項も依然として多いことも事実であるが、できる限りの努力は続けていきたい。

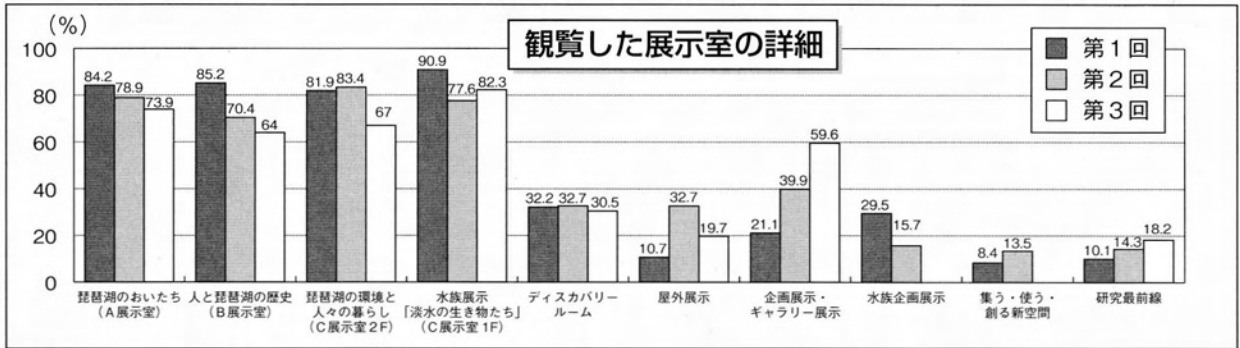
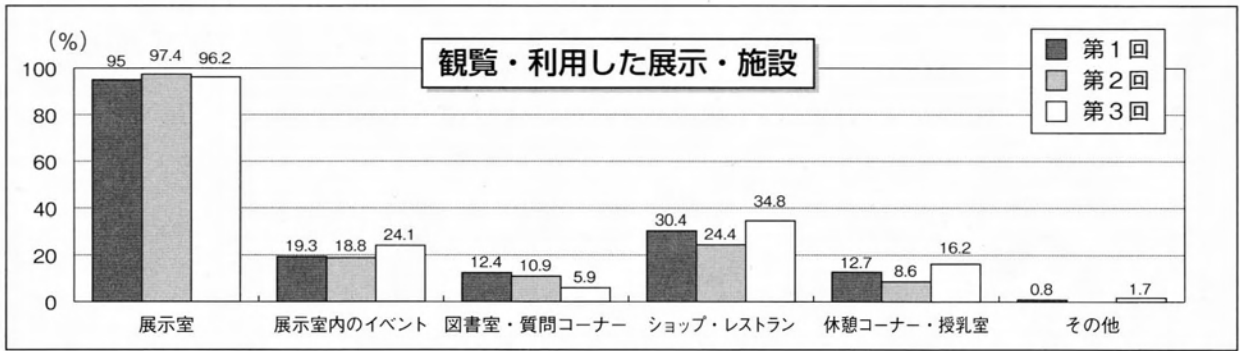
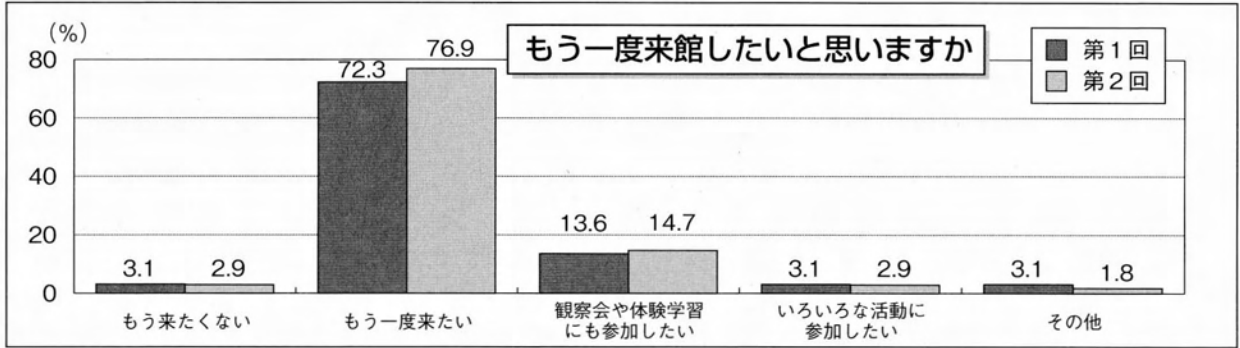
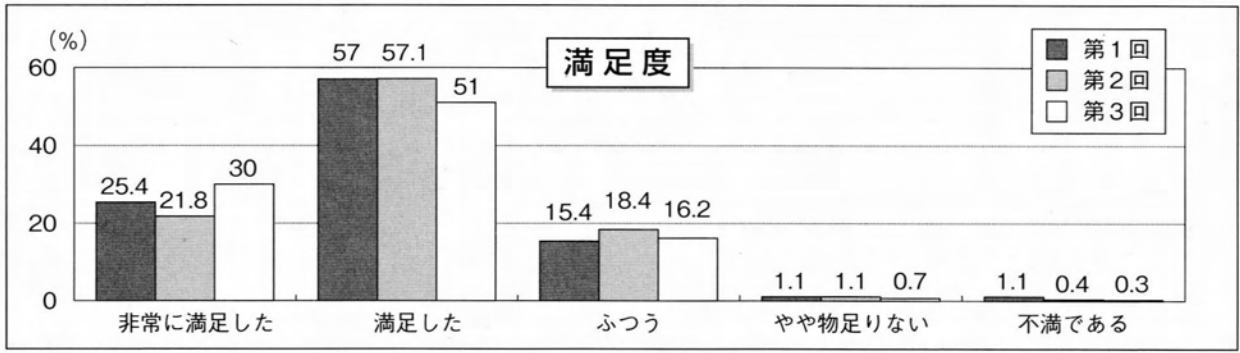
⑤来館者

年代別で見た場合30歳代、40歳代の方が来館者の中心であることは、これまでと大きな変化がなかった。これは、アンケートの実施日が休日を中心としたものであることに関係することもあるが、第3回目のアンケート調査からも、小さな子どものいる家族や友人同士に利用しやすい施設として受け入れられていると考えられる。

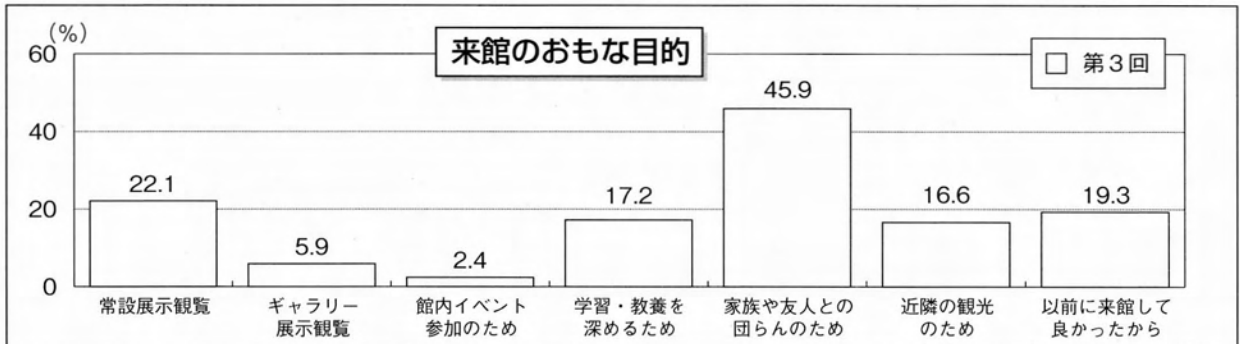
来館者の居住地では、滋賀県の方が2005年度は39%前後であったが、2006年度は33%前後に下がっている。その反面、京都・大阪からの来館者が増える傾向となった。これは琵琶湖博物館広報・経営戦略の基本計画に従い、2004年度から京阪神地域に重点をおいて広報活動を実施したことの効果があらわれている可能性もあり、今後も継続的に広報を行いたい。

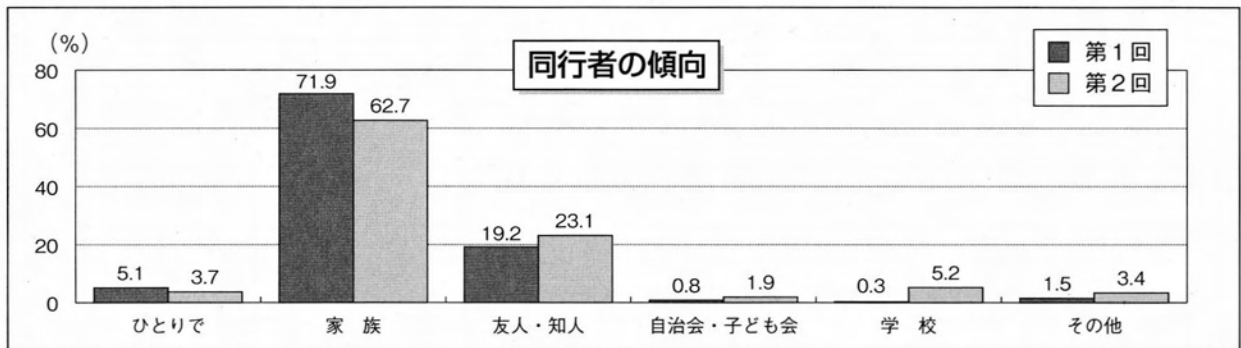
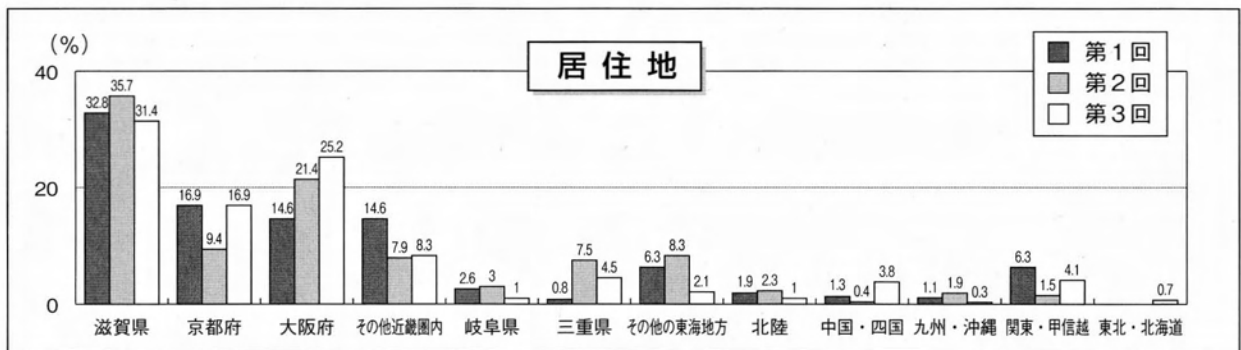
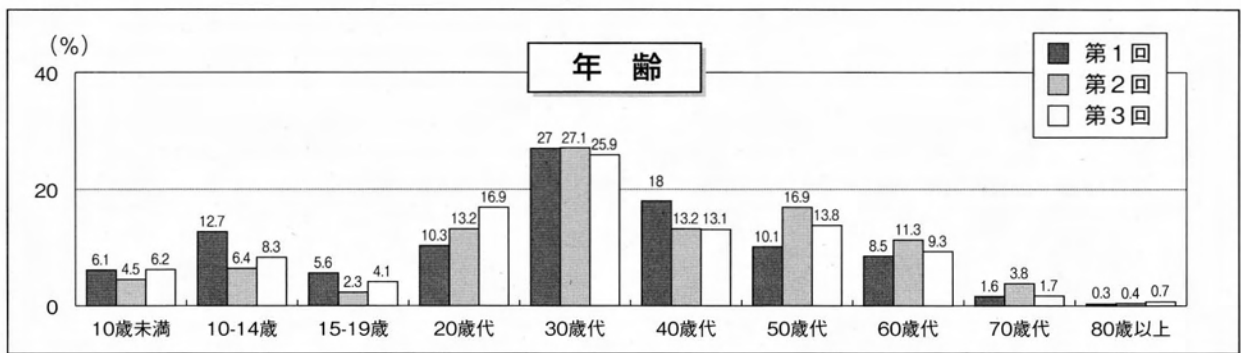
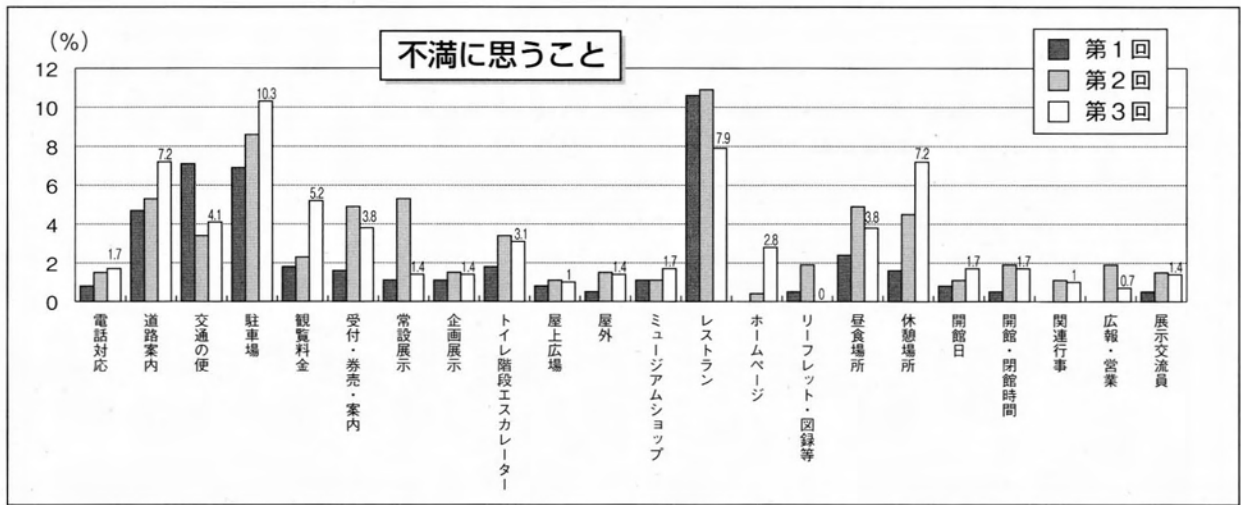
(特に断りのない限り、アンケート回答総数に対する各々の回答数の割合を率で示したもの)





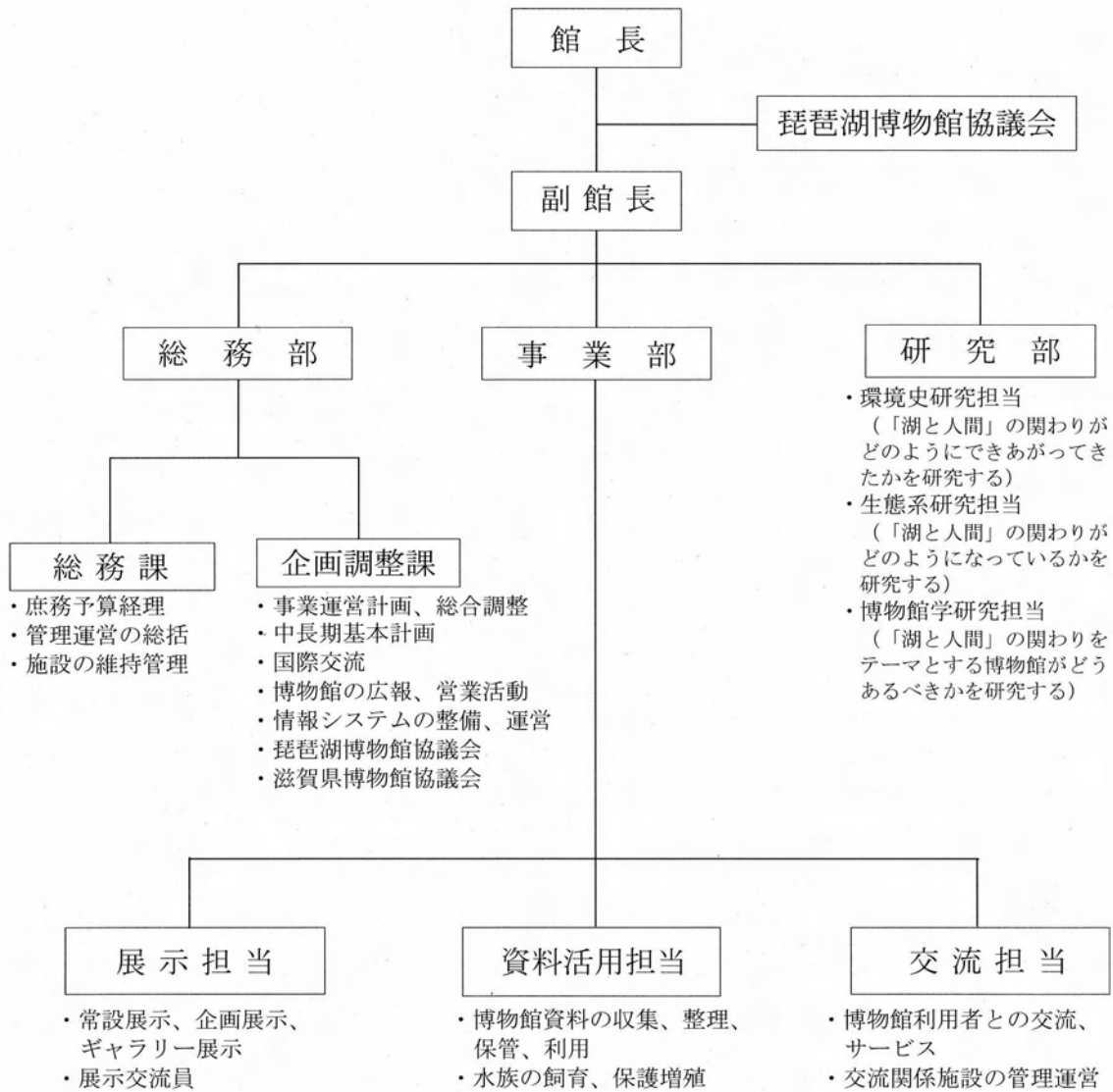
(「常設展示を観覧した」と回答した数に対する各展示室の観覧割合)





2 柔軟な運営組織

(1) 組織



職員構成 (2006年4月1日現在)

区分	館長 (非常勤)	行政職	研究職	教育職	小計	嘱託等	合計
人数 (名)	1	12	28	2	43	14	57

(2) 職員 (2006年4月1日現在)

- 館長 川那部 浩哉
- 副館長 寺田 治雄
- 上席総括学芸員 布谷 知夫
- 上席総括学芸員 中島 経夫

総務部

- 部長 寺田 治雄
- ◇総務課
- 課長 白井 莊一郎
- 主幹 南堀 貞雄
- 副主幹 中島 知子
- 主査 田中 順子
- 主任主事 西田 千恵子
- 主事 井上 裕士

- ◇企画調整課
- 課長(兼) 松田 征也
- 課長補佐 杉野 和彦
- (兼) 孝橋 賢一
- (兼) 戸田 孝
- (兼) 里口 保文
- (兼) 宮本 真二
- (兼) 中藤 容子
- (兼) ロビン・ジェームス・スミス

事業部

- 部長(兼) 用田 政晴
- ◇展示担当
- G. L. (兼) 牧野 久実
- (兼) マーク・ジョセフ・グライガー
- (兼) 武部 強
- (兼) 草加 伸吾
- (兼) 芳賀 裕樹
- (兼) 芦谷美奈子
- (兼) 榎永 一宏

- ◇交流担当(交流センター)
- G. L. (兼) 八尋 克郎
- (兼) 前畑 政善
- 主査(併任) 中村 公一
- 主査(併任) 中野 正俊
- (兼) 小川 雅広
- (兼) 西村 知記
- (兼) 楠岡 泰
- (兼) 中井 克樹
- (兼) 牧野 厚史

- ◇資料活用担当
- G. L. (兼) 桑原 雅之
- (兼) 秋山 廣光
- (兼) 亀田佳代子
- (兼) 山川千代美
- (兼) 矢野 晋吾
- (兼) 橋本 道範
- (兼) 大塚 泰介

研究部

- 部長(兼) 高橋 啓一
- ◇環境史研究担当
- G. L. 総括学芸員 高橋 啓一
- S. G. L. 主任学芸員 里口 保文
- 専門学芸員 牧野 久実
- 主任学芸員 山川千代美
- 同 橋本 道範
- 学芸員 宮本 真二
- 同 榎永 一宏

- ◇生態系研担当
- G. L. 総括学芸員 前畑 政善
- S. G. L. 専門学芸員 亀田佳代子
- 専門員(兼) 小川 雅広
- 専門学芸員 松田 征也
- 同 桑原 雅之
- 主任主査(兼) 武部 強
- 主査(兼) 西村 知記
- 主査 孝橋 賢一
- 主任学芸員 草加 伸吾
- 同 楠岡 泰
- 同 中井 克樹
- 同 牧野 厚史
- 同 芳賀 裕樹
- 同 矢野 晋吾
- 同 大塚 泰介
- 学芸技師 ロビン・ジェームス・スミス

- ◇博物館学研究担当
- G. L. 総括学芸員 マーク・ジョセフ・グライガー
- S. G. L. 主任学芸員 戸田 孝
- 総括学芸員 用田 政晴
- 専門学芸員 秋山 廣光
- 同 八尋 克郎
- 主任学芸員 芦谷美奈子
- 学芸員 中藤 容子
- (兼) 中村 公一
- (兼) 中野 正俊

注) G.L. はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

臨時的任用職員・嘱託員

小菅由有子	館長秘書	辻川 智代	歴史民俗資料整理
野口美智子	同	太田 佳恵	同
川崎 睦男	広報担当アドバイザー	杉江鉄之介	実習補助・団体利用受付
堀田 桃子	ディスカバリールーム運営	北川 峰男	屋外展示運営
荒井 文子	同	青木 伸子	交流事業
木田 幹夫	展示物の製作・維持補修	中西美智子	図書情報利用室運営・
小泉 誠	地学標本整理		図書資料整理（H18.5まで）
大川 聡	微小生物標本整理（H18.10まで）	藤森 麻子	同（H18.5～）
中園 健治	同（H18.11～）		

県職員以外の職員等およびフィールドレポーター・はしかけ登録者

◇特別研究員

藤田裕子、野嶋宏二、水野敏明、堀田桃子、北村美香

◇総務事務補助

菊地さとみ、下村美香子

◇研究補助

打越崇子、大橋正敏、大島輝美、奥田学美、甲斐朋子、北川直子、北村明子、白井幸子、鈴木規慈、瀬川也寸子、田尾稲子、高田千都子、高橋和征、谷川真紀、坪井美智子、中村和代、中村優介、中山法子、平野文子、細川真理子、村田美徳、室田潔枝、八尋由佳、山中裕子、山本亜紀、国分政子、柴田陽一、高田裕子、立石文代、中西美智子、肥山陽子、若狭喜弘

◇図書資料整理・図書情報利用室運営

後藤嘉治子、野口比佐江

◇情報システム管理・管理補助

佐本 泉、津田厚弘、天野好美

◇資料整理保存維持管理業務員

石田未基、上原千春、太田 学、黒田耕平、佐々木 剛、辻 美穂、出口武洋、西川佳子、町田英則、山本真彩子

◇水族飼育員

右川洋一、大西 拓、岡田 隆、岡田勇馬、岡本博仁、佐藤智之、柴山弘史、関 慎太郎、武富鷹矢、豊田幸詞、西村博之、原口哲史、布施幸江、藤井泰正、丸尾有美、御薬袋 聡、山田康幸、吉川真一郎、吉田史子

◇展示交流員

三宅磯司、谷 貴美代、愛須美由起、芦田弘美、荒井紀子、池畑慎吾、石川寛子、井出範子、犬塚きく美、

今泉美保、岩見 勉、奥村恵子、折中康子、鴨田真依子、北川喜美榮、北田昌子、近藤摩子、斉藤文子、澤井秀之、杉本和子、中村とく子、浪江伊都子、西山順子、橋本富栄、初田幸穂、林 克子、本田幸子、前川桂子、村田洋子、森 智美、弓削宣子、吉岡 令、今泉圭恵、大林博子、大山綾子、大山智子、金盛美和、北村美香、木村 永、木村美枝、坂井純子、清水聡子、諸富光子、千葉いづみ、山本真理、齋藤滋子、矢野典子、土井博子、中江美知子、西尾文里、福井明美、森永紗江子、柳原徳子、吉田治美、

◇常設展示補修

緒方久美、松浦一広

◇企画展示・ギャラリー展示運営

貝増千賀子、坂本 卓、白井弘子、中井大介

◇警備員

中村善夫、大原 進、近藤功一、永田哲彦、南条 博、野口幸二、山本 勝

◇清掃員

滝 勇男、勝島道子、北川智子、滝 千晶、中井寿美子、野田 勝、堀井加代、平井千代子

◇設備管理員

甲斐幸夫、北川 宏、北村康彦、黒川 勲、近藤武夫、酒井芳樹、瀬川 満、竹内和雄、中川 清、廣瀬正尚、伏見庄司、松原 茂、吉井利典、吉浦 修

◇屋外清掃

片岡輝子、片山玉枝、黒川よし江、高田明美

◇駐車場

市川三十二、栗栖康和、黒田晃次、園田与一、辻元次雄、土野池周平

◇ミュージアムレストラン

平井芳章、飯田昌子、入江美雪、岩崎由美子、大槻洋子、岡田真弓美、奥野礼子、奥村法子、北川真悠、高坂真理子、駒井知代、杉田結香里、杉本尚美、原口澄子、堀川勝義、松木美代子、源吉千恵、山田美幸

◇ミュージアムショップ

森 薫、宇野 薫、神田輝子、中山陽子

◇フィールドレポーター

青井陽子、有田重彦、井門静夫、井上弘司、井野勝行、伊吹達郎、岩根健治、江尻清子、大石法子、大石雅也、大橋義孝、岡崎直純、奥村 勤、奥村恵子、小倉市子、小利池享良、片岡庄一、勝見政之、門脇きみ子、梶島昭紘、梶島奈美子、北川幸雄、北川尚弘、京 美季男、久保穂子、口分田政博、小林隆夫、小林光子、小原寿子、阪口 進、澤島 篤、杉江ミサ子、梶本さつき、高瀬喜久男、高田正一、高田節子、武田 繁、谷元峰男、田村健太郎、津田國史、土田正文、寺村知子、中川徳司、中後佐知子、中西 健、西野 薫、東野重信、平井政一、古谷善彦、堀野善博、前田雅子、松野久美子、水戸涼乃、水戸基博、水戸涼介、村上靖昭、森 小夜子、森 擴之、安井加奈恵、矢原 功、山崎千晶、渡辺克彦、渡辺秀美、渡邊康子

◇はしかけ

青山喜博、秋山茂也、朝隈洋子、穴蔵雅彦、飯田俊宏、石井千津、石井利和、石川雅量、石塚一樹、石橋英洋、板倉孝史、一木 彰、今井 洋、上田 収、上田修三、上原由喜美、浮田日出男、遠藤吉三、遠藤真樹、大石麻美子、大崎淳子、大住光男、大谷敏子、大富信一、大野貞雄、大橋 洋、岡田文夫、岡田有矢、奥西幸司、甲斐朋子、片岡庄一、片山慈敏、香月利明、桂 雅之、金山雅幸、金山美佐子、梶島奈美子、鴨田真依子、川瀬成吾、川南 仁、岸本順次、北側忠次、北村美香、木下多津江、木下裕也、木原靖郎、木村恵子、木村 登、木村美枝、倉田忠彦、倉田英恵、黒川 薫、桑垣 瑞、國分政子、後藤真吾、後藤真至、小林蒼馬、小林隆夫、小原寿子、齋藤真琴、齋藤真由美、酒井啓子、笹井まち子、佐々木信幸、佐々木則子、佐々木満保、佐々木幹朗、笹生正則、佐藤亜紀、佐藤智之、佐藤秀夫、佐藤義信、佐橋保司、澤田知之、柴田利彦、嶋村のぞみ、清水聡子、新玉拓也、菅原和博、杉本昌隆、杉山晃規、鈴木道弘、鈴木みつ子、鈴木陽子、角田典久、瀬尾好英、瀬川也寸子、高田正一、高田昌彦、高野裕樹、高山博好、竹内正吾、武田 繁、武田広志、竹谷満弘、多胡好武、田中俊雄、田中治男、田中雅也、田邊 穰、谷口貴也、谷口雅之、谷口 實、玉藤典一、田村雅裕、田村隆一、田室圭一、辻 勝彦、辻 喜久子、辻 美穂、辻川智代、津田國史、手良村知功、手良村知央、所 邦彦、苗村かほる、苗村滋治、中島美智代、中園健治、中田智佳子、中西寛子、永野麻也子、長濱 脩、中村聡一、中山法子、西川 周、西川美喜、西林晴美、西村義隆、西脇実代、額田春枝、沼田 晋、野村昭夫、芳賀彦一、橋田卓也、橋本昭也、服部隆義、原島和雄、原田和紀、原田剛史、原田朋紀、原田優美、日影一正、日田琥珀、日田みか、人見和代、人見幸恵、人見竜樹、肥山陽子、平尾 武、廣瀬範香、広谷ちひろ、福田尚人、藤井晴美、藤井泰正、藤井優香、藤野あぐり、藤野未音、藤野美由紀、布施幸江、古谷善彦、別所かおる、別所宏二、星野英史、星野賢史、堀 英輔、本田英樹、前川英喜、前田博美、前田雅子、松田道一、松川郁子、松原孝治、松原正子、松本 勉、水戸涼乃、水戸基博、水戸涼介、南井直之、南川純一郎、南川翔哉、三村鎮雄、宮本哲覚、宮本直興、村上五十三、村上靖昭、村田博之、室田潔枝、森永紗江子、森村一貴、森村真由美、森村康彦、安井加奈恵、柳原徳子、矢原 功、山崎千晶、山田徳恵、山中裕子、山本 篤、行本宏子、横田彰子、吉井 隆、吉野彰一、吉野千栄子、吉本直之、米田秀之、若狭喜弘、和田昭宏、和田清恵、和田至博、渡邊一郎、渡邊佐和子、渡辺菜美子、渡邊康子

3 社会的支援と新しい経営

(1) 利用状況 (2006年度入館者数)

1) 総入館者数

期間：2006年（平成18年）4月1日～2007年（平成19年）3月31日

合計：476,563 人 開館日数：308日

一日平均：1,547 人

月平均：39,714 人

入館者区分別内訳

単位：人

区 分	個 人(人)	団 体(人)	合 計(人)	構成比(%)
未 就 学 児	59,728	5,215	64,943	13.6
小学生・中学生	42,018	72,373	114,391	24.0
高校生・大学生	6,496	9,167	15,663	3.3
一 般	210,466	71,100	281,566	59.1
合 計	318,708	157,855	476,563	100.0

年 月	開 館 日 数 (日)	有 料 入 館 (人)				無 料 入 館 (人)								総 計 (人)	1日当 り平均 (人)
		一 般	高 大 学 生	小 中 学 生	有 料 計	65歳以上	障 害 者	家 庭 の 日	体 験 学 習	こ だ も の 日	学 校 行 事	そ の 他	無 料 計		
2006・4	26	16,132	2,693	8,126	26,951	498	769	450	34		144	6,064	7,959	34,910	1,343
5	27	27,131	2,187	19,440	48,758	833	1,420	1,121	73	624	621	8,330	13,022	61,780	2,288
6	26	17,317	653	8,382	26,352	624	792	1,500	135		1,748	4,982	9,781	36,133	1,390
7	28	30,136	910	7,943	38,989	772	1,764	1,309	226		1,057	8,861	13,989	52,978	1,892
8	30	39,646	2,348	14,374	56,368	1,075	1,759	976	126		588	11,657	16,181	72,549	2,418
9	22	19,037	1,569	4,435	25,041	396	1,481	1,620	65		1,595	5,960	11,117	36,158	1,644
10	26	20,034	1,246	14,646	35,926	791	1,423	740	44		6,839	6,500	16,337	52,263	2,010
11	26	17,484	1,027	6,709	25,220	480	1,040	925	103		1,773	7,977	12,298	37,518	1,443
12	21	6,836	579	2,028	9,443	107	417	452	46		238	3,644	4,904	14,347	683
2007・1	25	11,253	338	2,484	14,075	380	556	913	37		593	5,067	7,546	21,621	865
2	24	13,138	576	4,313	18,027	387	585	1,055	49		890	6,060	9,026	27,053	1,127
3	27	15,141	780	3,924	19,845	562	797	784	142		565	6,558	9,408	29,253	1,083
計	308	233,285	14,906	96,804	344,995	6,905	12,803	11,845	1,080	624	16,651	81,660	131,568	476,563	1,547

2) 学校等入館者数

年 月		小 学 校		中 学 校		高等学校		養 聾 盲 学 校	
		学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数
2006・4	全 体	36	3,510	13	1,816	7	1,719	0	0
	県 内	1	73	1	68	0	0	0	0
5	全 体	92	8,573	58	7,754	10	1,394	8	193
	県 内	11	473	2	42	1	11	5	114
6	全 体	40	3,298	39	5,064	4	145	2	28
	県 内	18	1,208	6	407	0	0	2	28
7	全 体	15	1,137	20	1,668	13	220	3	39
	県 内	2	212	9	575	11	162	2	15
8	全 体	14	253	8	176	2	87	2	38
	県 内	11	23	7	61	0	0	1	8
9	全 体	47	2,920	2	61	7	626	5	38
	県 内	27	1,464	0	0	5	105	3	15
10	全 体	221	17,381	24	1,805	5	558	3	77
	県 内	87	6,453	10	319	1	1	1	13
11	全 体	58	4,183	19	2,066	6	560	4	27
	県 内	26	1,533	4	64	1	80	3	20
12	全 体	26	1,136	5	27	3	44	0	0
	県 内	12	971	0	0	1	12	0	0
2007・1	全 体	14	948	0	0	1	16	2	12
	県 内	9	564	0	0	0	0	2	12
2	全 体	32	2,619	5	500	0	0	2	20
	県 内	7	593	4	282	0	0	0	0
3	全 体	5	353	3	200	4	311	1	35
	県 内	2	157	1	80	2	273	1	35
合 計	全 体	600	46,311	196	21,137	62	5,680	32	507
	県 内	213	13,724	44	1,898	22	644	20	260

3) 月別・曜日別入館者数

年 月	日曜・祝祭日	土曜日(祝日除く)	そ の 他	計
2006・4	14,474	6,662	13,774	34,910
5	27,312	9,093	25,375	61,780
6	13,382	6,971	15,780	36,133
7	24,343	10,673	17,962	52,978
8	15,857	9,686	47,006	72,549
9	18,526	6,872	10,760	36,158
10	14,956	5,723	31,584	52,263
11	15,738	7,285	14,495	37,518
12	7,265	2,875	4,207	14,347
2007・1	8,950	4,302	8,369	21,621
2	13,867	5,346	7,840	27,053
3	11,233	6,871	11,149	29,253
計	185,903	82,359	208,301	476,563
構成割合	39.0%	17.3%	43.7%	100.0%

(2) 新聞掲載記録

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
4	2	勝ち負けより長い目で見よう 発想を変え、自然から学びたい 川那部浩哉琵琶湖博物館館長	京都新聞	4	18	県環境学習支援センターが環境学習のリーダー養成、琵琶湖博物館などの施設利用や教え方指導	毎日新聞
	2	お魚ネット交流会を琵琶湖博物館で開催	毎日新聞		18	平安時代の「伊勢物語」に記された歴史持つ近江の奇祭「鍋冠祭」の行列図を紹介したトピック展を琵琶湖博物館で開催中	中日新聞
	3	現場で考える、琵琶湖の駆除漁「近い水、遠い水」琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授が水環境問題を考える際のキーワード	毎日新聞		19	[琵琶湖いきもの図鑑]『ワヒガイ』写真資料提供(琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞
	5	[琵琶湖いきもの図鑑]『ワタカ』中島経夫上席総括学芸員のコメントと写真資料提供(琵琶湖博物館うおの会) / 水草帯による水の停滞、アオコの発生に関係か 01年には水草の分布面積が南湖の6割近くに(琵琶湖博物館調べ)	毎日新聞		21	カイミジンコのオス発見のロビン・J・スミス学芸技師の紹介	朝日新聞
	5	県内の在来種タンボポの占める割合が3分の1に低下していることが琵琶湖博物館などの調査で判明	中日新聞		21	琵琶湖博物館と館内のレストラン「にほのうみ」のバス料理の紹介、「バスと湖の関係」孝橋賢一主査 / 烏丸半島民間ゾーン開発 琵琶湖博物館などの施設と関連づけ水をテーマにした複合商業施設建設を提案	毎日新聞
	5	琵琶湖博物館催し物の案内 / 湖国のケモノ『ニホンアナグマ』若狭喜弘共同研究員	朝日新聞(あいあいAI鑑賞)		21	リゾート開発再始動、琵琶湖博物館とみずの森の完成以後空閑地として残っていた草津・烏丸半島の9ヘクタールに長期滞在型施設など09年秋に開業 /	京都新聞
	12	[琵琶湖いきもの図鑑]『ウツセミカジカ』写真資料提供(琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞		21	烏丸半島(琵琶湖博物館などに隣接するエリア)開発 事業者名乗り、リゾート施設を提案	産経新聞
	13	2億年で初、ロビン・スミス学芸員らがカイミジンコのオスを発見	朝日新聞		22	琵琶湖博物館に「滋賀県のオサムシ調査」コーナー新設 八尋克郎主任学芸員	毎日新聞
	13	カイミジンコに「オス」ロビン・ジェームス・スミス学芸技師らが発見、メスだけで繁殖とする定説を覆す	京都新聞(夕刊)		23	琵琶湖博物館で市民交流スペース開設、化石などの展示始まる	京都新聞
	13	小さな命の大きな発見、ロビン・スミス学芸員らがカイミジンコのオスを発見	毎日新聞(夕刊)		23	カワウの声が弱点『オオクチバス』写真資料提供	中日新聞
	14	カイミジンコ雄いた「雌だけで繁殖」定説覆す、ロビン・スミス学芸員らの研究グループが発見	中日新聞		25	琵琶湖博物館催し物の案内	産経新聞
	14	2億年の謎ついに、ロビン・スミス学芸員らの研究グループがカイミジンコのオスを発見	産経新聞		27	お魚調査 ナマズも出てきてこんにちは琵琶湖博物館うおの会が協力	読売新聞(しが県民情報)
	15	南湖でも週上・産卵復活を 大津で琵琶湖固有種ピワマスの稚魚放流、榊永一宏学芸員がエサになるカゲロウの幼虫を確認	毎日新聞		29	琵琶湖に潜った気分！琵琶湖博物館紹介	中日新聞
	15	千年の奇祭、筑摩神社「鍋冠祭」知ってる？琵琶湖博物館で祭礼行列図を公開	京都新聞		30	動植物の生態から環境変化をたどる、琵琶湖博物館で水族企画展・ギャラリー展示など始まる	京都新聞
	15	乗って見て楽しもう 近江鉄道バスの一泊乗降り自由の乗車券と琵琶湖博物館などの入場券をセットにした「わくわく観光バスポート」をきょうから発売	中日新聞	5	1	貴重な漁労民具紹介、琵琶湖博物館で民俗資料目録を発刊	京都新聞
	16	きれいな水残そう、水環境を守る活動をしている市民団体開催の「地下水シンポジウム未来につなぐ水」で琵琶湖博物館研究顧問の嘉田由紀子京都精華大教授らが講演 / 【週間ニュースバック】生物界の謎解明？琵琶湖博物館の学芸員らの研究グループが「カイミジンコ」の雄を発見	中日新聞		2	現代の水城 重文も豊富な県立琵琶湖文化館の水族館を琵琶湖博物館に移転	朝日新聞
					2	琵琶湖博物館と「ボテジャコは、いま…？」の紹介	産経新聞
					2	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞(しが県民情報)
					3	黄ナマズ、トリオ、きれい、琵琶湖博物館で展示始まる	読売新聞
					3	琵琶湖博物館に交流空間を新設	中日新聞
					3	市民団体「ほてじゃこトラスト」が五感で魚に親しむイベントを開催、秋山廣光専門学芸員が魚をさばきながら体の仕組みや調理のコツを説明 / 湖国のケモノ『湖国のケモノたち』若狭喜弘共同研究員	朝日新聞(あいあいAI鑑賞)

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
5	4	唯一の丸子船現役大工松井三四郎さん死去 牧野久実専門学芸員のコメント	毎日新聞	6	1	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ハス』写真資料提供 (琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞
	4	丸子船の伝統継承、琵琶湖博物館展示用の丸子船建造の松井三四郎氏死去 牧野久実専門学芸員のコメント	京都新聞		1	川や湖でわくわく体験! 自然環境を親子で学ぼう 「五感で魚を楽しむ会」と題した体験教室で秋山廣光専門学芸員がピワコナマズを解剖し、魚の体の仕組みを説明	毎日新聞 (オー!ミー)
	4	琵琶湖博物館展示用の丸子船を造るなど最後の現役船大工として知られた、丸子船の建造技術伝える松井三四郎氏死去	産経新聞		7	湖国の昆虫 『オオセンチコガネ』 八尋克郎専門学芸員 / 『漣人物録』千丈川のホタルを見守る 荒井紀子展示交流員	朝日新聞 (あいあいAI読賞)
	8	琵琶湖博物館に金色ナマズ3匹目登場	京都新聞		8	[琵琶湖いきもの図鑑] 『カネヒラ』写真資料提供と秋山廣光専門学芸員	毎日新聞
	9	琵琶湖博物館と館内のレストラン「にはのうみ」のバス天井の紹介	京都新聞		10	宇佐市発足1周年記念フォーラム「山・里・海彩りに満ちた宇佐の環境歴史と地域づくり」で高橋啓一研究部長が基調講演	大分合同新聞
	10	琵琶湖の魚フィギュアに 固有種など17種、琵琶湖博物館でも販売	読売新聞		11	ゾウ頭骨化石、顔右半分年度内復元へ高橋啓一研究部長の話	読売新聞
	10	イタセンバラの標本も琵琶湖博物館ギャラリー展「つかんだ・つんだ・いつもいた-あの生き物は、いま…?」の紹介	中日新聞		11	04年安心院で出土のミエゾウ、頭骨の縮小判明 高橋啓一研究部長の話	大分合同新聞
	11	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ホンモロコ』写真資料提供 (琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞		12	自然との共生を図ろう、「山・里・海彩りに満ちた宇佐の環境歴史と地域づくり」フォーラムで高橋啓一研究部長が基調講演	大分合同新聞
	11	琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (夕刊)		14	湖国の昆虫 『ゲンジボタル』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読賞)
	12	能登川博物館に9カ国の博物館の研修生が現地研修、琵琶湖博物館などで7月まで研修を続け運営方法を学ぶ	毎日新聞		15	[琵琶湖いきもの図鑑] 『シロヒレタビラ』写真資料提供	毎日新聞
	12	運営法は「地域密着」南米などの学芸員たちが能登川博物館を見学、4月上旬から琵琶湖博物館などで運営を学ぶ	京都新聞		16	琵琶湖博物館が協議会委員募る	京都新聞
	13	カミツキガメでかっ〜 高島の琵琶湖で県内最大級捕獲、琵琶湖博物館で確認	京都新聞		16	北淡震災記念公園 レストランの料理長らが琵琶湖博物館内レストランで試食し調理方法などを学んでつくったナマズ料理が新名物に	毎日新聞
	16	琵琶湖博物館内の土産店「おいでや」の『金のなまずまんじゅう』の紹介	京都新聞		17	「環境の変化」目に見える、レッドデータブック05年版完成 布谷知夫上総括学芸員のコメント / 『スジシマドジョウ』『アユモドキ』写真資料提供	朝日新聞
	17	湖国の昆虫 『ギフチョウ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読賞)		20	琵琶湖の環境 どう改善 昨年の漁獲量、過去最低 中井克樹主任学芸員のコメント	朝日新聞
	18	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ピワマス』写真資料提供 (琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞		21	2000万年前のワニ足跡発見、岩肌などに30個以上 高橋啓一総括学芸員のコメント	読売新聞
	20	コイの季節、琵琶湖で産卵ピーク 琵琶湖博物館のコメント	中日新聞		21	松江で2千万年前、国内最古級のワニ足跡化石発見 高橋啓一総括学芸員のコメント	京都新聞
	22	外来魚阻止へ秘策、速い流れと「せき」苦手 琵琶湖河川事務所が調査 中井克樹主任学芸員の話	産経新聞 (夕刊)		21	湖国の昆虫 『ムカシトンボ』 八尋克郎専門学芸員 / 投網体験会まず広場で練習、琵琶湖博物館催し物の紹介	朝日新聞 (あいあいAI読賞)
	23	魚道普及、実用性に課題、堰や土砂移動阻む 設置後の検証が重要 前畑政善総括学芸員のコメント	京都新聞		21	2000万年前にワニ存在か 美保関で足跡化石発見 高橋啓一総括学芸員のコメント	朝日新聞 (島根版)
	24	湖国の昆虫 『メガネサナエ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI読賞)		21	国内最古級のワニ足跡化石 鳥大院生が発見	山陰中央新報
	25	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ゼゼラ』写真資料提供	毎日新聞				
	28	琵琶湖博物館催し物の案内	京都新聞				
	29	泥や生き物に歓声「自然観察会-湖と田んぼの自然にふれあう魚つかみ体験」で琵琶湖博物館うおの会の講師らが魚の種類などを解説	中日新聞				
	31	湖国の昆虫 『モンシロチョウ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読賞)				

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
6	22	[琵琶湖いきもの図鑑] 『デメモロコ』 写真資料提供	毎日新聞	7	22	貴重な姿 見に来て、絶滅危惧種のイタセンバラ、琵琶湖博物館で繁殖の稚魚を公開 / 朽木いきものふれあいの里が琵琶湖博物館などの協力で「夏の森のいきもの展」を開催	京都新聞
	23	琵琶湖博物館の紹介	日本経済新聞(夕刊)				
	24	湖国の環境保全考える「びわこ環境セミナー」を滋賀県が開催 講師に川那部浩哉琵琶湖博物館館長	京都新聞		25	水田の魚が温暖化防ぐ、琵琶湖博物館などが調査 中島経夫上席総括学芸員のコメント	中日新聞(夕刊)
	24	復活カワウゝ大食、被害 対策とったら生息拡散、アユなど全国で46億円 亀田佳代子専門学芸員のコメント	朝日新聞(夕刊)		26	大津市におの浜の川に熱帯魚のアロワナ飼いが放流か 秋山廣光専門学芸員のコメント	読売新聞
	28	湖国の昆虫 『アゲハチョウ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)		26	湖国の昆虫 『ミイデラゴミムシ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)
	29	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ニゴロブナ』 写真資料提供	毎日新聞		31	増える水草 漁業、航行に支障 環境面ではプラスも 琵琶湖博物館と芳賀裕樹主任学芸員のコメント	京都新聞
7	4	川の魚に詳しい人ヤ〜イ 東近江市が今夏から「琵琶湖博物館うおの会」などの協力で生息調査実施	毎日新聞	8	2	「夏休み自由研究頑張る」琵琶湖博物館などの相談室や体験教室などの催し特集 / 湖国の昆虫 『ヒメボタル』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)
	4	夏休みの宿題手伝います 琵琶湖博物館で「夏休み自由研究講座」開催	読売新聞(しが県民情報)		3	ブルーギルの産卵場所で親と卵を一網打尽 中井克樹主任学芸員のコメント	京都新聞
	5	国内最小ハッチョウトンボが米原で羽化最盛 琵琶湖博物館がコメント	中日新聞		3	湖辺〜水、魚、そして人〜 10年の研究成果を琵琶湖博物館で展示	毎日新聞
	5	濁水 生態系に影響、琵琶湖博物館で研究セミナー開催	京都新聞		3	[琵琶湖いきもの図鑑] 『イワナ』 写真資料提供	毎日新聞
	6	湖北野鳥センターに黄金色カエルが人気 琵琶湖博物館のコメント	中日新聞		4	県議会一般質問で自民党県議が 新幹線新駅やダム建設の凍結を掲げる嘉田由紀子知事に県職員時代にかかわった琵琶湖博物館を引き合いに再考を求める	中日新聞
	6	[琵琶湖いきもの図鑑] 『アカザ』 写真資料提供	毎日新聞		4	草津の中学生らが「自然調査ゼミナール」で琵琶湖の水質や魚介類を調査	京都新聞
	12	野鳥センターに珍客「黄金ガエル」 琵琶湖博物館のコメント	読売新聞		4	環境保護の大切さ学ぶ 長浜市水生生物調査隊の交流会で榎永一宏学芸員が講演	中日新聞
	12	湖国の昆虫 『タガメ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)		5	命名「ヤヒロミドリトビハムシ」 八尋克郎専門学芸員がハムシの新種発見 / 自然と歴史の湖国巡り 琵琶湖博物館と企画展「湖辺」の紹介 中島経夫上席総括学芸員のコメント	朝日新聞
	15	琵琶湖環境 先生も学ぼう 琵琶湖博物館講座開催 中村公一主査のコメント	朝日新聞		7	白鳥川で親子連れら70人が「かいどり」楽しむ、勉強会で琵琶湖博物館うおの会が指導	毎日新聞
	16	琵琶湖博物館夏のイベント案内	滋賀民報		9	湖国の昆虫 『カブトムシ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)
	18	ピワマス巡る話題を紹介「第1回びわますフォーラム」を琵琶湖博物館で開催 川那部浩哉琵琶湖博物館館長が講演	毎日新聞		9	貝やフナが泥掃除 前畑政善総括学芸員のコメント	日本経済新聞
	18	琵琶湖博物館企画展示「湖辺」開催 ヨシ原、アユ、エリ漁…今森光彦さんが琵琶湖を舞台に撮影した写真	京都新聞		11	愛知川図書館で小学生らがトンボの分布マップ作成 琵琶湖博物館研究調査報告によると県内では98種のトンボが記録されている	京都新聞
	19	水田に魚 メタン抑制効果、琵琶湖博物館が確認	京都新聞		11	どんな魚がいるかな 琵琶湖博物館うおの会の協力で子どもらが昔の方法で捕獲、調査(白鳥川)	中日新聞
	19	湖国の昆虫 『オオムラサキ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞(あいかいAI滋賀)		11	Ministry lets black bass operators off the hook 中井克樹主任学芸員 のコメント	朝日新聞
	20	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ウグイ』 写真資料提供(琵琶湖博物館うおの会)	毎日新聞				
	20	琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞(夕刊)				
	21	高島にハムシの新種 八尋克郎専門学芸員が捕獲 ヤヒロミドリトビハムシと命名	京都新聞				
	21	ハムシの新種 湖周辺で発見 八尋克郎専門学芸員が採集 ヤヒロミドリトビハムシと命名	中日新聞				

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
8	17	ブルーギルは浅瀬嫌い 琵琶湖博物館の研究員らが調査 水野敏明特別研究員のコメント	産経新聞	9	5	淡水魚研究32年、前畑総括学芸員がハン六文化振興財団学術賞受賞	読売新聞
	19	高島で採集の新種ハムシに八尋克郎専門学芸員の名前をとって「ヤヒロミドリトビハムシ」と命名	産経新聞		5	白ナマズ 産卵の瞬間 前畑政善総括学芸員のコメント	毎日新聞
	20	胸に貴重な思い出 こども環境特派員事業、琵琶湖博物館で閉幕	毎日新聞		5	国内外来種オヤニラミ放流禁止、滋賀県が指定外来種の選定を検討 写真資料提供と前畑政善総括学芸員のコメント	京都新聞
	21	八尋克郎主任学芸員がハムシの新種発見	毎日新聞		6	湖国の昆虫 『ヒサマツミドリシジミ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)
	21	県絶滅危惧種のベニイトトンボを発見	産経新聞		6	琵琶湖博物館の催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI読)
	22	子どもに「琵琶湖」分かりやすく学芸員志望者が製作したディスクカバーボックスを琵琶湖博物館で展示	京都新聞		7	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ピワコオオナマズ』 写真資料提供	毎日新聞
	22	企画展「湖辺」の案内	京都新聞		9	[びわこのうちそと] コクチバスの何が問題? 河川など流水域も平気、水温3~4度でも活動 中井克樹主任学芸員のコメント	朝日新聞
	23	湖国の昆虫 『アブラゼミ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)		13	動物命名法国際審議会委員にグライガー総括学芸員が任命される	中日新聞
	24	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ニゴイ』 写真資料提供	毎日新聞		13	湖国の昆虫 『ツマグロヒョウモン』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)
	24	水族企画展「水辺の生き物」の案内	朝日新聞 (夕刊)		15	外来魚また琵琶湖に「フラミンゴシクリッド」が捕獲されたと琵琶湖博物館が発表	読売新聞
	25	希少淡水魚の繁殖評価、ハン六文化振興財団学術賞に前畑政善総括学芸員	京都新聞		15	中米原産の熱帯魚「フラミンゴシクリッド」が琵琶湖で捕獲されたと琵琶湖博物館が発表	中日新聞
	25	前畑政善総括学芸員がハン六文化振興財団学術賞を受賞	中日新聞		15	悲しい熱帯魚、後絶たぬ放流 駆除網にまた2匹「フラミンゴシクリッド」 写真資料提供	産経新聞
	25	カワウ生息数は横ばい 県が合同会議、対策効果に疑問 亀田佳代子専門学芸員のコメント	毎日新聞		16	[びわこのうちそと] オオクチバス・ブルーギル 駆除量、過去最高ペース 中井克樹主任学芸員のコメント / 熱帯魚2種類相次いで捕獲 「フラミンゴシクリッド」 写真資料提供	朝日新聞
	27	夏休みもいよいよ終わり、自由課題など宿題追い込み 琵琶湖博物館など県内の各施設は多くの親子連れでにぎわう	毎日新聞		20	湖国の昆虫 『ハッチョウトンボ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)
	28	大津でハン六文化振興財団の授賞式、前畑政善総括学芸員が学術賞を受賞	中日新聞		21	[琵琶湖いきもの図鑑] 『イチモンジタナゴ』 写真資料提供	毎日新聞
	28	[琵琶湖からのメッセージ] 外来魚対策は繁殖を抑制の課題山積 中井克樹主任学芸員のコメント	京都新聞		21	琵琶湖博物館催し物の案内	毎日新聞 (オー！ミー)
	29	琵琶湖の外来魚駆除過去最高に 中井克樹主任学芸員のコメント	京都新聞		25	[琵琶湖からのメッセージ] カワウ増殖 打つ手なく 竹生島立ち枯れ被害 亀田佳代子専門学芸員の調査によると夏にアユを秋から冬は外来魚を餌にしている、牧野厚史主任学芸員のコメント	京都新聞
	30	湖国の昆虫 『クマゼミ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)		27	秋旅へ行く<小旅編> 琵琶湖博物館の紹介	読売新聞
	31	大勢の家族連れでにぎわう琵琶湖博物館トンネル水槽	中日新聞		27	湖国の昆虫 『カワラハンミョウ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)
	31	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ギギ』 写真資料提供	毎日新聞		28	ホトケドジョウ知ってる? 絶滅の危機の日本固有種 琵琶湖博物館で公開	中日新聞
	31	琵琶湖の歩み 企画展「湖辺」琵琶湖博物館で開催	産経新聞		28	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ヌマチチブ』 写真資料提供 秋山廣光専門学芸員のコメント	毎日新聞
9	2	希少種「ミヤマダイフクコガネ」県内で3年ぶり発見、琵琶湖博物館で展示 特定した八尋克郎専門学芸員のコメント	京都新聞				
	3	琵琶湖博物館が収蔵するゾウなどの化石を伊賀市上野歴史民俗資料館で展示	中日新聞				
	5	こども環境特派員が琵琶湖体験、思い出の夏3日間 最終日は琵琶湖博物館で体験教室と展示見学	毎日新聞				

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
9	29	江戸中期に丸子船船首なぜ変わった 2種の模型船で実験 牧野久実専門学芸員のコメント	京都新聞	10	29	南湖も酸素濃度低下 芳賀裕樹主任学芸員らがデータ解析	毎日新聞
	30	[びわこのうちそと] 南湖の藻 異常増殖 日光よく届き成長促進? 芳賀裕樹主任学芸員のコメント	朝日新聞		30	琵琶湖周辺の生態系を解説、琵琶湖博物館で「びわ湖の森の生き物」と題した講演会開催	京都新聞
10	1	在来魚の生態特定へ アクア琵琶と琵琶湖博物館うおの会が湖岸全域で産卵調査	京都新聞	11	1	湖国の昆虫 『アキアカネ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)
	4	湖国の昆虫 『カワラバク』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI読)		2	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ウキゴリ』 写真資料提供	毎日新聞
	5	[琵琶湖いきもの図鑑] 『イワトコナマズ』 写真資料提供	毎日新聞		3	琵琶湖博物館のパンフレットを基にかばたを描いた『カバタから光輝くびわ湖へ』が「よりよい水環境づくりポスターコンクール」で県知事賞受賞	朝日新聞
	8	絶えぬ外来魚放流 流通規制、飼育者の教育必要 中井克樹主任学芸員	京都新聞		5	特定外来生物に指定 タンカイザリガニ 桑原雅之専門学芸員のコメント	中日新聞
	11	琵琶湖博物館開館10年 21日に記念式典、講演やパネル展示	京都新聞		8	[おうみ草子] 丸子船を見に 琵琶湖博物館に展示されている丸子船を造船した松井三四郎さんについて	読売新聞
	11	『ニゴロブナ』 写真資料提供	中日新聞		8	湖国の昆虫 『ゲンゴロウ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI読)
	12	[琵琶湖いきもの図鑑] 『ブルーギル』 写真資料提供	毎日新聞		9	[琵琶湖いきもの図鑑] 『アマゴ』 写真資料提供	毎日新聞
	15	川遊び 指導の在り方学ぶ「大人の川遊びトレーニング」で秋山廣光専門学芸員が魚の見分け方を指導	京都新聞		9	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 1 写真資料提供	読売新聞
	16	魚類資料46種126万個体を琵琶湖博物館に寄贈	中日新聞		10	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 2 写真資料提供	読売新聞
	18	「地域だれでも・どこでも博物館」めざして 開館10周年 琵琶湖博物館	京都新聞		11	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 3 写真資料提供	読売新聞
	18	湖国の昆虫 『オニヤンマ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)		12	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞
	19	琵琶湖ホールや琵琶湖博物館の整備などを行った稲葉元知事に350人最後の別れ / [琵琶湖いきもの図鑑] 『ワカサギ』 写真資料提供	毎日新聞		12	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 4 写真資料提供	読売新聞
	19	国内原産魚「オヤニラミ」を外来種指定 桑原雅之専門学芸員のコメント	中日新聞		14	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 5 写真資料提供	読売新聞
	20	学名の命名法で夢の審議委員に マーク・J・グライガー総括学芸員	朝日新聞		14	[師あり弟あり] 琵琶湖研究 刻んだ歴史、数百万年 支えてきた自然と人 引くくめて博物館 川那部浩哉琵琶湖博物館館長、高橋啓一研究部長のコメント	読売新聞 (夕刊)
	22	琵琶湖博物館が10周年記念式典、嘉田知事ら祝う	中日新聞		15	湖国の昆虫 『スズムシ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館でフィッシュクラフト展「木から生まれた渓魚たち」開催	朝日新聞 (あいあいAI読)
	22	琵琶湖博物館」開館10周年で集い	毎日新聞		15	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 6 写真資料提供	読売新聞
	22	地域と湖 懸け橋の10年、琵琶湖博物館開館10周年記念式典で決意新た	京都新聞		16	野生生物と共生考えて 琵琶湖博物館でシンポジウム	京都新聞
	25	湖国の昆虫 『カワムラナベバタムシ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI読)		16	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 7 写真資料提供	読売新聞
	26	[琵琶湖いきもの図鑑] 『アユモドキ』 写真資料提供	毎日新聞		17	[嘉田知事に聞く 琵琶湖今昔物語] 8 写真資料提供	読売新聞
	26	琵琶湖博物館10周年 里山保全へ大きな役割	滋賀報知新聞		19	絶滅危機の淡水魚守れ 繁殖に取り組む水族館、動物園 全国一斉に企画展、琵琶湖博物館でも臨時の水槽やパネルの展示が始まる	京都新聞
	27	関西文化の日 琵琶湖博物館など270施設が入場無料	毎日新聞				
	27	関市の後藤さん、琵琶湖博物館に魚標本寄贈	朝日新聞 (岐阜)				
	27	長良川魚の標本126万個体琵琶湖博物館へ寄贈	中日新聞				

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
11	22	湖国の昆虫 『シガラキオサムシ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)	12	20	『ヒクイナ』湖国で年越し 亀田佳代子専門学芸員のコメント	京都新聞
	23	木製の渓魚見て フィッシュクラフトの展示会「木から生まれた渓魚たち」が琵琶湖博物館で開催	中日新聞		20	湖国の昆虫 『ヤヒロミドリトビハムシ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)
	29	湖国の昆虫 『ヒメハルゼミ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)		20	The 10th Anniversary of the Lake Biwa Museum	朝日新聞
12	2	人と自然への投資訴え「もったいない」嘉田由紀子 滋賀県知事、川那部浩哉琵琶湖博物館館長のコメント	朝日新聞		21	琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (夕刊)
	4	市民団体や学校施設の役割探る 「県民環境学習のつどい」が琵琶湖博物館で開催	京都新聞		22	「生きものと水土のシンポジウム」嘉田知事の琵琶湖博物館で「田んぼ総合研究」を始めた話	京都新聞
	4	太陽光発電や植物の“カーテン” 「みんなでストップ! 温暖化in琵琶湖博物館」が開催	中日新聞		23	[びわこのうちそと] 琵琶湖10大ニュース 1位嘉田・琵琶湖博物館元学芸員が知事に	朝日新聞
	6	湖国の昆虫 『ヒラサナエ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)		26	彦根の会社が、琵琶湖の魚や鳥をフィギュアに 琵琶湖博物館などで販売	中日新聞
	7	遊んで守る里山 布谷知夫上席総括学芸員のコメント	読売新聞		28	滋賀この1年(上) 黄色いビワコオオナマズ、琵琶湖博物館に展示	朝日新聞
	7	琵琶湖博物館催し物の案内	毎日新聞 (オー!ミニー)		28	『琵琶湖』フィギュア人気 琵琶湖博物館などで販売	京都新聞
	7	琵琶湖博物館で研究成果発表、外来魚やカワウ…「やっかい者」語る	京都新聞	1	3	湖国の昆虫 『昆虫の楽しみ方』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)
	9	[びわこのうちそと] 運営・展示 市民とともに 琵琶湖博物館が10周年 川那部浩哉館長に聞く	朝日新聞		3	琵琶湖博物館 入館者、復調に手応え 小中校訪問宣伝を拡大戦略が奏功	京都新聞
	10	イタセンバラ盗難から守れ、われる飼育施設 琵琶湖博物館のコメント	産経新聞		5	琵琶湖博物館で えとのイノシシ紹介	中日新聞
	10	水田で…泳げ魚くん 温暖化防止に貢献、中島経夫上席総括学芸員らの研究で確認	毎日新聞		6	琵琶湖博物館開館10周年を記念 企画展の資料一堂に	中日新聞
	10	[ネイチャー・ウォッチ] 危機迫る希少動物① 『アユモドキ』産卵場は河川の氾濫原 松田征也専門学芸員のコメント	日本経済新聞		7	[湖はどこへ] 3 水草 異常繁茂で問題山積 芳賀裕樹主任学芸員らが過去と現在の記録を精査、さらに水草の多い場所で湖底付近の容存酸素の濃度が低下する傾向が判明	毎日新聞
	12	日本の淡水魚があぶない「保存」テーマに企画展 松田征也専門学芸員のコメント 写真資料提供	朝日小学生新聞		7	琵琶湖博物館催し物の案内	京都新聞
	13	湖国の昆虫 『ビワコエグリトビケラ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)		8	琵琶湖博物館で巨大イノシシ頭骨など展示	京都新聞
	13	子どもとでかけ隊! 湖の魚 トンネルでご対面 琵琶湖博物館	朝日新聞 (夕刊)		9	[湖はどこへ] 4 外来魚 生態系回復へ模索続く、駆除本格化で減少傾向 中井克樹主任学芸員のコメント	毎日新聞
	16	[びわこのうちそと] 琵琶湖博物館を活用して 開館10年 村上うおの会会長に聞く	朝日新聞		9	琵琶湖博物館催し物の案内	京都新聞
	17	[あのころ湖国は] 烏丸半島 名前と共に変わる風景 琵琶湖博物館周辺	朝日新聞		13	ケイ藻図鑑 琵琶湖博物館のHPで公開	朝日新聞
	17	琵琶湖博物館で研究発表会 琵琶湖のやっかい者考察	京都新聞		16	珪藻のユニークな姿観察して、琵琶湖博物館で珪藻の電子図鑑を作成HPで公開 大塚泰介学芸員のコメント	京都新聞
	19	外来魚の駆除方法探る 大津で検討会、湖北の産卵調査報告 中井克樹主任学芸員のコメント	京都新聞		17	湖国の昆虫 『アカムシユスリカ』 八尋克郎専門学芸員、写真資料提供 榎永一宏学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)
	19	過去最大級の繁茂 南湖の8割で湖底の半分以上が水草で覆われていたことが琵琶湖博物館の調査で判明、調査を担当した芳賀裕樹主任学芸員のコメント	中日新聞		24	湖国の昆虫 『ビワコシロカゲ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI滋賀)
					28	なぜ! 魚はエリに入るのか? 琵琶湖博物館で研究セミナー開催	京都新聞

月	日	記事テーマ	掲載新聞社名	月	日	記事テーマ	掲載新聞社名
1	29	〔琵琶湖からのメッセージ〕 藍藻や珪藻急増 網に大量付着、漁に被害 孝橋賢一主査のコメント / 文化財保安官が対策指南、講演会「今、地域の文化財を伝えるために」が琵琶湖博物館で開催	京都新聞	2	25	琵琶湖水系の水生生物生息状況データを公開「琵琶湖お魚ネットワーク」の交流会を琵琶湖博物館で開催 水野敏明特別研究員と中島経夫上席総括学芸員による調査報告	毎日新聞
	31	湖国の昆虫『ヒイラギハマキワタムシ』 八尋克郎専門学芸員、写真資料提供 草加伸吾主任学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)		26	〔琵琶湖からのメッセージ〕 森林管理で水環境守れ「樹木の吸収力保持重要」伐採・間伐方法探る 草加伸吾主任学芸員の話	京都新聞
2	6	アート体験してみよう 美術館や博物館が集合、琵琶湖博物館など30館で様々なプログラム	朝日新聞		26	外来種が非常に多い「琵琶湖お魚ネットワーク」が琵琶湖博物館で交流会開催 水野敏明特別研究員が調査結果を報告	中日新聞
	6	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞 (しが県民情報)		27	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞 (しが県民情報)
	7	湖国の昆虫『セッケイカワゲラ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI選賃)		28	湖国の昆虫『ベニイトトンボ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)
	12	琵琶湖「春夏 週上ピワマス群」祖先の性質残す？ 桑原雅之専門学芸員の調査で判明	京都新聞	3	1	琵琶湖研究成果を共有 琵琶湖博物館など県立の八機関でつくる連絡会議が「琵琶湖沿岸帯の現状とその評価」をテーマに研究発表会を開催	京都新聞
	15	湖国の昆虫『ミノムシ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)		3	「湖国もぐらの会」が琵琶湖博物館でギャラリー展示「続・湖国の大地に夢を掘る」を開催	読売新聞 (しが県民情報)
	15	漁具や造船道具…2500点 琵琶湖博物館が所蔵する民俗資料をデータベース化、ネットで公開	京都新聞		7	湖国の昆虫『キマダラルリツバメ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI選賃)
	17	[びわこのうちそと] 暖冬で琵琶湖が酸欠のピンチ 芳賀裕樹主任学芸員のコメント	朝日新聞		8	琵琶湖のナマズ降雨量や濁りで産卵行動を誘発 前畑政善総括学芸員がオランダの学術誌に研究論文	京都新聞
	20	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞 (しが県民情報)		14	湖国の昆虫『チョウトンボ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)
	21	湖国の昆虫『カイコ』 八尋克郎専門学芸員 / 琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (あいあいAI選賃)		21	かつて琵琶湖が海だった証し… サメ化石など3,800点を展示、「鉱物・化石展-続・湖国の大地に夢を掘る」を琵琶湖博物館で開催、里口保文主任学芸員のコメント	京都新聞
	22	暖冬の影響 外来種も青々 熱帯性の水草枯れず 芳賀裕樹主任学芸員のコメント / 琵琶湖と流域の自然や人々とのかわりを描いたドキュメンタリー映像「淡海と生きる～琵琶湖～」のDVDをWWFが制作 WWFジャパン職員の水野敏明琵琶湖博物館特別研究員のコメント	京都新聞		21	湖国の昆虫『オオカマキリ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)
	23	親子で考える地球環境、琵琶湖に学ぼう「琵琶湖お魚ネットワーク」の調査イベントで取った魚を琵琶湖博物館の学芸員と一緒に確認	毎日新聞		22	琵琶湖博物館催し物の案内	朝日新聞 (夕刊)
	24	市民の研究に公表の場を 活動38団体、成果を発表 琵琶湖博物館で研究発表会「大集合！琵琶湖の研究」を開催 高橋啓一研究部長のコメント / 琵琶湖博物館で民俗資料などネットで公開	朝日新聞		28	湖国の昆虫『チャイロスズメバチ』 八尋克郎専門学芸員	朝日新聞 (あいあいAI選賃)
	24	琵琶湖保全へ、WWFジャパンの水野敏明琵琶湖博物館特別研究員が企画したDVD「淡海と生きる～琵琶湖～」をWWFジャパンが制作	中日新聞		30	台湾菜寮川産化石を日本の研究者（高橋啓一研究部長）が黒熊と同定	中華日報
	24	WWFジャパンの水野敏明琵琶湖博物館特別研究員が企画した琵琶湖の歴史や湖魚の生態描いたDVD「淡海と生きる～琵琶湖～」をWWFジャパンが制作 琵琶湖博物館で上映会	毎日新聞		30	台湾の黒熊は60万年前にも生きていたー王良傑氏発見の3化石標本を日本の研究者（高橋啓一研究部長）が同定ー	聯合報 (台湾) 南県文教版
					31	琵琶湖博物館催し物の案内	読売新聞 (夕刊)

(3) 雑誌等掲載記録

月	記事テーマ	掲載雑誌社名	月	記事テーマ	掲載雑誌社名	
4	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.83	5	琵琶湖博物館の紹介	JAF Mate	
	琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.455		琵琶湖博物館の紹介	全国水族館ガイド 2006>2007	
	琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 4号	6	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内 / 琵琶湖博物館協議会委員の募集	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.85	
	琵琶湖博物館の催し物案内	日経サイエンス 414号		琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.457	
	琵琶湖博物館の催し物案内	れいかる<春号>vol.40		琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 6号	
	琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀旅人(県イベント情報誌)<春号>		琵琶湖博物館の催し物案内	大人組	
	琵琶湖博物館の催し物案内	EMATEC(環境情報) 116号		琵琶湖博物館の紹介	元気 UP! 関西 PORTAL No.055	
	琵琶湖博物館の施設紹介	FRONT		琵琶湖博物館の催し物案内		
	「里川の魚」を守るための手だて 水族館が取り組む希少淡水魚の繁殖計画、琵琶湖博物館の取り組み 前畑政善総括学芸員の話	水族館をまるごと楽しむ! 観光 No.474		7	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.86
	琵琶湖博物館の紹介	たのしい学校			琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 7号
地域魅力としての博物館 「フィールドレポーター制度」や「はしかけ制度」の紹介	びいめーる vol.49	琵琶湖博物館の催し物案内	日経サイエンス 417号			
琵琶湖博物館の施設紹介	琵琶湖汽船	琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.458			
琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀子育てネットワークだより 第13号	琵琶湖博物館の催し物案内	れいかる<夏号> vol.41			
琵琶湖博物館を巡るコース、琵琶湖大橋クルーズの紹介	さらさ(かわの情報誌)	琵琶湖博物館の紹介	旅こよみ(JR西日本)			
琵琶湖博物館の紹介	遊び100選	琵琶湖博物館の紹介	ぶらり蓮探訪(JR西日本)			
琵琶湖博物館の催し物案内	ドキドキサクスvol.20	琵琶湖博物館の案内	滋賀の旅(JR西日本)			
琵琶湖博物館の蟹気楼の写真	リビング滋賀 1126号	琵琶湖博物館の催し物案内	教育しが(滋賀県教委) No.1			
琵琶湖博物館水族展示室の紹介	水族館の不思議な生き物	琵琶湖博物館の催し物案内	家族の絆(西宮市教委) vol.28			
5	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.84	7	琵琶湖博物館の催し物案内	日本の合戦 No. 50	
	琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.456		琵琶湖博物館の催し物案内	じゃらん(関西・東海版) 109号	
	琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 5号	8	琵琶湖博物館の催し物案内	関西ファミリー・ウォーカー夏休み号	
	琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.411		琵琶湖博物館でのイベント案内	JAF Mate	
	学会でも博物館学~どう伝える?生態学の面白さ、事例報告「植物を好きになってもらうための展示会『のびる・ひらく・ひろがる 植物がうごくとき』布谷知夫 布谷知夫 芦谷美奈子 芸員、芦谷美奈子 芸員	月刊ミュゼ vol.76	8	琵琶湖博物館の催し物案内	リビング(滋賀、京都中央・東南・南西、高槻・茨木、枚方・交野、大阪)	
	琵琶湖博物館の紹介 松田征也 専門学芸員のコメント	ナショナルジオグラフィック 日本版		琵琶湖博物館の催し物案内	PORTAL No.056	
	琵琶湖博物館の催し物案内	全科協ニュース vol.36		琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀旅人(県イベント情報誌)<夏号>	
	琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀の旅		琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀県からのお知らせ(暮らしの情報)	
	琵琶湖博物館の施設紹介	科学館へようこそ		琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.459	
	琵琶湖博物館の紹介	LAFORÉT (ラフォーレ通信)		琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 8号	
		琵琶湖博物館の催し物案内		日経サイエンス 418号		
		琵琶湖博物館の紹介		昆虫と自然		
		「びわ湖生命の水プロジェクト」WWF、プリジストン、琵琶湖博物館うおの会の活動紹介	Leaf			
		琵琶湖博物館で開催された「第1回びわますフォーラム」の紹介	パンダニュース(WWF) 夏号			
			モーニングくさつ vol.27			

月	記事テーマ	掲載雑誌社名	月	記事テーマ	掲載雑誌社名
8	琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.412	10	琵琶湖博物館の紹介	SOUGETSU (草月流80周年記念誌)
	琵琶湖博物館の紹介	関西じゃらん110号	10	琵琶湖博物館の催し物案内	おとなのいい旅 (東日本版)
	琵琶湖博物館の紹介 大津西武のイベント「夏休みの自由研究 ～琵琶湖の魚たち～」 協力：琵琶湖博物館 リンクについての琵琶湖博物館の考え方	a・haha vol. 88 SEIBU NOW これからホームページをつくる研究者のために	11	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 湖国の伝統食を語る 喜多品老舗当主と川那部館長との対談 ミュージアムボランティアの活動 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 嘉田由紀子滋賀県知事の学生時代から琵琶湖博物館オープン、知事になるまでの話 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.89 博物館研究 No.462 子供の科学 11号 あかね(京一中洛北高校同窓会誌) 関西電力新聞 メジャーレイク (滋賀の学生情報誌) にゅーすもりやま No.417 Oggi アサヒカメラ
9	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.87	12	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内 / 琵琶湖博物館の施設紹介	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.90
	琵琶湖博物館の催し物案内	大人組		琵琶湖博物館の催し物案内	PORTAL No.060
	琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.460		琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 12号
	琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 9号		琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.419
	開館10周年を迎える滋賀県立琵琶湖博物館 琵琶湖博物館の紹介	都道府県展望(全国知事会) 京阪神エルマガジン No.378 BY BLUE vol.19		琵琶湖博物館の紹介	松湖荘(松下電器健保組合保養所パンフレット) 滋賀旅人(県イベント情報誌) <冬号> ビワズ通信 (アクア琵琶情報誌)
琵琶湖固有の魚たち 写真資料提供	たのしい水族館 2007 CALENDER	1	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.91	
琵琶湖博物館の魚の写真のカレンダー	元気 UP! 関西 vol.38		琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 1号	
琵琶湖博物館の展示の紹介	本当にいる世界の「未知生物」案内		琵琶湖博物館の催し物案内	日経サイエンス 424号	
『ピワコオオナマズ』写真資料提供	Si・Di・Fa 秋号		琵琶湖博物館の催し物案内	れいかる <冬号> vol.43	
琵琶湖博物館の紹介	ブルータス		琵琶湖北上 バイクでツーリング 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の催し物案内	ガクシン	
琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.414	WWFが琵琶湖博物館の協力のもと行った琵琶湖命の水プロジェクトの紹介 / 琵琶湖博物館うおの会の紹介	にゅーすもりやま No.421		
10	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.88	琵琶湖博物館の催し物案内	PORTAL No.061	
	琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.461	琵琶湖博物館の催し物案内	モーニングくさつ vol.28	
	琵琶湖博物館の催し物案内	日経サイエンス 420号	琵琶湖博物館の催し物案内	プレシャス	
	琵琶湖博物館の催し物案内	子供の科学 10号	琵琶湖博物館の紹介と写真資料提供	ネイチャーステーション	
	琵琶湖博物館の催し物案内	れいかる <秋号> vol.42			
琵琶湖博物館の催し物案内	PORTAL No.058				
琵琶湖博物館の紹介	ぶんぶん(朝日新聞地元情報誌)宝塚市、川西市				
琵琶湖博物館の催し物案内	教育しが(滋賀県教委) No.2				
琵琶湖博物館の催し物案内	いっとく				
琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.416				
琵琶湖博物館の催し物案内	モーニングくさつ vol.27				
「たいへんだ」ということは、みんなわかっている。川那部館長の話/琵琶湖博物館うおの会の紹介/琵琶湖博物館の紹介	Yes Kyoto it! (京都放送)				

月	記事テーマ	掲載雑誌社名	月	記事テーマ	掲載雑誌社名
1	地域とともに成長する博物館 琵琶湖博物館十年の成果 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の紹介	WEDGE 京都 子連れパワーアップ情報 南びわこ！冬のええとこクイズラリー	3	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の施設紹介	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.93 博物館研究 No.465 子供の科学 3号 国土交通(国土交通省広報誌)
2	施設だより 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀プラス1 (県広報誌) vol.92 博物館研究 No.464 子供の科学 2号 にゅーすもりやま No.423 近くていい旅 電車&ウォーク (JR日帰り情報カレンダー)		琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の紹介 鳥瞰図画家 延木由紀子さんによる「琵琶湖博物館」の鳥瞰図	滋賀(観光ベストガイド)びわこビジターズビューロー にゅーすもりやま No.425 KANSAI 1週間 No.1 リビング滋賀

(4) テレビ放映・ラジオ放送記録

放送日	番組名	内容	媒体	担当者
4	東京キッズクラブ	水族展示、ピワコオオナマズ、固有種について	BSフジ	孝橋主査
3	松井桂三のさんさんわいど	琵琶湖の様子と黄色のピワコオオナマズについて	KBSラジオ	前畑総括学芸員
4	びびっとびわこ	ホンモノコ減少の理由	びわ湖放送	松田専門学芸員
6	デイリーかわらばん	ギャラリー展示「博物館を楽しもう - はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」について	滋賀ケーブルネットワーク	谷口主査
		体験型博物館について	韓国MBC放送	前畑総括学芸員
12	ニュース番組	トピック展示「近江の奇祭筑摩の人々」	関西テレビ	橋本主任学芸員
13	ニュース番組	トピック展示「近江の奇祭筑摩の人々」	びわ湖放送	橋本主任学芸員
15	県政テレビタ刊プラスワン	わくわく探検隊 紙すきをしよう	びわ湖放送	孝橋主査
29	県政テレビ週刊プラスワン	ギャラリー展示「つかんだ・つんだ・いつもいた - あんたの生き物は、いま・・・? -」、水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・?」	びわ湖放送	孝橋主査
5	1 おうみ発610	黄色いナマズ、ディスカバリールーム	NHK大津	松田専門学芸員
1	ニュース番組	黄色いナマズ、ギャラリー展示、集う・創る・使う新空間	びわ湖放送	松田専門学芸員
10	滋賀プラスワン インフォメーション	ギャラリー展示	FM滋賀	松田専門学芸員
10	DAILY!かわらばん		滋賀ケーブルネットワーク	
12	知っとこ滋賀		KBS京都	
13	県政テレビ週刊プラスワン	「里山体験教室」	びわ湖放送	孝橋主査
6	5 県政テレビタ刊プラスワン	琵琶湖博物館協議会委員募集	びわ湖放送	杉野課長補佐
25	おでかけパレット「琵琶湖周遊」	外観、水族展示	東海テレビ	孝橋主査
	読売ニュースナビ関西発	竹生島でのカワウの被害	CS放送	亀田専門学芸員
7	27 もっともっと関西	富江家での知事のインタビュー	NHK大阪	孝橋主査
8	2 おうみ発610	ブルーギル	NHK大津	松田専門学芸員
8	県政テレビタ刊プラスワン	企画展、水族企画展、富江家	びわ湖放送	孝橋主査
16	DAILY!かわらばん		滋賀ケーブルネットワーク	
18	田淵岩夫の特ダネ! てれび	企画展、水族企画展、チョウザメ、カイツブリ	京都放送	松田専門学芸員 孝橋主査
20	ザ・サンデー	黄色いピワコオオナマズ	日本放送	孝橋主査
	琵琶湖が動く	琵琶湖の移動と環境変化	ケーブルネット鈴鹿	里口主任学芸員

放送日	番組名	内容	媒体	担当者	
9		NHKラジオ深夜便	魚と人との共存	NHKラジオ	中島上席 総括学芸員
	11	見てハッスル！ 聞いてハッスル！	琵琶湖について学ぶ子ども向け教育番組	NHK教育テレビ	孝橋主査
	未定	自主制作映画 「しんおん」	トンネル水槽、ディスカバリールーム、A展示室、エントランス	滋賀ロケーションオフィス	孝橋主査
	23	クイズどんでん グランプリ	館内をめぐるクイズを出題	近鉄ケーブルネットワーク	孝橋主査
10	16	鶴瓶の家族に乾杯	黄色いピワコオオナマズ、ピワコオオナマズ、博物館外観	NHK総合	杉野課長補佐
10 ～		ダーウィンが来た	オオミジンコ、水族展示室、博物館から見た琵琶湖	NHK	杉野課長補佐 楠岡主任学芸員
11	3	Voice	長浜市下坂浜の遺構について	MBS	用田総括学芸員 里口主任学芸員
	9	県政テレビタ刊 プラスワン	観察会「比良の里山探検」、「よその博物館探検」	びわ湖放送	孝橋主査
12	1	知っとこ滋賀	「滋賀県県民環境学習のつどい」、ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」	KBSラジオ	中村主査
	8	びびっとびわこ	わくわく探検隊「富江家はっけんブックづくり」	びわ湖放送	中村主査
	20	県政テレビタ刊 プラスワン	ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」	びわ湖放送	孝橋主査
	23	県政テレビ週刊 プラスワン	ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」、「博物館でスゴロクをしよう」	びわ湖放送	孝橋主査
1	19	県政テレビタ刊 プラスワン	平成18年度 琵琶湖博物館研究発表会「めざしたこと・できたこと・これからのことー琵琶湖博物館の10年ー」、ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」		
	9	笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ	トピックス展示「イノシシ」	KBSラジオ	松田専門学芸員
	26	おうみ発610	特別研究セミナー	NHK天津	橋本主任学芸員
	27	県政テレビ週刊 プラスワン	ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」、琵琶湖博物館の楽しみかたの極意	びわ湖放送	孝橋主査
	30	おうみ発610	丸子船の実験航行	NHK天津	牧野久実 専門学芸員
2	7	県政テレビタ刊 プラスワン	平成18年度 琵琶湖博物館研究発表会「大集合！ 琵琶湖の研究」	びわ湖放送	孝橋主査
	28	おうみ発610	琵琶湖博物館から中継	NHK天津	孝橋主査
3	8	おうみ発610	水族飼育員	NHK天津	孝橋主査
	23	県政テレビタ刊 プラスワン	ギャラリー展示「鉱物・化石展「続・湖国の大地に夢を掘る」」	びわ湖放送	孝橋主査

(5) 予 算

2006年（平成18年）度歳入状況 (円)

科 目	決 算 額
使用料及び手数料	184,002,485
財 産 収 入	1,216,150
諸 収 入	3,405,403
合 計	188,624,038

2006年（平成18年）度歳出状況 (円)

事 業 名	事 業 内 容	決 算 額
管 理 運 営 費	施設維持費、烏丸半島整備費、事務費	287,415,855
調査資料収集事業費	研究費、研究備品、資料収集製作、資料整理保管、水族飼育	182,804,154
展 示 事 業 費	企画展示、常設展示、展示維持管理、展示用印刷物	168,946,996
情報交流事業費	情報システム管理、データ入力、図書整備、交流事業開催、フィールドレポーター	51,395,245
	合 計	690,562,250

4 存在基盤の確立

(1) 滋賀県立琵琶湖博物館協議会

第1回

開催日時 2006年11月1日(水) 13:30~16:30

場 所 琵琶湖博物館セミナー室

第2回

開催日時 2007年2月23日(金) 13:30~16:30

場 所 琵琶湖博物館セミナー室

第5期委員

(任期：2004年9月1日~2006年8月31日)

氏 名	区 分	現 職 (2006年4月現在)
伊 部 加 代	学 校 教 育	長浜市立びわ南小学校 教諭
長 瀬 良 文	学 校 教 育	東近江市立五個荘中学校 教諭
西 尾 久美子	社 会 教 育	エコ村ネットワーク副理事長
佐 藤 祐 子	社 会 教 育	全国旅館生活衛生同業組合連合会青年部
永 田 俊	学 識 者	京都大学生態学研究センター教授
篠 原 徹	学 識 者	国立歴史民俗博物館民俗研究部 教授
内 田 紘 臣	学 識 者	串本海中公園センター 館長
村 井 良 子	学 識 者	(有)プランニング・ラボ 代表取締役
岡 村 恵 子	学 識 者	毎日新聞社大津支局 記者
横 山 俊 夫	学 識 者	京都大学大学院 地球環境学堂 教授・三才学林長 同大人文学研究所 教授(両任)
西 野 麻知子	学 識 者	滋賀県立琵琶湖・環境科学研究センター 総括研究員
木 上 秀 保	学 識 者	滋賀県脊髄損傷者協会 副会長
ブライアン ウイリアムズ	学 識 者	風景画家
沼 井 哲 男	学 識 者	公募委員
福 田 正	学 識 者	公募委員

第6期委員

(任期：2006年9月1日~2008年8月31日)

氏 名	区 分	現 職 (2007年3月現在)
八 里 良 子	学 校 教 育	甲賀市立甲南中部小学校 校長
片 山 勝	学 校 教 育	長浜市立北中学校 校長
西 尾 久美子	社 会 教 育	エコ村ネットワーク副理事長
青 木 繁	社 会 教 育	(有)グリーンウォーカー・ネイチャーガイド研究所 代表取締役
永 田 俊	学 識 者	京都大学生態学研究センター教授
篠 原 徹	学 識 者	国立歴史民俗博物館民俗研究部 教授
西 源二郎	学 識 者	東海大学海洋研究所 教授 東海大学海洋科学博物館 館長
村 井 良 子	学 識 者	(有)プランニング・ラボ 代表取締役
山 田 史 生	学 識 者	共同通信社大津支局 支局長

横山俊夫	学識者	京都大学副学長 同大学院地球環境学堂 教授・三才学林長 同大人文学研究所教授（両任）
伊達仁美	学識者	京都造形芸術大学芸術学部 助教授
木上秀保	学識者	滋賀県脊髄損傷者協会 副会長
劉穎(りゅうえい)	学識者	翻訳者・中国語講師
辻洋子	学識者	公募委員
佐川雅彦	学識者	公募委員

(2) 企画・計画

1) 第二段階（2006年度～2010年度）活動計画

2002年12月に策定した琵琶湖博物館中長期目標『地域だれでも・どこでも博物館』の実現をめざし、博物館の運営方針としてその具体的な取り組み方策および必要な環境の整備について明らかにするため、2005年3月に琵琶湖博物館中長期基本計画が策定された。2006年度は計画の第二段階の初年度であり、2006年3月に中長期基本計画第二段階（2006年度～2010年度）活動計画および2006年度行動計画を策定した。2007年2月には2006年度行動計画の実績・評価を行うとともに、2007年度の行動計画案を作成し、琵琶湖博物館協議会で報告した。

2) 琵琶湖博物館広報・経営戦略

琵琶湖博物館の「利用されることで成長・発展する博物館」という博物館の理念は、一定の支持を集め、これまで多くの来館者を迎えることができた。しかし、ここ数年は来館者数の落ち込みが目立つようになり、博物館利用を促すための効果的な広報活動と効率的な運営を行うため、2006年度から上席総括学芸員をリーダーとする広報・経営戦略検討チームを立ち上げた。2006年度琵琶湖博物館広報・経営戦略」行動計画の進行管理を行うとともに、2007年度の「琵琶湖博物館広報・経営戦略」行動計画案を作成した。

3) 琵琶湖博物館中長期基本計画第二段階活動計画 2006年度行動計画の実績および自己評価

基本方針	中長期基本計画(第二段階)		第二段階(2006年度~2010年度)の活動計画				2006年度行動計画の実績・評価		備考	
	実施方針および指標・目標値	相当部課グループ名	事業・活動名	活動方針・内容	達成目標	目標値	達成度	目標達成状況		自己評価
										評価
<p>資料が活用できる博物館</p> <p>博物館機能の強化</p>	<p>琵琶湖地域で保存された資料や情報が、地域博物館や関連施設で必要に応じて相互に利用できる関係を構築し、資料の情報を共有する。</p> <p>【指標・目標値】 分野別データベース公開数(総数) 11件→15件</p>	<p>資料活用担当</p>	<p>資料の整備と活用サービスの推進</p>	<p>資料整備・活用方針の策定 未整理資料の整理の充実 有効な活用サービスの検討 資料の活用サービス内容の発信</p>	<p>収蔵資料情報の公開(資料の登録・管理方法や活用サービスの内容を含む)</p>	<p>資料整備・活用方針の策定</p>	<p>概ね達成</p>	<p>方針について、検討結果をまとめることができました。</p>	<p>○</p>	<p>期限保存資料(永久保存を前提としない資料)の活用度を一層高めるための方法を提示できた。 永久保存資料活用に向けての方向性をある程度提示できた。 今後、展示担当や交流担当との一層の連携が必要である。</p>
			<p>代替療法法の確立とIPMの推進</p>	<p>資料・環境・人に影響の少ない適切なIPM(総合的資料有害虫管理)の検討 IPM推進体制の整備</p>	<p>悪影響が少なく効果的な適正な導入と当館に対応したIPM手法の確立</p>	<p>当館独自のIPM基準値を設定※ IPM: Integrated Pest Management 総合的有害生物防除管理</p>	<p>これまで実施してきた生物環境調査(由緒調査、空中調査、フリップ調査、専門家による調査、虫と菌類を踏まえ、IPM基準値を設定した。</p>	<p>○</p>	<p>これらを実施してきた生物環境調査(由緒調査、空中調査、フリップ調査、専門家による調査、虫と菌類を踏まえ、IPM基準値を設定した。</p>	<p>IPMを実施し、資料を長期保存するための目標となる値の一つを設定することができた。 今後、基準値の維持、基準値を超える場所での対処、当館としてのIPMの全体的な考え方の整理が必要</p>
			<p>電子図鑑の公開</p>	<p>電子図鑑公開のさらなる推進 資料収集・研究成果公表としての位置づけの強化</p>	<p>7分野の電子図鑑の公開 既存の電子図鑑の増補改訂</p>	<p>電子図鑑の新規公開 1分野</p>	<p>電子図鑑「硅藻」を正式に公開した。</p>	<p>○</p>	<p>電子図鑑「硅藻」を正式に公開した。</p>	<p>今後の増補・改良により、さらなる発展が期待される。</p>
			<p>資料情報の公開・増補・改良</p>	<p>既存資料データベースの増補と利用促進のための改良 未公開データベースの公開 データ入力・整理のための人員確保 琵琶湖から国内外への研究成果の発信 データベース作成・改良の外部委託</p>	<p>2006年まで:計15分野のデータベース公開、登録件数20%増 2010年まで:生物・地学全分野の英文データベースの公開、当館データベース以外の資料情報公開の推進</p>	<p>データベース3分野新規公開</p>	<p>民具データベースおよび化石標本、植物および薬標本、昆虫標本データベースの英語版データベースを公開した。</p>	<p>○</p>	<p>4分野のデータベース公開を行い、鳥類・哺乳類データベースの公開準備も進めており、目標値以上の成果が得られた。</p>	<p>第二段階指標 2007年度 組織目標</p>
<p>研究を進めて活かせる博物館</p>	<p>琵琶湖博物館のテーマを活かした研究を推進する中で、琵琶湖博物館ならではの学際的あるいは地域的な研究を各専門分野の中で確立する。</p> <p>【指標・目標値】 学際的・地域的研究成果の公表 18件→20件</p>	<p>研究部</p>	<p>総会・共同研究を軸とした異分野の研究者による研究の活発化 地域の人びととの研究の強化 琵琶湖から国内外への研究成果の発信 学芸職員が課題解決に向け努力する</p>	<p>琵琶湖地域における研究課題の明確化 地域の人びと、館外研究者・機関との協力による研究課題解決方法の確立 これらの活動の結果として、学際的・地域的な研究 20件</p>	<p>2007年度研究課題の申請件数は、総合研究が11件であった。 審査会の結果、共同研究の2件は採択されなかった。</p>	<p>○</p>	<p>今年度の申請数実績は、総合研究2件、共同研究11件で、合計数は目標値と同じであり、目標はほぼ達成していると考えられる。 今後最低限の数を維持していきたい。 総合研究は3件にならなかったが、2008年度の総合研究として立ち上げる準備は行っている。</p>	<p>第二段階指標</p>		

※担当部課・グループ名の()内は、2007年度の担当者

評価
○:大いに評価
○:ますます評価
△:次年度に向けて対応策を検討
×:ほとんど評価できない

中長期基本計画(第二段階)		第二段階(2006年度~2010年度)の活動計画				2006年度行動計画の実績・評価		備考			
基本方針	実現方策および指標・目標値	担当部署グループ名	事業・活動名	活動方針・内容	達成目標	目標値	達成度	自己評価			
	<ul style="list-style-type: none"> ・目標像「地域だけでなく、どこでも博物館」に沿った展示交流空間の更新整備を行う。 ・地域の入びとの参加による展示を重視し、琵琶湖博物館と地域との共同研究や活動成果の発表の場にする。 ・琵琶湖地域における博物館との関係性を密にしながら、国内や海外の展示を計画する。 ・琵琶湖博物館における活動の特色である展示交流員のある展示交流員あり方を検討し、交流の専門職として組織の中で位置づける。 	事業部 交流担当 展示担当	「(仮称)集う・使う・創る新空間」の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・情報利用室での展示交流空間の創設 ・館内外の交流活動を通じた交流空間のあり方の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流空間としての情報利用室の整備 ・展示交流空間の利用方針の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報利用室を利用した新しい交流空間の試行結果のまとめ一式 	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住人等による活動を8回行い、これらを踏まえ、さらには腕手が良い空間とするための整備および実施結果のまとめを行った。 ・「集う・使う・創る新空間(情報利用室)運営要領および利用規約を策定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試行結果のまとめは予定どおり行うことができた。 	第二段階指標	
	<ul style="list-style-type: none"> ・目標像「地域だけでなく、どこでも博物館」に沿った展示交流空間の更新整備を行う。 ・地域の入びとの参加による展示を重視し、琵琶湖博物館と地域との共同研究や活動成果の発表の場にする。 ・琵琶湖地域における博物館との関係性を密にしながら、国内や海外の展示を計画する。 ・琵琶湖博物館における活動の特色である展示交流員のある展示交流員あり方を検討し、交流の専門職として組織の中で位置づける。 	展示担当	地域の入びと参加による展示の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・常設展示、企画展示、キャラクター展示への地域住民参加型や共催型展示の導入 ・情報利用室を用いた交流空間における地域住民の活動成果の効果的展示 	<ul style="list-style-type: none"> ・はしかけの活動成果を取り入れた、キャラクター展示の開催や常設展示の更新 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の入びととの参加展示や当館と地域との共同研究や活動の成果7回(キャラクター展示3回、企画展関連1回、情報利用室を用いた活動成果の発表3回) 	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展示1回、キャラクター展示3回、企画展関連展示1回、新空間を用いた活動紹介を8回行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に「集う・使う・創る新空間」では、予定回数以上に地域の入びととの参加展示が実施でき、目標値を達成できた。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・目標像「地域だけでなく、どこでも博物館」に沿った展示交流空間の更新整備を行う。 ・地域の入びとの参加による展示を重視し、琵琶湖博物館と地域との共同研究や活動成果の発表の場にする。 ・琵琶湖地域における博物館との関係性を密にしながら、国内や海外の展示を計画する。 ・琵琶湖博物館における活動の特色である展示交流員のある展示交流員あり方を検討し、交流の専門職として組織の中で位置づける。 	展示担当	展示交流員あり方の検討	<ul style="list-style-type: none"> ・専門職としての訓練の継続的かつ効果的な実施 ・展示室での立場の位置づけの明確化 ・他のグループの活動との有機的な結びつきを検討 ・展示室での交流活動の円滑な運営の推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門職として来館者との対話を進めるための研修の実施 ・常設展示に関する館外研修の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・2006年度企画展示に関する館外研修1回 ・展示室における交流活動については、方向性を探りつつある段階で、より具体的な方向性を見いだすための検討会(展示交流員との意見交換会)を実施した。 	概ね達成	<ul style="list-style-type: none"> ・2006年度企画展示に関する研修を1回実施した。 ・展示室内における交流活動については、方向性を探りつつある段階で、より具体的な方向性を見いだすための検討会(展示交流員との意見交換会)を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展示に関する研修は、前年度に館外では館内で行った。 ・検討会(意見交換会)を開催したが、具体的な内容検討は2007年度以降となる。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・目標像「地域だけでなく、どこでも博物館」に沿った展示交流空間の更新整備を行う。 ・地域の入びとの参加による展示を重視し、琵琶湖博物館と地域との共同研究や活動成果の発表の場にする。 ・琵琶湖地域における博物館との関係性を密にしながら、国内や海外の展示を計画する。 ・琵琶湖博物館における活動の特色である展示交流員のある展示交流員あり方を検討し、交流の専門職として組織の中で位置づける。 	展示担当	既存展示の評価と改善	<ul style="list-style-type: none"> ・解説パネル等の見えやすさの改善 ・常設展示の改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・既存展示や解説パネル等の見え方の改善 ・常設展示の部分的更新の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の見えやすさの改善 ・改善方針のまとめ一式 	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・展示のみやすさを改善方針を立て、可能なところから改善を行った。 ・解説パネルの位置の改善はほぼ完了した。 ・常設展示では、「この10年」の展示更新(追加)、水族館展示の展示水槽前のスクロップ化工事(2箇所)は年度内に完成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示のみやすさを改善方針を立て、可能なところから改善を行った。 ・解説パネルの位置の改善はほぼ完了した。 ・常設展示では、「この10年」の展示更新(追加)、水族館展示の展示水槽前のスクロップ化工事(2箇所)は年度内に完成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示のみやすさを改善方針を立て、可能なところから改善を行った。 ・解説パネルの位置の改善はほぼ完了した。 ・常設展示では、「この10年」の展示更新(追加)、水族館展示の展示水槽前のスクロップ化工事(2箇所)は年度内に完成した。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・目標像「地域だけでなく、どこでも博物館」に沿った展示交流空間の更新整備を行う。 ・地域の入びとの参加による展示を重視し、琵琶湖博物館と地域との共同研究や活動成果の発表の場にする。 ・琵琶湖地域における博物館との関係性を密にしながら、国内や海外の展示を計画する。 ・琵琶湖博物館における活動の特色である展示交流員のある展示交流員あり方を検討し、交流の専門職として組織の中で位置づける。 	展示担当ほか	国内外の博物館との共同展示の推進	<ul style="list-style-type: none"> ・琵琶湖地域の博物館との関係強化 ・国内や海外の博物館との共同展示の計画検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内外との共同展示の計画策定 ・フェアブル100年展の準備と実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・フェアブル100年展の実施設計一式 	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の基本設計に続き、展示実施設計を行い、年度内に完了した。 ・日本側5館が協力し、フランス側との資料、標本等の活用に関する調整、後援、協賛等にかかる交渉、図録作成等の準備を行った。 ※日本動物園水族館協会加盟52館が協力し、希少淡水魚種保存のため企画展を一斉に開催。(当初計画外) 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本側5館およびフランス側との共同企画であり、方針決定、事務処理、調整等に時間を要するが、経費および作業の分担が可成りあり、かつ、各館の専門家により様々な視点でのアイデアが出されるため効率的、効果的に実施設計を進めることができた。 		

中長期基本計画(第二段階)		第二段階(2006年度～2010年度)の活動計画					2006年度行動計画の実績・評価			備考	
基本方針	実施方針および指標・目標値	担当部署グループ名	事業・活動名	活動方針・内容	達成目標	目標値	達成度	目標達成状況	評価		自己評価
		事業部 交流担当 展示担当	新しい交流のあり方、内容の検討およびその展開	・展示交流員や「(仮称)東う・使う・創る新空間」のあり方を含む、展示室での交流のあり方の検討 ・中長期目標実現に向けた地域での交流のあり方の検討 ・館内外の既存交流事業の位置づけと方向性の検討	・館内外の交流について新たな交流方針の確立	・新たな交流のあり方を検討するため体制の確立と検討のまとめ(館内の交流について方向性の打ち出し)一式	概ね達成	・展示交流空間や地域での交流のあり方、館内外の既存交流事業の位置づけと方向性を検討し、その結果をまとめた。 ・新たな交流のあり方を検討するための体制についてその方向を検討し、まとめた。	○	・展示担当と交流担当により、既存交流事業の今後の方向を中心に展示交流空間や地域での交流のあり方を検討し、館内の交流についての方向をまとめた。 ・今後の検討体制については検討方向を示すにとどまった。	
		交流担当	交流・サービス事業の充実(学校団体)	・体験学習プログラムの開発、実施、改良 ・教員対象の研修やフィールドでの事業の実施 ・シンクタンク機能を活かした環境学習等の支援 ・教員や地域活動指導者の情報交換や交流のための空間の設置	・目標体験学習プログラム数13→17 ・教員等指導者研修参加者数1000人/年 ・「エデュケーターナー」の設置	①体験学習プログラム13→15 ②教員等指導者研修参加者数900人/年	①達成 ②概ね達成 ③達成	・体験学習プログラム「3Dびわ湖」と「ピョンホールカメラで写してみよう」を開発して教員等指導者研修参加者数900人/年を達成した。	①○ ②○	・体験学習プログラムの開発は、概ね計画通りに進めることができた。 ・教員研修は、時期により申し込み人数の差が大きかった(最少は0人)。今後、時期を見極めて計画したい。	第二段階指標
	博物館機能の強化 体験と交流を促す博物館	交流担当	観劇会・講座・体験教室の充実	・既存事業プログラムの継続的見直し ・博物館施設の活用促進 ・地域の機関や団体等との交流事業の協力的な関係構築 ・研修室等が活動できる人づくりにつながる事業の実施	・他団体との協働割合の増加・維持(70%) ・プログラム内容の充実 ・博物館施設の活用	①交流事業数25件 ②他団体との協働事業実施率65% ③外部団体による博物館施設の活用に関する内部規定の作成	①達成 ②概ね達成 ③達成	・交流事業数は年度末までに29件で目標を達成したが、他団体との協働事業数は17件、実施率は58%にとどまらず、目標値は達成できなかった。 ・外部団体による博物館施設の活用に関する内部規定の原案を作成した。	①○ ②○ ③○	・事業数では目標を達成したが、協働事業実施率はやや低い達成率となった。 ・当初予定になかった夏休みや10周年関連イベントの当館施設の一つとなった。 ・独自の主催事業を多く実施するは活動事業実施率は下がるという自己矛盾を含んでいる。 ・施設利用内部規定は、着手が遅れたため担当室での原案作成段階にとどまった。	「対話と広場」で開演
		交流担当	生涯学習、学校教育としての博物館利用の促進	・博物館が持つ芸術者への学習支援活動(生涯学習・学校教育のための必要と博物館との関わり)の強化 ・活動を通じた学習支援機能強化へのノウハウの蓄積 ・活動計画を担える館内職員の育成	・利用手引き書の完成とその配布	・利用手引き書作成方針の作成	達成	・学校団体だけでなく地域団体も意識した利用手引き書の作成方針を固め、目標を達成した。	○	・現行版の見直し、業者委託による作成の検討、販路展開の算出、広報・交流アドバライザーとの協同活動、博物館教員研究会での意見聴取等、十分な検討・協議を経て方針を決定することができた。	
		交流担当	◆2007年度新規事業 教員研修、地域文化協賛を含めた学校サテライト博物館の設置	・博物館の展示物を利用した学校サテライト博物館の活用 ・施設活用による体験学習を通じた児童生徒の学習力向上を図る研修 ・学校教員の指導力向上を図る施設として活用 ・博物館、学校、地域の交流を深め、地域全体としての博物館機能の強化	・学校サテライト博物館の設置および運営の開始	-	-	【2006年度の状況】 ・企画展「ギャラリー」で展示された展示物、標本の再利用を推進する一歩として、移動博物館巡回計画を立てた。広報・交流アドバライザーからの助言により、受け入れ校が決定した。			

中長期基本計画(第二段階)		第二段階(2006年度～2010年度)の活動計画				2006年度行動計画の実績・評価			備考	
基本方針	変現方策および指標・目標値	担当部課グループ名	事業・活動名の充実	活動方針・内容	達成目標	目標値	目標達成状況	自己評価		
		交流担当	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信機能の強化 ・フィードバック制度の位置づけの再確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙媒体情報の電子メールおよびウェブサイトの提供開始 ・過去の紙媒体の電子化と提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィードバック制度の電子化達成 ・2004-2005年の電子化と提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・便りと掲示板の電子化が完了し、誰でも閲覧、ダウンロードが可能となった。 ・電子媒体のみの希望者には紙の「便り」および「掲示版」の送付を中止し、新号発行の情報のみを電子メールで配信し、各自でダウンロードする機能が整備された。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2003年度から現在までのフィードバックが電子化でき、目標値を達成することができた。 ・フィードバックの位置づけも明確になってきたが、今後は博物館中心の活動から各地域に根ざした活動に広げていく必要がある。 			
博物館機能の強化	<ul style="list-style-type: none"> ・「はしかけ」や「フィードバック」とそこから展開する地域のグループ活動の応援を行う。 ・地域で活動できる人づくりにつながる観覧会や講座などを実施する。 	交流担当	<ul style="list-style-type: none"> はしかけ制度の発展 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館のさまざまな事業・行事への積極的協働の推進 ・会員間の相互交流、グループ間の協働態勢の促進 ・従来の制度(ボランティア、友の会)との比較検討を含めた利用者との関係に関する新たな仕組みの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・はしかけや地域との協働による観覧会・講座の割合の増加 ・担当者の専門分野以外の活動への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ①はしかけグループ数 14→15 ②交流会 2回 	<ul style="list-style-type: none"> ①未達成 ②達成 	<ul style="list-style-type: none"> ①× ②○ 		
対話と応援ができる博物館	<ul style="list-style-type: none"> 【指標・目標値】 はしかけや地域との協働による観覧会・講座の割合 59%→70% 	交流担当	<ul style="list-style-type: none"> 観覧会・講座・体験教室の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・既存事業プログラムの継続的見直し ・博物館施設の活用促進 ・地域の機関や団体等との交流事業の効果的な開催 ・研修会等地域で活動できる人づくりにつながる事業の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・他団体との協働割合の増加・維持(70%) ・プログラム内容の充実 ・博物館施設の活用 	<ul style="list-style-type: none"> ①交流事業数 25件 ②他団体との協働事業実施率 65% ③外部団体による博物館施設の利用に関する内部規定の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ①達成 ②概ね達成 ③概ね達成 	<ul style="list-style-type: none"> ①○ ②○ ③○ 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業数では目標を達成したは、協働事業実施率はやや低い達成率となった。 ・当初予定になかった夏休みや10周年関連イベントの当部実施率を引き下げる要因の一つとなった。 ※独自の主催事業を多く実施するほど協働事業実施率は下がるという自己矛盾を含んでいる。 ・施設利用内部規定は、担当者で運れたため担当にとどまった。 	第二段階指標 再掲(「体縁と交流」を促す博物館と関連)
		企画調整課	<ul style="list-style-type: none"> 質問対応の系統化とデータベース化 	<ul style="list-style-type: none"> ・問い合わせ対応職員が活用しやすい質問情報のデータベース化 ・質問回答集(FAQ)の作成と公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問情報の蓄積管理に関する体制の確立と公開に向けての処理方針の確立 	<ul style="list-style-type: none"> ・質問情報処理方針の検討のまとめ(方向性の打ち出し)一式 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね達成 	○	<ul style="list-style-type: none"> ・既存質問データの新たなデータベースへの移行方法、安定的な使用方法に関する検討を行う。内部の合意調整を図っていく必要がある。 	

中長期基本計画(第二段階)		第二段階(2006年度～2010年度)の活動計画					2006年度行動計画の実績・評価			備考
基本方針	実現方策および指標・目標値	担当部課グループ名	事業・活動名	活動方針・内容	達成目標	目標値	目標達成状況		自己評価	
							達成度	評価		
	<ul style="list-style-type: none"> 資料や情報を安全に保管、利用できる拠点と管理、利用できる拠点と設備・保護施設の増築と設備の拡充を計画的に図り、収集、整理された資料や情報は、展示交流空間においても活用できるようにする。 	資料活用担当	収蔵庫施設の充実と環境整備	<ul style="list-style-type: none"> 計画的な収蔵庫等の増設 空気環境の精密な状況把握 資料活用のための整備方針作成と整備確保環境の確保 	<ul style="list-style-type: none"> 活用資料の整備体制の確立 	<ul style="list-style-type: none"> 環境モニタリング装置の整備 	<ul style="list-style-type: none"> モニタリング装置の整備は進まなかった。 	△	<ul style="list-style-type: none"> モニタリングは現有設備で実施しており、各収蔵庫環境の問題点等はある程度把握していたが、センサーの位置や数の細かなモニタリングはできていない。 設備を改善・充実するためにはかなりの費用が必要であり、具体的な行動を起こせなかった。 	第二段階指標
	<ul style="list-style-type: none"> 【指標・目標値】活用資料の整備体制の確立 	企画調整課	情報システムを介した対話機能の充実	<ul style="list-style-type: none"> 対話機能改善のためのインフラ整備の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 対話機能に役立つシステム(メール・リングリス、ト、掲示板、ブログ等の機能)の運用の検討と導入 	<ul style="list-style-type: none"> サーバ更新計画への反映 	<ul style="list-style-type: none"> 達成 	○	<ul style="list-style-type: none"> 対話機能の充実が可能となるハードシステムの設計を行い、2007年度のサーバ更新計画に反映することができ、目標を達成した。 	
		総務課	県有施設建築物現況・劣化状況調査事業	<ul style="list-style-type: none"> 建築物現況・劣化状況調査(3年に1回) 建築物設備点検(毎年) 	<ul style="list-style-type: none"> 県有施設建築物現況・劣化状況調査の業務委託完了と安全対策の実施 	完了	<ul style="list-style-type: none"> 達成 	○	<ul style="list-style-type: none"> 県有施設での調査仕様が統一するため、建築課での仕様書内容の調査に時間を要し、契約が遅くなったが、以後は順調に進捗した。 	
		総務部 研究部 事業部	専門スタッフの配置・組織体制	<ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖地域の中での柔軟な職員配置 専門分野の特色を活かした組織の連携 中期的な目標と計画に従った学芸員の配置と区分 事業に関する継続的な見直し 事業に関する仕事量の公平な評価を行うための指標づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖博物館の目標実現のために必要な専門スタッフの適正配置 	<ul style="list-style-type: none"> 広報専門スタッフの配置 他の機関を含めた柔軟な職員配置 	<ul style="list-style-type: none"> 達成 	○	<ul style="list-style-type: none"> 広報・交流にかかわる専門の嘱託員を配置することができ、学校等に対する効果的な広報を実施することができた。 業務のかたちで外部に派遣された学芸員は、当館学芸員として派遣先で研究や事業に総意取り組んでいる。 	第二段階指標
	柔軟な運営組織	総務課	効率的な事務処理の推進	<ul style="list-style-type: none"> 効率的な事務処理の執行 グループ外業務(専門分野に関する業務など)の把握とそれをふまえた業務配分 	<ul style="list-style-type: none"> 総時間外勤務時間数の対前年度末比3.2%縮減 	<ul style="list-style-type: none"> 総時間外勤務時間数の対前年度末比3.2%縮減 	<ul style="list-style-type: none"> 一部達成 25%(8.6/32.0) 	△	<ul style="list-style-type: none"> 当館総時間外勤務時間の削減は前年度の8.6%の削減にとどまる見込みで、目標値の達成ができた。 	「専門スタッフの配置・組織体制」と連携

中長期基本計画 (第二段階)		第二段階 (2006年度～2010年度) の活動計画				2006年度行動計画の実績・評価			備考
基本方針	実現方策および指標・目標値	担当部課グループ名	事業・活動名	活動方針・内容	達成目標	目標値	達成度	目標達成状況	自己評価
社会的支援と新しい経営	<ul style="list-style-type: none"> 研究基金、助成、協賛を積極的に活用するなどの幅広い財源の確保に努める。 琵琶湖博物館らしさを追求し、「地域だれでもどこでも博物館」の目標に沿った活動を重点的に行うことにより、事業の効率化と質の向上をはかる。 	企画調整課	広報・経営戦略の具体的な展開	<ul style="list-style-type: none"> 不満足の高かった施設の改善・整備 「3T戦略」やトラリアルウィークなどの広報活動の実施 効果的・効率的な運営と柔軟な財源確保 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートの満足度80%達成 年間来館者数50万人 アンケートのリピート率6%以上の達成・維持 展示にかかかかからの取支バランスの改善 	<ul style="list-style-type: none"> 2006年度1年間の来館者は476,563人で2004年度比35,377人の増加であり目標値を達成した。 目標達成のため、琵琶湖博物館広報・経営戦略2006年度行動計画を展開していったことにより目標値の達成が可能になったものと考えられ、次年度以降の広報・経営戦略の継続的な実施が必要である。 資料提供数で見るとハブリシティの活用は前年度並となり、質・量ともに高めていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 2006年度の科研究費新規採択率は28%で昨年度並みであった。 応募数7件、採択2件 民間基金の研究助成申請数はまだ十分とはいえない。 	<ul style="list-style-type: none"> 協議会委員の改選では、保存科学の専門家、小・中学校の校長先生、旅行代理店等経歴者(公募委員)等の参加により、以前とはまた異なる分野の専門、立場の方にも就任いただいた。協議会会議以外の場でも新たなアドバイザーをお願したいと考えている。 評価機能の拡充について、さらに具体的な検討が必要である。 	第二段階指標
環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> 【指標・目標値】研究基金利用・助成数1.7件→1.9件 	研究部 総務課	幅広い財源の確保	<ul style="list-style-type: none"> 研究事業の進捗と展示・交流活動への活用のための研究費の十分な確保 公的機関からの委託事業費、公的助成金、民間基金等からの助成金の獲得 研究事業以外の事業における柔軟な財源確保の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 国など公的機関からの委託事業 現状維持 科学研究費補助金等の公的機関からの補助金 採択率30% 民間基金からの研究助成 研究職学会委員の3分の1 	<ul style="list-style-type: none"> 国等からの委託事業 新規0件 継続1件 科学研究費補助金(代表者)新規2件 継続3件 民間からの助成金(代表者)新規2件 継続0件 合計 8件新規4件 継続4件 	<ul style="list-style-type: none"> 2006年度の科研究費新規採択率は28%で昨年度並みであった。 応募数7件、採択2件 民間基金の研究助成申請数はまだ十分とはいえない。 	第二段階指標	
存在基盤の確立	<ul style="list-style-type: none"> 【指標・目標値】機能の拡充に向けての見直し一式 	企画調整課	琵琶湖博物館協議会の役割の検討	<ul style="list-style-type: none"> これまでの機能に加えて、博物館活動の成果や自己評価結果についてや対応を検討 様々な博物館活動について応援を求めた 	<ul style="list-style-type: none"> 博物館協議会の機能拡充についての検討結果のまとめ一式 	<ul style="list-style-type: none"> 協議会の機能拡充については、2006年度(平成18年9月)の協議会委員の改選により、以前とはまた異なる分野に就任いただいた。一力強化が図られた。 協議会による評価機能については、博物館が提示する当該年度の行動計画の実績、自己評価結果に対し、外部の立場で意見を述べるといった役割を加える方向でまとめた。当該委員・自己評価結果に協議会から出された意見を付して公表することとした。 	<ul style="list-style-type: none"> 協議会委員の改選では、保存科学の専門家、小・中学校の校長先生、旅行代理店等経歴者(公募委員)等の参加により、以前とはまた異なる分野の専門、立場の方にも就任いただいた。協議会会議以外の場でも新たなアドバイザーをお願したいと考えている。 評価機能の拡充について、さらに具体的な検討が必要である。 	第二段階指標	

4) 琵琶湖博物館中長期基本計画2006年度行動計画の目標達成状況および自己評価結果について滋賀県立琵琶湖博物館協議会（2007. 2.23）で出だされた意見（要約）

ア 評価実施方法・総括

(a) 評価のあり方

- ・計画を策定し、目標を立て、その目標に少しでも近づけようとする事、PDCA（プラン（計画）、ドゥ（実施）、チェック（評価）、アクション（改善））が現場で回り始めていることが重要で、細かい目標値の達成については気にしすぎなくてもよい。
- ・できることを書いて、できたら「○」では意味がなく、評価には工夫があるが、苦労してでも実施してよかったというものにしてほしい。

(b) 設定目標、評価方法等

- ・観察会等の協働事業実施率については、「独自の主催事業を実施するほど協働事業実施率は下がるといふ自己矛盾を含んでいる。」とある。こういう場合は来年度の設定目標を見直す必要がある。どの事業を引き継ぎ、どの事業を変えるのか考えてほしい。
- ・今回の自己評価では32項目のうち18項目が「◎（大いに評価）」であった。達成しやすいような、数字に落としやすいような目標設定になっていないか点検してほしい。逆に、これができないと博物館は成り立たないような項目には重み付けがほしい。
- ・博物館の取り組み不足ではなく、外部の条件でそうならざるを得ない場合、自己評価は「△（次年度に向けて対応策を検討）」ではなく、何か別の印を考えてもよい。

(c) 琵琶湖博物館協議会としての対応

- ・協議会は数字だけでは評価しない。博物館が正直に頑張ったことに対しては評価し、できなかったことがその後きちんと行われれば協議会が評価する意義がある。
- ・博物館協議会の評価機能として重要なことは、PDCAがうまく回っているかどうかを監視し続けること、大きな目標である「地域だれでも・どこでも博物館」の実現が少しでも進んだかどうかを年度ごとに見ていくこと、次年度の計画ではその目標に向かって前年度の課題を整理あるいは解決できるような方策が立てられているかどうかをチェックすることで、大きな観点で評価することである。
- ・行動計画の全体の表だけではわかりにくいので、重点目標と目標値、その年度目標というようなものをつくり、その年度の事業の優先順位がわかるようにしてほしい。そういう工夫も行いながら、協議会が評価できるような仕組みをつくってほしい。新空間や学校サテライト博物館は、大きな目標に向かっての重要なステップである。
- ・委員のそれぞれの立場と見識を生かし、教育・観光等、琵琶湖博物館の果たすべき機能・役割を多面的に定性評価することは可能。

イ 個別の項目

(a) 「集う、使う、創る 新空間」

- ・この新空間の運営実験は、県民が博物館を使うという大へん面白い試みだが、その理念、コンセプト（考え方）や、具体的にどのように利用できるかがわかりにくい。最初は少し説明を行い、新空間で実施してほしい内容を示さないとなかなか利用されない。
- ・博物館が利用してほしい活動イメージを描き、館主導で何かプログラム（実施企画案・要綱）をつくって実施し、その実績をビジュアルに（絵や写真などを使って）利用者へ示していく必要がある。

(b) 交流事業（学校との連携）

- ・琵琶湖博物館が教育施設であるという面から考えると、県内の小・中学校の利用率が少なければ校長会や県教育委員会と連携し、学校が琵琶湖博物館を利用する狙いを明確にし、発信していかなければならない。
- ・琵琶湖博物館の研究者が講師として学校に出かけていき、情報や知識を提供していくと、そこからまた博物館や自然に興味を持ってもらうことができる。
- ・児童生徒の科学する芽を育てるという点で、琵琶湖博物館の研究や観察会に期待している。琵琶湖博物館で学んだ科学、研究の手法を用いた研究を中学生が行うようになってくると、その研究成果が展示や交流、新空間の利用などにつながるので、そういう波及効果も評価の視点として取り入れてほしい。

(c) 広報・経営戦略（観光施設としての期待）

- ・民間では中長期の計画を立てる場合にはまず数字を出し、何年にはどういう来館者層をどれだけ入れ、その収入がいくらで、そのためにどうするということを書く。
- ・琵琶湖博物館が観光施設であるという面から考えると、広報が非常に大事。県外から小学校が1泊旅行でどんどん来れば観光振興になり、地域の経済も潤う。県内の旅館から関東や東北、九州の旅行会社に行く営業マンに琵琶湖博物館の広報・宣伝をしてもらえれば来館者数も増える。
- ・琵琶湖博物館は、研究活動が基本にあるので教育活動や観光活動という展開ができ、しかも続くという仕組みになっている。観光の面でも大いに期待したい。

(d) 高校生・大学生の来館者増加対策

- ・高校生・大学生の来館者割合が4.1%と少ない。受験や大学教育にはほとんど無縁の展示を見に来る多くの昆虫好き、博物館好きの少年・少女が、高校生や大学生になると来なくなる。中長期基本計画に盛り込み、この割合が増えるよう取り組んでほしい。
- ・高校生や大学生は博物館を担う一番近い人たちで、狙うべき対象である。ここを引き付けていくことが大切で、ここを頑張れば日本の教育文化の改革にもつながる。

(e) その他

- ・「環境モニタリング装置の整備」は、進まなかったのが「△」となっているが、現状でどれだけの危機感があるのかわからない。博物館としてどうしても改善しなくてはならない状況であれば、協議会としても予算化に向けてあと押しする必要がある。
- ・県内には利用されず劣化してきている資料がいろいろあるので、整理・保管し、利用できる方法を考えてほしい。他方、県内には退職した人たちがいろいろなグループをつくり、地域で何かを掘り出し、書きとめ、残していこうという動きがあり、そういう方々が多数おられるので、非常に強い力になり、協力者になると思う。
- ・I P M（Integrated Pest Management；総合的資料有害虫管理）の推進について、アルコール噴霧は主に防カビ、殺カビのための方法なので、防虫には限界がある。常に乾燥させることが重要。I P Mは場所ごとの最適条件というものがあるので現場での試行錯誤も必要となる。

Ⅲ 2006年度をふり返って

1 研究部

今年度は琵琶湖博物館の中長期計画の第2段階の最初の年であり、今後は琵琶湖博物館ならではの学際的あるいは地域的な研究をなお一層推進していくことを目標として掲げている。

研究・調査活動においては、総合研究3件、共同研究9件、申請専門研究3件、専門研究29件を行った。開館以来の総合研究や共同研究などの件数は減少傾向にあったが、今年度はひとまず3件の総合研究を開始することができた。

県費以外の外部の助成による研究あるいは研究の分担者として、17人の学芸職員による38件が行われた。今後も外部からの資金も活用しながら研究を活発化するとともに館外の方々との共同研究によって研究能力を高める活動を継続する必要がある。

成果の発信については、学術論文33件、専門分野の著作82件、そして一般向けの著作として新聞への原稿も含め165件が行われた。今後は数だけを問題とするのではなく、琵琶湖博物館の中長期計画に照らし合わせた学際的あるいは地域を対象としながらも国際的な関心を呼ぶような研究をひとつでも増やすことを目標としたい。

その他、館内事業としては、例年は1回しか行っていない研究発表会を4回開催した。この4回の発表会のうち、1～3回目では研究部の3つの領域におけるこの10年間の研究成果を中心に発表を行った。また、4回目には中長期方針に沿って琵琶湖地域の研究を行っている個人や団体に集まっていたアトリウムでのポスター発表を中心に研究の発表交流を行った。発表は38件あり充実したものとなった。

特別研究員については、5名の外部研究員が琵琶湖博物館の施設を利用して研究を行い、またセミナーで発表を行った。その他、4名の外部研究者が施設利用手続きの後、生態進化実験室、共同利用研究室などの施設を利用した。外部の研究者との共同研究を活発化し、互いに議論をする中で研究能力が向上していくことを考えると今後も施設利用者が増加する傾向が望まれる。

この他、琵琶湖博物館開館10周年を記念して、開館以来10年間の研究部の活動などを「琵琶湖博物館研究部10年の歩み」にまとめて出版した。この冊子が、これまでの活動を総括し、今後の研究部の進む方針の足がかりとなること期待したい。

2 事業部

(1) 展示交流

展示交流空間の更新にむけて、老朽化した情報機器類の全体的な見直しを行い、同じ展示効果を他の機種で安価に実現できるものについては速やかに更新し、情報機器類を使わずに展示効果が期待できるものについては、別の手法に変更した。また、内容が時代にあわなくなったものについても随時更新を行った。特に、「わたしたちの暮らし40年」のコーナーでは、琵琶湖博物館が開館した1996年から2005年までの展示を加え、「わたしたちの暮らし50年」へと更新した。

展示交流活動については、展示交流員、水族飼育員やディスカバリールーム嘱託職員による来館者との交流活動を強化した。

2006年度と2007年度の二年にわたって、総合研究「東アジアの中の琵琶湖－コイ科魚類を展開の軸とした環境史に関する研究－」の総括として開催される企画展示の第一弾として、第14回企画展示「湖辺～水、魚そして、人～東アジアの中の琵琶湖」が開催された。本企画展では、湖辺での人間と生き物、その環境とのかかわりを、今森光彦氏の映像を用いることによって、幻想的なイメージとして展示した。そのことによって、改めて観覧者に環境に関する問題意識を感覚的に理解していただくよう努めた。併せて、水族企画展示として、第18回 水族企画展示「水辺の生き物」を同時期に開催した。

ギャラリー展示等では、2003年度より連携して活動を行ってきた志津小学校との連携企画である「こど

もが見つめる ふるさとの川－こどもエコクラブ伯母Q五郎のたからもの－」や、近年における身の回りの生きものの変化に目を向けた『つかんだ・つんだ・いつもいた あの生きものは、いま…?』等を開催した。また、「集う、使う、創る 新空間」ではいよいよ試行的に運用を開始し、地域住民の活動紹介を行った。

(2) 資料の整備・活用

中長期基本計画の第二段階（2006年度～2010年度）に入り、琵琶湖博物館では、「琵琶湖地域で保存された資料や情報が、地域の博物館や関連施設で必要に応じて相互に利用できる環境を整備し、資料の情報を共有する」ことを通して、資料が活用できる博物館の実現をめざしている。第二段階では、特に、1) 資料の整備と活用サービスの推進、2) 代替燻蒸法の確立とIPM（総合的資料有害虫管理）の推進、3) 電子図鑑の公開、4) 資料情報の公開・増補・改良、を推進している。

1) については、2006年度は「永久保存資料」と「時限保存資料」に資料を区分し、特に後者について、活用度をいっそう高めるための方策を検討した。今後は資料を活用するための整理と管理体制の検討が必要となっている。2) については、当館独自のIPM基準値を設定し、この基準値を維持するための日常管理の徹底を行った。具体的には、収蔵庫内の清掃に加えて収蔵庫前廊下の定期的清掃、防虫防菌対策の試行と効果測定、各分野の資料の殺虫・防虫処理方法の現状把握などを新たに実施した。今後とも各収蔵庫でIPM基準値を維持できるよう、収蔵庫環境の整備や日常管理の徹底を行っていききたい。3) については電子図鑑「珪藻」を正式に公開、4) については民具データベースおよび、化石標本、植物さく葉標本、昆虫液浸標本の英語版データベースを公開することができ、目標値以上の成果が得られた。今後も公開準備を進めるとともに、資料の収集および整理の進展によって、各データベースの充実を図っていききたい。

資料の保存環境の整備では、収蔵庫施設の充実と環境整備が、拠点としての施設整備の課題となっている。収蔵庫の環境モニタリングに関わる設備を改善・充実するためには、かなりの費用が必要であり、2006年度には具体的な行動を起こすことはできなかった。今後は、現有設備を活かしながらできるだけ少ない費用で整備を進める方策を検討するとともに、収蔵庫ごとのあるべき温湿度環境の設定とその維持管理についても検討を行いたい。それによって、環境管理システムの現状把握と再整備の方針について検討する予定である。

(3) 交流・サービス活動

体験学習プログラムの充実や「はしかけ」、「フィールドレポーター」の活動充実を中心に交流・サービス事業を進めてきた。また、今年度から中長期基本計画の実現に向けて新しい交流のあり方の検討を始めた。その結果、体験学習プログラムは13から15に増加した。教員等指導者研修参加者数は年に900人を越えた。はしかけは357名の登録があった。フィールドレポーターについては、172名の登録があり、調査は年3回行った。2003年度から今年度までのフィールドレポーター便りと掲示板を電子化し、誰でもが閲覧ダウンロードが可能になった。「はしかけ」、「フィールドレポーター」は、九州国立博物館で開催された「ボランティアメッセ2006 IN 九博」に参加し、県外の団体との交流を深めるとともに、活動の充実をはかることができた。また、2つのグループは琵琶湖博物館開館10周年関連イベントで、研究発表会に参加するとともに10周年記念ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」においても展示した。さらに、情報利用室の新空間で「はしかけ・フィールドレポーター活動紹介」の展示を行った。観察会、講座については29件、約65%を他団体との協働で実施した。

今後の課題として、新しい交流のあり方の検討をはじめたが、方向性をだすにとどまった。来年度は、具体的な方策の検討に着手したい。はしかけについては、グループの参加人数から活性化の状況を示す新たな評価基準や数値目標を検討する。また、来年度は学校サテライト博物館の試行を考えている。

(4) 情報発信

今年度の最も大きな成果は、電子情報発信の要となっているWWWサイトについての情報の充実に努めたことである。また、2005年度に大規模更新を行ったWWWサイトの不具合箇所に関して、順次改善を行った。さらには、端末機器の継続的な更新と併せて、2007年度に予定している情報システムの中核機器群の更新のための各種検討を行い、基本方針を確定させた。

体制面では、WWWサイトの即効的かつ安定的な情報更新を目的に、情報システム全体の運用方針を検討し、次年度の運用に反映させる作業を行った。

3 総務部

(1) 来館者の状況

琵琶湖博物館の来館者数は、開館初年度を除き年々減少傾向にあった。2004年度には44万人台となり過去最低となった。しかし、2005年度には年間来館者数が約45万人となり、2006年度には約47万まで回復した。来館者数が増加傾向に転じた要因には、博物館施設への来館者数が全国的に回復傾向にあることもあるが、ギャラリー展、水族企画展などが好評であったこと、少しずつではあるが常設展示の更新が行われていること、ユニバーサルデザインの推進など考えられる。また、「琵琶湖博物館広報・経営戦略」に基づき、トライアルウィークや効果的な広報活動が実施されたことによる効果があったのではないかと考えられる。

(2) 来館者アンケート結果

毎回のアンケート調査結果とほぼ同じ傾向を示していることが得られたデータからわかる。満足度については、博物館を訪ねてみて「非常に満足した」と「満足した」をあわせて、昨年度に引き続き80%以上の数値となった。これは、水族展示室、ディスカバリールーム、アトリウムで実施されたトピック展や、展示交流員と話そう、水族飼育員と話そう、フロアトークなどの活動が満足度の向上に結びついていると考えられる。満足度の数値については「琵琶湖博物館中長期基本計画」第2段階で「年3回平均目標値80%」に上方修正されたが、その目標値が実現できていることになる。

(3) 広報・経営戦略

琵琶湖博物館広報・経営戦略は、2005年度に設置された広報・戦略会議が作成し、琵琶湖博物館協議会の審議を経て、2006年3月に策定されたもので、中長期基本計画と連動しながら、2010年度には年間来館者50万人を回復し、以後この数字を維持し、県民の認知と支持を得て今後も発展していくことをその骨子としている。

この計画を推進し進行管理するため2006年度から上席総括学芸員をリーダーとする広報・経営戦略検討チームを立ち上げ、毎年度「琵琶湖博物館広報・経営戦略」行動計画を作成し、その進行管理を行うこととした。平成18年度にはトライアルウィークとして県下の小・中学校を中心とした広報活動のほか、パブリシティーを活用した積極的な情報提供を行った。

(4) 琵琶湖博物館開館10周年記念事業

1996年10月の開館から10年の節目を迎えたことから、2006年度には10周年を記念するためのロゴマークの作成、記念誌の出版、記念行事を開催した。ロゴマークは、博物館の利用者への感謝の気持ちを込めて「ありがとう10周年」の文字を盛り込んだものとして、チラシや記念誌などに加えた。

記念誌は「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」と「滋賀県立琵琶湖博物館研究部10年の歩み」を発行した。記念事業は、10月21日（土）・22日（日）に「ありがとう10周年感謝のつどい」を開催した。21日（土）には記念式典と滋賀県出身のNHKチーフアナウンサー野村正育氏を講師にお迎えして、「琵琶湖 ふるさと 滋賀-放送現場からのメッセージ-」と題した講演を開催し、22日（日）には日本ヨシ笛

協会によるヨシ笛の演奏会をホールで開催した。また、アトリウムでは琵琶湖博物館と関わりのある地域の団体などの活動をポスター掲示し、「使う、集う、創る 新空間」では10月17日（火）～10月29日（日）にかけてヨシ紙展示「琵琶湖と鶴殿のヨシ紙」を、ヨシ博物館と鶴殿ヨシ研究所との協同で開催した。この他にも、紙芝居、屋外展示の観察会、水族バックヤードミニツアーなどの各種イベントも同時開催された。

（５）施設整備

建築後10年が経過し、設備等の劣化が進行しており、空調設備や配管等の修繕等を行い、施設設備の維持管理に努めた。

また、博物館全体の施設設備について現状・劣化状況の調査を行なった。今後は、17年度に調査した空調設備保全計画と合わせて計画的な施設設備の保全に努める。

（６）来館者サービスの向上

来館者サービスの向上の一環として2004年4月から1年間何回でも観覧できる年間パスポートの販売を始め、2006年度は738人（対前年68人増）に購入いただき、延べ3,105回の入館観覧をしていただいた。当館の来館者はリピーターの方が多く、利用者ニーズに応えることができるとともに顧客の定着化による利用の促進が図れた。公共交通機関や他の施設と連携した取り組みとして、ＪＲ西日本等との連携による周遊パスポート「わくわく観光パスポート びわ湖・草津へ行く」に取り組み、2006年度は3,261人の販売実績があった。また、関西地域に所在する他の博物館等65施設と連携し「ミュージアムぐるっとパス・関西」に取り組み、60人の方に購入いただき延べ231回の入館観覧をしていただいた。

今後もより一層の利用促進を図るため、近隣の観光施設や交通機関等との連携による観覧券の導入を検討していきたい。

（７）国際交流活動

JICAからの委託事業として「博物館集中コース」研修を国立民俗学博物館との共催で実施し、8カ国10名の研修生を受け入れた。JICA研修についてはその内容を継続的に充実し、海外からの研修生との関係強化を図りたい。

視察については、アジア地域をはじめ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカなど世界各地域から、合計46件、約630人が博物館を訪れた。このうち韓国からの視察が増加していることと、自然環境の保全に関する視察件数が多いことが2006年度の傾向として見てとることができた。

国際交流活動については中長期的な視点を持ち、海外との将来にわたる良好な関係を構築するきっかけとなるよう努力したい。

IV 博物館利用のご案内

■開館時間 午前9時30分から午後5時まで（入館は、午後4時30分まで）

■休館日 毎週月曜日（祝日・休日の場合は、翌日休館）
 年末年始（12月25日～1月2日）
 その他館長が定める日

■観覧料（常設展示）

（2007年4月1日現在）

	個人	団体（20名以上）	年間観覧券	共通券（*）
小学生・中学生	250円	200円	750円	320円
高校生・大学生	400円	320円	1,600円	520円
大人	600円	480円	2,400円	730円

（*）草津市立水生植物公園「みずの森」との共通券。団体は取り扱いませぬ

※未就学児、障害のある方、県内居住の65歳以上の方は常設展示の観覧は無料です。（詳細についてはご確認ください。）

※年間観覧券は、購入後1年間、常設展示、企画展示を何回でも観覧できます。

※企画展示はそのつど料金を定めます。（開催期間中）

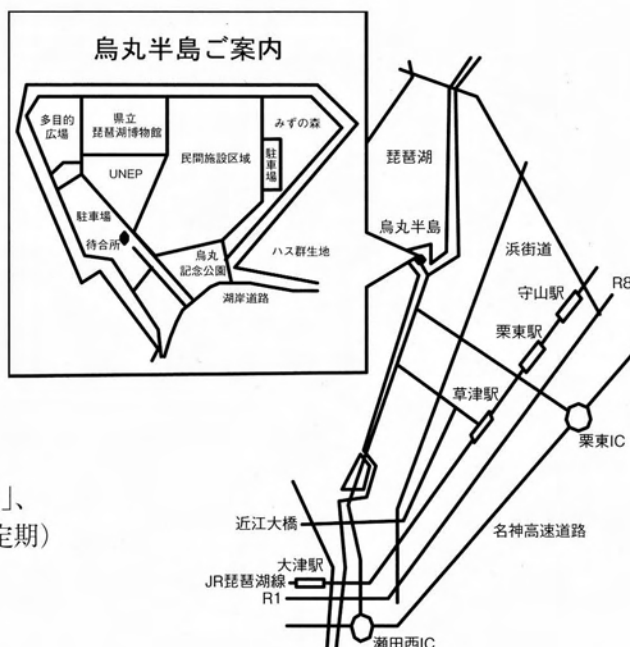
■交通案内

- JR新幹線「京都駅」「米原駅」からJR琵琶湖線に乗り換え「草津駅」「守山駅」で下車。
 「草津駅西口」から、近江鉄道バス「烏丸半島」行きで「琵琶湖博物館前」下車、約25分。
 タクシーで約20分。
 「守山駅西口」からタクシーで約20分。

- 車では、名神高速道路「栗東IC」から国道1号線～栗東志那中線～湖周道路を経て約25分。
 または「瀬田西IC」から湖周道路を経て約30分

- 航路では、琵琶湖汽船シャトルボートで「大津港」、「琵琶湖大橋港」から「草津烏丸半島港」へ（不定期）

*問い合わせ先：琵琶湖汽船077-524-5000



■駐車料金

（2007年4月1日現在）

大型バス	1,700円	マイクロバス	1,100円
普通車	550円	二輪車	200円

※博物館観覧者が使用する普通車と二輪車は無料扱いとなります。

■問い合わせ

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091番地
 滋賀県立琵琶湖博物館

TEL (077) 568-4811 FAX (077) 568-4850

インターネットホームページ <http://www.lbm.go.jp/>

職員 (2007年4月1日現在)

○館長	川那部 浩哉
○副館長	寺田 治雄
○上席総括学芸員	布谷 知夫
○上席総括学芸員	中島 経夫
○上席総括学芸員	前畑 政善

総務部

○部長 寺田 治雄
 ◇総務課
 課長 竹内 恵子
 主幹 南堀 貞雄
 副主幹 中島 知子
 同 井上 雅勝
 主任主事 細矢 智美
 同 西田千恵子

◇企画調整課
 課長(兼) 松田 征也
 課長補佐 杉野 和彦
 (兼) 楠岡 泰
 (兼) 戸田 孝
 (兼) 里口 保文
 (兼) 宮本 真二
 (兼) 中藤 容子
 (兼) ロビン・ジェームス・スミス

事業部

○部長(兼) 用田 政晴
 ◇展示担当
 G. L. (兼) 桑原 雅之
 (兼) マーク・ジョセフ・グライガー
 (兼) 白井 学
 (兼) 草加 伸吾
 (兼) 芳賀 裕樹
 (兼) 芦谷美奈子
 (兼) 橋本 道範

◇交流担当
 G. L. (兼) 八尋 克郎
 主査(併任) 中村 公一
 主査(併任) 中野 正俊
 (兼) 小川 雅広
 (兼) 西村 知記
 (兼) 中井 克樹
 (兼) 牧野 厚史

◇資料活用担当
 G. L. (兼) 亀田佳代子
 (兼) 秋山 廣光
 (兼) 孝橋 賢一
 (兼) 山川千代美
 (兼) 大塚 泰介
 (兼) 榊永 一宏

研究部

○部長(兼) 高橋 啓一
 ◇環境史研究担当
 G. L. 総括学芸員 高橋 啓一
 S. G. L. 主任学芸員 里口 保文
 上席総括学芸員 中島 経夫
 主任学芸員 山川千代美
 同 橋本 道範
 同 宮本 真二
 同 榊永 一宏

◇生態系研担当
 G. L. 総括学芸員 マーク・ジョセフ・グライガー
 S. G. L. 主任学芸員 牧野 厚史
 上席総括学芸員 前畑 政善
 専門員(兼) 小川 雅広
 専門学芸員 桑原 雅之
 同 亀田佳代子
 主査 孝橋 賢一
 主査(兼) 白井 学
 主査(兼) 西村 知記
 主任学芸員 草加 伸吾
 同 楠岡 泰
 同 中井 克樹
 同 芳賀 裕樹
 同 大塚 泰介
 同 ロビン・ジェームス・スミス

◇博物館学研究担当
 G. L. 総括学芸員 用田 政晴
 S. G. L. 主任学芸員 戸田 孝
 上席総括学芸員 布谷 知夫
 専門学芸員 秋山 廣光
 同 松田 征也
 同 八尋 克郎
 主任学芸員 芦谷美奈子
 同 中藤 容子
 (兼) 中村 公一
 (兼) 中野 正俊

2007年度（平成19年度）職員紹介

館長 兼 滋賀県顧問 川那部 浩哉 (かわなべ ひろや)

略歴 1955年京都大学理学部(動物学科)卒業、1960年京都大学大学院理学研究科博士課程(動物学専攻)修了・京都大学理学博士、同年京都大学助手、1961年同講師、1967年同助教授、1977年同教授、1991年同生態学研究センター長兼任、1996年停年退官、同年4月より現職。1960年京都大学大学院理学研究科博士課程修了・京都大学理学博士。同年京都大学助手、1961年同講師、1967年同助教授、1977年同教授、1991年同生態学研究センター長を経て、1996年退官。同年4月より現職。

賞罰 1960年朝日奨励賞、1995年カナダ国ゲルフ大学(U. of Guelph)名誉理学博士、1996年京都大学名誉教授・日本学士院賞エディンバラ公賞、1997年アメリカ芸術科学アカデミー(AAAS)外国人名誉会員、1997年世界科学協会(IMS)会員、1999年京都新聞文化学術賞、2001年世界芸術科学アカデミー(WAAS)会員、2002年京都府自治功労賞、2003年日本生態学会功労賞・応用生態工学会名誉会員。1960年朝日奨励賞、1995年カナダ国ゲルフ大学(U. of Guelph)名誉理学博士、1996年京都大学名誉教授・日本学士院賞エディンバラ公賞、1997年アメリカ芸術・科学アカデミー(AAAS)外国人名誉会員・世界科学協会(IMS)会員、1999年京都新聞文化学術賞、2001年世界芸術・科学アカデミー(WAAS)会員、2002年京都府自治功労賞、2003年日本生態学会功労賞・応用生態工学会名誉会員。

役員 日本生態学会・国際古代湖生物学会(SIAL)・応用生態工学会元会長、国際生態学連合(INTECOL)元副会長・第5回大会会長、国際理論応用陸水学会(SIL)元日本代表・生物多様性委員長、生物多様性国際研究計画(DIVERTSITAS)科学委員会元委員・西太平洋アジア地域ネットワーク(DIWPA)元委員長・陸水部会元部会長、未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」研究推進委員会元委員長、世界自然保護基金ジャパン(WWFJ)常任理事、21世紀 COE プログラム委員会・京都府文化財保護審議会・京都市文化財保護審議会・国際生物学賞委員会委員、第9回世界湖沼会議調整会議議長・企画委員会委員長、など。

専門分野 生態学

研究テーマ 社会・群集関係の総体論、文化多様性・生物多様性の歴史的関係

1955年以来、アユの社会構造や川や湖の魚の種間関係を主に調べてきたつもり。京丹後市にある宇川の魚について、50年以上ほぼ毎年調査してきた愚直さを大いに誇りにしている。その初期から、アユの成長や数の減少など生物生産の動態がその社会構造によって変化することを見つけ、競争的な「食いわけ」と「棲みわけ」を明らかにし、1970年代には、アユの社会構造を含むいくつかの生態的現象の進化史的な意義に関する仮説を提唱した。また1977年からは、アフリカのタンガニイカ湖などで国際共同研究を進め、「競争的協同」の考えを進めた。これらをも含め、生きものの間の関係は、「あれかこれか」と言うようなものではなく、むしろ相対的かつ曖昧なものだと考えている。

国内的にも国際的にも地域主義的な発想が極めて大切だと思い、従って特に国際的な共同研究においては、「当該地域の人々が調査のリード役を果たし、さまざまな決定はその地域の人々が行うべきだ」との考えのもと、現地の研究者のアドバイザーの役割に徹することに努めてきたつもりだ。

「生物間関係の総体」の研究こそが重要だと、50年あまり言い続けてきたが、近年の生態学の国際的流れはこの方向にかなり近づいているようで、いささか満足している。「生物の多種共存機構を促進する相互作用機構」すなわち「地球共生系」の共同研究に引き続き、「生物多様性を促進する生態複合」すなわち「共生生物圏」の共同研究をも進め、国内的には2002年3月に一応終わった。

琵琶湖博物館は、私流の言いかたをすれば、「湖と人間とのあいだの関係の総体を歴史的に見て、今後の自然とのつきあいかたやそれぞれのくらしを各自に考えて貰う」ための組織である。従ってここに来るからは、従来からの「生物間関係の総体」を拡張して、「湖と人間関係の総体の歴史性」を考え直しており、「古代湖は生命文化複合体」などと奇妙な用語を口走ったりもして、館員諸氏には大いに迷惑をかけているに違いない。また、博物館事業の国際化にも少し力を注ぎたいと、数年前からフランス国立自然史博物館(MNHN)などと論議を進めてきた。この成果の一つは、日仏合同企画展示「ファールに

学ぶ」として、2007-8年には日本で、2009-10年にはフランスで開催される。

『原色日本淡水魚類図鑑』(1963, 76)、『川と湖の魚たち』(1969)、『生物と環境』(1978)、『川と湖の生態学』(1985)、『山溪カラー名鑑日本の淡水魚』(1989, 2001)、『生物界における共生と多様性』(1996)など、比較的小となしい題名の著書もあるが、『偏見の生態学』(1987)、『曖昧の生態学』(1996)、『魚々食記』(2000)など、いささか鬼面人を驚かす題のものもある。また、私淑していたエルトンさんの本を3冊翻訳したほか、『シリーズ地球共生系全6巻』(1992-93)、『共生の生態学全8巻』(1994-96)を監修したりもした。また、博物館へ来てから編集したものには、『古代湖：その文化的・生物的多様性』(1999、英文)、『古代湖：生物多様性・生態・進化』(2000、英文)、『博物館を楽しむ：琵琶湖博物館ものがたり』(2000)、『ビジュアル科学講座生命の地球全13巻』(2000)、『生物多様性の世界』(2003)などがあり、もうしばらくすると、『対談 琵琶湖博物館を語る』も出ることになっている。

なお、『日本の魚類生物学：川那部浩哉に捧げる』(1998、英文)や『川の自然を残したいー川那部浩哉先生とアユ』(2000)などを贈って頂き、光栄に思うと同時にいささかならず恥ずかしい気もしている。

上席総括学芸員 布谷 知夫 (ぬのたに ともお)

略歴 1974年京都大学大学院農学研究科博士課程中退、農学修士、2004年総合大学院大学博士(文学)取得、1974年大阪市立自然史博物館、1991年滋賀県教育委員会事務局文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 博物館学

研究テーマ 利用者の視点を持った博物館の運営

博物館の現場で長く仕事をしてきた。そんなある時に、各地の博物館の活動が非常に多彩に行なわれているのに、その情報発信はほとんど行なわれていないことに気がついた。また一方で博物館学を勉強していて、現場での情報が反映されておらず、また現場で必要なことが書かれていないことが多いことも気になった。たまたま滋賀県で新しい県立博物館の建設をするという仕事に参加することができ、自分が不満に思っていたことを、自分のできる範囲でやってみようと考えた。そして、専門を自然科学系から博物館学に変えることになった。

ここ1-2年は、博物館が提供できる学びとは何であるのか、どのような対象者に対して、どのような学びの場を提供することができるのか、ということに関心を持っており、何本かの報告書なども書いて、考えをまとめつつある。

上席総括学芸員 中島 経夫 (なかじま つねお)

略歴 1972年東京都立大学理学部化学科卒業、1980年京都大学外学院理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、同年日本学術振興会奨励研究員、岐阜歯科大学(現在朝日大学)歯学部助手、1982年理学博士(京都大学)取得、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室主査、1996年滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員を経て、2005年より現職、1997年第6回生態学琵琶湖賞受賞。

専門分野 魚類形態学

研究テーマ コイ科魚類の咽頭歯の研究

コイ科魚類に特有な咽頭歯の形の美しさに魅せられて研究を始めた。コイ科魚類の数10ミクロンの小さな歯からコイ科魚類の進化を探り、化石の記録と合わせながらユーラシア大陸や日本列島の数千万年の大地の変遷の様子を紐解いている。その一端を「東アジアの化石コイ科魚類の時空分布と古地理学的重要性」に著した。また、小さな咽頭歯は化石としてよく残り、琵琶湖やそこにすむコイ科魚類の生い立ちを語っている。そのささやきから明らかにされた古琵琶湖から琵琶湖への変遷を「琵琶湖の自然史」に著した。最近では、遺跡に残された咽頭歯遺体から当時の人の活動の復元に興味をもち、歴史時代にも絶滅したコイ科魚類がいることを明らかにしている。

上席総括学芸員 前畑 政善（まえはた まさよし）

略歴 1974年高知大学大学院農学研究科修士課程栽培漁業学専攻中退、1974年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1997年より現職。2002年理学博士（京都大学）取得。

専門分野 水族繁殖学

研究テーマ 日本産ナマズ類の産卵生態

専門研究「水田利用魚類の生態と外来種の関連」では、これまでに自分自身および共同研究者等が琵琶湖の湖岸、内湖、および水田地帯で魚類調査してきた内容について論文化すべく執筆活動を進め、4編の原著論文を執筆・改変した。また、過去に調査した水田を繁殖・仔稚魚の生育場としている代表的な魚類の一つ、ナマズの産卵生態に関する論文1編を国際学術誌に掲載することができた。（仮）総合研究「水田地帯における水域ネットワークの構造と生物群集の関係性に関する研究」では、本研究を本格的な総合研究へと格上げすべく、館内外で議論を行い、新年度総合研究「琵琶湖に隣接した水田地帯の特性の解明—ニゴロブナを媒体として—」を立案した。また、その予備的研究として、共同研究者とともに守山市内の水田9筆にニゴロブナを放流し、新年度以降の総合研究に必要な資料を入手すべく予備試験を実施した。さらに、研究成果の情報発信の一環として、昨年度までに得られた研究成果の一端を日本魚類学会、当館研究発表会等において発表するとともに、併せて、滋賀県で大切にすべき野生生物（滋賀県レッドデータブック2005年版）や当館水族企画展示「水辺の生き物」において広く一般に公表した。また、当館主催事業やさまざまな団体への講演会等を通じて、水辺環境の由々しき実態と外来種（魚類）の生態系へ及ぼす影響等の解説にも努めた。

◇ 環境史研究領域

総括学芸員 高橋 啓一（たかはし けいいち）

略歴 1979年日本大学文理学部応用地学科卒業、1979年～1980年京都大学理学部研修員、1980年～1990年日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学教室助手、講師、1990年歯学博士（日本歯科大学）、2004年理学博士（日本大学）取得、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古脊椎動物学

研究テーマ ゾウ化石を中心とした東アジアの古脊椎動物の変遷

2006年度は昨年度同様、研究部長および環境史研究領域のグループリーダーとしての活動を中心に行った。特に本年度は博物館の10周年であったため研究部でも開館10周年記念誌「研究部10年の歩み」を作成することとなり、その編集に時間を費やした。この冊子には研究部の人材、設備、研究費、これまでの成果や今後の見通し、規約などをまとめることができた。この冊子が琵琶湖博物館の中長期基本計画第2段階を進めるために活用されることを望みたい。

研究事業においては、古琵琶湖層の時代でもある約500万年以降の脊椎動物化石の変遷を東アジア全体の環境史の中で捉えようとしてきた。この研究のために、総合研究、共同研究、専門研究を組み合わせで行っている。今年度は、海外の国際誌1件を含む3件の原著論文を公表することができた。

また、外部研究費に関しては、昨年度から科学研究費補助金基盤（C）に採択され、「後期更新世における動植物相の変遷と旧石器文化の関係解明のための学際的研究」という研究課題で外部の研究者と共同研究を行い、成果を蓄積している。その他、今年度からは総合地球環境学研究所のプロジェクトに参加し、多くの外部の研究者と研究面で交流する機会を持った。サハリンにもはじめて調査にでかけ、貴重な体験ができた。

展示事業では、お正月開館を告知することを関連するイノシシ展示にイノシシ化石の展示を行った。

また、ギャラリー展示「鉍物化石展」の開催準備の補助を行った。鉍物化石展は外部の方々が中心になって展示する展示であり、琵琶湖博物館の中長期基本計画の方針に沿った活動であるといえる。今後もこのような活動と国際的な研究を平行して行っていきたい。

主任学芸員 山川 千代美（やまかわ ちよみ）

略歴 1987年北海道教育大学釧路分校中学理科課程卒業、1989年兵庫教育大学修士課程学校教育自然系コース修了、教育学修士、1989年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古植物学

研究テーマ 新生代における植物化石の研究

2006年度研究テーマ:専門研究「古琵琶湖層群における植物相の変化と常緑広葉樹の衰退」、共同研究「古琵琶湖出現期の古環境分析」

古琵琶湖層群上野層、伊賀層、阿山層、甲賀層から大型植物化石を採取し、同定および植物化石群集の組成解析を行っている。その結果、古琵琶湖層群では上野層最上部と阿山層最上部—甲賀層最下部で常緑広葉樹が確認でき、メタセコイア植物群で象徴された鮮新世の時代に植物相の変化がとられることが示唆された。

<論文>山川千代美・此松昌彦・八尋克郎・里口保文・石田志朗（2007）；伊吹山南麓に分布する中部更新統寺林層の植物化石および昆虫化石に基づく古環境復元。第四紀研究、第46巻第1号 P.1-18。

<学会発表>南澤修・松本みどり・百原新・山川千代美（2006）；古琵琶湖層群・更新統畑層の植物化石群集の解析。日本植生史学会第21回大会 東京大学本郷キャンパス。

主任学芸員 橋本 道範（はしもと みちのり）

略歴 1993年京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退、同年滋賀県教育委員会事務局（仮称）琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 文献史学

研究テーマ 13世紀における社会経済構造の変動

研究については、今年度は2001年以来中断していた中世琵琶湖漁撈研究に取り組み始めた。当初は、網野善彦氏の中世琵琶湖漁業史研究の批判的検討を掲げて、奥島（近江八幡市）の漁撈の実態と展開を明らかにすることを目標に定めたが、実際に作業を進めていくなかで、中世堅田漁業研究が十分な史料の紹介と批判がなされないままで行われてきたことが明らかとなり、堅田漁業に関する基礎史料の収集と翻刻を行っている。これらの作業により、堅田の「自由漁撈の特権」を中心に構築されてきた中世琵琶湖漁撈研究を根底から再構築したいと考えている。

また、貴族山科家の15世紀の日記を基にした「中世魚介類データベース」が完成した。この10年の間に中世の消費研究は著しく進展したが、このデータベース完成により、魚介類について、消費と流通と生産とをトータルに捉える研究がいつそうの進展することが期待される。また、本データベースは山科家を経由した魚介類のみのデータベースではあるが、琵琶湖漁撈史研究もまた新たな段階に入るものと確信している。

その他、博物館資料の利用のあり方について、「地域の人たち」の利用とともに「悪意の利用者」を想定する必要があることを論じた論文を投稿し、琵琶湖の湖辺エコトーンとの比較研究の一環として行っている備前国豊原庄の研究については、関係史料を収集した『邑久町史 史料編（上）古代・中世・近世』第2章中世 二、豊原庄関係史料の編集を担当した。

事業については、資料活用担当グループの一員として分掌する任務を行ったほか、歴史資料担当として例年の業務を実施した。また、トピック展示「近江の奇祭 鍋冠祭と中世筑摩の人々」（4月11日～5月7日）を実施した。

主任学芸員 里口 保文（さとぐち やすふみ）

略歴 1997年大阪市立大学理学研究科後期博士課程地質学専攻学位取得後修了、理学博士、同年より現

職。

専門分野 層序学

研究テーマ 火山灰層による鮮新-更新統の広域層序

主として、古琵琶湖層群とその同時代の地層（鮮新-更新統）にある火山灰層をもとに、広範囲の詳細な地層層序をあみ、時空間的な地層形成環境の変化や、日本の鮮新-更新世の爆発的火山噴火活動史を明らかにすることを目的としている。

ここ数年は、古琵琶湖の出現時期について、古琵琶湖が、いつ、どのような環境でできてきたのか？について興味をもっている。この研究は、博物館内外と共同研究として行っており、これまでに古琵琶湖形成時期について、従来よりも一桁高い精度で明らかにした。また、専門研究としても、太平洋で掘削された海底のボーリングコアについて、この時代の火山灰層研究をおこなっており、この研究ではこの時代の日本の火山灰の噴出年代と降灰分布を明らかにする目的で行っている。

研究成果や地学について広く知ってもらうために、個人管理ページで発信を行っている。また、滋賀県に關係する地学関係者による情報交換や交流、研究の活発化などを目的として、琵琶湖博物館地学関係学芸職員と共に事務局をもち、研究会を開き、この活動についても個人管理ページにおいて紹介している。

また、平成18年度末から19年度はじめに開催するギャラリー展示の企画・準備を外部協力者で行った。このギャラリー展示は、地域の人々が調査や採集した化石や鉱物を、参加者自らが展示を行うというもので、6年前に同様の企画を行っている。

主任学芸員 宮本 真二（みやもと しんじ）

略歴 1993年立命館大学文学部地理学科地理学専攻卒業、1996年東京都立大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程中退、同年5月より現職。2005年博士（理学、東京都立大学）取得。

専門分野 微古生物学

研究テーマ 堆積物試料の各種分析（おもに花粉化石）・測定による第四紀の古環境変動の復原

研究活動では、総合研究（東アジア）、専門研究でコイ・フナ属の人為的分布変化について、研究代表者と論文公表を行った。琵琶湖沿岸地域でのエコトーン環境の変化について、データ整理を行い、総合研究発表会での発表や、公表に向けた準備等を行った。さらに自身が代表を務める科研費や、他の科研費や外部研究助成金によって、県内に分布する遺跡の立地環境の解析や、南部アフリカの半乾燥地域（ナミビア）、ヒマラヤ山脈東部の水田耕作地帯（インド北東部）、さらには熱帯モンスーン湿潤地帯の水田地帯（バングラデシュ中部）を調査地として、「自然環境の変遷と人間活動との対応関係の検討」に関する現地調査を外部研究者や現地研究者と行い、研究発表等を行った。

今年度も近江・琵琶湖という特殊性および普遍性を検討する上で、世界各地で「地に足のついたフィールドワーク」にもとづく地域研究の重要性と必要性を強く感じた一年であった。

博物館の運営に関する業務では、近年急速に技術進歩が進んでいる電子情報関係の業務を担当している。今年度は、次年度に予定される情報システム中枢機器の更新に関する予算作成・折衝、リース端末の導入、端末破棄、新データベース（質問回答）システム開発、次年度情報システム保守契約、研究関係では電子顕微鏡保守契約等について中心となって作業した。たとえばそのなかで、学芸職員の研究紹介ページや、個人ホームページの公表、もしくはその準備をシステムエンジニアの方や、ホームページ更新の担当者の方にご教示・指導を受けながら実施した。

博物館の活動がインターネット上で完結するものでない。しかし、「きっかけ」づくりの道具として電子情報・媒体の重要性は高まっていると、海外からみても実感している。

主任学芸員 榎永 一宏（ますなが かずひろ）

略歴 1994年九州大学農学部農学科卒業、2000年九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得、同年より現職、2002年九州大学博士（理学）取得。

専門分野 水生昆虫学

研究テーマ 水生昆虫の分類、系統進化、生物地理

水生双翅類昆虫の水辺環境への適応がどのように進化し、地理的に広がっていったのかについて、時間軸が導入できる分子系統学的手法と伝統的な比較形態学的手法を用いて解析し、その系統進化過程を解明することを目標として研究を行っている。この系統発生像に生物地理学的観点をも含めて考察し、東アジアの中での琵琶湖の成立過程や固有性を明らかにしようと考えている。

本年度の学術論文の発表は英文・共著で4本行った。論文タイトルは『A new species of *Hydrophorus* (Diptera: Dolichopodidae), with a key to species from China.』、『Note on *Syntormon* from Chinese mainland (Diptera: Dolichopodidae).』、『Two new species of *Thinophilus* from China (Diptera: Dolichopodidae).』、『Two New Long-legged Flies of the Genus *Paraclius* (Insecta: Diptera: Dolichopodidae) from Taiwan, with New Records of Three Species.』であった。これらは中国や台湾における調査で得た標本に基づき新種記載を行ったものである。第6回国際双翅目会議で、ワークショップのローカルオーガナイザーを務めた。また、「Biogeography and phylogeny of marine dolichopodid fly in the Hawaiian Islands (Diptera, Dolichopodidae)」というタイトルで口頭発表も行った。

文部科学省の科学研究費補助金(科研費)の研究「海洋性双翅目昆虫の起源と進化」において研究代表者として、2007年1月22日から3月8日の間、オーストラリアとニュージーランドで調査を行った。これらの地域に固有な種(未記載を含む)を多数採集できた。この他、日本各地で多数の水生双翅類標本が収集され、現在、標本作製やDNAの解析を行っている。

◇生態系研究領域

総括学芸員 マーク ジョセフ グライガー (Mark J. Grygier)

略歴 1984年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリップス海洋研究所博士課程終了、コペンハーゲン大学細胞生物学及び解剖学研究所アメリカ-スカンジナビア交換研究員、スミソニアン研究所国立自然史博物館研究員・研究協力員・協力研究員、オーストラリア博物館客員研究員、琉球大学熱帯海洋科学センター外国人研究員(3回)、パリの国立自然史博物館海洋無脊椎動物学及び軟体動物学研究所客員学芸員、京都大学瀬戸臨海実験所日本学術振興会研究員、ロサンゼルス郡立自然史博物館協力研究員、広島大学水産実験所團生物学国際基金助成研究員、ウィーン大学動物学研究所客員上級研究員、琉球大学熱帯生物圏研究センター COE外国人研究員などを歴任。1997年より現職。

専門分野 生物多様性学

研究テーマ 甲殻類分類学、魚類寄生虫調査、田んぼにおけるエビの生態発生学、海洋寄生虫

今年度は、総合研究「分類学」の研究代表者として、琵琶湖のフィールド調査への参加や事務的活動が行ったが、自分の研究活動より共著者との論文の執筆の方が多かった。新しくに投稿した原稿と校正再投稿した原稿は、下記の分野である：

I) 寄生虫学：琵琶湖とその集水域の魚類に寄生する頭鉤虫相および琵琶湖産の全国に放流されるアユのマーカースとして使用される寄生虫に関する定義

II) 大型鰓脚類(甲殻類)の生物学：日本の地域で起ったと考えられるカプトエビまたはカイエビの種の入替わりの証拠のまとめおよび各県の「レッドデータブック」で登録された種類とその保全カテゴリーのリストの作成

III) 海洋甲殻類の分類学と幼生発生学(操作電子顕微鏡による記載が多い)：カイアシ類モンストリラ目の新属の記載論文、囊胸類シダムシ属の二枚殻を持つ幼生の記載、彫甲類のキプリスY幼生の新種の記載、そして人工的に脱皮させたキプリスYのあとの段階(イプシゴン幼体)の発見に関する論文
自分の研究では、大阪市立自然史博物館第35回特別展の協力者として、2006年に奈良県・大阪府で採集された大形鰓脚類を同定した。また、囊胸類の形態学に関する論文の原稿2件のための写真プレートを製作

した。日本動物分類学会特別功労賞を6月に授賞し、8月に動物命名法国際新議会の委員に任命された。

研究部博物館学領域グループリーダーとして、琵琶湖博物館研究発表会「めざしたこと・できたこと・これからのこと－琵琶湖博物館の10年－」を担当した。ギャラリー展「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」の「国際交流、覚書」コーナーも担当した。16組の外国人VIPや外国人団体に琵琶湖博物館の概要説明・展示案内をした。また、JICAの博物館学集中コースにおいて講義した。琵琶湖博物館の色々な展示や交流活動のための出版物の英訳・編集、そして大阪市立自然史博物館の常設展示「生き物のくらし」の解説分を英訳した。資料管理・整理に関しては、無脊椎動物（昆虫類、貝類を除く）25件993点の受け入れ、および甲殻類1,234点とその他の無脊椎動物30点の仮データ入力・ラベル付けを行ったほか、研究依頼3件、特別観覧1件への対応を行った。滋賀県から生態学琵琶湖賞選考委員会の委員を委嘱された。

専門員 小川 雅広（おがわ まさひろ）

略歴 1984年中央大学理工学部土木工学科卒業、1993年滋賀県職員（農業土木技術吏員）採用、農村整備課、湖北地域振興局田園振興課を経て、2006年4月より現職。

専門分野 農業工学

研究テーマ 農村環境直接支払い制度について

農業、農村地域は、食料の生産基盤としての面だけでなく様々な機能を有している。これを「多面的機能」と呼んでおり、私たちの生活の一端を支えているものである。滋賀県では過年度から環境直接支払い制度を導入して多面的機能を維持するための施策を実施してきた。また、農林水産省においては、直接支払い制度による「農地・水・環境保全向上対策」が2007年度から展開される。2006年度の研究では、滋賀県で実施している「ゆりかご水田環境直接支払い制度」、農林水産省の「農地・水・環境保全向上対策」および諸外国の制度について調査を進めてきた。今後は、農村地域の保全管理活動に必要な組織形成手法を調査・検証していきたいと考えている。

専門学芸員 桑原 雅之（くわはら まさゆき）

略歴 1982年愛媛大学理学部生物学科卒業、1984年三重大学水産学研究科修士課程中退、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族生理学

研究テーマ 琵琶湖固有亜種であるピワマスと、琵琶湖流入河川に生息するアマゴとの関係

事業の方では、主に水族の飼育管理全般および水族資料の管理を行っている。その中で、中長期の展示替えに向けて、展示替えの方針を検討するとともに、それに沿った展示生物の準備などを進めている。特に、タンガニーカ湖の水槽においては、すでにレイアウトの変更はなされていたが、展示魚種については検討されていなかった。そこで、レイアウトのモデルがタンガニーカ湖南部のNkumbula島付近であることから、その付近に生息する魚類を中心に収集を始め、2007年9月には展示替えをする予定である中長期目標の中で、ユニバーサルデザイン化が進められている。当館の展示の中で、車いすでそばまで寄ることのできない展示は、水族の「内湖よし帯」および「河川中流」の水槽のみであった。そこで、まず内湖よし帯水槽前通路に手作りでスロープを設けたところ、好評を得たため、河川中流水槽前通路においても永久的なスロープを設けた。この二つにより、大きな問題は解消されたといえる。ただ、内湖よし帯の水槽前通路のスロープは、木製の仮設のものであるため、将来的には永久的なものに作り替える必要がある。

研究の方では、2006年度から「河川残留型を含むピワマス地域個体群存在の可能性」と題した新たな共同研究を開始した。この共同研究においては、琵琶湖水系に生息するとされているピワマスとアマゴの関係を明らかにするとともに、放流されている醒井養鱒場産のアマゴの影響についても明らかにしてゆこうというものである。この研究では、これまで行ってきた生態、形態、mt-DNAに加えて、詳細な核ゲノムの研究が必要になる。そこで、自由度が高く、多くの座数で解析することのできるAFLP方で分析を行うこととした。

また、8月上旬にアイスランドで開催された5th International Charr Symposium に参加し、2002年から2004年にかけて行った共同研究「琵琶湖水系に生息するイワナの地理的分布とその形成過程」の結果について発表を行った。

専門学芸員 亀田 佳代子 (かめだ かよこ)

略歴 1996年京都大学大学院理学研究科博士後期課程動物学専攻修了、博士(理学)取得、京大大学生態学研究センター研修員を経て、同年12月より現職。

専門分野 鳥類学

研究テーマ 生態系における鳥類の役割に関する研究

2006年度前半は、共同研究者として生態系研究領域の総合研究に関する研究会や研究計画の検討に参加し、また、生態系研究領域のサブグループリーダーとして博物館開館10周年記念誌「滋賀県立琵琶湖博物館研究部10年のあゆみ」の生態系研究領域の研究のまとめを行った。年度後半は、10周年記念の研究発表会4回のうち、2回の発表会で発表を行った。個人の業績としては、1つの主著論文と3つの共著論文が印刷され、分担執筆した1冊の本が出版された。また、研究者としての社会貢献としては、「カワウ総合対策計画」(滋賀県)および「伊崎国有林の森林管理におけるカワウ対策方針」(近畿森林管理局)の策定に協力するとともに、日本鳥学会の評議員として学会活動の発展に貢献した。

博物館事業では、所属する事業部資料活用担当の業務として収蔵庫の維持管理を行った。鳥類学分野に関わる事業としては、観察会においてはしかけグループ「びわたん」と協力してプログラムを試行した。また、フィールドレポーターによる「オオヨシキリ調査」「ツバメ調査」の調査方法の検討や調査票の作成、結果の検討に協力した。

主査 臼井 学 (うすい まなぶ)

略歴 1990年 大阪工業大学工学部土木工学科卒業、1991年滋賀県職員(土木技術吏員)採用、河港課、湖東地域振興局河川砂防課を経て、2007年4月より現職。

専門分野 河川工学

研究テーマ 河道内の伐採竹におけるゼロエミッション型地域モデルの構築に関する研究

県職員として、これまで主として河川関係を中心に県の地方機関で直接事業を実施する業務に携わって来ました。当初配属された頃というのは潤沢な事業費を使って、各地で治水に主眼を置いた事業が行われていた時代でした。その後、琵琶湖総合開発の終結と共に年々予算規模も縮小していき、河川法に「環境」という新たな要素も加わって、事業は河川環境重視へと転換してきました。そしてそれに呼応して徐々に「つくる」時代から「維持管理する」時代へと移り変わってきていることを今日では肌で感じるようになって来ました。「維持管理」の範囲は単なる堤防・護岸などの河川管理施設の維持補修だけでなく、良好な水辺空間の維持としての堤防除草や不法投棄対策、荒廃する河畔林の環境改善等、非常に幅が広がっています。そしてこれら既存施設の更新・補修や河川敷で発生する刈草、伐採竹などの処分が多額の維持管理費用を費やしているのが現状です。今後この傾向はますます強まってくるとみられ、緊縮財政の折、このような維持管理費用のコスト縮減が喫緊の課題となってきています。

このような行政的課題を解決する施策のひとつとして、河川内の広大な竹林の伐採コストの大幅縮減を図るために、事業者、地域、研究機関と連携を図りながら、竹の製品化等により竹資源の活用を実証する場を確保するなど、事業者の起業化を誘導し、循環型の維持管理が継続できるモデルの構築について考えていきたいと思っています。

主査 西村 知記 (にしむら ともき)

略歴 1994年高知大学大学院農学研究科修士課程林学専攻修了。同年滋賀県職員(林業技術吏員)採用。2006年4月より現職。

専門分野 林学

研究テーマ 野生動物と人のかかわり ～今までとこれから～

近年、滋賀県内の中山間地域においては、野生動物による農林業被害が発生し、農林家、行政ともに対応に苦慮しています。とくに林業被害としては、ニホンジカにより、植栽したばかりの苗木が食べられてしまう「食害」が起こっていて、対策なしには森林資源の循環利用が行えない状態が続いています。私は、こうした被害を直接防ぐ「防除」と被害軽減につながると考えられている「生息地改善」をテーマに研究を行っています。具体的には、「複層林」という、主林木をぬき伐りした人工林下に、植栽された苗木一本一本に対して保護（プロテクト）する、「単木防除」を施行した場合の防除効果と苗木の成長特性を調査しています。また従来の間伐よりも多くの本数を伐採する「強度間伐」跡地において、発達する下層植生の推移を調べています。この「下層植生」が、どれだけ餌資源として利用価値があるか、ニホンジカにとって「生息地改善」につながるか、その可能性を模索しています。

主査 孝橋 賢一（こうはし けんいち）

略歴 1990年近畿大学農学部水産学科卒業、1992年三重大学大学院生物資源学研究科修了、同年滋賀県職員（水産技術吏員）採用、滋賀県水産試験場、滋賀県庁農政水産部水産課、再度水産試験場を経て、2004年より現職。

専門分野 水産学

研究テーマ ・近年、琵琶湖で増加したエリ網の付着物について
・琵琶湖湖岸において造成されたヨシ群落の機能回復度の評価

今年度、水産試験場に在職当時から行ってきたエリ網を汚損する付着物に関する研究については、現状把握に留まってしまったものの、現状やこれまでの知見などを、水試とともに館内研究発表会でポスター発表し、新聞などに取り上げてもらった。

また新たな専門研究として、現在、琵琶湖湖岸で実施されているヨシ群落の造成地において、もっとも期待されている「魚類の産卵繁殖場機能」がどれほど回復しているのかを把握する目的で、機能回復度の評価に関する研究に着手し、今年度はヨシの生育状況や、魚類産卵・仔稚魚出現状況、餌料環境や水温・一般水質などの面から検討した。その結果、良好な産卵繁殖機能が確認できた造成ヨシ群落は、確認できなかったものに比較して、ヨシ群落岸側と沖側で水温、餌料環境などに差が見られ、これらによって機能回復度のある程度の把握が可能であると考えられた。これらを館内の研究セミナーにて発表し、今後の進め方などについて各方面からアドバイスをうけた。事業においては、昨年より引き続いて、広報を担当したが、今年度の新たな取り組みとして、館主催の夏休み期間中の行事をまとめたチラシ「琵琶湖博物館で夏休みを10倍楽しもう！」を作成し、夏休み前に小・中学校を通じて全児童・生徒に配布した。その結果、本チラシに掲載した行事の全てで参加者が増加し、ある程度の広報効果があったのではと考えている。

主任学芸員 草加 伸吾（くさか しんご）

略歴 1990年大阪市立大学大学院理学研究科博士課程単位取得、学術修士。同年滋賀県教育委員会事務局文化振興課を経て1996年より現職。2006年より滋賀県琵琶湖環境研究センター主任研究員を兼務。

専門分野 森林生態学

研究テーマ 植生の水質調節機能、森林伐採前後の変化と下流域の富栄養化への影響を最小限度にする森林管理方法の探求

2006年4月から琵琶湖環境研究センター兼務となり、週2日、3日の勤務となったので、忙しいが目新しい日々を過ごした。

研究活動では、6月に開かれた自然修復に関する国際会議（ICLEE2006）で、外部資金で専門研究として行っている森林再生促進技術の開発研究に関して、「モンゴル北部フスグル湖集水域での焼失したシ

ベリヤカラマツ林の再生－再生阻害要因に関する野外実験」として発表した。また、5月下旬から6月上旬、雪解けのハトガル村に行き、現地の学校の生徒達にも種子の選別、種まきに参加・協力してもらって、新たな柵で囲まれた実験地を学校の近くに設定し、8月半ばにデータ採取を行った。7月の例年にない大雨(年間降水量の7割の200mm)で実験地は半分以上水没していたが、光に関しては初期の実験と同様の結果が得られた。またいたるところで発芽個体が見られた(ほとんど枯れる)ことも本来の森林の更新を考える上で収穫だった。

外部資金(河川財団)も加えて、琵琶湖環境科学研究センターや滋賀県立大、京大等と共同で行っている森林管理に関する実験研究は2007年3月の日本生態学会で「下流域への栄養塩負荷を最小限にする森林伐採管理方法の探求」として発表した。これまで提案してきた伐採負荷削減での斜面下部残存林の有効性を実証できてうれしく思っている。今後の森林利用・整備を考えると、ノンポイント負荷削減に、この結果をどう生かしていこうかと考えている。

博物館の運営に関する業務では、展示科で展示に関する維持管理業務の一部を分担し、10周年事業で、ギャラリー展「企画展で振り返る琵琶湖博物館の10年」の展示主担当として進行管理と展示、屋外観察会を行った。また武部さん(前期)、小川さん(後期)と共同で屋外展示の維持管理を行った。その他資料整理委託職員の協力のもと、植物収蔵庫の運営・管理を行なって、滋賀県産植物標本の整理・蓄積に努めた。

主任学芸員 楠岡 泰 (くすおか やすし)

略歴 1985年東京都立大学理学研究科博士課程単位取得、理学博士(東京都立大学)取得、日本学術振興会特別研究員を経て、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室に勤務、1996年より現職。

専門分野 微生物生態学

研究テーマ 繊毛虫の生態学

2006年度は総合研究「琵琶湖およびその集水域の生物学的探査：分類学、形態と分子に基づく系統学」の一環として中国とオーストリアから繊毛虫の分類学者を招待し、一緒に琵琶湖の繊毛虫の調査を行った。その結果、5種の新種を見つけることができた。共生藻類をもつ繊毛虫の研究では体内に共生するクロレラをもつ繊毛虫で、これまで報告されている同じ属の繊毛虫とはまったく核の形が異なる種を見つけた。未記載種である可能性が高く、現在その形態の細かい解析を行っている。

博物館の事業としては交流グループのフィールドレポーター担当としてフィールドレポータースタッフの協力を得ながら、ニュースレターのインターネットでの提供などを実現した。JICA博物館学集中コースの担当として、9カ国10人の研修員を受け入れ、琵琶湖博物館で行ったさまざまなプログラムの立案やコーディネートを行った。全国豊かなうみづくり大会関連イベントの「琵琶湖の漁業と環境」展示の館内副担当として、展示計画に関わった。

主任学芸員 中井 克樹 (なかい かつき)

略歴 1992年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、日本学術振興会特別研究員(1990～1992年)を経て、1992年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室、1996年理学博士(京都大学)取得、1996年より現職。2006年より滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課副主幹(野生生物担当)を兼務。

専門分野 魚類生態学

研究テーマ 外来生物の生態と影響の解明および防除・抑制方法の開発 希少淡水生物の保全非海産(陸産・淡水産)貝類の生態と分布・変異

外来生物に深くかわるききっかけは、大学院での研究テーマであった「アフリカ・タンガニイカ湖におけるカワスズメ科魚類の繁殖生態」を身近な場所で継続したいと考え、1990年から琵琶湖に潜り、同様の

子育て習性をもち観察が容易なオオクチバスとブルーギルを調査と対象にしたことだった。以後、両種の繁殖生態を調べるかたわら、とりわけバスをめぐる社会的対立の問題にも関心が広がり、やがて外来生物と人間とのかかわりにも興味を持つようになった次第。

近年は、外来魚の繁殖生態や分布に関する研究を実際の生息抑制や予防につなげる応用的側面の研究に重点を置き、2004年度から環境省地球環境研究総合推進費（課題「侵入種生態リスク評価研究プロジェクト」）に参画し、2005年度からは水産庁健全な内水面生態系復元等推進委託事業「ブルーギル食害等影響調査」を分担し、ともに本年度が最終年度であった。前者では、主に岐阜大学、三重大学、各地の内水面水産試験場等の研究者・調査員との共同作業で、全国のコクチバスの遺伝的分析を行い、この魚種の各地への分布拡大経緯を推測した。後者では、琵琶湖の滋賀県立大学の大学院生と共同で、ブルーギルの繁殖コロニーの捕獲方法を開発し、それが繁殖抑制に有効であることを明らかにした。

主任学芸員 牧野 厚史（まきの あつし）

略歴 1984年関西学院大学経済学部卒業、1990年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程単位取得退学、関西学院大学社会学研究科研究員を経て、1999年より現職。

専門分野 地域社会学

研究テーマ 環境問題についての地域社会学的研究

湖と人間というテーマをもつ琵琶湖博物館にとって、自然環境との共存が可能な社会の仕組みや価値観の探求は重要な研究課題である。私は、琵琶湖博物館の生態系研究グループに所属し、地域社会学・環境社会学という立場から、事例研究を通して湖沼と人間との共存の可能性を検討している。

2006年度は、琵琶湖博物館の専門研究の他に、共同研究、総合研究にも参加し、以下の領域についての研究を実施した。1. 農村の日常生活における水利用の実態把握、2. 水田を管理する社会組織の構造と変動、3. 水田等の耕地の外側に広がるヨシや森林の管理に生じる問題の把握とその要因の解明である。ことに3では、カワウの森林営巣による被害問題に関する共同研究を代表者として推進し、成果の一部を公表した。また、科研等、館外の研究者が主催する共同研究については、調査およびディスカッションに分担者として参加した。また、成果公表については、様々な機会を捉えて中間報告を行った。ことに本年度は、学会、研究会だけではなく、NPOの方々とディスカッションを行う機会が多くよき刺激となった。来年度に順次まとまったかたちで成果は公表する予定である。また、琵琶湖博物館における新規の総合研究の立ち上げについても社会科学という立場から積極的に参加した。

2006年度は琵琶湖博物館の開館から10周年にあたり、開館以降の研究および事業の総括と見直しが求められた年であった。10年間の成果について、生態系研究グループのなかでも社会科学と関連する研究成果の紹介を担当し、10年誌の出版に寄与した。また、10周年事業とかかわるギャラリー展示および研究発表会等の事業についても積極的に参加した。また、それらとは別に、2007年度の企画展示開催にむけた準備および展示に向けた資料調査を実施し、展示についての実施計画の策定に貢献した。また、早崎内湖の再生、水陸移行帯の維持管理等についての委員会にも出席した。

交流担当としては、館外の地域団体との連携や共同事業の推進、はしかけ制度による利用者グループの応援を行った。具体的には、学芸職員が館内で行う講演のアレンジをはじめ、佐川美術館との共催でワークショップ（SAGAWAキッズミュージアム）などの地域連携と関わる共同事業を実施し、報告書をまとめた（『SAGAWAキッズミュージアム報告書』）。また、はしかけ制度については、副担当としてニュースレター発行、登録講座の実施、はしかけ・フィールドレポーター交流会の開催などの事業を行った。

主任学芸員 芳賀 裕樹（はが ひろき）

略歴 1994年名古屋大学理学研究科博士課程大気水圏科学専攻単位取得、同年滋賀県教育委員会事務局（仮称）琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年理学博士（名古屋大学）取得、1996年より現職。

専門分野 陸水化学

研究テーマ 琵琶湖南湖の沈水植物の動向

沈水植物とは、全体が水中にある水草のことである。南湖では1990年代の半ばから沈水植物が急に増えだし、最近では航路障害や漁業被害、景観の悪化などが社会問題化している。筆者らは2001年から沈水植物の分布や現存量（重量）の調査を始めた。2001年は魚群探知機を使った分布範囲の観測（夏季）、2002年は52地点での定量採取調査、2003年からは魚群探知機を用いて分布範囲や被度・群落高などを観測し、分布地図を作成している。最近の調査の結果や、過去の記録との比較から、1930-50年代の南湖では沈水植物が豊富に生息していたが、1960年代前半に一度全滅しかけたこと、その後30年間少ない状態が続いたが、環境が良くなったために増加に転じたこと、ただし、回復というべき状態を乗り越えて過去に例を見ないほど分布範囲や現存量が大きくなっていることを明らかにした。また、沈水植物が繁茂しすぎた場所では湖底の酸素が少なくなる恐れがあること、セタシジミやタテボシガイは無酸素でも10日程度は半分が生き残るが、40日以上は生きられないことなども研究結果として報告した。最近では、沈水植物が増えたり減ったりした原因の解明に取り組んでいる。

事業部では展示グループに属し、ユニバーサルデザインの推進と、新しい交流施設「集う・使う・創る新空間」の運営を担当している。

主任学芸員 大塚 泰介（おおつか たいすけ）

略歴 1998年京都大学大学院農学研究科博士課程熱帯農学専攻修了、博士（農学）取得、島根大学汽水域研究センター非常勤研究員（講師）を経て、2000年より現職。

専門分野 陸上生態系学

研究テーマ 付着珪藻の分布

共同研究の代表者、総合研究のための準備研究の副代表者、科研費研究の代表者、3つの科研費研究の分担者などになり、しかもそれぞれの研究内容が互いに異なっていたため、研究についてはなんとも腰の落ち着かない1年だった。もはや、自分の本当の専門が何だったのか良く思い出せない。

はしかけグループの1つ「たんさいぼうの会」で「影の会長」（会の規約に定められた正式な役職名）を務め、20代から70代まで幅広い年齢層の会員とともに、川や湿原で調査をしたり、珪藻の美しい顕微鏡写真を撮りためてはうっとりしたりしていた。

たんさいぼうの会の協力を得て作成した珪藻の電子図鑑が、2007年1月に正式公開された。今のところ掲載種数は250種に過ぎないので、今後も増補改訂を進めていく所存である。

主任学芸員 ロビン ジェームス スミス（Robin James Smith）

略歴 1999年英国レスター大学地質学部卒業、古生物学博士取得。2000年から2002年日本学術振興会特別研究員として金沢大学、2002年から2003年英国学士院研究員として英国グリニッチ大学、2003年から2004年英国学士院研究員として英国自然史博物館、2004年COE研究員として金沢大学にて研究に従事。2004年12月より現職。

専門分野 国際湖沼学

研究テーマ カイミジンコ（Ostracods）の分類と発達

私は琵琶湖に生息するカイミジンコについてひろく研究しており、特にサンプルを収集、分析し、種の判別を行っている。琵琶湖に生息するカイミジンコの進化を理解するための交尾行動と性形態についての研究に琵琶湖のカイミジンコを用いている。スコットランドのLoch Assynt湖のカイミジンコについても研究中で、鉱水に生息するカイミジンコを採集するために屋久島にも行った。その他の研究では、カイミジンコの第一触角についての研究がある。

館内活動

英語版のホームページを更新し、私の研究とカイミジンコについてのページをいくつか作成した。英語版の要覧を更新した。外国からの来館者に対して案内や講義を行った。メディアからの私の研究について

のインタビューに対応した。

◇博物館学研究領域

総括学芸員 用田 政晴 (ようだ まさはる)

略歴 1979年岡山大学法文学専攻科史学専攻考古学コース修了、岡山県総務部県史編纂室、滋賀県教育委員会文化財保護課、琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 考古学

研究テーマ 古代国家成立前史

琵琶湖博物館での研究は、昨年からは近江の前方後円墳を中心とする首長墓と中世山岳寺院研究を中心に行うようになった。今年度は特に、これまでの近江を中心とする古墳研究の諸論文を取りまとめた学位論文を滋賀県立大学に提出して、2006年度末に学位が授与された。現在、その刊行に向けての手直し中で、追加作業と編集を経て2007年上半期には公刊する。

それ以外に、琵琶湖博物館10周年を記念するギャラリー展示の開催やその図録の編集・執筆、記念講演会の手配や講演者の館長対談などを企画・実施し、その成果も『うみんど』等に掲載しているところである。

10年以上にわたる整理作業を経て昨年度末にとりまとめて刊行した琵琶湖博物館資料目録の紹介等も『民具マンスリー』で行い、広く資料目録が活用されるようになってきた。現在も残る農業や生活用具類の整理作業を行っており、引き続いて資料目録の第3分冊以降を刊行・公開していく予定である。

一方、野洲川や愛知川流域の弥生時代環濠集落研究を河川環境管理財団の助成を得て行うこととなり、主として下之郷遺跡や欲賀南遺跡、斗西遺跡や石田遺跡の水環境論を整理中であり、2007年5月から6月にかけて、その成果を琵琶湖博物館新空間において展示・公表する予定であるし、その後、共同研究者の所属する東近江市埋蔵文化財センターでも展示を行う予定である。

滋賀県立大学大学院での日本考古学の講義は4年目を迎え、考古学を専門とする学生以外の受講も多く、研究の成果を広く次世代に伝えられるようになってきた。

専門学芸員 秋山 廣光 (あきやま ひろみつ)

略歴 1974年日本大学農獣医学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族病理学

研究テーマ ズナガニゴイの繁殖行動、ギギの発音機構

絵ての人に、役に立つ博物館資料作りを目標にしています。また、自然の神秘、巧妙さに惹かれ、様々な事柄に興味を持つ人を少しでも増やしてゆきたいと考えています。そこで普通は余り考えられていない魚の鳴き声を調べたり、更に、できるだけ多くの人に水生生物に対する正しい知識を持って欲しく、有志を集め県内河川の魚類や水生昆虫など水生生物の調査を行っています。この瞬間の生き物の姿や自然を出来る限り映像記録として後世に残して行きたいとも思っています。

本年度は、企画展示の担当となり湧き水を源流とする針江大川の集落における水と魚と人の暮らしに関する展示を行いました。企画展示は琵琶湖博物館総合研究の成果の発表との位置づけから、共同研究者である今森光彦氏の写真を多用する展示となりました。

また、琵琶湖博物館の開館10周年記念として、博物館学研究系の10年のまとめを研究報告会にて発表しました。映像資料については、激しいIT化の波の中でデジタル画像の保存性について検討がなされてきました。デジタルは不変との誤解の中で、メディアの耐久性について、あるいは機器、OSやアプリケーションの変更や陳腐化によるアクセス不能の議論が木霊のように置き去りにされています。不可視なこれら電子データに対しヒューマンリーダブルなアナログメディアは、保存性の有利さよりも利便性に優れるデジタル画像に圧倒されています。さて博物館資料としての画像は、100年後にどちらが残ることになるのでしょうか。10年前のデジタルメディアのおよそ7割弱がアクセス不能であるとの国会図書館の報告

に寒気を覚えるのは、私だけでしょうか。

今年度の研究成果については、企画展示などの業務のためほとんど進捗はありませんでしたが、展示絡み、映像絡みで写真・画像に関して得るところの多い一年でした。

専門学芸員 松田 征也 (まつだ まさなり)

略歴 1983年近畿大学農学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 底生動物学

研究テーマ 淡水産貝類の滋賀県内における分布状況調査。琵琶湖湖底に生息するピワコミズシタダミ、水田に棲むマルタニシ、移入種のカワヒバリガイの生態調査

今年度の展示業務としては、4月29日～6月18日に開催した、ギャラリー展示「つかんだ・つんだ・いつもいた あの生き物は、いま・・・？」と、第17回水族企画展示「ボテジャコは、いま・・・？」、1月3日開館を記念して開催したトピックス展示「イノシシ」の企画・展示・運営に携わった。この他、11月18日から(社)日本動物園水族館協会の日本産希少淡水魚繁殖検討委員会が全国51の動物園・水族館に呼びかけて実施した、全国一斉企画展示「いま、日本の淡水魚があぶない」の開催事務局を担当した。また、ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」では、2000年に開催した企画展「湖の魚、漁、食」の展示と、企画展示「湖辺」では、巨大たつべの設置と企画展入口付近のディスプレイを行った。

企画調整業務では、開館10周年記念事業、琵琶湖博物館 広報・経営戦略におけるトライアルウィークの企画・進行管理を担当した。

研究活動では、シジミ類の共同研究を昨年度に引き続き実施したほか、近畿大学の 小林徹助教授と共同で、DNA分析により飼育下魚類の遺伝的多様性を明らかにする研究のほか、同じく近畿大学の山根猛教授と共同で、総合研究「東アジアの中の琵琶湖」の一環として、湖水の流動環境と漁獲との関係に関する研究を継続的に実施した。

専門学芸員 八尋 克郎 (やひろ かつろう)

略歴 1994年九州大学大学院農学研究科博士後期課程昆虫学専攻修了、博士(農学)取得。九州大学農学部研究生、国際協力事業団派遣職員を経て、1996年より現職。

専門分野 陸上昆虫学

研究テーマ オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究

今年度の研究活動の中心となったのは、滋賀県生きもの総合調査委員会が編集・発行した「滋賀県で大切にすべき野生生物－滋賀県レッドデータブック2005年版－」の昆虫類全体のとりまとめおよび甲虫類の選定種の記述の作業である。この出版物において昆虫・クモ類概要を記述するとともに選定種16種について記述を行った。学術論文としては、共著で「伊吹山南麓に分布する中部更新統寺林層の植物化石および昆虫化石に基づく古環境復元」(山川ら、2007)が印刷された。この論文で昆虫化石を担当した。一般向けの著述としては、あいあいAI滋賀の「湖国の昆虫」シリーズで41種の昆虫類について記述し、現在も連載中である。その他の一般向けの著述を合計すると45におよぶ。学会講演として鹿児島大学で行われた日本昆虫学会第66回大会において八尋・亀田・近の共同で「カワウの営巣による森林の甲虫群集の変化」を口頭発表した。また、琵琶湖博物館研究発表会(第3回目)で「なぜたくさんの虫を集めるのか－地域の人のたちとの調査研究から企画展へ－」というタイトルで講演を行った。

今年度の事業活動では、交流担当のグループリーダーとして全体の総括を行った。その他の交流業務として通年でショップ会議の担当、後期に「うみんど」の編集作業を担当した。ギャラリー展示「企画展でふりかえる琵琶湖博物館の10年」では「近江はトンボの宝庫」、「歩く宝石オサムシ」の展示コーナーを担当した。2007年の7月から北海道大学総合博物館を始まりとして巡回して開催される日仏共同企画「フェアブルにまなぶ」展では、企画展ワーキンググループの一員として実施設計の作成と展示解説書(図録)の編集を担当した。観察会・講座では、「ホテルを観察しよう」「ミドリセンチコガネを探しに行こう」「生

き物飼い方講座」「夏休み自由研究講座」を担当した。

主任学芸員 戸田 孝 (とだ たかし)

略歴 1991年京都大学理学研究科博士課程地球物理学専攻単位取得、同年科学技術庁防災科学技術研究所特別研究員(非常勤)、1992年理学博士(京都大学)取得、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 地球物理学

研究テーマ 人工衛星や航空機からの観測による琵琶湖の流動の実態解明

本年度は、情報事業に関する組織改変が完了した最初の年である。開館当初、「電子情報を含む二次情報」は新しい独立した事業分野として取扱ってきたが、事業進捗の中で「資料整備」的な部分と「広報活動」的な部分を、各々電子情報以外の部分と連携して展開する必要性が認識され、それに応じた組織へと切替えて来たのである。この流れに基づいて、「広報活動」的な部分の一部という位置付けに変わった新たな情報事業を立上げる業務を担当した。

具体的には、昨年度までに構築してきた広報に関わる諸情報(Webによる情報発信や、電子メールでの質問等への対応)の流れについて、技術的および運営的な両面の立場から全体を見渡し、改変の必要が無いかどうかについて検討しつつ、現場の必要に応じて実際に直接に実務に携わった。特に7~9月にはWebによる情報発信、2~3月には電子メールへの対応の各々の実務を継続的に担当した。

また、「広報・経営戦略会議」のメンバーとして、館の広報戦略の企画に携わった。特に、トライアルウィークの実施に際しては、訪問先選定の実務を担当した。

研究関連では、今年度より博物館学研究領域のサブリーダーとなり、10周年記念の研究発表会の担当として準備の実務を担当すると共に、博物館情報論に関する研究発表を行った。しかし、概して10周年記念事業で全員が分担する雑務が予想していたよりも大きな負担となり、10周年に関わらない部分の進捗は遅滞せざるを得なかった。

主任学芸員 芦谷 美奈子 (あしや みなこ)

略歴 1990年千葉大学理学研究科修士課程生態学専攻修了、理学修士、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 水生植物学

研究テーマ 展示が人に与える効果とその補助技術

2006年度は、主として博物館学の課題に集中して、博物館の展示がどのように人に博物館のメッセージを伝えるのか、展示室のスタッフの役割、展示室用のワークシートなど、展示室を巡る博物館学的な課題について、情報を集め、また関係者との議論を行ってきた。これは博物館の様々な事業が行われ、議論もされているにもかかわらず、全ての利用者が初期的にかかわるはずの展示の有り方や楽しみ方についての議論、楽しい展示室のあり方や条件などの基本的な議論がされていないと感じるためである。今後は、これらの延長として、博物館の新しいスタッフとして話題になることの多いエデュケイターとは、日本の博物館の現状の中でどのような役割を持ち、そのようにして育成することができるのか、展示室での役割などを実践的に考え、議論する場を作っていきたいと考えている。

主任学芸員 中藤 容子 (なかとう ようこ)

略歴 1996年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻修了、文学修士、同年5月より現職。

専門分野 民俗学

研究テーマ 琵琶湖水系における伝統的な資源利用とその変化

民俗学部門担当の学芸職員として、開館以来、民俗資料の収集・整理・利用、民俗分野に関する交流・情報・展示の各事業を担当しています。伝統的な日本の暮らしを探究して得られた成果がこれからの社会

に大いに役立てられるのではないかという見通しをもって、主に琵琶湖水系の漁撈・淡水魚食文化をテーマに調査研究した成果を資料整理、展示や交流活動の場で公表してきました。2005年度には本館収蔵民具資料整理の集大成として琵琶湖水系の漁労習俗資料の資料目録を刊行し、2006年度にはその資料データベースを本館インターネットページ上に公開。さらに、2005年度からは専門研究のテーマとして「博物館における民具資料の存在意義と利用価値の再発見」を掲げ、はしかけグループ「近江はたおり探検隊」や「展示室を楽しくする会」の活動の中で、地域の人々とともに探究し、技を継承し、多様な人々とネットワークを作っていく新しい実践を進めています。今は、博物館の生活実験工房とその周辺の田畑・森林を使って、志を同じくする人々とともに四季折々の昔の暮らしを体験する場をつくっていったらと夢を描いています。

主査(教員) 中村 公一 (なかむら こういち)

略歴 1988年滋賀大学教育学部理科教育研究室卒業、滋賀県公立中学校教員、在職中2001年滋賀大学大学院教育学研究科理科教育専修修了、教育学修士、2005年4月より現職。

専門分野 教育学(中学生対象)

研究テーマ 琵琶湖博物館を利用した学習プログラムの開発

教員11年目に現職大学院生として滋賀大学理科教育研究室で、認知心理学や授業評価の方法を学び、知識を構成する「子どもの学び」に興味をもち、学校教育における子どもの「自発的な学び」を研究してきた。博物館は子どもが自発的な学びにより、概念転換をする機会にあふれているところである。琵琶湖博物館団体向け体験学習や個人向け体験学習「琵琶湖博物館わくわく探検隊」でプログラムを実践しながら、どういう「しかけ」が「子どもの学び」にとって有効か、考えている。

また、全国の博物館教員とのネットワーク構築に向けて、資料収集・基本調査を行っている。

主査(教員) 中野 正俊 (なかの まさとし)

略歴 1988年大阪教育大学教育学部教育学科小学校教員養成課程理科教育学教室卒業、滋賀県公立中・小学校教員、在職中2000年滋賀大学大学院教育学研究科学校教育専修学校教育専攻修了、教育学修士、2006年より現職。

専門分野 教育学(小学生対象)

研究テーマ 琵琶湖博物館と学校の交流・連携に関わる実践的研究

1. 事業関連(2006年度): 滋賀県教育委員会、市町教育委員会や琵琶湖博物館が催す教員研修、児童生徒研修の企画・運営、また、環境学習支援センターとの共同事業運営や県総合教育センター「環境教育に関する研究Ⅰ」委員としての活動があった。加えて、学校団体の校外学習、修学旅行に関わる下見対応、体験学習(講義)の相談、調整、プログラム開発と改善、運営。琵琶湖フローティングスクール運営協議会委員ならびに当該体験学習の運営、海と船の博物館ネットワーク推進協議会企画展の企画を行った。館内では、「琵琶湖博物館利用の手引き」編集方針の作成、同「子ども体験教室実行委員会」としての活動、同展示物・標本貸し出し運営ならびに、他博物館、大学からの視察対応などを進めた。

2. 研究関連(2006年度): サブテーマ「環境学習における児童生徒の心理過程に関わる考察」日本理科教育学会等の先行研究をベースに小学校高学年から中学生を対象とした環境学習における心理尺度の構成を試みた。これは、広瀬(1995)が提示したモデルに、小池ら(2003)の示したメタ認知的要因がどう関わるかをさぐるうとしたものである。予備調査として、県内の小中学校7校(n=796)を対象にサンプル収集し、原尺度の妥当性ならびに信頼性を確かめた。引き続き、前段で得られた尺度要因それぞれの関わりを重回帰分析等で検討した。その結果、広瀬モデルがサンプル対象年代でも、概ね成り立つこと、環境認知・行動評価要因とメタ認知的要因との関わりが示唆されること、児童の規範感が環境保全態度の形成に関わっている、つまり大人の期待や行動が子どもへ影響することが明らかとなった。一方、課題としては、琵琶湖博物館に訪れる児童生徒の半数以上は県外であることを踏まえ、サンプル対象をさらに広げ

る必要があること。加えて、琵琶湖博物館の基本理念を反映した尺度項目作成にかかる可能性が示唆された。

広瀬幸雄,1995,環境と消費の心理学,名古屋大学出版会。

小池俊雄・吉谷崇・白川直樹・中央学術研究所/環境問題研究会,2003,環境問題に関する心理プロセスと行動に関する基礎的考察,水工学論文集,47,361-366。

琵琶湖博物館 年報 11号

平成19年(2007年)10月 発行

編集・発行 滋賀県立琵琶湖博物館
〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091番地
電話 077-568-4811

印刷 株式会社 スマイ印刷工業

©滋賀県立琵琶湖博物館 2007

Printed in Japan

R100 この冊子は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

